

# 奇譚クラブ

新時代の風俗雑誌

1953・9



奇譚クラブ

9



定価 百円

地方売価 百参円



豪華な責めの色刷画帖が極めて  
安価に皆様のお手元へ届きます



# 画帖 時代物責繪卷

従来本誌に寄せられました多数愛読者の要望をとりいれまして時代物の責の画家として定評のある三条春彦氏に委嘱いたしました。こゝに八枚の極彩色の責繪卷の完成を見ました。何れも同好者の垂涎おくあたざる傑作揃いであります。広く本誌読者の愛好の方々へ頒布いたします故何卒一本を御求め下さるよう、お待ちいたします。

凄艶！

内容

- 一、山法師と静御前
- 二、女スリと岡引き
- 三、淀吉と千姫
- 四、犬公方と侍女
- 五、八百屋お七の最後
- 六、新撰組と芸妓
- 七、十郎左エ門と腰元
- 八、小紫と悪旗本連

五百部限定版・限定番号入

特価 三百円

(送料五十円)

○装針  
縦六寸横八寸五分  
横トチ豪華美本

極彩色美術オフセット  
多色印刷特アト使用  
繪の大きさB6版  
画帖の大きさB5版

・構成・  
美濃村 晃

美 し き

・撮映・  
塚本 鉄三

縛 し め

## 縛られた女の集大成

縛られた女の中、優美さと緊縛感の秀れた代表的な絢爛目をあざむく十六態  
特アトに美術コロタイプ印刷を施した十六葉を貼付した豪華なアルバム  
痺れるような妖しい雰囲気は、素晴らしい反響を呼んでまたくうちに限定部数を突破してしまいました。其の為、切以後の御申込に對しましては取敢えず一部御返金致して居りましたが、遂に読者の要望もだし難くやむを得ず若干部数増刷しました。此の機会を逃さず今直ぐお申込下さい。

総て新に特写したもののばかりですから、従来の写真と絶対に重複することはありません。

全部未発表の特寫！

(縛られた女ばかりの十六態)

内容

エビ責	足枷
高手小手	鞭打ち
芋虫	蠟燭責
くさり	滑車吊
床の置物	観念
紅と白	荒縄
目の絞	犠牲台
雁字搦目	猿轡

各葉解説文句付

・増刷分、  
・頒価一部 五百円・

(送料荷造費 六十円)  
○絶対市販は致しません

○申込所 大阪府堺局区内菅原通り四丁  
曙書房代理部 振替大阪三四九五六番



# ★ 本誌の旧號に

# ★ 現れた責絵

辻～村～隆～構～成～



愛沈木春雨草紙



昭和二十六年二月号の「愛沈木春雨草紙」



昭和二十五年十月号の「女快道中」 緑猛比古作



昭和二十五年十月号の「女学生の私刑」 片矢薫作



恋主貝め

松井頼子

昭和二十六年三月号の「恋主貝め」

五月号で予告した通り本誌の旧号に現れた責絵の中、日判時代の本誌に掲載した喜多玲子氏のもの古いものから順に紹介してゐる先ず昭和二十五年十月号の「女学生の私刑」片矢薫作、喜多玲子画同じ号の「女快道中」緑猛比古作、これは玲子氏が本名の須磨利之

昭和二十六年三月号の「遊女葦水の最後」



遊女葦水の最後

片矢薫





奇譚クラブ 九月号 目次

口絵 本誌の舊号に現れた責め繪

辻村 隆

口絵 灸をすえられる女

南川和子 画

鞭うたれる外國の少女達

吾妻 新

切腹願望と女性心理

中康弘通

繪看板の咄

伊藤晴雨

淫

みだらび

火

【第九回】

松井 鑽子

(151)

京子の生活と意見から

羽村京子

(104)

兩棲動物

(一) (男色夜話)

岡 真史郎

(78)

木内恒司 画

あるマゾヒストの手帖から (四) 沼正三

夕の朝顔

那須不二夫

(92)

大東塾と神風連

中康弘通

(143)

讀者座談會

縛られた女ばかりの座談會

司金 川端多奈子

(164)

幸福なる隷屬の告白

鐘坊 巡

(130)

黒のハイヒール

芳野眉美

(128)

我が告白の断章 (四)

須藤 律夫

(161)

私は何故責め繪を描くか

南川和子

(80)

らぶ・すれいぶ 【第九回】

鬼山 絢策

(173)

燃ゆる緋罌粟

川合伊都子

(120)

孤兒院での経験

野々村由紀夫

(134)

白粉地獄

中川秀夫

(126)

愛と憎しみ

壇 不二子

(129)

悦虐の告白

長期刑

古川 裕子

(138)

三條春彦・画

邦人女性受難事件

姫宮 四郎

(66)

責めの自画像

越野 義夫

(100)

口絵写真

折込写真 緊縛美のオンパレード

(49)

縛られた女の美しさ

女性切腹の繪について

(64)

甘美なるアリスの降伏

【第二回】 寒川 緑・訳

(152)



殺人淫楽痴の女 緑 狂比古  
江戸時代異色書 模写



昭和二十六年十二月号 緑比古氏の殺人淫楽痴の女



女体燃ゆれど  
松井 籬子  
珍花多 玲子



昭和二十六年四月号の松井籬子作 女体燃ゆれど



昭和二十七年二月号の 女体燃ゆれど

繪圖世間 様本 参り  
松井 籬子



昭和二十七年新年号 松井籬子作の 繪圖世間

拷問 片矢 薫  
え須磨比古



昭和二十七年新年号 片矢薫作の 拷問

たものがあるが、それは書いておいて昭和二十七年新年号に載った二作品、何れも須磨利之の本名を用いて、片矢薫作の『拷問』それに松井籬子作の『女体燃ゆれど』、須磨利之の『繪圖世間』を出している。引續いて、珍多玲子の『女体燃ゆれど』、昭和二十六年四月号の松井籬子作『女体燃ゆれど』、昭和二十七年二月号の『女体燃ゆれど』、昭和二十七年四月号の『女体燃ゆれど』、以上でB判時代の主な松井氏

の名で書いたもの、昭和二十六年二月号の『愛染草水』、同じく本名の須磨利之で書いたもの、同年三月号の『女体燃ゆれど』の三枚も須磨利之で書いてはいるが大分珍子調が出ているのは、左側の同じ号の『恋責め』で、珍多玲子のペンネームで書いたものと比較されると興味があると思う。  
次に同じく珍子氏が今幾久蔵のペンネームで描いた時代物を挙げてみる、昭和二十六年十二月号に載せた、緑比古氏の『殺人淫楽痴の女』外にも今幾久蔵のペンネームで書いた



昭和二十七年四月号の 女体燃ゆれど



貞節を挙げた。昭和二十七年四月号がB判時代の最後の号であるから、この『女体燃ゆれど』に引續いてA判時代に入る。  
A判時代の初期のものは過つて発表すると、次回には珍子氏の挿絵と比較検討のため村田誠一氏を雇って、伊藤晴雨氏の今は益御自身と御所持にならないという意匠を御披露することにする。



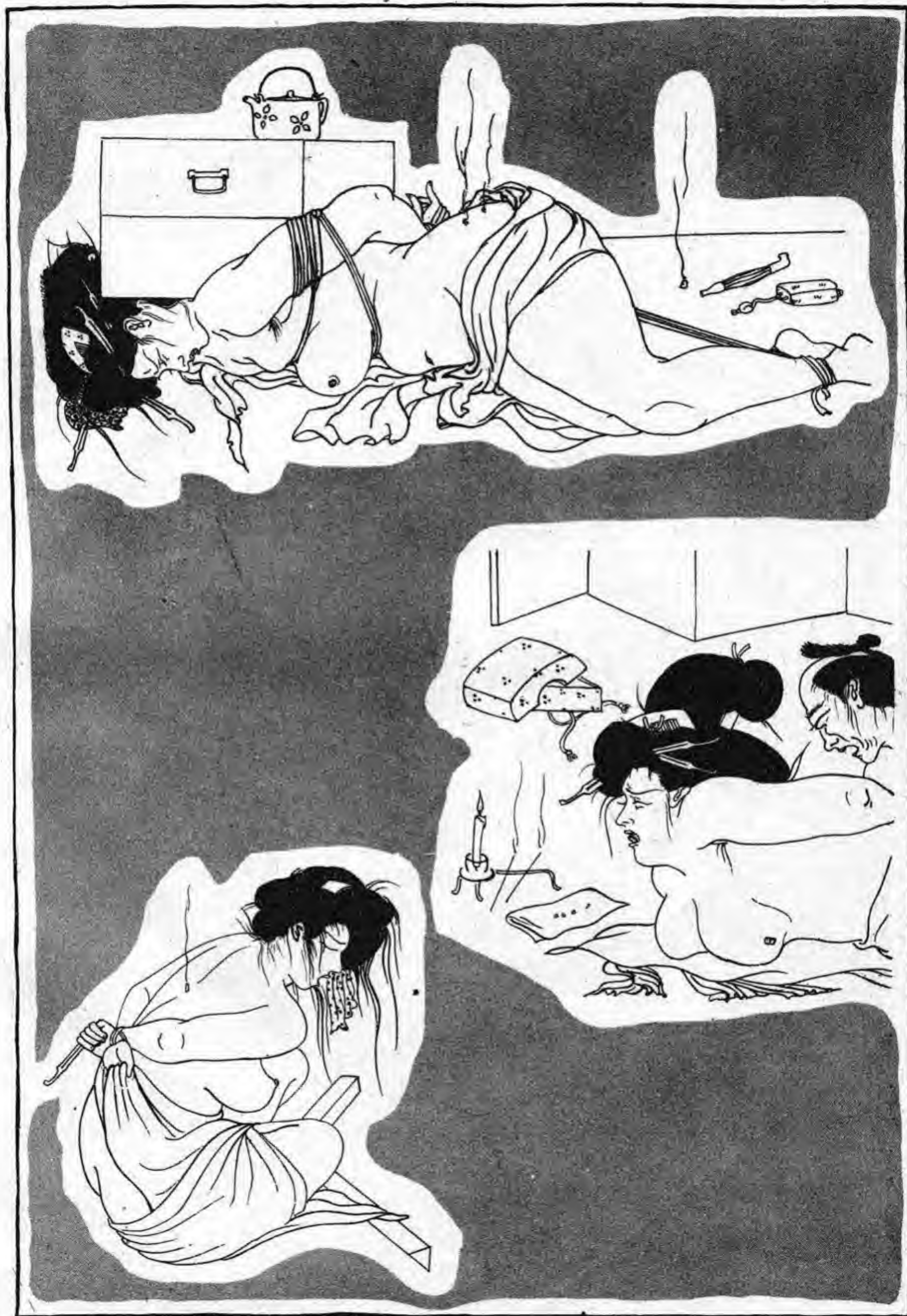


灰をすえられゝ女

南川和子

















# ☆ 縛られた女の美しさ ☆

## 二女連縛について

長雨続きで外へも出られず腐つていた時であつた。私宛の手紙の束の中に一通の艶めかしい若い女からの手紙を見つけた。私の手が先ずそのいわくありげな封筒に伸びていたのは勿論である。その文面には余り上手だという筆致ではなかつたが、奇譚クラブを見て、自分も縛られる女のモデルになつてみたいと思う。報酬に望みはないが、秘密を厳守してくれるのだつたら、自分の友達と一緒に操つて貰いたい。そして撮つただけの写真に全部二枚宛焼増してほしい。この条件さえ守つてくれるのなら、何時でも御指定の場所へ行つて何枚撮映されてもかまわないと言うのであつた。私は数日後の日曜日の朝、彼女、中富綾子とあつて先ず驚いた。齡は十七才と云うのだが、全身に溢れる匂うばかりの魅力、今迄いくら探してみても中々見つからなかつた清純無垢な美しさが、にじみ出ていた。そしてこゝに、はからずも中富綾子















並川トミの二嬢の連縛写真を撮映することが出来たのである。縛られた女の美しさを追求する上に於て二女連縛の方法は従来も度々手がけてきたし昨年は本誌上にも一部発表したこともあるが今回は、あらゆる角度から二女共々十分注躍しているという点をおいて数十枚の写真を得ることが出来た。年齢は二人共十七才で並川さんの方はいさゝかまだ發育途上といった感を受けないでもなかつたが、中富さんの方は伸々と發育した四肢はぼつてりと肉がついて餅肌の申分のないモデルである。

そして二人共繩にて縛られたことの無いのは勿論のことまだ一度もモデルになつたこともなければ人前にヌードをさらした事もないというので、特に緊縛係として川端多奈子嬢にかつて出て貰つた。緊縛しつゝある場面もいくつかフィルム上に記録されたが、今回は二女連縛の姿態のみにとどめた。

二人以上の連縛では主体になる人に狙いをつけると、どうしても他の人がお留守になつて只単に在るだけとい事うになり勝ちなのでその点何れも平均に働いて貰つて単独では中々とれない連縛による女体の美しさを強調したつもりである。

辻村 隆・構成

塚本鉄三・撮映

モデル 中並 富川 綾ト 子ミ 嬢嬢 緊縛担当・川端多奈子嬢





悦唐の三昧境

新時代の風俗雑誌

奇 譚 ク ラ ブ

1953年9月号

第七巻 第九号 通刊第五十九号



# 鞭うたれる外国の少女達

吾妻新

鞭は日本ではめずらしいが、外国では全くありふれた折檻の道具です。ヨーロッパでは十八世紀まで、大抵の家庭にありました。もちろん子供を叩くためです。もつと以前になると、たとえばルネッサンスのような人間復興のころでも、成長した女や妻が鞭で訓練されました。国王の眼を惹いたシャトーブリアン夫人みたいな高貴な地位のものでも夫の鞭をうけたものです。ヨーロッパにおいては、鞭打史は女性史でもあるのです。だが、ここではそういう話には触れずに、現代でも鞭打が行われているかどうかを述べたいと思います。

このことは常に教育家や識者の間で議論がくりかえされ、肯定するもの、否定するもの

の間で意見が一致していません。というのは一般の文明国では、もう鞭は公然の道具ではなくなつたからです。しかし、たえずこの問題が蒸し返され、議論の的になるということが、刑罰以外に学校や家庭などで行われていることを暗示しています。それも、コソソリ行われるだけでなく、かなり公然と行われているらしいのです。

そこで、あるフランスの新聞が、肉体的な懲罰としての鞭打(平手打も含む)について読者の通信を求めたことがあります。その中から代表的な手紙を二十通選りぬいたのが、サデイ・ブラツケイズの書物の中に収められているので、その中の二三を訳してご紹介しましょう。

この書物の題名はSweet Sixteenと書いてそれにはA romance of family discipline「家庭教育のロマンス」Sonia or the beautiful student「ソーニヤ、別名美しい女生徒」というサデイズムの二つの小説と、ここに紹介する手紙の集録 Some letters on corporal punishment「肉体的懲罰にかんする若干の手紙」がのつています。この書物の英訳本は、英国とアメリカでは販売しないと表紙に記してあり、発行所はパリのDrouin書店、価格は二十五フランです。

序でにいうと、サデイ・ブラツケイズはこの他に尚二つのサデイズムの本を同じ書店から出しています。

一、「Miss」



特殊な寄宿舎生活をおる娘が回想したもの。

一“Lovely Lisette”

リゼットという女の味わつた冒険と不幸を描いたもの。

いずれも絵入りのカバーがついています。

ただ次に掲げる手紙は創作でなく、実際のもので、彼はこれを編集するについて、あまりに些細なことや興味の無い説明は多少けずつたことを断り、この問題に興味のある人は好奇心をみたすだろうが、ある種の人は「世界中の母親がいつの時代にもやつてきた懲罰の意味を大げさに扱っていると考えて、わがままな少女の教育には必要なんだと思うだけでしよう」とも、「これは鞭打の研究であつて、それ以上のなにもありません」とも言っています。

二十通の手紙は直接編集者に送つたのもあ

ゴヤのエツチング

男の子を打つ母親



り、友人間でとりかわしたものを送つたものもありますが、ここでは特色のあるものを四つだけ訳出します。即ち一つは鞭打する側のもの、二つは鞭打される側のもの、いま一つはそれを観察する立場のものです。番号は原書にある手紙の順序を示します。

(手紙2)

ここに出てくる鞭打機は、サンフランシスコのある教授が発明したもので、小生はよく知りません。この手紙の筆者は明らかにサデイストで、あとの手紙と対比すれば、いかに外国の女学生が悲惨であるか(もちろん一部ですが)分ります。

拝啓

あなたはきつと、あの有名な機械、電力自動鞭打機をごぞんじでしょう。

生来おどけることの好きなフランス人は、この発明をからかいました。フランスの人にとつては、鞭打というものがなくなつた以上それは時代ばなれがしているようにみえるのですが、ここでは事情がまつたくちがいます私を信じていただきたいのですが、電力自動鞭打機は退化の徴候ではなくて、進歩の徴候なのです。

私自身についていえば、私はアルカンサスの学校の女校長です。この生徒のなかにカナダの少女たちがいますが、彼女等の頭ときたら、岩よりも頑固なんです。あなたには、二十八才の女校長が味わう焦立たしさがどんなものか、お分りにならないでしょう。私は年をとつた女の忍耐力はまだ持てません。生徒が常に為すべきように振舞わないと、たちまちカツとしてしまいます。

一人の少女を——二人でないとしたら——支配すること以上にむづかしいものはありません。私は十三才から十七才まで、五十人を受け持っています。私をいちばん困らせるのは、往々にして最も年のいつた連中です。こうした、もう成長しきつたわかい娘にたいして、どうしたら身を守ることができでしよう! 罰の仕事、罰の学課、居残らせること、



デザートを取り上げること、——そんなことは、彼らは鼻歌まじりで平気です。

たつた一つ、規律を守らせる方法があります。それは、……それは、鞭です！重大な言葉を言つてしまいました。この言葉はラテン人であるあなたをびつくりさせるでしょう。なぜなら、この刑罰はあなたに奴隷を思い出させるからです。

自由な国々には奴隷はいません。しかも、鞭は絶えず、男女に用いられます。もちろん罪人ですが、かならず市民です。この刑罰の恥すべき一面は、私にとつては、あなたが感ずるほどではありません。ただ苦痛を伴う懲罰だと思えます。しかもそれは、慎重に傷つけまいとする特別の理由から、自然が注意深く詰め物をしてくれた部分の肉体に適用されるのです。また鞭打は、子供が冒すような比較的かい、ちよつとした反抗にたいして用いられるということを忘れさせないためにも、そういうところを叩くのです。

こんなわけで、鞭打はいまだに多くの女学校が実行されています。私は電力自動鞭打機が、たとえ異論があろうとも、役に立つ発明だと考えます。

実際、だれか生徒を鞭うつようなことの起

つた場合、ふるいやりかただと全く厄介な仕事なのです。あなたは、十六か十七の生徒を鞭打する用意がどんなものか想像できるでしょう。懲罰を効果的に行うためには、尻を裸にすることが絶対に必要です。肉体のこの部分をむきだしにするのは、他のどの部分をやるよりも不道徳ではないと考えます。これには意見もあるでしょう。しかし私は、生徒が教師と争うのは本質的にわるいことだと思ふのです。だから、刑罰の執行は当然です。わかい娘は大きくて力もありますから、懲罰を言いわたすと抵抗しようします。つかまえようとするとともがいて、あるときは地面を転げまわつたりします。スカートをまくりあげて、「名を言いくいもの」の紐を解いたりコンピネーションのボタンをはずしたりするのは不可能になります。そこで、小使の手を借りねばなりません。かれらは罪を冒した生徒におどりかかつて、たちまち身体を折り曲げ、都合のいい恰好にしています。だがこの争いは権威を弱めるものです。そんなことはなくしたいものです。鞭打の準備の光景は、私の考えでは、いつも醜いものです。鞭打機を用いれば、組み伏せることも、争うことも要らない。あつという間に生徒は便利な

形に、つまり頭と上体を折り曲げた形に縛りつけられてしまいます。手も足も動かさせません。彼女は抵抗することができず、やがて……機械が任務にとりかかります。ただボタンを押しさえすればよい。そうすれば、車輪にとりつけたしなやかな鞭が注意ぶかく肉付きのいい場所を叩き、罪人はそれを避けようもなく曝しているのです。

敬具

近代的な一女校長より

#### (手紙6)

十四才の女学生の手紙。じぶんより少し年上の友人にかいたものである。

なつかしいアンドレさん、

何よりもまず、あなたの十六回めの誕生日をお祝いいたします。あなたと語り合えるのがうれしいの。ですから、あなたが寄宿舎になんかいたことのないのは、どんなに幸運かということ、また繰り返してお話して下さるわ。

私がこの牢獄に入つてからというものの、二年後の解放される日のことばかり、考えてきました。そうすれば免状をもらつて、×——婆さん……おそろべき骨董品……と、さよならが言えるんです。



ここでは、どんな不平を言うこともできません。いつか鞭でぶたれたとき、私はお父さまに手紙をかいたの（約二年前です）そうしたら、返事がきて、お前の先生は全く正しいことをしたのだ、もつとお前をきびしく取り扱ってくれるように手紙を出す、懲罰は必要だ、おまえのお母さんはお前を甘やかしすぎた、その他いろんなことを言つてよこしたわ。それで、私はもう一度鞭打を受けたの。それから、しよつちゆうです。もう、私は不平を言いません。私はそれがなんにもならないこと、そのためにまた罰せられることを知っています。だから私、あきらめているんです。

あなたは、私たちの懲罰や、生活や、食べもののことをくわしくお訊ねになつたわね。いいわ。ご返事します。食物は、この寄宿舎の値段だつたら十分御馳走が食べられるはずなのに、ちつともおいしくないの。舎監が私たちの費用でふところを肥やしているのよ。彼女が大まかなのは懲罰だけ。懲罰ときたら壁を向いて立たせるのから鞭打まで、なんでもあるわ。あなたが知っている最初のものだつて、べつに楽しいものじゃないけど、すくなくとも、ものしずかよ。ところが鞭打とき

たら、まるつきり話がべつなんです。あなたがくわしく知りたがるから説明しますよ、物好きな、かわいいお嬢さん。とにかくそれがどんなものか、あなたは噂にきくだけね。なぜつて、あなたのご両親も家庭教師も、あなたに手を上げたことがないのを、私は知っています。幸運だわ！嫉ましくなるわ。だけど私は、あなたの聞きたいことを全部、お告げすることができます。私はそれを知っているし、時節柄たくさん服を身に付けるように、たつぷりぶたれてきました。そうよ、打つというのは言葉にすぎないのよ、親しき友。この種の懲罰をかれらは、ハツキリ口に出しては説明できないような箇所に加えるんです。

最近に私が受けたのは、ほんの一週間前、私流に言えば、私たちが外出するまさに最近の日曜日でした。私が食堂でだれよりもさきに罰をうけたのは、皿をこわしたからなの。ホーテンス女史はじぶんでそれを執行したわあ。のひとは私の下穿をずりおろし、ものすごく鞭打したので、私は金切声をあげて絶叫しました。友だちはみんな、私のお尻をみました。……もつとも、はじめてのことじゃないけれど。

この鞭打だけで終らず、ホーテンス女史は

舎監に報告したので、私はパンと水だけの食事を宣告されました。それでもまだ足りないと言わんばかりに、浣腸を申し渡されたんです。これはここでよくやる刑罰なのよ。マダムはそれが健康的で、費用がかからず、しかもその羞かしめは非常にいゝ影響をあたえると考えているの。私のクラスの女助教師がこの療法をやりました。それから、浣腸された病室のドアの前に立たされて、半時間がまんしろと命ぜられました。全くの苦しみでしたさしこむようにお腹が痛くなつて泣きました……でも、命令にそむかないように一生懸命につとめました。こんな場合に絶対にやむをえないようなこと（下痢）でも起きようものなら、たちまち鞭でひどくぶたれるに相違ないのです。こんな細かなことをかいて、ごめんなさいね。これらは、寄宿学校の生活の側面にすぎないのよ。……これに似たようなことは無限です。そして誰もそれを疑わないんです。でも、私たちのような哀れなものに課せられたこの生活は呪わしいわ。しかもまだまだつづくんです。私になにか、お菓子か、絵入り新聞を送つてくだらない？ マダムは気にかけないでしようから。

あなたの友、D……

(手紙9)

拝啓

敬愛する御紙に出た解答に目をとおしたかぎり、あなたは学校関係でいまだに若い娘に鞭を使っているとは信じがたいとおつしやいました。私に反駁することをおゆるしくください。私は十六才で、年のわりに大柄です。私はある学校(ここではそれを記せません)にいますが、肉体的懲罰はまだ行われていることを確言できます。

鞭はまったくわずかなことに使用されます。十三才以下の生徒はじかに肌に当てられます。それ以上の年のものは下着に下穿かコンビネーションをつけねばなりません。寄宿生は十三才以上の少女は灰色のメリヤスのコンビネーションがきまりになっています。

明らかに、教師は大きな少女たちを赤子のようにむやみに罰することはできません。とはいえ、私に言わせるなら、下穿をつけていようと、鞭打はあまりに破廉恥な懲罰です。

海軍では、男の人たちは肩を打たれます。それが若い娘の場合に、なぜ顔を紅めなければ言えないような部分を選ばなければならぬのでしょうか？

私が打たれたのは、それほど前ではありません



一八九九年に描かれた「英国式偽善」というヴィレツトの絵。  
 バイブルとアルコールと愛国主義と鞭打ちとの悲しき融合が現されている。

せん。その痛みは忌まわしい、まったくの苦痛です。そして、ありうるかぎりのもつとも墮落的なものです。私がそれをさらに深く感じたのは、先週、お友だちの美しい十七才の少女が鞭打されるのを見たときです。前屈みにさせ、うしろを級友のほうにむけて、その

女の先生はスカートをまくりあげ、つつしむぶかく隠しておかねばならない場所をむきだしにしました。私は断言しますが、下穿は、犠牲者の自尊心を守ってくれるにはなんら役に立ちません。その薄い布地はクツキリとお尻の線を描きだして、完全にシヨツキングです。私の考えでは、裸体はこれほど淫らではありません。

この恰好で、彼女は鞭うたれたのです。言うまでもなく、苦悩のために狂気のようになつて、彼女は叫び声をあげ、足をバタバタさせました。そのため二人の小使が押えつねねばなりませんでした。

あなたにかいているこの事実をよんで、ひとは宗教裁判所の物語りだと思ふかもしれませんが。そんな空想はやめてください。厳然たる事実なのです。私たちは全く絶望しています。なぜなら、だれもこの刑罰を重大視して下さいませんから。私たちの両親は私たちをなくさめるために、こ



んなことを言います。

「私もお前の年ごろには免れなかつたのだ。そして今になると、罰してくれた手に感謝することができるようだ」と。不柔順を罰するための、もつと破廉恥でない他の方法はないものでしょうか？

不幸な一生徒。

(手紙16)

多数の婦人やわかい娘を使っている巨大な地方工場の女監督の手紙。これはある友人に宛てたものである。そのホーテンスは、手紙6のホーテンスとはもちろん別人である。

親しきホーテンスに、

夫と私はY……に職をみつめました。ギュスターヴは鉄道に、私は大きなヘアピン製作工場の労働女監督に備われたんです。私は三十才だけど、みんなに言わせると、ずっと若く、スマートにみえるそうです。いまだに私は手早く服を着られないんです。

私のはたらいにしている工場には千五百人ばかりの婦人労働者がいますが、十四才の若い娘から五十五才以上までおります。私の仕事は時間を守らせること、仕事の報告をかくこと秩序を保たせたり不平をきいてやつたりする

こと。ハッキリ言いますが、すこしも、のんきな仕事じゃありません。わずかな例外をのぞけば、みんな私に敬意をもっています。そしてそれは全く当然なんです。これが私の仕事の全部です。工場主が私に色目を使い、私もそれを憎からず思っているなんて噂が立っていますけど、いういう噂は避けられないしどこにいたつておなじことよ。私は弱気を出さないで、一生懸命まじめにやるわ。それにすこしは怖がられる位でないと、こんなところだつて居られやしないんですもの。とにかく、お昼の食事つきで月に百五十フランになるんですからね。

あなたには工場の生活なんて、わかりたくない。私もこんなみじめになるまでは、あなたと同じように家にいたから分らなかつたわ。工場の女たちのあるものは、残忍で、意地悪で執念ぶかくて、とても下劣よ。見習工の大半の時間は、懲罰をうけることでつぶされています。彼女たちは、ホンのちよつとしたことで腹立ちの的です。走り使いがわるかつたといつては鞭打される。命令をまちがえたといつては、また鞭で打たれる。取るに足らないことでも打たれる。といった調子です。私はそれをみとめません。やめさせようと

つとめました。でも、不可能なんです。私はこの風潮にたいして争いました。見習工は間断なく鞭打されている。そして、それを食いとめうるものは、私ではないのです。

私は眼をつむつていなければなりません。した。しかも、この行為ほど私を不愉快にしたものはありません。私はこれを野蠻な、おそろしいものだと思います。見習工は十四才から十六才までのわかい娘で、もう子供じやありません。それなのに、鞭打は有りふれたことになつている。この種の光景に出会わないですんだ日は一日もない。ほんの昨日のことです。私は本工場のとなりの、若い娘が十人と見習工が幾人かいる小さな部屋にいきなり入つてゆきました。だれも私の来るのを予期しなかつたので、私はこういう光景のまつただ中にとびこんでしまつたわけです。集まつている中央に、ひとりの女が十五才の女の子をひざまづかせていました。彼女がスカートをまくりあげると、その子は下穿をはいていないので、美しい裸のお尻がまるだしになりましたが、それを力強い手で叩くんです。かわいそうな子のお尻は、揚げ立ての力キの穀みたいになつて赤でした。私は中止させましたが、あまり自信がありませんでした。なぜ

なら、私が出てゆくや否、また別の一人を折檻しはじめることがわかつているからです。もしかしたら彼らの間では、それがすばらしい楽しみになつてゐるんです。

## 歌舞伎随筆(二)

# 血のり その他

宮内義雄

此の頃、奇クの誌上で切腹の話に花が咲いているようだ。歌舞伎の切腹の場面もいろいろあげられているようだ、血のりのことについてはあまり書かれていない。それで、歌舞伎の舞台ではどうするかということを書いてみようと思う。

歌舞伎には切腹の場面が多い。六月大阪の歌舞伎座では仮名手本忠臣蔵の通しが出ているが、一つの芝居を通して、切腹の場面が二つも三つもある。しかし多くの場合切腹というのは座つてする。これを立つて

あなたは、私が愉快な時を過している(反語)ことが分つたでしょう!だが、私はここを去ろうと考えています。シヨルジュがいい地位を得られるようになったら、私はすぐに

するとよけい凄惨だ。私は歌舞伎をよく見ることが、歌舞伎の舞台で立腹を切るのを見たのは一回ぐらいしかない。それは六郷川の権八の立腹だった。今の寿海丈がまだ寿美蔵と言つていた頃だから大分古い話である。白井権八の芝居は「鈴ヶ森」がよく上演され、近頃はやりの文士芝居でも東も西もこれをやつている。この「鈴ヶ森」は権八が江戸に上る途中だが、やがて江戸の吉原で小紫というおいらんと恋仲になり、その金の工面に辻野や強盗をするので捕手に追

でもこの工場をやめて、家庭にしりぞきます

心からあなたの サラ

(おわり)

われる身になるのである。

権八が六郷川で立腹を切る芝居は「其小唄夢廊」につづくので、この上の巻は俗に「権上」といつて、清元や常磐津ではよくやるが芝居としてはあまり面白くないのか上演されることが少い。しかし、前髪姿の権八が浅黄色のおしきせで本縄をかけられ裸馬で引かれてくる風情は実に美しいから奇クの読者にはうける芝居だろう。かん高い清元の吹声のみている者の体の芯にしみ通る様で、私など自分が縄をかけられたように体が引きしまつたものだ。さて、こうして縄目のまゝ引き出されて後手に縛つた縄だけとかれ、胸にはまだ縄のかかつた窮屈な姿のまゝ懺悔をする。そして、いよいよ磔になるという寸前に、廓をぬけた小紫がかけつけて、最後の願いに水盃をさせてくれと役人にたのみ、隠し持った短刀で権八の縄目を切ると、それがすべて夢だったということになつて舞台が吉



原の女郎屋へ変る。それから権八と小紫の濡れ模様があつたあとで、小紫は権八の前髪を剃つておとしてやる。この次の場面が六郷川になるわけだ。

舞台一面葦のはえている中に、一艘の捨て小舟がある。右も左も御用提灯にとりまかれ進退極つた権八がその小舟にとびのつて壮絶な立腹を切るのである。

この時舞台では本当に切れる刀を用いて腹へ突きさすのだ。一瞬はつとする。しかし腹の処へは厚い銅板が巻きつけてあり、その銅板の前へ細長い氷嚢をとじつけ、その上に白木綿の腹巻きをする。イザという時、本身で腹を突くのである。しかし厚い銅板の所で刀は止るが、氷嚢にしこんだ糊紅が白いさらし木綿に真赤ににじみ出するから本当に腹を切つたような感じになる。

舞台で使う糊紅というのは、工業用の朱染にうどん粉、布のりなどを加えて作るのだが、衣裳や手足についたものを洗いのきくように灰汁を入れる。こんな風にして糊紅を作つて、切腹してみたいような気がする。尚、ついでだから口から血をはく時はどうするかというと、これはふくみ紅と称

して、口の中に入れる為に製法が違つていゝる本紅に朱染、それに黒砂糖を入れてつくとところ面白いのはこれを何に入れてたらいいかということだ。昔は茶わんのようなものへふくみ紅を入れておいて、きつかけをはずさず手早く口の中に入れて出したらしいが、今はこれを入れるのに至極調法なものがある。何かというところウデサツクだサツクの中へ紅を入れて糸でとめておけば、イザという時まで口の中へかくしておける。歯でくいければ血がタラタラと流れてくるわけだ。

権八の立腹も腹だけではなく、口からも血をはいたように思うのだが、いつも寿海丈に聞いてみたいと思ひながら恥しいのは何故だろう。

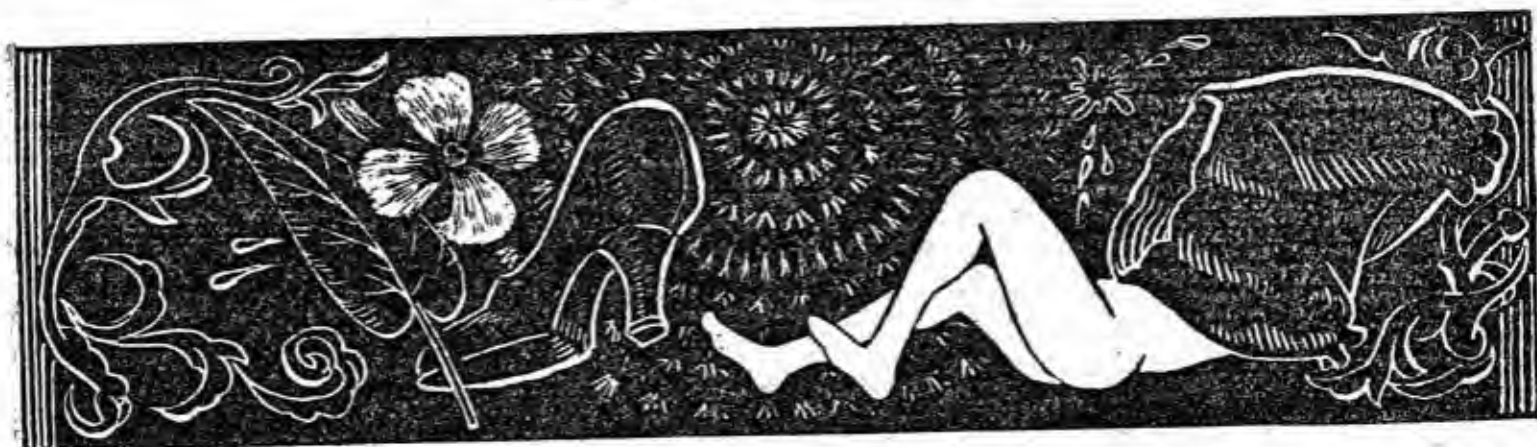
もう一つ家庭で責めの遊びをする時に応用出来るのは切られ与三の疵痕だと思ふ。本当に刀で切つて痕を残すのは厄介だが、女の白い胸や腿に幾条かの太刀疵があるのは裸体で縛られた女のアクセサリーだ。

この疵痕は油紅といつて、油墨の中へ油紅をまぜた茶かつ色のものか、油墨にたいしや色をまぜてかくのだ。しかし切られ与

三の様に身体中に数多い疵痕を書く場合に絆創膏の裏に茶かつ色の絵具をぬつて、疵の形にしてはりつける方法もある。此の頃の芝居ではあまりやらないが、私のいうアクセサリーに用いてみるのも一法だと思ふがどうだろう。

### 【読者通信】

御立派なアルバム御送付下さいまして本当に有難うございました。夜具の上で早速お姉様と二人して開いた時、本当に素晴らしさに言葉もありませんでした。唯もう夢中で見ました。中でも紅と白足枷、滑車吊りは素敵でした。どれもこれも十六態とも由紀子、こんな目に仕置して戴きたいものばかりです。紅と白多奈子お姉様でしよう。随分痛かつた御様子ですけど、私達も刑場以前に良くなんな姿にされましたわ、両足をお写真の様に宙に下げた儘では、本当に胸や腹部が痛くてなりません、でも両足を揃えて膝の上へも二ヶ所縛つて貰えば、上半身は例え後手でも余り痛くなくて、凄く責められる感じが出来ますわ。観念のモデルの方の表情は本当に共鳴します。由紀子何回も繰返えす様ですけど、観念した時の女が一番美しいと思いますわ、それに、その時の気持の良いいこと、だからお仕置大好きです。(大川由紀子)



# 黒のハイヒール

芳野眉美

## 第一章

座席に腰をかけた少年の伏せた目に、あの夏の夜の川開きの絢爛たる色彩の絵巻を思わせるような火花が激しく散った。

少年は訝かった。じつと見据えた。

それは、黒のハイヒールだった。

ぐつたり身を投げだしていた少年の目の前に無造作にぐいとだされたそのハイヒールは、それまで放心したように深々と眠っていた少年の神経を鋭く射た。神経は怖い程過敏な状態でそのねむりをさまされた。いらだつた。少年の頬がかつかと燃え肉体は苦しくわなないた。この人は靴下をはいていないのだろうか。

少年は興奮した。何故だかわからなかった。やたらに胸の鼓動が激しく鳴った。それは国電の激しい揺れより尚強く少年の胸に大きく揺がった。

素足なのだろうか。

ハイヒールがぼつとかすんで見えた。それがみる／＼

美しい肌にとけこんでいった。

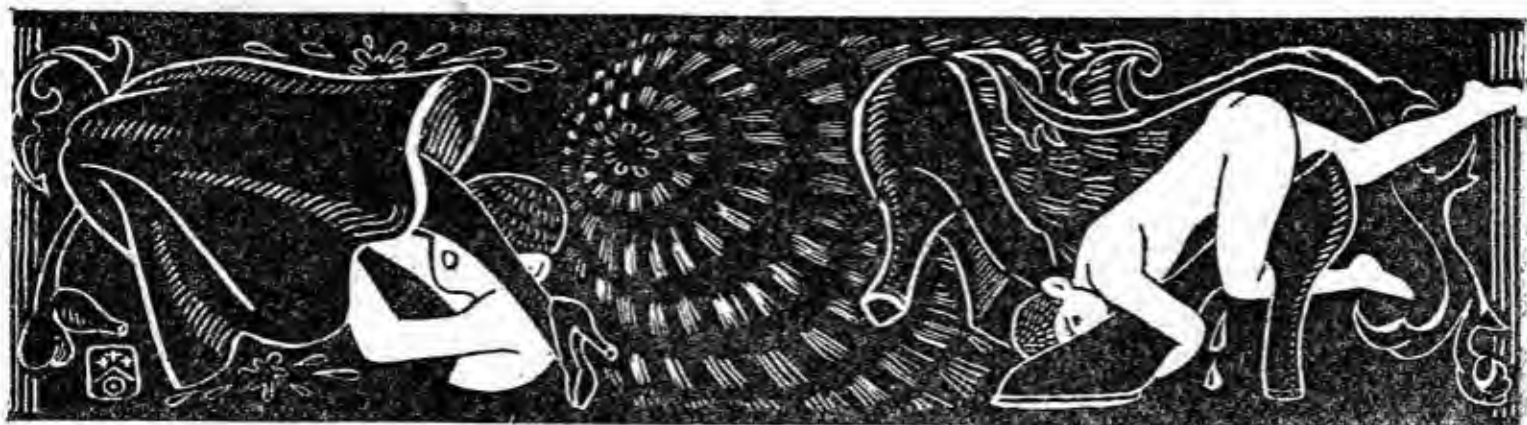
あの人のやわい皮膚だったのか。

少年はほのかによつた。

五本の指が見えるような気がした。うすべに色の爪の色合、珠のような踵のまる味、泉の水が怖れるような、ほんのり白い皮膚、やんわりしたおもみ。

わずかな皺が少年にすきとおつた絹の靴下を知らせた。少年にぐつとハイヒールの艶やかな黒がよみがえつた。





少年は激しく黒を意識した。

黒いハイヒール。

少年は口のなかでつぶやいた。

この刺戟はなんだろう。

そう思った。あまりにも常軌を逸した鋭い感触だった。

その幻影が少年を苦しめた。

黒のハイヒールは夢にまで少年を悩ませた。少年はふと異臭をかいた。

また、してしまった。

少年の当惑したような小声が朝の気をふるわした。気がいつとなく晴なかつた。

嫌な夢だ、と思った。

目がさめてしまうと、夢の記憶は殆どない。明け方に多く夢を見るものだが、蒲団から起きたす頃はすっかり忘れていた。

それがいつものことなのだが。

どうせ夢には規律などないものだ。でたらめな画面が莫然と無造作に展開する。なんの意味もない。

がそのなんの意味もない画面の羅列がときとして異様な恐怖をもたらすことがある。意味もないだけに、それだけ無気味におびやかす。

昨夜の夢もそうだった。

覚えているのは瞬間的なその場面だけなのだ。その前後は全く忘れていた。しかし、前後を知つてなにになるう。それは、これには全く関係のないことではないか。

どうせ夢の話だ。飛躍がひどすぎる。

それだけ、そこだけがくつきりえがかれた。

クローズアップされたのは黒のハイヒールだった。女の顔もあつた。どこかで見たような顔。誰だか思いだせない。あまり若くはなかつた。上品な美しい人。

ハイヒールがみる／＼大きくなつた。

その黒いハイヒールがやわらかく少年の顔を踏んだ。いたい？というやさしい女の声を聞いたような気がした。感触はなかつた。

それから？知らない。思い出せない。目がさめると。激しく興奮している自分を見ただけだった。

また見た。と思った。

その瞬間、少年は手に異様な感触を感じた。異臭をかいた。

あの黒のハイヒールは、国電で見たのにちがいはなかつた。靴下に皺があつたから。

目のまよいであるう。

昨夜は何も考えないで寝てしまったはずなのだが。

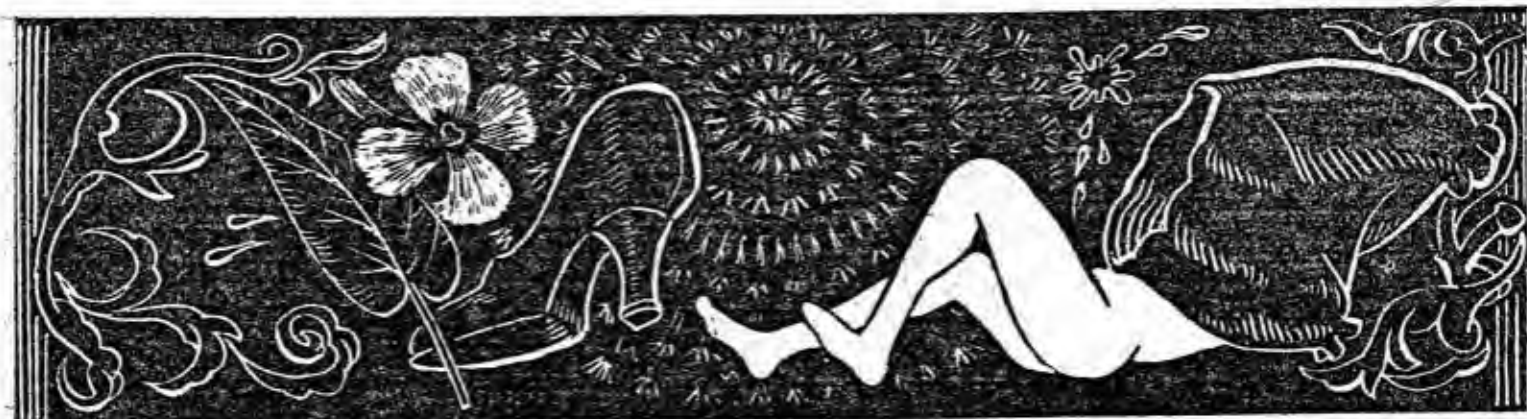
少年は大きく息をはいた。

よく見る。

そうつぶやいた。この頃特にひどい。

枕元をさぐつて寝たままタバコをくわえた。とにかくこの頃へんだ。

ぼんやり考えこんだ。



黒のハイヒール。  
そのあわきおもみ。

まだ感触がかすかに残っているように思えた。

シヨウウィンドーの冷たい窓ガラスを通して、少年に熱風を吹きあてるのは、この不思議な感触の故であろうか。

少年はシヨウウィンドーに飾られた黒のハイヒールを意識することなく、吸いつけられるように立ち止った。これが少年の街を歩く姿だった。

あまりにも静かなハイヒールに魅惑されて少年はそこから離れようとしなかった。

美しい。

と思った。

四千三百円で御座居ますが。

少年の前にその店員が笑顔で立っていた。少年はげんな顔をした。

こちらですと、六千円になります。

少年は店員の説明をます／＼訝かった。聞いてはいなかった。

やはりこちらにいたしますか？

少年はあわてて首をふった。なんだかわからなかった何か云ったのかしら？

少年は逃げるようにその店を離れた。

少年は深い嘆息をはいた。

何故こうもひきつけられるのか。

その異様な声に少年はびくつとした。あたりを見まわした。街を歩く人のふりかえった冷たい視線を感じた。

独り言だ。

少年は不安な気持でわなないた。全く無意識の衝動だった。

しかし、少年の病弱な神経は直ちにハイヒール以外のなにものにも注視する機能を失ったように、また、没我の状態に陥った。

少年は陶醉していた。

その店からふと聞いた靴の音が少年に動的なハイヒールを感知させた。静的なものから動的に移ったハイヒールは、また新たな美を少年に感じさせた。

少年はその音を追って街をさまよった。夢遊病者のように幾日も。

少年は聞いていた。

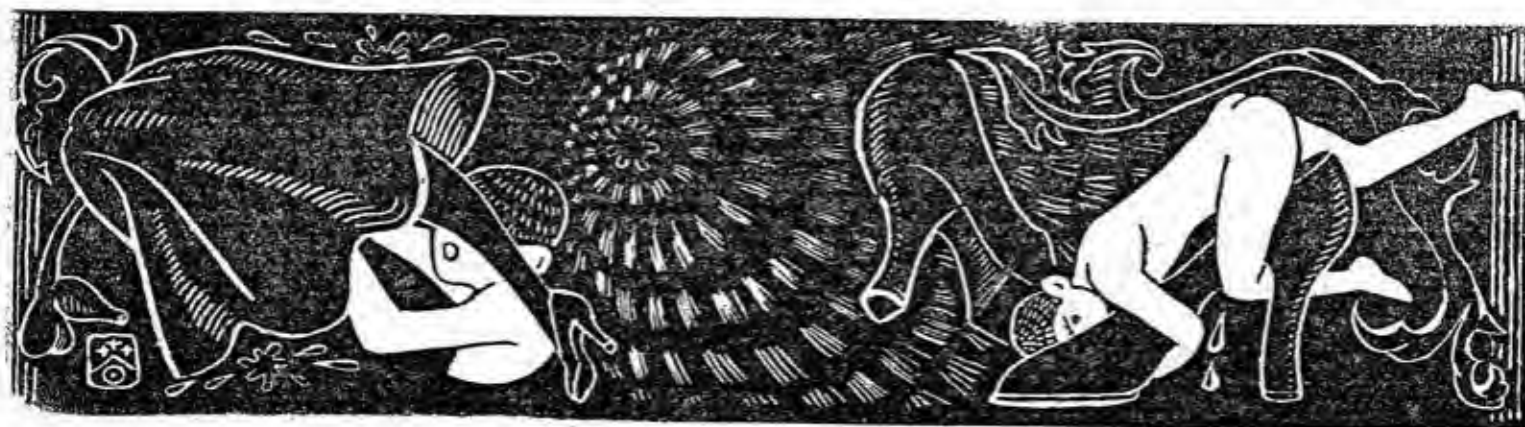
空間とアスファルトのリズム。

ブラック。

リアル・ブラック。

ハイヒールの黒は軽やかに調和を保つ。その量感。少年の見る街は、女の足でうずまつた。





誰もいなかった。

それは、アンドロメダの八十万年の光がクロダイヤの  
にぶい光沢をあたえた少女の背をおもうゆたかな黒髪を  
思わせた。

少年はそつと接吻した。

誰のハイヒールだろう？

少年は抱きしめた。

少年はぬくもりを感じた。

あの人だ。

そう思った。

部屋に入つた少年は姉の部屋から美しい笑い声を聞いた。

少年はゲーテ詩集をひろげた。すみれ。

あわれ、すみれはふみにじられ

倒れて息たえぬ。されどすみれは喜ぶよう。

こうして死んでも、わたしは

あの方の、あの方の

足もとで死ぬの。

少年はすみれをうらやましいと思った。

草かげにうなだれて咲くすみれがひそかに思つたこと

—やさしい人に摘みとられて胸におしつけられたなら。

それなのに美しい羊飼いの少女は無情にもすみれを踏  
んだ。

すみれは静かに息たえた。

さびしい死だろうか。

少年は悲しげに詩集を見守つていた。すみれへのあわ  
れみなのか。

ちがう。

さびしかつたのだ。

野原の一本の雑草にもなれぬ自分がうらめしかつた。  
突然、少年の狂気したような声が夜をふるわした。

誰か踏んづけてくれ、

誰でもいい、

誰でもいい。

その声はだん／＼小さくなつた。そしてとぎれた。

誰でも！

## 第二章

姉の部屋からもれるあの美しい笑い声は少年を悩ませ  
た。

その美しい声はハイヒールのぬくもりを少年によびさ  
ました。

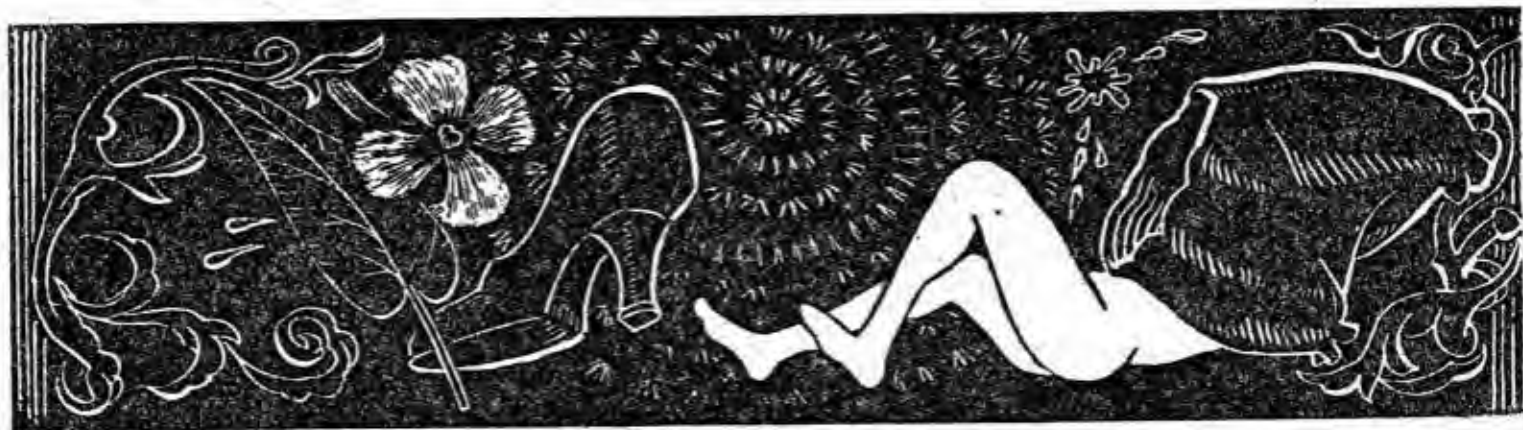
あの笑い声だ！

少年はおののいた。

ひそかにあの人を慕うこの罪惡。

あ—

今夜もまた、少年は玄関にあの黒のハイヒールを見た  
そして、あのサタンのような笑い声。



その人は姉より年上の戦争未亡人だった。  
未亡人——なんと魅力的な言葉なのだろう。

未亡人！

子供子供した少年の赤い唇がわなないた。その昔は少年の口の中で悩ましく消えていった。

未亡人！

何故！

少年は苦しんだ。

少年は見つめていた。

どうしようもないこのいらだった気持ち！

芝生に仰向にねころんでいる男は学生服を着ていた。それが少年の目に異様に光った。そして、もの狂おしそうに男にのしかかり男の顔を見つめているのだ。年配の女であることを知った。

夜の公園は不思議な香があつた。

女の手はしきりに男の髪をまさぐった。その白い手が顔がまるで失われた男の愛を引戻そうとするかの様に。女はまるで少年の存在に気がついていないかの様な狂乱に近い姿態だった。それにひきかえて無表情な男の顔。少年はその女の乱れるハイヒールに吸いつけられた。美しいと思つた。そして、その女を人妻だと思つた。ただなんとなくそう思つた。

少年は激しい嫉妬を覚えた。

あの笑い声を聞いたと思つた。

あの女の顔が未亡人の顔に見えた。  
あのハイヒールがこの女のハイヒールと。

少年はふと孤独を感じた。

若い人妻に誘惑されてみたい。

そう思つた。

少年は、若い人妻に誘惑された友達を知つていた。

月の美しい夜、やはり、この公園の芝生の中で。

白い細い指の感触に、ふと伏目になつた僕の目にうつつたのは！

その友達には興奮して云つた。

ハイヒールさ。美しいハイヒール。

少年はその友達をうらやんだ。

少年の首に犬の首輪がはめられていた。その冷たい重い鉄の輪は鎖で未亡人のベットの足にくくりつけられていた。

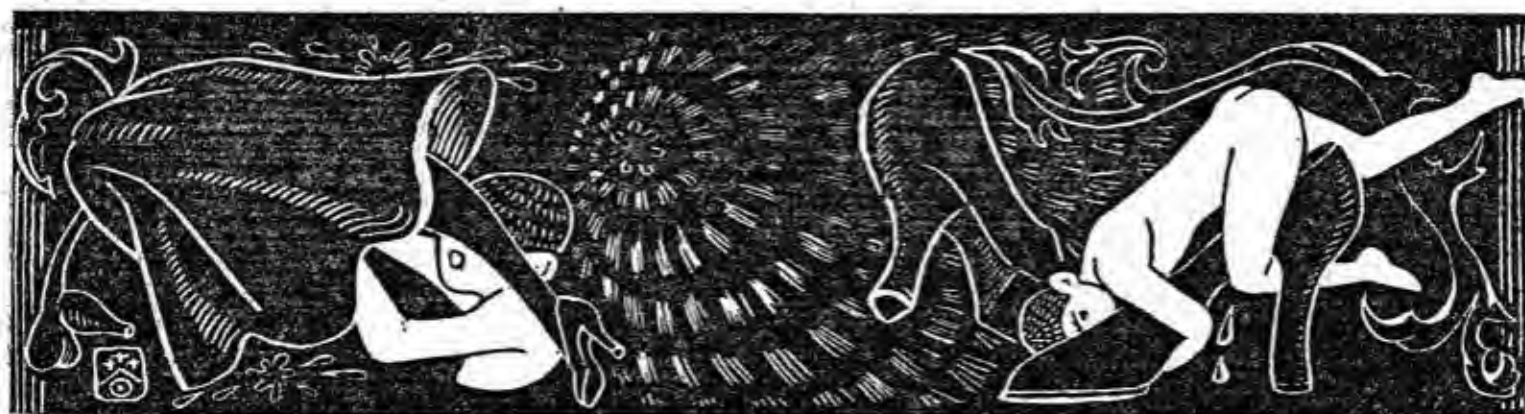
少年はもがいた。手と足の柳のふれる音がみにくく、また、あまく少年の心に響いた。少年の伏せた黒いひとみを未亡人は可愛いと思つた。そして、ちよつとにくらしいと思つた。

未亡人は微笑んだ。

あたたかい猿ぐつわをしてあげましょうね。未亡人は少年の目の前でズロースを脱いだ。ほら、こんなによごれている。

少年は羞恥におびえて、目を閉じた、





あなたの好きなブローズよ。見なさい。見るのよ。  
未亡人はブローズをひろげると少年のふるえている唇  
に押しつけた。

ここのところ、一番よごれている、ここところをな  
めるのよ。さあ、なめなさい。

少年はきつくく唇を結んだ。

なめるのよ、私の身体の臭をうんと味わうの。

未亡人はやにわに少年の鼻をつまんだ、息がつかまる。

少年はかすかに唇の線をゆるめた、と、非常な勢でブ  
ロースが少年の口の中に押し込まれた。少年はうめいた。  
激しい嘔吐が。

フフ、いかが、私のブローズの味！

ベッドの上で、未亡人は素裸の少女をだいていた、そ  
してその足元に未亡人のペット、テリアがブラ／＼まっ  
ていた。

少年はもだえた、激しい肉慾のもだえ。

見るのよ、見ているのよ。

息切れした未亡人の声が響いた。

皺もなき淡墨色の刺青の  
すき見ゆる絹の夢！

少年は前に未亡人が立っているのを知った。未亡人は  
何もまどつていなかった。ただ絹の靴下が未亡人の肉体  
に美しくまどつていた。そして黒のハイヒールが少

年を激しく威圧した。

苦しいでしょう。

未亡人は微笑んだ。

フフ、あんなにちいぢやいのが、

未亡人は足をあげた。少年のをハイヒールでいたずら  
した。

少年はおもわず、

黒のハイヒールに白い花が散った。

戸が開かれて、ふと、少年の幻想がとだえた。少年は  
心苦しい視線を感じた。

アパートの戸の前に未亡人が立っていた。

お姉様のお使い？

少年はうつむいた。

無造作に腰をおろしていたベッドの夜具が、いちだん  
と高く未亡人の香を放った。

少年はあわてた。

手に持っていた未亡人のハイヒールを、おずおずとベ  
ッドの下に置いた。

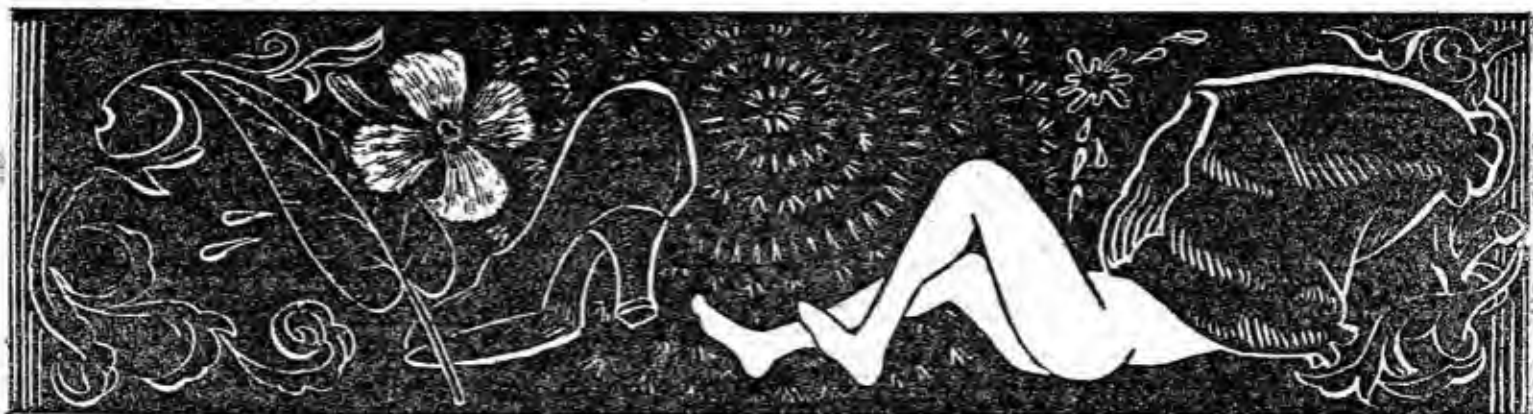
だまつて入ってしまったて……

少年は言葉が乾いてしまったのを感じた。

少年は最早そのいらだつた異常な神経をそらすすべを  
失った。

誰でもいい。

少年はもう一度云つてみた。



誰か踏んづけてくれ。  
誰でも、……

少年は空虚を感じた。

少年は思った。

やはり、創造しなければならぬ。

少年の目がいつとなく冷酷に見えた。ひややかな無表

情なむじやきな残酷がそこにあつた。

創造――

少年は叫んだ。

そして、ある夜のホテルの一室。

その少女は少年にとつて全く見知らぬ人だつた。強い

て云えば、不良の友達に紹介されたのを思いだしたまで

にすぎない。

ベツトを見つめた少女はかすかにおびえていた。

まだ処女なのだろうか。

少年はいぶかつた。

この場合、少年はあぼずれの不良少女を欲していたの

だ。より肉感的な。

少女はあまりにも静かすぎた。それは少年を軽い失望

に陥れた。

しかし……

少年は少女を見た。

不良仲間の一員には違いないのだ。

そう一人できめた。

少年はとつさに少女を抱きすくめた。肩がびくつと動

いた、少女はだまつていた。本能的な羞恥からか、少年の手は少女の手で強く握られた。少女の両腿はびつたり合わり、そのお尻の重みはますます度が加つてくる。それは異常な力が少年の手をはらいのけた。

皮下脂肪の多い柔かな滑めらかなお尻が薄いズロースから手にさわる、少年はむやみに少女がいとおしくなっていくらしくさえたつた。

少年はつと手を放した。均整のとれた若々しい肉体が気恥しさにふるえている。少年の鋭い視線を感じた少女は、少年に背をむけて乳房を手でおおつた。

少年はふと血を感じた。荒々しい兇暴な血が少年の体内を縦横にかけめぐつた、少年は一種の残酷に似た気持を持つて少女を眺めた。少女をつかむと背にねじりあげた。いたい、という悲しい弱々しい声を聞いた。少年はかすかに微笑をもらした。不思議な快感だつた。

少年は黒のハイヒールを指さした。

はいてみて。

少女は不思議そうに少年の顔を見た。

美しいんだ。

少年はそうつぶやいた。

乱暴してすまない。

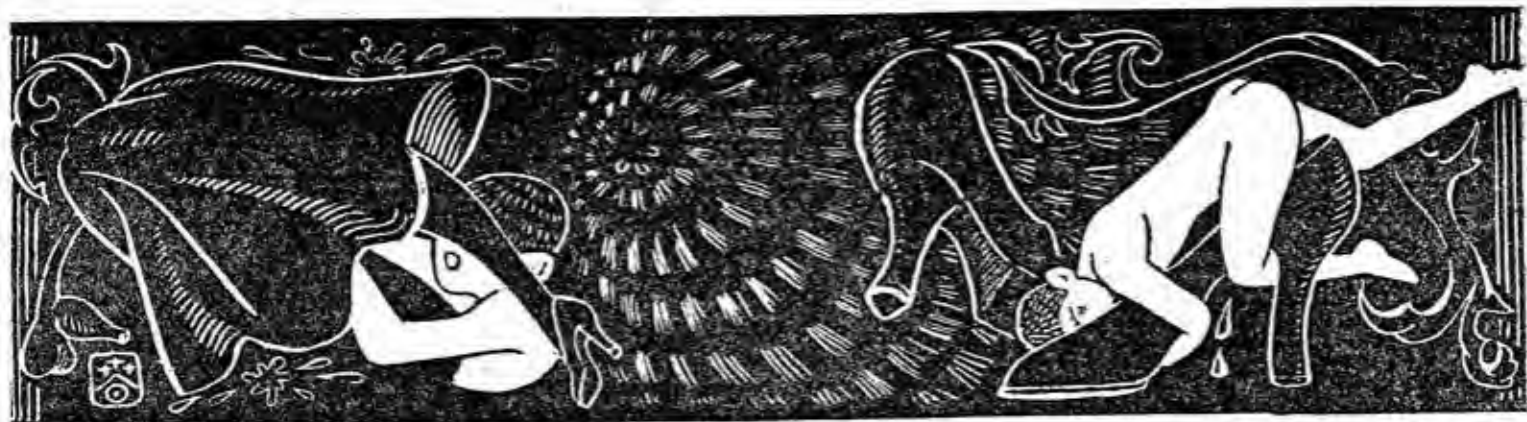
少女は素直にうなずいた。そして、ハイヒールを手に

とつた。

待つて、

少年は叫んだ。





僕がはかせてあげる。

少女はベッドに腰をかけた。少年は少女の絹の靴下を直した。

そして、はかせた。

少年はそこにパスキンを見た、ロートレックを見た。

モンパルナスやモンマルトルの観衆街をえがく、デカダンスの群。朽ちれてゆく、いまわしい娼婦の群。

そこにマドンナがあり、ヴィーナスがいた。

少年はそつと接吻した。

少年らしい陶醉だった。

黒のハイヒールは性の象徴と見做された。

黒のハイヒールがあたえる激しい苦悩によつて、少年の性はその代償満足を得ていた。確かに。

しかし、少年は思つた、何故黒のハイヒールを性の対象にしてしまったのか。

それはあまりにも病的な少年の耽美的な目がとらえた幻想の世界ではなかつたろうか。

深い長い眉にとざされた目は、無気味に光を放つ。

国鉄のなかで少年の前に無造作にぐいとだされた黒いハイヒール。一瞬にとらえられた花火のひとつとすくたつたのだろう。

そのひとしづくに少年は不思議な「美」への憧れを見いだした。

ボードレールを耽読する少年が、むしろデカダンスに

陥つた悲しいその花火のひとつとすくのなかに、少年は永遠の「美」の象徴としての「女」を見ていたのだ。

少年は夢にうなされた。

美しいあの未亡人が足から黒のハイヒールを脱ぐと、

そのなかに美酒をたたえて少年にほほえんだ。

少年はそつとハイヒールに接吻した。そして、その美酒に唇をひたした。

と、黒のハイヒールはたちまち未亡人のあらわな二つの白い………に没し、少年の唇におびただしい………

………がしたつた。

舌の音がして少年の顔が犬に見えた。鼻をならして奥深くなめまわる未亡人のペット、テリヤがそこにいた。

少年は、黒のハイヒールがなんであるかを知つた。

### 寄稿家への連絡

埼玉の那須不二夫氏へ「縄とmasochismus」についての原稿並に「小説の一幕」の続編を送り下さるようお願い致します。岡田圭介氏へ、続稿お待ちしております。連絡場所お知らせ下されば幸いです。局留でも。沼正三氏へ、委細承知致しました。至急連絡先を御指定下さい。羽村京子さま、七月一日附お手紙有難く拝見しました。住田氏への御返事は次号へ予定しました。小坂多美枝様、先日予告下さいました分の一部だけでも是非御送稿下さるようお願い致します。

(編集部)

# 切腹願望と女性心理

中 康 弘 通

人間の性への目覚めは、しばしば出生への疑問に始まる。女胎の神秘は、彼の、若しくは彼女の、肉体の故郷として憧憬される。

それは神聖であり、然し、すべて神聖なるものに付きまとう秘密の匂いを免れずにいない。

やがて女性是自己の果すべき役割——出産——を漠然と考え始める。月経の開始に続いて、乳房の発達もさる事ながら、急に皮下脂肪を湛えて豊満さを増す腹部は、彼女に女性の任務を自覚させずにはおかない。それは不可視なまゝに、定期的な疼痛と出血の源として認識される。

男性にあつては、外表に突出し単純な形態

を具えている性器の特徴によつて、腹部への性的な執着は比較的早く、概ね無自覚裡に消失する。然し女性に於ては性器が下腹部に内包されることから、妊娠乃至出産への神秘感と共に、腹部への象徴的執着を惹起する。従つて男性に於けるナルシズムがベニスに集中されるに対し、女性に在つては漠然と腹部に向けられるのは当然であろう。

さて性機能の特徴として、男性は能動的且つ貫通する自己を目標とし、女性は受動的且つ貫通される自己を常に見出さねばならない。従つて女性に於けるマゾヒズムは、下腹部を貫通される幻想に極めて戦慄的な快感を期待する。

それは彼女の中で、最も大切な然し最も不可解な機構を内包する部位だからである。即ち、愛する下腹部に於ける貫通の幻想は、女性にとつて、恐怖、苦痛、破壊の象徴でありマゾヒスチックな女性にとつては至上の歓喜でなければならぬ。(「第二の性」——

近來の名著——に於けるポーヴォワール女史の、思春期女性の「自己傷害」「盲腸切除の慾求」に対する分析は、必ずしも完全ではない、と云えよう。)

こゝに日本人特有の性心理異常としての「切腹願望」は、「腹切」という歴史的現象の持つ意義を、その悲愴美と自己加虐への憧憬のみを昇華させた、一種の自己遂行行為である。それが女性自身の意志により切腹の擬態として表現されるならば、他の手をからず、彼女自身の手で最も愛する自己の腹部に、ベニス代償たる刃物を加え、是を刺し、切り裂く幻想は、性行為へのナルシスチックな反撥と、愛するが故に自ら加虐するマゾヒズムとを、同時に満足せしめる象徴的手段に他ならない。男性に於ては女性的な性格の者に多いようである。此の場合、女性的な自己への自覚が不射的に女性としての二重人格的自己への



ナルシズムを生み、一方、劣等感への補償行為としてマゾヒスチックなヒロイズムを誘発するために、切腹願望が彼の意識に表象されて来るものの如くである。

筆者は「切腹」研究の途に於て、女性に於ける性心理異常と関連して、上記の理論の可能性を予想し、「切腹」という現象の女性心理に与える反応を検討したいと思つていた。

たまたま、筆者の畏友にして援助者、黒部竜二氏は、その資料蒐集中、「ストリップ忠臣蔵」判官切腹の舞台写真所載雑誌「りべらる」を購入した際の所見を、次の如く筆者に伝えた。

——私が例の「りべらる」を銀座で求めた時、何気なくパラ／＼とめくつていた女店員が、例の「女切腹」を見て同僚に、「女が切腹してるワいやあねエ」と二人で笑い合つていましたが、私の眼は其の時、彼女等の表情を走つた一種の昂奮を見逃しませんでした。

是は、筆者（同時に黒部氏）の抱懐する理論に、薄弱ながら一つの根拠を提供するよう思えた。

果せるかな本誌四月号の「開花の契機」に於ける、切腹願望の告白は、「現代女性の悶

える流露」と黒部氏も評する如く、筆者らに確信を与えるものであつた。七月号の水内氏の手記は、重要な例証を更に加えた。是はまた同時に、所謂「女腹切」に対する男の性心理をも示すものである。（尚、女性の腹部への愛着が嗜被虐的に働いた時、羽村氏の数多い手記となるのではないか。）

黒部氏はまた極めて最近の私信に於て、一つのケースを齎している。

——二十八日、歌舞伎座で市川海老蔵の「白井権八」（六郷川立腹の場）を観劇、権八が小舟を中流に乗出し逃れんとしながら兩岸を埋める御用提灯の波に覚悟を定め、「今が最期だ、見物致せ」と呼ばわつて、船端に片足をかけ、刀を逆手にウムと腹に突立てる刹那、前の席にいた二十才ばかりの女の子二人が、「あゝ……切腹たワ」と昂奮して互に抱き合つたのには、芝居よりも興味をひかれました。

元来、日本特有の演劇様式として発達した歌舞伎の特異性は、陰惨なるべき「切腹」を巧みに一大耽美要素として表現する事に、其の一件を負うのではあるまいか。而も観客層を女性として発達して来たことは、女性が「切腹」という現象に就て一種の美意識と関心

を感じている証左と見てよからう。

右の一例では、海老蔵のニヒルな美貌が生命を堵けた恋の達引に生きて死ぬ権八のニヒルな青春像に適合するが故に、其の自己加虐的な切腹の姿態に哀切な美意識を感じた若い女性の、昂奮を呼び起したに違いない。

然し、性心理殊に女性のそれは、極めて理論付けの困難な分野であり、斯学の進歩した泰西心理学界でも、H、エリスやフロイドが今日も尚、古くして新しい卓見を提示している状態のようである。

それは一つには性心理が屢々意識下に根源を発していることにもよるが、一つにはデータの蒐集が困難なことにもよる。

筆者は「切腹」研究に着手した以上、日本固有の性心理異常としての「切腹願望」を分析することによつて、女性性心理の追究に役立てたいと思う。

本誌読者にして、「切腹」乃至「切腹願望」に就て特に関心を寄せられる女性が、貴重な示教示唆を与えて下さることをお願いする次第である。

筆を節したため、明確を欠いた点は御賢察を乞う。

（おわり）

# 長期刑

——悦虐の告白——

古川 裕子

あゝ、一体何故私はこんなものを書かなければならないのでしょうか。これは私個人の「自慰」にすぎないのでしょうか。夫との骨に沁みるような快楽を失った三十過ぎた女の、哀れな「自慰」と云う以上、私に何を申せましょう。夜毎私は、今は亡き夫との加虐被虐の楽しみを追憶して身悶えました。女の身のうちに狂いまわる衝動が私にこんなものを書かせるのです。

私は恥しい。多くの読者のみなさんが、奇譚クラブの誌上で「最大公約数的道徳」の無意味さを私に教え、又「社会に害毒を及ぼさぬ限りの個人の絶対の自由」を強調し、私を教え励まして下さった。理屈の上からは、私にもそれがよくわかる。そしてそう思いたい

しかし私の心に蛇のようにからみついて離れない観念は、私自身への——そのような私への限りない嫌悪感なのです。地に伏し、泥に転んでも拭い切れない罪悪感なのです。愚かな私をお嗤い下さい。ひよつとすると、そのような罪悪感が、私のマゾヒズムの変形なのかも知れません。

ともあれ、私は、今夜は、これを書かずにはいられません。今私は悶えているのです。誰か私を満足させてくれる人はいないか。かつての夫との日々を経験したあの楽しみをあの方法で私に与えてくれる人はいないのか。今私はたゞ一人。この部屋に、桃色のシェードをかけたスタンドの柔かな光が、真白なシーツに落ちているこの部屋の寢床の上

に、私は今たゞ一人きり。

正直に申しましょう。あらい呼吸と身うち、はてつてくる熱感、下半身のもだえるばかりの、うごめきのうちに私は、これを書いているのです。

あゝあの夫との日々。私が心の底から満足させられ、地上の楽団を夢見たあの日々即ち夫から始めて、長期刑を受けた一週間のことを、今お話致します。また同じようなくり言とお思いになる方は、どうぞこの先をお読みつづけにはならないで下さい。そうですこれは哀れな女の、つまらないくり言にすぎないのでから。

一日目



それは五月の中旬のことでした。生あたたかい、密度の濃い重い風のゆるやかに吹く五月の朝のこと、朝食をすませたあとの夫は、いつになくゆつくりと茶の間に座っていました。

「今日はお仕事は？」

「うむ、今日午後からでいいんだ」

と答えて、夫はしばらく黙っていました

「ところでお前、昨日頼んでおいたあの用事はどうなつた」

とゆつくりした口調で申しました。

「あつ！ 忘れてましたわ。ごめんなさいね、つい、うつかりして」

私は本当に忘れていたのです。

「ごめんなさい」

私は新妻らしくにつこりとして、もう一度あやまりました。

「そう、忘れたの。あれは僕には、可成重要な用事だったのだが……。そう、お仕置を受けなくてはいけないよ。覚悟はいいだろうね」

一 日 目



夫は相変らず静かなゆつくりとした口調でつづけました。

「はい。すみません。貴方のお仕置を受けますわ。私が悪かつたのですから」

私は素直にそう云いました。そしてその夜の折檻を思い浮べました。

「そうか。では着物を脱ぎなさい」

「あら、今すぐに？ これから？」

「黙って裸になりなさい。」

おだやかに、しかし重々しく、すこしも表

情を変えずに云いました。その声には、犯し難い威厳が感じられると同時に、私に対する愛情の響きもありました。

それまで幾回も折檻を受けていましたが、それは、いつも人の寝しずまつた夜のこと、昼間からお仕置を受けることは、かつてなかつたことなのです。

私は黙つて茶の間の障子を閉め、外から見えぬようにして一枚一枚と着物をぬぎ始めました。夫は、そのような私の姿を目を離しもせずに、じつと見つめたまゝでした。繻絆一つになりました。

ました、私は流石にためらいました、いつもは夫の手で剥ぎとられるのですが、今日は自分で脱がなければならないのです。

「それも脱いで」

夫が視線をそらさずに云いました。

ズロース一枚の私の姿がそこにありました

「何をぐずぐずしているの、さあそれも」

夫は決して大声を出さず、むしろ押しこらしたような、おだやかな声で云うのです。

私は自分の指をズロースのゴムにかけて、

おろさねばならないのです。

私は完全にヌードとなつて立ちつくしました。

「そのまゝで赤の囚人服と月経帯をこゝにもつて来なさい」

云われるまゝに、すこし小腰をかゞめて、おずおずと隣室の洋服ダンスから赤のゴム引のレインコートとすこし汚れた私の月経帯とをもつて来ました、歩くと腰のあたりから股のあたりにかけて、なまあたたかい風が吹きとおつて、妙に刺戟的に感じられました。

夫は前のところに座つたまゝで、私を待つていました。

「女囚第十八号、囚衣を着ろ」

夫は今度は乱暴な口調で冷たく云いました。裸の素肌にはレインコートの裏のゴムが冷え冷えと感じられ、私には、ひどく悩ましく感じられます。

「女囚十八号。姿見の前に座り、月経帯からゴムをはずせ」

次の命令が下されます。

囚人服を着た途端に、私は折檻される妻の位置から、完全に刑期中の女囚に変つたのです。従つて、私の名は女囚十八号。この番号は私に下される折檻の回数を表わしています。

す。つまり今度は、結婚以来第十八回目のお仕置を受けているわけなのです、私は前科十七犯の女囚——今フードを背中につけた赤のレインコート姿で黒いズロ

二 日 目

はピンとこなかつたのです。ましてズロースを口に入れられることは始めての経験でした。

ースから月経帯の換えゴムをはずしているのです、私は覚悟しました。このレインコートの色によつて刑罰の重さがわかります、赤を着せられるときは最高刑なのです、そして今まで私は赤の囚人服を着せられたことは、なかつたのです。

夫はいつの間にか、姿見に真向いになつて全身をうつしながら正座している私の背後にひざまずいて鏡の中の私を見つめていました。

「女囚十八号。そのズロースを自分で口の中に押しこめ」

私はぼんやりとその言葉を聞いていました。いつもは、夫の手で、ハンケチやガーゼを口に入れられるので、そう云われても、すぐに



「女囚十八号。月経帯のズロースを口へ押しこむんだ！」

大きくはないが冷たく激しい声。



私はおずおずと口をあいて、自分でズロースを自分の口の中へ入れ始めました。自分の体臭とかすかな臭がし始めました。

「もつと、もつと、ズロースを全部口の中へ入れてしまえ」

命令は下されます。私は懸命に口を開いて自分でつめこみますが、ズロースを全部入れるには私の口は小さすぎます。ともすると布片は咽頭をふさぎ、呼吸をとめるばかりになります。舌で一生懸命支えていると舌が押しまげられて痛みます、舌が布片に押されて咽喉の方にまきこまれるようになる、全く一言も声が出なくなります、口は、あけられるだけ開かせられても黒いズロースの一部は口外に溢れ出しました。夫は、ゆつくりとそのズロースの上から、自分の禪を細くたたんで押さえ頭にくくり、ズロースを吐き出せぬようにしてから、

「女囚十八号、月経帯のゴムで自分の口と鼻とを完全におほい、頭の後でボタンでとめろ」

私はその汚れている飴色のゴムを自分の手で自らの口鼻にあて、ボタンをはめねばなりません、心持ち伸びたゴム膜は、口と鼻とをびつたりと蔽うて、ぐつとしまります。ゴム

と自分ながら異様な女の体臭とがいきりまじった臭が否応なしに私の臭覚を刺激します。いや、それよりも苦しいのは呼吸です。

口の中一杯のズロースと、夫の禪をとおして口鼻をおうゴム膜とのわずかの間隙からだけしか、私が生きるために必要な酸素をとることが出来ないのです。

「苦しい！ 苦しいのよ」

私の目から涙がこぼれ、声にならぬうめきでこう云いました。

夫は注意深く私の呼吸の状態を見ていましたが、まだ安全と見てとつたのか、別に猿ぐつわには手もふれません。私はそれだけで胸をはずませて呼吸をしなければならぬ苦しさなのです。しかし一方口をふさがれると自分の身体の一部が、急激に充血してくるのが、自分でわかるのは悲しいことでした。

「ごめんなさい。苦しいの」

私は猶もだえて手をあげて頭の猿ぐつわの結び目に触れようとした途端、両手首は後にねじあげられ、麻縄がまきつき、首縄をかけてぐつと縛りあげられました。

身体が前のめりになり、顔が畳の上に押し伏せられて、縄は容赦なく腕に頭に胸に乳房に巻きついて来ます。足首も括られて後手の

縄と結び合され、喉に首縄が食いこみます。

「女囚十八号は、そのまゝの姿で一時間、猶爾後一週間の長期刑に処す。服罪のしるしにうなずけ」

一週間と云う言葉は私を驚かせました。想像もしなかつた長期刑だつたからです。しかしこんな私にどんな反抗が出来ましょう。猿ぐつわの顔をわずかに動かし、うなずくよりほかはありません。

あゝ、その一時間がどんなに長かつたことでしょう。手首や肩の痛みもさることながら、一番辛いのは何と云つても下半身が殆ど露出してしまつてことです。十分、二十分とたつてくると、もがくまいと固く決心をしていても、だんだんと耐え難くなつて来ます。すこしでも呼吸が楽になるように、すこしでも首縄がゆるむように、おりまげられた足を、いくらかでも休めるように、身体は心にもなく浅ましくもがき廻ります、と同時にレインコートの裾はまくれて臀部から太ももまで一度露出したら、もはやかくそうすべもありません。それは云いようもない凌辱の感じでした。

三十分、四十分、畳の上を、もがき廻り、たうつ私を、夫は一言も云わず、殆ど目も離

さず、見つめています。四十分すぎると、もう、力が尽きて、ぐつたりとして来ます。一時間、本格的なゴムの猿ぐつわが、どの位辛いものなのか、猿ぐつわを嵌ませられた経験のある読者の皆さんには、わかつて下さいますでしょう。

五十分すぎると、もがく力も失せて、たゞ畳の上にくつたりと転がつたきり、せい一杯の哀願を、唯一つ許された自由である瞳にたゞえて、弱々しく夫を見つめるだけなのです。そして一時間目、私にとつて長い長い体刑の終了の時刻、夫は、ゆつくりと身体をうごかして、私の背後にまわり、まず手首と足首とをむすび合せた縄をほどいてくれました。それだけで天国のような自由感。そして次に無惨にも私の口鼻をふさぎきつている、月経帯の猿轡のボタンに夫の指がかゝります。ゴムが顔から離れると同時に新鮮な空気が鼻から一度に入つて来ます。齒の間に噛まされた夫の禪がとり去られました。もう顎の感覚が麻痺していて、ブロースを自分では吐き出せぬ有様です。夫がつかみ出してくれるのをぼんやりまっています。

完全に口が自由にされた時、私がこの夫に完全に屈服し、夫の命令に何一つ反抗し得ぬ

精神状態に陥つた自分を発見しました。

自分でも不思議な心境でした。それまでだつて、マゾヒストの私のことです、夫に対して表面立つて対立的な態度にでたことは一度もなかったのですが、この時は、心の底から完全な被征服感を味わわれました、たとえ殺されても、私は夫をうらみには思わないでしょう。全くの心理的の奴隷！無意識の内にあつた、独立の私と云う人格は完全に征服されて、たゞたゞ屈従を歎びと感ずる奴隷としての自分を、はつきりと意識しました。今までに何回となく受けた折檻は、遊びごとだったのでしょうか。これはその時まで嘗つて感じたことのない心理だったのです。こんなに完全な苦しい猿ぐつわも、こんなに身も絞る程の縄目も、始めてでした、わずか一時間、それも鞭打たれたわけでもないこの一時間以後、私の運命は、はつきりと定つてしまつたのです。完全なマゾヒスト！夫の完全な所有物、完全な女奴隷！私はその時から、それ以外の何物でもなくなつたのです。

猿轡をとられ足縄をとかれた私は、後手の縄尻をとられて夫の前に正座させられました。そして声を出して服罪の約束をさせられた

のです。

「わたしは、これから一週間の刑に忠実に服します、わたしは以後自分を女囚十八号と呼びます。」

私ははつきりこれを云わされました。これからは私に下される命令を一つ一つ自分で復唱し服罪を誓わねばならないのです。

「女囚十八号。只今から労役に服せ」

「女囚十八号は只今から労役に服します」

後手の縄を解かれ、レインコートをぬがせられ全裸にされました。そして両手首間を十五厘程の鎖でつないだ革の手錠を、前に手首をそろえて嵌められました、又足首には同じように二十厘の鎖つきの足枷を嵌められ、麻縄の腰縄で素膚の腰をじかに括られ、その縄尻を夫がとりました。そして朝食のあとの食器の片付け、洗い物をさせられました。

夫は流石に台所や玄関の鍵を閉め、外からのぞかれるところは、見えぬようにしてくれました、せめてものことでした、とは云え相当以上の手足の不自由さです。茶碗や皿をやつともつて、ヨチヨチとよるめき、よるめき歩かねばならないのは、我乍ら情けない姿でした。しかも、少しでも、もさもさしたり、



茶碗を落したりでもすると、夫の手にある幅二纏長さ六十纏の厚いゴム鞭が背中に音をたて、又背を突きとばされるのです。

「懲役」と云う言葉の意味がよく解りましたそれにしても真裸であると云うことは、何と恥しいそして

三日目

又、棚の上など高いところをふくときは一層みじめでした。両手首を高くあげ、足枷の足をのびあがるようにして、ふかねばなりません。夫の目はその時には、ちやんと前に廻っているのです。



に結びつけました。尚、口には大きなマスクをさせられました。しかし今度は楽です。私はベットの途中で三時間程休養しました。その間に夫は私にいろいろなものを食べさせてくれました。

三時頃でしたらうか。

「これから出てくるから、その間は晒しものだよ」

と夫は私をベットから起しました、そうして囚衣を再び剥ぎとると、麻縄で括り直しました。そして便所につれてゆき用便をさせ、今度は地下室の仕置部屋にひきたててゆきました。

たまらない恥しさをさそいます折檻を受けつけているといつても白昼の光の中です、肩をすぼめ身をちぢめて、おずおずと労役をする私の姿を夫は縄尻をとりながら冷たい目で見ていました。

あと片付けがすむと雑布がけをさせられました。手錠の手首をそろえ、裸の尻を高くあげてしなければならぬこの仕事は辛いことでした、夫は私の後で見ています。

昼頃やつと「労役」が一段落しました、私は肉体的にも精神的にも相当疲労しました。夫は注意深くそれを見てとつたのでしよう。

再び囚衣を着せ今度は後手錠にし、足枷を嵌めた上、革の首枷を嵌めて私をベットに寝かせ手錠足枷首枷についている鎖を夫々ベット

それから五時間、夫が帰ってくるまで、私は仕置部屋の首枷台に首をはさまれ、素裸の後手という姿で遇されました。足首も括られて立つたまゝです、相当の疲労を感じます。膝を折ると首枷台のために丁度首吊りの様な状態となるのは困りました。又大鏡と真向いですので、ともすれば鏡の中の裸の女がいつも私をじつと見ている錯覚に陥ります

首枷姿の哀れな女、それが自分の写った姿だとは思えなくなってくるのです、誰も居ない地下室でのこの感覚は妖しくも不気味で、

私は時間のたつのを忘れ、時には声を出して鏡の中の裸の女に話しかけました。声は地下室のコンクリートの天井にひびいて、妙に空ろに反響し、その声さえも鏡の中からきこえてくるようです。

「あなた、私はこうして、おとなしくお仕置を受けていますわ。あなたは、私のこの姿を絶えずに思いうかべながら、お仕事をなさつていらつしやるのでしょね、この一切の自由を奪われた私の身体、これは全部あなたのもの。あなたの所有物。あなたのドレイ。これが私の最大の愛情よ」

今度は後手の縄も、首縄もそれほど固くありません、縄の喰い入る苦痛で、のたうち廻つた朝にくらべれば、殆ど天国のような楽さです。しかしいくらもがいても、決して解けないことは同じです、私は晒しものになりながら、心の中では、夫のことばかり考えていました、それは真の「愛情」と云う言葉をもつて表現すべき、飲ばしい感情だつたのです。夜に入つて夫の帰宅と同後に野晒しを赦されました。そして再び手錠足枷ゴムマスク囚衣の姿で、足枷の鎖をベットにむすびつけられて、第一日の休養を与えられたのです。どうやら私は第一日の刑について、詳しく

お話しすぎたようです。この調子で七日間の詳細を述べていては、いつ果てるとも知れません、あとはなるべく簡単に書きましょう。

要するに夫の考えは結婚以来、数度の折檻によつて私の被虐性を確かめ得て、この際、徹底したお仕置を行つて、私を心の底から屈伏させ、完全なマゾヒストに完成するつもりだつたのでしよう。そしてその意図は、最初の一日で、いや身を絞る程の緊縛を与えられた最初の一時間で、大部分達せられてしまつたのです。以後の数々の折檻がなくても私は完全なドレイと化していたのです。

二日目



四日目

第二日は、朝から夫は仕事に出かけました。私は囚衣に後手錠足枷革首枷の姿で、首枷の鎖を犬のように折檻室の柱につながれ、食事はお皿に盛つた御飯を直接口をつけて食べさせられました。一番困るのは用便でした、足枷の鎖が短いので、その苦勞は一通りではありませんでした、もつとも辛いのは、しかしそのことではありません、周囲がことごとく鏡なので、そうやつて這い廻っている私の姿を、耐え切れず、夫がおいてくれた小箱に用便をしている哀れにも情けない姿を、いやでも自分で見なくてはならなかつたことです。これは、一時も休むひまのない精神的な拷問でした。午後になると私は疲れ切つて油染



みたボロ布のように、ぐつたりと横たわり知らず知らず寝てしまいました、そして夕刻夫がゆりおこしてくれるまで前後不覚だったのです。

### 三日目

三日目は肉体的な苦痛を、さほど加えられませんでした。その代り、夫のあらゆる排泄物を口に入れ飲みくたさせられました。

しかしそれらの排泄物を好まれる方もあるようですが、私にはその性癖はございませんでした。従つて夫からそれらを与えられ嘔み下すように命ぜられ実行させられたときは、縛られるよりも、息も出来ぬような猿轡を嵌ませられるよりも、又、鞭で打たれるよりも辛うございました。

それまではいくら痛くても、いくら苦しくても、むしろそれは私にとつて歓喜であつたのですが、これらの排泄物には全く嫌悪のほかはなかつたのです。

「これだけは勘弁して。かんにんして。そのほかのことなら、どんなことでもしますわ。ごめんなさい。ねえ、これだけは勘忍して。」

私は本当に懇願しました。

「女囚十八号は、これを口に入れ嘔み下すのだ」

夫は低いが押しつけるように冷たく言い放ちました。

「嫌！ いやよ！ いや！！」

私は口をしつかりと食いしばつて口を激しく左右にふりました。

「女囚十八号、おとなしくこれを飲むんだ」

「ごめんなさい。いやよ、いやよ、それだけはいや」

私は本当に泣き出しました。

「そんなものを飲ませないで、ねえあなた、いやよう、いやよう」

私は後手の身体をのたうつて泣き叫びました。

夫は冷たい目で私をじつと見ていました。

「そんなに嫌か。でもお前はこれを飲まねばならない。」

夫は私を荒々しく抱きおこして後手のまゝ正座させました。そしてそのまゝ両足首を括り合せ、髪の毛を一束にして縄で縛り、ぐつとひきしぼつて背中を通して正座し括り合せた足首をむすびました。私は咽喉を見せて仰向けにならざるを得ません。そのまゝ倒れぬように柱に括られ喰いしばつた齒の間に外科

用の開口器を挟まれました。器具はじりじりと口を開けてゆきます。無中で首を振つてもがいた位ではとれるわけがありません。

遂に液が口の中に流れこんできました。吐き出すにも首が仰向けになつたきりで髪の毛が抜けでもしなければ下を向けません。液は容赦なく咽喉に流れて来ます。夫は私の首を動かぬようにしつかり抱いてゴム布で私の口をピタリとふさぎながら、泣きもがく私の顔を見えています。

すべては終わりました。一滴残らず私の胃の中に落ちていつてしまつたのです。私はもう観念して、そのまゝの姿でぐつたりしていました。

夫は私を柱から解くと猿轡をはめ首と膝とを殆ど一緒にくくりました。手は勿論後手高小手です。私は平伏している姿となつたわけです。こゝでこの刑が始つて以来始めての本格的な鞭を受けました。

「女囚十八号、もう一度自分の手で飲むか」ぐつたりとした私の心にも、反抗の心がわきました。今迄のお仕置は私自身にも楽しかつたのですが、この刑はたゞ苦痛です。夫が憎らしくさえなりました。嫌がるものを余り酷い——死んだつて飲むものか、と。

思えば第一日の緊縛刑で私がすっかりドレイ化してしまつたと自ら信じたのは、まだまだ本当ではなかつたようです。

細いゴムの鞭が尻から下半身に容赦なく鳴り始めました。私は転つてもだえました、同じ所を打たれると痛さが二倍になります。一度打たれた場所は床の上を転り廻つて夫の鞭から避けねばなりません。避けると云つても思う存分に自由を奪れた身体、そう簡単に逃げ切れるものではありません。あつちへ転がり、こつちへ転がりうつぶせになり、身体をまげ、おそらく他の女の人に見られたら、浅ましい悶えかたと云うもおろかです。

ものの三十も打たれると、もう転び廻る力もなくなり、ぐつたりとのびて来ます。そして意識もやゝ朦朧として来ます。

夫は一言も云わずゴム鞭を振つていました。がそう云う私を見てとると両足を自由にし、片方の手では、……片方の手でも……始めました。鞭打ちのあとの朦朧とした虚脱感の中に、まざまざとした……猿ぐつわの下から……うめき出ます。もう先程の憎らしさなどはどこかに飛んでしまします。容赦ない鞭打の刺激とこの快感は、私に何もかも、どうでもいいような思いにさせてしまつたのです。

……がつづきます。うーむ、うーむ、と云ううなり声が、人事のように私の不自由な口から洩れるのです。

「女囚十八号。飲むか。承知ならうなずけ」私は思わずうなずいてしましました。

猿ぐつわがはずされ、コップが口へもつて来られました。そうして私は下半身からわきあがる感情の中でゴクゴクと何杯も与えるだけ飲みほしました。

夫は片方の手で私の口にコップをあてがひ片方で……ながら、そういう私を満足そうに、しかし冷然と見つめていました。

#### 四 日 目

四日目はいわば休養でした。二日目と同様に折檻部屋につながれていましたが、夫も忙しく家を留守にしましたので、私は殆ど一日首枷の鎖につながれて寝ていました。それにしても後手錠にされ、足枷の鎖をひきずり、囚衣に首枷までつけられて、フードをかぶせられたまゝ床の上に、ぐつたりと転つてゐる女の姿を御想像下さい。私も鏡にうつる自分の姿を見て、つくづく情けなくなりました。と同時にこの浅ましい姿を、誰か他の人に見られたいと云う不思議な衝動にかられました。

囚衣の裾はまくれています。たつた一枚素膚の上からきせられた囚衣です。裾の直しようもありません。身体の他の部分は充分すぎる程、囚衣につつまれてゐるのに下半身だけが真白な肉体を露出して居ます。囚衣が真紅のゴムレインコートであるだけ、白い肉体とのコントラストが鮮やかで私を余計そゝりたてました。云わば私は鏡の中の自分を見て、誰か他人に見られているという感覚にとらわれていたのです。私にもナルチズムと露出癖の傾向があるようです。

#### 五 日 目

次の日は早朝、まだ夜のあけきらぬうちに夫は私を自分のトラックにのせて、秩父の正丸峠につれてゆきました。小雨が降つていました。私は例によつてレインコートにマスク姿。目だたぬように鎖をのぼして後手錠がはめられていました。尻のあたりに手首があり運転台に座つていましたので、一寸見ただけではわからないのです。

峠の頂上についた頃は、天気はすっかり晴れ渡つて来しました。夫は頃合の場所にトラックをとめ、私をつれて、予め選定しておいた場所に入りこみました。そこは誰も通らない



しかも、山々を見はるかす雄大な場所でした。私はそこで裸にされ麻縄で後手に括りあげられました。しかし何という良い気持。身をおう布は何一つありませんが、朝の晴れ晴れとした山の空気が雲母のように透明な光と風。山々のトテツもない重量感。その中で私は樹に縛られ、岩に臥かされ、地面にうつぶせに倒され、又仰向けに左右に足首をくくられて写真をとられ、殆んどあらゆる姿態をさせられました。でも暗いお仕置部屋や夜でない、大自然の中の悦びは、私には一層の歓喜でした。何か健康なリクリエーションでもしている感じでした。

## 五日目



伸

夫は、丁度ハイキングに来たように私のそのような姿をいちいちカメラにおさめました。

午後再び曇って峠をあとに家へ帰って来ました。私には、手枷足枷が待つていましたがこの日は長期刑中のお仕置と云うよりもつとハイキングめいた楽しさの日でした。

## 六日目

第六日は、いろいろな緊縛の実

私はたゞ人形のようにあつかわれていました。最初から、かたく猿ぐつわをはめられて、これは一日中とり去ってもらえませんでした。御飯の時、といつても赤ン坊のように夫に口へ入れてもらう時だけ、わずかに口が解放されました。私の身体には縄の跡が無数につき、夕方にはただぐつたりと縛られて畳の上に転ったきりの有様でした。

しかし最後のお仕置はこのあとで行われました。それは夕方から再び雨になったのですが、囚衣を着せられたまゝ庭の立木に縛られて長期刑の最後の夜を夜明けまで雨に叩かれていたのです。流石にこの時は猿ぐつわはとられて、外科医用のそれを、ゴム製にしたような大きなマスクをすつぽりかけられました。一晩中、身体を直接叩くような雨の音を聴いているのは、何とも寂しく、又情けないものでした。頸や腕や胸や股、膝、足首には縄がかかっていますので、疲れてくると立木にもたれ、又前のめりに縄にもたれて、居眠りが出ます。だん／＼ひどくなつて来た雨はそうした私のフードから背中を腰を音をたてて流れ、何か絶え間のない鞭をうけているようにした。手には手術用のゴム手袋をはめられ手首は嚴重に背中で縄がかかっていますので

験日。私は全裸で、写真や絵、又は参考書に従つて、次々と鏡の前でその通りの型に括られました。所謂方円流の捕縄術の型、警視庁流の種々の緊縛、刑務所の重謹慎に用いる後革手錠、種々の拷問の場合の特有な括り方、



雨は流れこみませんが、雨にしめつた縄で身体をしめられているのが苦痛でした。

時々夫が雨戸をあけて様子を見に来ました。懷中電燈でゆつくりと私の表情をしらべ、囚衣の具合をあらためて、又帰つてゆくのです。夕刻の七時頃から縛られて翌朝の五時頃までこのお仕置の時間は約十時間でした。

七日目の朝私はやつと女囚十八号から、妻の位置にもどりました。しかし約二日間は、朝から晩までの休養が必要でした。

この長期刑以来、私は完全に夫に隷属してしまいました。そうしてこのような遊びから一生抜けきれなくなつてしまつたのです。

私のように折檻の折檻の方法は、まことに変化なく、珍らしいものではないですね。実際に行なうためには、そんなに複雑な方法をとれるものではないのです。しかしその平凡な方法に於ても、デリケートなあらゆる細部を楽しむ、それが私たち夫婦のやりかただつたのです。

こゝにお話したのは、そのような遊びのごく初期もので何ら皆様の心をそよめるものではないと思います。でも私には、この長期刑が忘れられません。夫がなくなつた今日、折りにふれて、身の感覚によみがえるのは、第一日

の緊縛刑であり、山の大自然中のお仕置であり雨にうたれる自分の姿なのです。私のマゾヒズムの第一歩、これは本当の最初の一里塚にすぎないのです。しかしそれだけに忘れ難い懐しさに一杯なのです。

ともあれ今夜私は悶えています。今の私には誰もこのような折檻を与えてくれる人はありません。私はたゞ一人、やわらかな桃色の光の中で、真白なシーツの上に身を悶えて、尚私はそのような私自身に罪のうしろめたさを感じつつ、身のうちにうずく宿命の血に耐え切れないでいるのです。

誰かこの身体をめちやめちやに虐いたげてくれる人はいないでしょうか、いやあの札幌での有様を思い出せ、もうこりこりした筈ではないか、と私の心の片隅で別の声が叫びます。

でも、でも、でも、あゝ誰か来て下さい。さあ早く私を裸にしてぎり／＼と縛りあげて！口には、呼吸もとまる程の袋ぐつわを嵌めてしまつて！そしてお望みならその上何とでもして！ あゝ誰もそうしてくれる男のかたは居ないのでしょうか。今、こゝで、私はこんなに悶えているのに！

(終り)



# 女性切腹の 繪について

田谷敬生

上、美女一文字腹

中、美女十文字腹

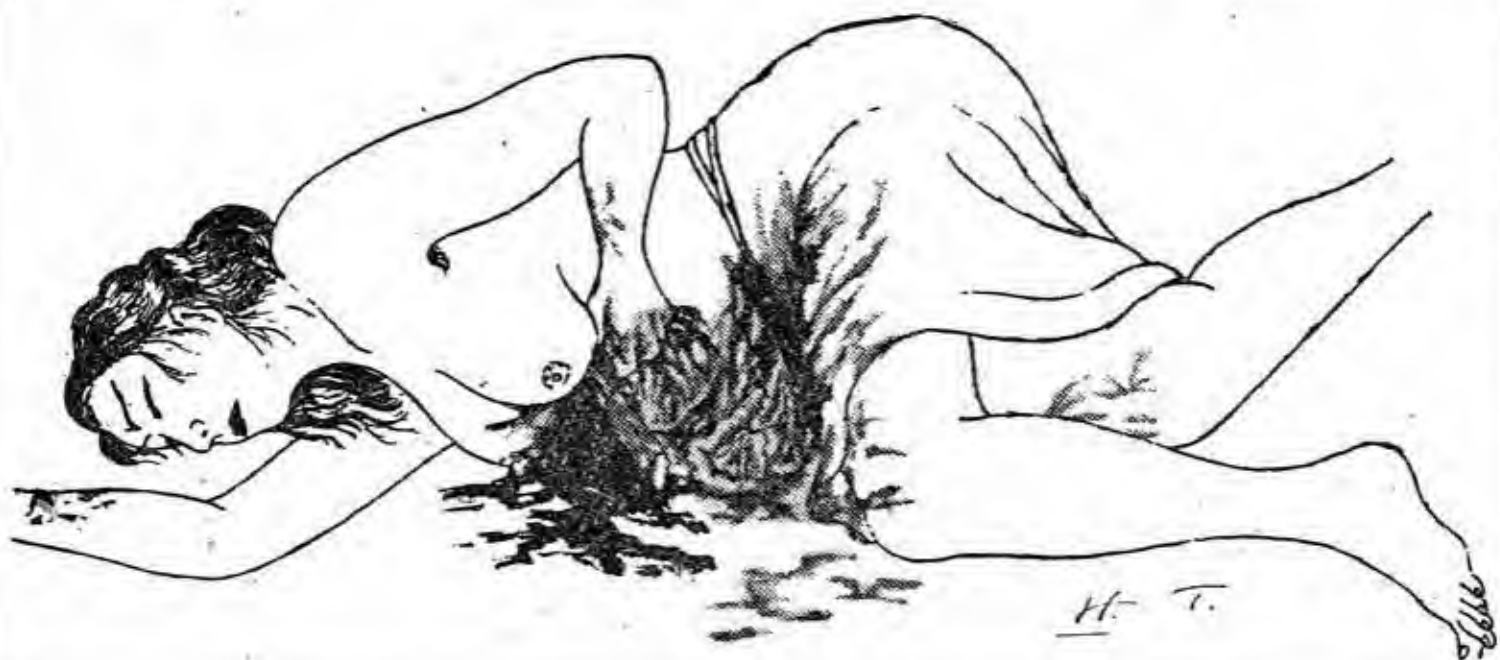
下、裸女自決



此の参考女性切腹図は八月号の「女腹切の考察と女性の切腹例」田谷敬生、と同時に掲載する性質のものでありますが、筆者からの到着が遅れましたので本月号に掲載しました前月号と併せ御覧下されば幸甚です。

——田谷敬生氏より——

H君より同封の切腹図絵をことづかりました。いずれも昔の記憶を大体辿つたもので、傷の開き方、血の流れる程度など正確に描いてあるそうです。その点、画そのものは上手でないかも知れませんが参考図としては貴重なものだと言います。





# 幸福なる隷属の告白

## 前がき

人間の心の不思議さは全く神秘と云う他はない。特に私がマゾヒストとして完成する迄の色々な悩みを振り返つて見て、其の感を深くする。マゾヒスト程自己批判をして、自分を不幸であると考え込んで居る者は凡そこの世の中に少いであろう。彼等は自分が変形の心理の症状を持つて居ると云う事の不自然さを悲観的に考え過ぎて、自分の希望を実現させようとする勇気を失い、満されぬまゝに悶々の日を、自らあきらめて送つて居るのである。奇クはかゝる不幸な魂の昇華を大胆に取り

鐘かね

坊ぼう

巡めぐる

上げて、努力されて居る点に付ては全く驚異的な存在であり、不幸な心に光明を与える唯一の糧となりつゝあることは実に貴いものと云わねばならない。然し本誌も重点は「男性サディスト」及び「女性マゾヒスト」に置かれてゐる様にお見かけする。

世には「男性サディスト、女性マゾヒスト」と同数以上の「男性マゾヒスト、女性サディスト」が存在する。「男性サディスト」より以上の心の苦痛に悶えながら、彼等より勇氣と実行力に欠け且つ又感覚は鋭敏にして頭脳は鋭敏なれど、引込思案で内気なため只々夢想の世界にのみ呻吟してゐる人達が如何に

多きことか。

又「女性サディスト」も女性特有の羞恥心から、積極性なく、結局彼等は奇クの編集方針に口を挟むことも少く、黙々として唯その発売される日を待ち焦れて居るばかりであろう。マゾヒズムは決して背神的な不健全なものでなく、最も感受性の強い「ヒューマニスト」に多く見られる、善良さの具現であると思ふ。

従つてマゾヒストは不幸な者でなく、幸福な者であるとする実証として、又世の此の道に行き悩む人々に光明の貧燈ともなればとも思ひ、不得手なる拙文を、我が最愛の妻の許



可あるまゝ、旅宿のつれづれを利用してこゝに認めた次第である。



私は、現在の妻と結婚してからと云うものは、事業も漸次成功の一途を辿り、身体も日々健康さを加え、独身時代の蒼白き顔色の頃に比べれば何と云う相違であらうかと自分ながら不思議に思う位である。苦しみの時代の記録をこゝに書こうと云うのでは無い。それは、色々な形で本誌に発表済みのことであるから。

私はあくまで私の現在の幸福なる生活を、極く平凡にありのまゝ叙事羅列することにする。文を飾る程の文才を持ち合わさないし、又結婚以前の自分の心の悩みは、どちらかと云えば妻に見せたくないものである。唯如何にして私が彼女を得、又彼女が平凡なる、一中流家庭のお嬢さんから現在の如き理想的な女神として完成し私に君臨する様に成ったか？この過程が一番皆様にとつては、望ましい告

白であろうし、又私もその義務がある様に思うが、それは彼女の許可を得て次の機会に譲ることとする。

その過程を一言にして云えば、本来女性と云うものは、男性が彼女を崇拜して愛を求め自分を卑下して、中世の騎士の如く奉仕し、誠意の有りつたけを費し続けられ、必ずその男を愛し、同情し、好きになつて、その男の満足が行く様に、自分を色々な形に表現することが出来るものであつて、私はそれを徹底的にやり遂げたに過ぎぬ。

勿論彼女は私以上に徹底した気魄の持主で人一倍勝気であり、此の点私のそう云う態度に共感があつたこともいふまでもない事実であるが次第に私に崇拜されるのが当然だと思ふ様になり、更に私の愛情の表現に異常性を見出し、次には、その私の異常性に自分を協調させて私を喜ばせてやろうと思ふ様になり、遂にはそれが習性となつて、自然に女王として私を支配する事を好む様になり、美の女神として私に君臨する事が自分の女としての生命

だと感ずる様になつたのである。

然し彼女の此の面は、あくまで私と二人だけの世界に於て、私の好みに応じて、女性の内部に潜める、感覚的なブライド及征服欲が自然に妖美の香りの中に醸成されたものであつて、一度、現実の生活に戻るや、私の異常性を絶対に許さないし、又それに協調する彼女の異常性も全く影をひそめ、第三者に対しては絶対の体面を保ち、美しく上品なる、レディとして、他人に我々の生活を覗かれることを、極度に恐れるのである。この点、アブノーマルな私の生活にも劃然たる一定の枠があり、ノーマルな人達から見れば、全くの狂態としか思えない生活態度も、決して第三者には立ち入ることの出来ない夢幻のカーテンの奥に於てのみの事であつて、實際社会人としてはノーマルそのものなる生活が送られている所以であり、又その幸福なる生活が、飽きず撓まず長続きする所でもある。

私の妻は私にとつて神であり、亦彼女自身もそう思つて居る。彼女の性格、天性の容姿





その心、皆私にとつては理想的な女神のそれである。彼女を探し得、結婚し得たことが私の幸福の始まりなのである。彼女と二人きりで生活する東京都郊外の私の自宅は正に天国であり、第三者の訪問の無い時、実務のない時の、家での凡ての時間は、彼女への奉仕と崇拜のためにのみ費される。この天国では、彼女は私を「お前」と呼び、私は彼女を「奥様」「女王様」「女神様」、はた又「御主人様」と呼ぶ。カーテン外の現実の世界に於ては、平凡な家庭の主婦として甲斐／＼しく、家事を処理し、貞淑なる若奥様として心から私を愛し、私の身体の加減の悪い時など実に献身的に尽して呉れる妻が、二人きりの世界に入るや、急に残酷にして驕慢なる女王として私に君臨するのである。

日曜日は、私が完全無欠に徹底して奴隷になる日である。朝起きてより就寝まで家事一切を行い、彼女は唯私に命令を下すことのみが仕事である。土曜日の夜は最も楽しい御仕置の日であり、其他のウィークデイは、家事

は全部妻がするが、二人きりの世界に於ては厳しい女王と奴隷の関係には変りはない。彼女の衣類の内、パンティとブラジャー、及び彼女の多量各種の靴、これだけの洗濯及び掃除は何日と云えども凡て私の役目である。私が出張から帰った時などは、下男部屋（彼女は私の書齋をそう呼んでいる）の戸棚の中は彼女の汚れ物が山の様に積んである。

彼女にとつてはそれが汚れ物の山でも私にとつては正に楽園の花山にも等しい。久方振りで懐しい女神の香氣にむせ返り乍らその品々の中へ顔を埋めるのである。彼女は全くの美人で、その容姿の美しさ、上品さは私の文才では到底表現し難い。特に私はぞつこん惚れ抜いて居るだけにそう思えるのかも知れないが、エキゾチックなのび／＼とした姿態、芸術的センスのある感覚、及び能力、実際的な思考力、上品なる教養、特に私を有頂天にさせるのはその匂えるが如き体臭である。

彼女が部屋に入つて来ると、あたり一面後光がさした様に明くなり、周囲は酔えるが如

き甘い香りに包まれるのである。真におのりの様になつて恐縮であるが、私の友人等も皆そう云つて呉れるから、半分はお世辞としても、一寸ザラにない美人であると私は思っている。彼女は学生時代スポーツの選手で、性格は明朗快活、極めて健康で病氣は始どしない。従つて日曜日の朝、奴隷としての私がベッドの下に踞いて朝の挨拶をする時も、大変寝起きが良く、「ウーン」と女学生のような伸びをして、可愛く笑い作ら、すんなりとした美しい足を床につけて、起き上る。

「あゝ今日は日曜日なのネ」

と私の差し出すスリッパに無難作に足を突込んで、チラと私の顔を何時もの、イタズラそうな目で見下す後からガウンを着せかけ、洗面所へお伴をして日曜日の私の御奉仕が始るのである。

彼女が洗面する間私は側へ踞いて次の命令を待つて居る。彼女は目で命じて私に「アー」と口を開けさせ、自分のウガイしたあとの水を、私の口の中へ吐き棄てる。彼女から



最初の嬉しい贈物を受けて暫くウツトリと  
しているとパチンと頬を打たれる。

「早くトイレの準備をなさいよ」

言い捨てて置いてひらりと軽快な足取りで  
トイレットの方へ向うのである。トイレット  
ルームと云つても、ベッドルームと私の書齋  
の間にある一坪半程の仕度部屋であつた其所  
にシュータンを敷いて、彼女の為に専用のト  
イレットとして居るだけのことである。神聖  
なる女神の日々の生理的行爲を、側で私が奉  
仕するのに、便利にする為、普通の便所と区  
別してあるのである。

彼女は煙草を吸い、新聞を読みながら、悠  
々と私に奉仕させつゝ朝の此の部屋での行爲  
を楽しむ。勿論彼女の此の行爲の始めから終  
りまで一切は全部私が手を下してするのであ  
つて、彼女自身は全然自分の手を使う必要が  
無いのである。彼女の用が済んで、容器の中  
に顔を近づけ馥郁たる香氣に私は、酔いしれ  
ることが出来るのだ。私が外出中の彼女の此  
の部屋での行爲は従てあり得ない。その時は

彼女も普通の便所へ用足しに行く訳である。

女神の香物の入った容器を捧げて、仕末を  
しに行く私に、「どんなお味？ 何時もと違  
つてゝ？ 妾、昨夜は少しお腹の具合が変だつ  
たのヨ」

亦女神の「ネクタール」を捧げ持った時は  
「如何？ それで顔を洗つて見たら？ 少し  
は美男子になれるかも知れないことヨ」

彼女は例の軽い笑声を含み乍らそんな事を  
云うのである。私がそれに応じて如何にする  
かは御想像にお任せする。

日曜日の食事は勿論彼女一人がテーブルに  
向つて振る。私は側で給仕。私の食事は彼女  
の許可が下りて後、台所で彼女の喰べ残りを  
一人で振る。彼女は時として、給仕する私に  
目で命じて、足許に蹴ずかす。そして自分の  
喰べかけや、一旦。に入れたものを皿に吐き  
出して、自分の足許に置く。足の先でそれを  
私に寄せ乍ら

「お上り！ ワン君」

私は犬の様に匹つん這いになつて、それを

喰べるのである。喰べ終つて彼女を仰ぎ見る  
私の目と、キラと光るイタズラツボく、私を  
見下す彼女の目とがカチツと合致する。すぐ  
彼女は軽いスマートな笑い声を立てゝ、足の  
先で私の顔を一寸蹴つて、「さ、お立ち！」  
と合図する。

食事が済むと入浴。脱衣を手伝い、裸身の  
ヴィーナスに色々と奉仕する楽しさ。全身  
を洗つて、マツサージ、化粧を終えて、部屋  
衣にくつろぎ、長椅子に身を横たえた彼女の  
足許へ跪いて足の爪を切りマニキュアする。

朝起床してから此時までに、その間、二十回  
から三十回の彼女の平手打を両頬へ頂戴する  
私の奉仕のやり方のちよつとしたお気に召さ  
ない点を提えて、甘く叱り乍ら打つのである  
午後は大抵リクレイションに外出する。帰  
宅後、彼女の疲れた足をもみほぐすのも私の  
楽しい務めである。その際彼女は、汗の出た  
自分の素足の指や指の股を、私の舌で奇麗に  
掃除するのが非常に好きである。これは、ウ  
イークデイでもよく命令することの一つにな





つてゐる。再び入浴して、夜の食事を済ませ私が凡ての家事を片付け終ると、彼女の検査を受けねばならない。不備な点が必ず、見つけられてそれを理由にお仕置を受ける。然し日曜日のお仕置きは、明日の仕事に対する私の消耗を恐れてか、簡単に三十分位で大抵許して貰える。

一番酷いお仕置は、土曜日の夜で、この時は大抵三時間から六時間位、長期のお仕置の時は日曜の朝まで続く時がある。勿論彼女は就寝するし私も、犬小屋につながれたまま、睡眠するのではあるが！

鞭打ち、緊縛、犬や馬にされる事、足で蹴られること。ハイヒールの靴を履いた足で踏まれること。等々、其他色々の方法のお仕置を受けるが、それを具体的に詳細に書けば枚数に限りが無いので、省略し、希望があれば次の機会に報告してもいいが、大体本誌の女性責めの色々の方法を、男責めに逆用したのもと思つて戴ければ大差はない。丁度、吾妻新氏が女性に成り替つた様なものである。

彼女は血を見るのは嫌で、私を折檻するに、ゆ・つ・く・り・と時間をかけて、楽しみ乍ら、然も、ごくスマートに洗練された物腰で、色つぽく、且つ驕慢にして氣品を失わず、甘美な色彩の中で、皮肉な微笑をたゞえ乍ら、私を苛めるのが好きだ。香氣溢れる体臭を吸い乍ら、ス・ン・ナリとした美しい手足で、責められる私。然も天上の福音かとも思える様な、彼女の美声で叱られ乍ら……。

此時こそ私の幸福の絶頂なのである。忘れない。結婚して三年目の、彼女の誕生日の夜の事であつた。彼女に命令された、パンティの洗濯を忘れたために酷く折檻された事があつた。普通のお仕置が済んだ後、その汚れた彼女のパンティを口に押し込まれ、ブラジャーで猿ぐつわを、かまされて、家の周囲を三十回、真裸で四つ這で廻れと命令された門は閉つて居り、家の周囲の庭に芝生があり氣候も左程悪くないし、高をくくつて廻り始めたが、実際にやつて見ると十回はおろか五回でグロツキーになつてしまった。彼女は

ポーチに出て、月光に照らされ乍ら、私の浅間しい姿をジツと見て居る。

一回廻つて来る毎に、彼女の前へ進み出て廻つた数だけ、彼女の靴に接吻しなければならぬのだ。接吻が済むと彼女は足を揚げて私の尻を強く蹴る。私は十回廻ると完全に、のびて、一步も、進まない様になつた。彼女は煙草を吸い乍ら私の有様を見て居たが、「ベッドへ行つて鞭を持つておいで！」

と命令した。私が彼女の前へそれを持つて蹠坐して捧げると。

「お前はほんとのマゾヒストなの？ 勇氣のないマゾヒストなんてお断りよ！ 何でも徹底してるお前が好きで私は結婚して上げたのよ。妾の命令が聞けないの？ これ位の苦しみて一生の幸福を捨てる積り？」

鞭の先で、軽く私の頬を叩き乍ら彼女はそう云つた。

「勇氣をお出し！ そら！」

彼女は手にした鞭で私の尻を思い切り三度叩くと、さつと身をひるがえして家の中へ入



つてしまった。私は此の時程彼女を残酷だと思つた事はなかつた。然し痛い手足を引きずり乍ら、一回一回と、犬這いを続ける内、彼女の真価を次第に悟り得て、終りには、何とも云えぬ幸福にむせび乍らぐるぐると家の周囲を廻つたものである。

も少しで完遂する頃、彼女が寝巻の上にガウンをつゝかけ、部屋靴のまゝで、テラスの方から、私の方へ近づいて来た。

「どう？弱虫さん、少しは妾の恐い事が分つた？」

私はそれから、彼女の靴が私の咽喉や、顔を踏み付けるのを感じた。許されて、ベッドルームに入つたその夜の、彼女は殊の他気嫌がよく晴やかな笑い声を立て乍ら私を愛撫して呉れたのである。

家庭生活に於ける丈でなく、ビジネスの面に於ても、彼女は私を叱咤し、弱気になり勝な私に世の荒波を乗り越えて行く勇気を与えて呉れた。実質的な、申し分のない家庭の主婦、貞淑此の上ない良妻が、二人だけの世界に入るや忽ちにして妖美な暴君に早変わりす

る彼女の不思議なる魅力に圧倒され続け乍ら私は夢の様な幸福感を切実に感じて居る。此の上品なる美女の淑やかな物腰の何処に、何かと云うと間髪を入れず、ピシヤリと私に平手打を呉れる敏捷さが潜んで居るのであるうか。

私は時々彼女を崇拜するの余り、両手を合せて伏し拝むことがある。そんな時でも彼女は平然と私に自分を拝ませているのだ。彼女は最近私を叱る時「バカ」と云う言葉をよく使う。「ちよいと、お馬鹿さん、此所へいらつしやい！」自分の正面へ蹠かせ、「バカ、顔をお上げ！」と命令して置いて、ペツ！と痰を私の顔へかける。「バカ、それが乾くまでじつとそうしていらつしやい。拭いたりすると承知しないワヨ」ざつとこんな風である彼女から嘲弄されることは、私に、彼女の愛情の深さをひし／＼と感じさすのみで、益々彼女への思慕がつゝのである。彼女もそれを知りつゝ、その目的でやつて居るのだ。仕事に疲れ、夜晩く我が家に帰る私を温く迎

え入れ、甘い頬打ちを交え乍ら繰返えされる蜜の様な接吻。彼女への絶対的たる隷属が、反対的に明日への私の活動力の源泉となるのである。夢幻のカーテンの内で彼女の足下に屈する安心感は、カーテンの外で勇躍伸張する生活欲、事業欲と転化されるのである。これこそマゾヒストの理想的完成ではなからうか。

マゾヒストは夢幻と現実とを明確に区別すべきである。甘い幸福なる屈辱を夢幻の世界とすれば、ビジネスは強い勇気と実行力の現実の世界である。

倫理的な自己批判は一切やめ給え。マゾヒストたるものは人一倍純情家である。道德觀念が強い人である。然し夢想にのみ走つてはいけない。必要なのは現実的な勇気だ。これなくては、マゾヒストは何時までも不幸である。

〔註〕 今年妻は二十九才。

私は三十八才。結婚して今年で八年です。



其 頃 を 語 る (四)

絵 看 板 の 咄

伊 藤 晴 雨

泉鏡花作「三味線」は前後只一回、明治四十年四月浅草公園宮戸座で水野好寿、五味国太郎、木下吉之助等に依つて演ぜられた外、今日迄舞台に掛けられた事が無い。三味堀の塵介の船頭(実は肥料屋なんだが)が美しい妾を持つて居るのも可怪しいが其妾を鍛冶屋の工場で轆の前へ縛り附けて焼き殺すというのも不自然といえ云える。併しソコが鏡花文学で「おはし様の霊」が現れるという事になつて居るから幽霊文学の正体はボカサれて幽艶無比な情景を現わして居た。其三味堀のある浅草向柳原一丁目には柳盛座という市内で一番小さい劇場があつて、今前進座で話題になつて居る中村翫右エ門の父、中村梅雀が座頭で坂東和好という九代目市川団十郎に酷似した役者が居た。木戸大入場金二銭であつたから俗に二銭団品といつて評判であつた。此劇場は昼は旧劇、夜は新派で女の責められる芝居を時々やつて居た。今日日本劇壇の第一人者として権威ある渥見清太郎君がまだ演芸画報在社中、私が同君を勧めて「江戸育紅葉江戸猿」という暫の顔見世狂言を書いたのが同君が劇界へデビューする最初であつた。其柳盛座の絵看板は新派が三枚、旧派が五枚で旧劇の方は縦六尺横二尺八寸、新派の方は

縦五尺、横二尺五寸、筆者は先代鳥居清忠氏で画料は一枚金二円であつた。

「三味線堀」の本文に「柳盛座の看板には女が縛られて居るオールドの弁慶が羽目に剝げかゝつて居る」といつた様な事があるのはそれで其柳盛座の舞台は幕尻五間三尺、廻しが四間三尺、定員千人、座主福島佐吉で福しまという座附茶屋が一軒あつて年中無休、女の責場は旧劇の紅皿、缺皿、新内の歌鳥、義太夫の皿屋敷等、座主の好みと下町の職人手合の多い観客層であつたから同区内の七軒町の開盛座の中野信近一座の新派劇と競争で夜の新派劇は一方で「十万円」を出せば、一方では「地獄燈籠」などという地下室へ娘を抛り込んで責めて弄り殺しにするという前受け専門の脚本をやつて競争して居た。甚だ「自己を語る」とお叱りを蒙るかも知れないが、私は其頃同座の興行に係りして居たので二六新報所載山田旭南作「七化地蔵」などという五幕七場の中に女の責場が三場もある脚本を座附作者の竹紫鶏三に脚色させ、私が洋面風の背景を揮毫(勿論無料奉仕)して喜んで居た。毎日女の責場を見て酔つ払つて先生扱いにされて悦に入つてブラ／＼して居たのだからタワイの無い話であつた。



高島田振袖の美しい腰元を縛つて海底に放り込むと舞台一面の亀甲沙をかぶせ数十匹の魚が腰元の周囲を泳ぎ廻るという様な工夫をして喜んで居た。其内に段々道楽が強くなつて来て芝居の看板を描いたり、番附の下絵を附けたして居る内、習うより何とやらで後に松竹合名社に入り、大谷社長に依頼で伊井、河合、喜多村の全盛時代に絵看板と番附一切を私が揮毫する様になり一時私は劇評家——新聞記者——の足を洗つて劇壇の人になつたので芝居の絵看板に就ての専門的な咄を書こうと思います。

いづれ其内に早稲田の演劇博物館長河竹繁氏からの御依頼もあつた事でありますが茲では女の責場の絵看板に就て専門雑誌にも未発表の話を書く事に致します。

「ナン」の芝居の看板位「と頭からケナシて了えばソレ切りです。併し「面白そうだ一幕見たいナア」と見物を引ツ張り込むのは何と

宮戸座三味線堀の看板、水野の船頭、木下の妾、芳三郎の情夫、阿村のおはし様の霊



いつでも看板です。此点は正直な処、関西の方が勝れて居ると思います。戦災前の大阪道頓堀五座の絵看板の雰囲気は東京では決して見る事は出来ません。（映画の看板も関西の方が親切だと思ひます）。

東京風の鳥居流と大阪の芦国風と芸術的問題には触れずにどちらが現代の観客層にピッタリするかと云えば関西に団扇が上ると思

います。又しても老人の昔譚になりますが、明治三十一年頃京都に野村芳国という芝居絵看板の名人が居た。此人の息子が過去の松竹の映画監督野村芳亭氏で、もしハツキリ云えば柳サク子の旦那です熱海にロケの時「先生お淋しいでしょう」と云い乍ら入つて来て。ソレカラ……、其頃、蒲田の松竹撮影所では「お淋しいでしょう」という言葉が大流行り、イヤこれは余談です。

現、其頃の四条南座、京都新京極の阪井座、京都明治東向の芝居、其他映画館のない頃の京極に四、五軒あつた劇場の看板は全部野村芳国一派の作で洋画風の光線を配つた人物が浮き上つて美事な絵であつたのを覚えて居る。

其頃、京極の夷谷座に明治時代川上貞奴と共に洋行してソ連迄廻つて来た日本最初の女優というより女役者という方が適當な当時、中村仲吉という女優があつた。後に此人は中

村翠娥となつて、川上児童学園の教師となり福沢桃介経営の学校で没したが、其頃は沢村源之助と福井茂兵衛を情夫にして新京極の往来で酔つて寝て了つたという豪放な女で私に至つて親しくして居た。此翠娥に可愛がられたのは、今関西劇壇で「西の川口松太郎」と云われて居る五世瀬川如皐君である事を罪な様だがスツパ抜いておく。

其翠娥が(卅一年八月)矢張、夷谷座で大切に「浦里の雪責め」を出した時の事、絵看板に浦里の縛られて居る処を描いたら、「女の

本郷座 不如座不如帰の看板 喜多村の浪子



縛られて居る処を描いた看板は掲出罷りならぬ」と警察が云い出した。其理由というのが頗る振つて居る。曰く「京都は観光地で外国人が大勢来る所である。日本人は女を虐待する様に思われるのは国辱であるから、縄をかけた看板を出す事は許可しない」というのである。泣く児と地頭の譬。御無理御尤、描き直したのはいいが浦里に縄をかけない看板は凡そこれ程間抜けなものは無かつたが此取締りはたしか大正時代迄続けられたのを覚えて居る。大阪にはこんな馬鹿げた取締りは無かつたらしく明治の末期、道

頓堀の中座で中里介山原作「高野義人」を新旧合同で演じた時、奥の院の療堂で河合武雄の娘芳野が杉の木に後ろ手に縛られ、深沢の悪僧に辱められ様として居

る図は背高であつたかと覚えて居る。色彩の豊富な絵看板であつた。

東京の芝居看板は横巾が狭く、縦が長く、関西は横が長く縦が短かく正に反対であるのは引幕にも現われ、東京は縫目が縦、大阪は横(軍陣の幕を利用したとすれば大阪方が正しいが江戸は船の幕だというからそうなたのである)という風に何もかも反対なのも地方色が出て居て面白いと思います。茲で絵看板の寸法をいえば東京の歌舞伎座は創業当時より、縦五尺、横四尺、明治座は縦五尺二寸、横二尺八寸、一番大きな看板は焼失前の新富座で縦七尺三寸、横四尺というべら棒に大きなもので、女の責場を描く場合などは人物が二尺以上になる。此座で明治廿九年七月山口定雄一座(當時は深野座と改称)の狂言は俗に「野ム虎」という書生芝居の独壇場と云われる裁判劇で、山口の芸妓小さん深川洲崎弁天の鳥居に縛られて、悪車夫の熊蔵に強姦され様とする画面(清忠筆)を見て其絵看板に誘惑されて観劇したのを今に忘れ得ない。大阪の中座の看板は縦四尺、横七尺余と記憶して居るが横の方が構図には至便である。揮毫製作に関するいろ／＼な条件を書けば際限は無いが責場に関係が無いから省略す



る事にした。

「看板描き」といえば一種の屈辱的な名称とも聞かれる。併し芝居の看板描きは馳け出しの美校の生徒なんかには描けない。第一に草稿をつけて居る時間がない。絹地の製作の様に下書をスキ写しにして描く事を許されない。ザラ紙の上へ（大劇場は鳥の子だが）木炭でザツトあたりをつけて描くので書き損じをしたら全部紙を張り直さねばならず、ソナ事は絶対に出来ない。第二に日限はギリギリ一杯である、甚だしい時は一座六、七枚の絵看板を一日で仕上げる場合さえ珍らしい事では無い。馳け出しの画工などは面積に吞まれてしまつて手も足も出ない。イクラ芸術論を振り廻しても追つかない。第三は材料の問題である。絵具は粗悪な泥絵具である、筆も刷毛も粗末なもの斗りである。揮毫料はお話にならぬ程少く、責任は重く官展万能主義の画家などの知らない苦心と手腕を要するといふ位にしておくのが丁度いゝ、叱られるのが怖いから……

過去と現在の第一流の画家にして芝居の絵看板を描いた人は鏑木清方、鱸崎英朋、小室翠雲、久保田米仙、其息金仙、同米秋、鞆音門下の小山栄達、寺崎広業、小林清親、現代

では伊東深水、小村雪岱、岩田専太郎等々々所謂一流画家が看板に筆を執つて敢て愧じなかつた。勿論看板絵を以て生活費にしたのでは無いが演劇発展の為に敢て看板絵を描いた事は美挙である。徒らに大言壮語、口に芸術論を喋々として暮夜密に官展審査員の門を叩き叩頭百拝、阿諛これ事とする徒の如きは綴帳芝居の看板さえ描き得ないであろう。南画の大家、小室翠雲氏が明治末期に伊原青々園博士作「緑の糸」を神田三崎町の東京座に上演した時、縦五尺、横三尺の絹本に南画を以て台湾風景を描いた其画料は僅に金五円であつたと覚えて居る。他人の事を云う序でに自身の画料を正直に云えば歌舞伎座も明治座も均一の一枚金八円宛、本郷座が五円であつた。曾我廼家五郎に頼まれて大阪中座の看板を描いて一枚七円請求したら大阪の松竹本社から三円に負けてくれと云われた事があつた余りに裏面史を書くのも如何かと思われるので此辺りで止める事にする。闇の夜もある事だから……

責場の画家の件でかいた月岡芳年の描いた三国志の桃園結義の看板は明治初期、団菊座三人揃での歌舞伎座（？）の看板で今なら準国宝級のもの、上野東照宮の衝立になつて居

たが、戦災のドサクサ紛れに行方知れずになつてしまつた。又明治廿九年七月興行の本江座の「不如帰」の看板は逗子の海岸が寺崎広業当時審査員、伊香保の藤狩りが鏑木清方、浪子の臨終が鱸崎英朋、青山の共同墓地が落合芳麿で此看板は同座の大入祝として現在豊川稲荷神社の社宝となつて居る。

看板芸術また捨る可らず、草稿無しにブツツケに描く芝居の看板は大衆小説の口絵より至難である。論より証拠で専門の芝居看板を描く人は東西を通じて何人あるだろう。現在東京松竹の新派の看板を描いて居る田中不染という男は元神戸で橋本関雪氏等と共に輸出の安屏風を描いて居た人であつたが、今の東京の看板はマンネリズムに陥つて行き詰りの形である。むしろ大阪の方が技巧は別としても効果的であると私は見て居る。

大衆小説の挿絵画家、野口昶明氏は井川洗涯の門下で嘗ては京都の小芝居の看板を描いて居たと覚えて居る。

神戸新開地の看板描きから出て挿画に転身したのは私の門下生、大橋月皎である。月皎は神戸新開地の看板画師木田敬氏の弟子であつたのを後に私の手許から講談社へ入り、里見弴氏の小説から一時売り出したが今は似顔

絵専門家になつちまつた。

神戸に芳明という人が居た。恐らく京都の野村一派であるだろうが新国劇、沢田正二郎一派の専属であつたが今でも大阪の看板を描いて居るだろうと思う。温厚な君子で技巧も巧い人であつた。

新派全盛時代の東京の看板は富岡永洗門下の落合芳麿の筆で、芳麿の父は似顔絵の大家落合芳幾である。洋画風を取り入れた清新の画風で此人の描いた被縛画は艶麗という言葉丈けでは尽し得ないものがある。空前絶後といつても決して溢美でない。美人画の大家、永洗の衣鉢をついだ丈けあつて縛られた女のポーズの美しさ、髪形のよさは正に垂涎三

(一)

それは去年も八月の半ば頃からでした。

それ迄は健康に絶対的な自信を持っていた私でしたが少しく胃腸障害を起し、食欲も減退の一途を辿り日増しに衰弱して行くのが恰も目に見える様なのです。殊に一番悩まされたのは連日の不眠症と、腹鳴り(毎食後ごろごろと間断なく鳩尾の辺りが鳴り響く)それとその音に目覚めたり、又その音が耳底に

尺の価がある。現代の大衆小説の挿絵程迫真

力が無いかも知れぬが明治時代には芝居の看板は此人に限られて居た。其作品は今、早稲田の演劇博物館に残されて居るが、晩年、不幸肺を病み、大正五年の夏、四五才で東京浅草阿部川町の裏長屋で死んだ。

出でよ、芝居の看板画工出でよ、と私は大声で叫びたい。芝居の看板が満足にかけられ、大衆小説の挿画位はお茶の子さいさいの河童だ。

「其の頃を語る」

— 完 —

こびりついて仲々に眠れないのです。そんな状態が一ヶ月近くも続き(勿論その間節酒、節煙したり、種々な薬も試みて見ましたが)

一向に効き目もなく、遂に勤務先の医者に徹底的に診察して貰う事にしました、採血、赤血球沈降速度検査、レントゲン検査、検便、蛔虫等の有無、胃癌、胃潰瘍の疑念、血圧の検査等等、その結果は何処にも欠陥はないとの事、然し前記の症状は連日厳然たる事実だつたのです、一度自分が病んで見ると初めて

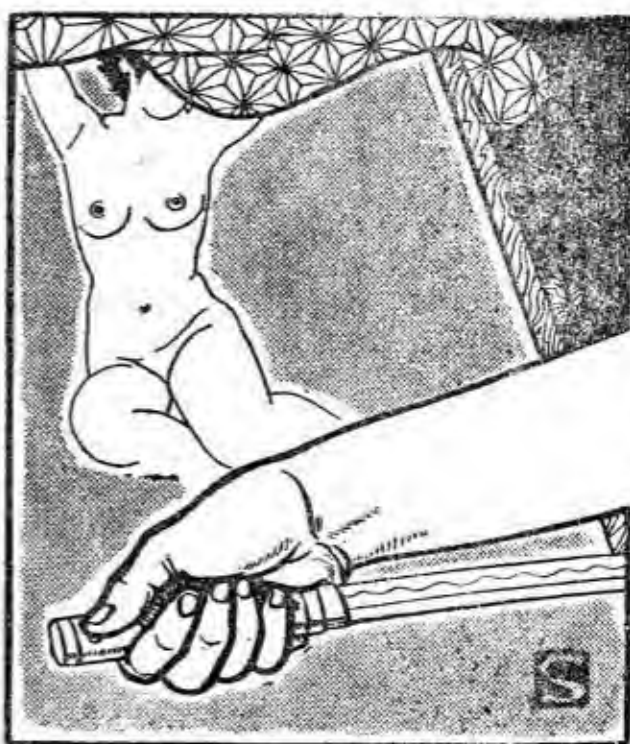
【読者通信】

先日、アルバムが美しきし縛めが入手致しました。本当に立派なものです。あの十六枚の中、荒縄。足枷、犠牲台等がよいと思ひました。たゞもう少し想像し得るその場の雰囲気というものがほしい気がしました。例えば「足枷」のように、そして「猿ぐつわ」では余り顔を掩い過ぎたようです。洋装着衣の少ないのも残念でした。然し、何んと云つても私のよいコレクションの一部となりました。尙引続いて時代物の画帖を出されるそうですがこれには大きな期待をかけています。次は男の責め場のものを限定版で出してほしいと思います。(京都 I・A 生)

健康体の有難さが身にしみて応え、私は復員当時ののはち切れんばかりの健康さを堪らなく懐しく想い出すのでした。

九月に入ると夜毎鳴きすだく虫の音も段々と繁くなり、一方体の調子は相変らずなので益々淋しくなる許りです、毎夜床に入つても眠れるのは極く僅か二、三時間、その間私は色々と考え抜きました、食後七時間、乃至八時間位すると決つた様に鳩尾から腹部にかけてごろ／＼と無痛の鳴動を感じるのです、私





## 我が告白の

## 断章

(四)

須藤 律夫

それには五つの治療（胃腸障害、肺結核、赤痢、大腸カタル等）の実例も載つて居り著者は某医博、信憑性を云々するよりも寧ろ治り度い一心で翌日艾を買つて来ると早速試みる事にしたのでです。（けれど正直に言うのと治り度いと言う気持よりも私の性癖自己の腹部に刺戟を与え度い）と言う自虐趣味が強く作用した事是否めません。

(二)

には原因も解らず、療治の法も解らず、時としては自ら腹を切り割いて調べて見度い様な焦燥さえ覚えるのでした。

「何か上手い療法はないものか」

それ迄に種々の薬も試みていましたし、漢方薬のげんのしようこ等私は案外好きでしたので御茶代りに毎日飲んで居りましたが、何の変化もありません。連日の不眠と殆んど絶食に近い迄の食餌、そして暁方等殊に悩まされる強引な膨鳴り、そんな時静かに臍の上に手を置くと鳴動と共に腸のじゆ動すら感じられるのです。そんな状態が幾日か続いた或る夜半の事でした。眠られぬ儘に書斎に入つて

或る本をとり出していた私はふと一つの事を想い出したのです、それは今から数年前に発行された某婦人雑誌の附録で難病の家庭療法と看護そんな表題がついて居りました

その中に余り人口に膾炙されていない「臍の塩灸」と言うのがあるのです、それ迄にも灸点の本は色々と読みましたけれど臍の穴が灸点等とは余り見かけませんし、普通臍部の灸点としては臍の穴の上が水分、その上が中臍、臍の下が気海、更にその下に曲骨、横骨と並んで居りますが臍自体に灸をすえる（尤も直接ではないのですが）と言うのは私もその時迄初めてでした。早速取り出して見ると

「ねえ、此処に書いてある臍の塩灸を試めしで見度いと思うんだが、手伝つてくれないか？」翌くる日私は訳を話して妻に頼んで見ました。

「あら、お臍の窩にお灸をすえるなんて……貴方少し変態ね」何故か妻はにべもない返事です。

「妾何んだか怖いわ、貴方、御自分でやりなつたら……」

ノーマルな女性の考え方として或は無理もない事かと思いましたが、実際にお灸を野蠻だ

とか原始的だとか未だに考える者もよく見かける現在ですから……。

私は諦めて不自由乍ら自分でやつて見る事にしました、床の上に横わり、腰の周りは汚れてもよいようにナイロンのシーツを敷きます。枕元には小豆粒位に丸めた艾を四十個位線香を一本（半分ですと二十火位しかもちません）又本に書いてあるように経一寸位の青竹高さ七、八分に切断したものを用意して置きその竹筒の底に塩を固く敷き詰めます。臍の穴の中へは塩を一杯詰めてその上に竹筒を置き、艾の一粒をのせて静かに点火します、じつと眼を凝らしていると火の点いた艾は恰度焙り出しのように端から端へじり／＼と燃え広がって行きますが熱さは殆んど感じません本によれば熱くなつたら竹筒を取り除くように書かれてありますが、実際は温かいと言つた程度で私には何か物足りなく感じられるのでした。

そんな不満から二日目には竹筒を用いず、更に三日目には臍の穴へもなるべく浅く塩を詰めて文字通り焦げつくような熱さに異常な快感を味う私でした、實際艾の火が燃えさかる時、熱さと痛さの混同した刺激は体肉の諸臓器すらもゆすぶり、そんな時私は昔観た同

じ場面の映画を思い出したのでした、私が未だ少年の頃、岡本一平氏原作「刀を抜いて」が映画化された折、場所は花の廓の吉原で町奴と旗本の達引、幡随院長兵衛（市川文治扮）の丸出しの臍の穴へボンと煙管の吸がらを擲り込んだ水野十郎左衛門（片岡千恵蔵扮）……。嗚呼！ その頃から（或はそれ以前から）私のこの奇妙な性癖は胚胎していたのかも知れません。その場面の一駒が現在でもはつきりと私の脳裡に刻まれているのですから……。

扱て塩灸の方は約一週間程続け、それから時々想い出した様に試みては居りましたが秋風の訪れと共に、朝夕の寒さも加わり何時ともなく忘れ去ってしまうのでした。

一方体の方は灸を始めてから三日目には早くも例の腹鳴りが殆んど止り、食欲も連日増加、一週間目には再び常態に復して健康を取り戻す事が出来ました、私には未だに何故塩灸がそれ程効果のあるものか、又自分は何処が悪かつたのかその病名すらも解らず、唯恵まれた健康の裡に日々を送つて居ります。

### (三)

私の嗜好に叶つた治療法「臍の塩灸」もさ

る事乍ら、これと殆んど併行して、つまり昨年の八月頃から私は浅草六区のストリップを観る機会が多くなりました、勿論それ以前にも新宿のセントラル劇場等日曜日の暇を見て月一回位出かけた事もありましたが、前記の頃からは仕事の関係で週二回位浅草に出かけますし、それに私の現在の仕事が行行に關係し従つて各劇場が殆んど自由に観られる、と言つた事も確かに一つの理由だつたかも知れません、浅草では公園劇場、ロック座、フランス座、カシノ座、浅草座、美人座、等々数多くのシヨウがありますけれど、私の主として行くのは何時も大抵C座、F座等です。

終戦後最初に見たのが新風シヨウ、或は新宿の額縁シヨウ等でしたが何れも余り興味は魅かれませんでした。それは私の場合、他の観客の人達と違つてその好みが一寸偏つてゐるからかも知れません、六月号本誌所載の如く私の希望は、私の慾求は飽く迄も踊り子の豊富な腹部、就中深く窪んだ臍窩に魅かされたのでした、殊に最前列の所謂かぶりつき等に席を占める事があると踊り子のお臍の垢までが黒々として見えますし私の視線は何時もその一点に固定されてしまうのです、言うなればそれこそ私のシヨウを見る目的かも知れ



ません、そんな訳でしまいには

一、舞台と客席との距離が比較的近い事（踊り子の腹部がよく見える）二、なるべく多勢の踊り子のいる小屋（好きなタイプのお臍を見られる率が多い）

この二つの条件にせめられて、結局行く先もC座、F座、K劇場とそれ〴〵に限定されてしまうのでした、七彩の交錯したスポットに照らされ、舞台一杯に踊りまくる女体私の視線は期せずしておおらかなその腹部に注がれ、踊り子の臍部に凝集されるのです、或る時は私の貧しい臍相学の蘊蓄からその踊り子の過去を憶い、現在を考え、そして未来迄も想像したり等致します。

今迄私の観たストリップの中で変った刺激乃至快い興奮を覚えたものは色々とありますが、その中でもR座で観た肉体の門、A座に上演された〴〵ストリップ忠臣蔵〴〵新宿F座の〴〵お臍踊り〴〵等仲々に印象深いものがあります。前記〴〵肉体の門〴〵それは仲間の不文律を犯したパン〴〵が朋輩のリンチを受けた場面でした。――柱に架けられていた殆んどヌードに近い裸身、激しい息使いに戦く両の乳房緊い縛しめに深く括れた鳩尾、パンティも臍の下迄下げられ肩で息をする肉塊！

ピシリツ〴〵と妖鬼な香りを放つ厳しい鞭の音！暗い凄惨なシヨウでしたが唯加虐のテクニクに一寸態とらしさが見られました。

ストリップ忠臣蔵は偶然にも本誌五月号に於て中康弘通氏が書かれて居りますが、臍窩への郷愁と華やかな女性の切腹、私の嗜好を充分に満足させて呉れるのでした。白衣平腹之相と言う辞があります、冬瓜の様に円味を帯びた真白なお腹に、出来のよい餡ぱんの様に深く引込んだお臍の穴、リズムミカルな躍動と共にお腹の表情が或は笑い或は泣き、お臍のゴミ迄手を取る様に見えるのです。憶えばS座の〴〵お臍踊り〴〵も仲々に心楽しいものでした。

### ――むすび――

今年（廿八年）の二月初旬、その日は朝から曇交りの小雨が降り注いで居りましたが私は仕事の関係で浅草に行き、帰途例の通りF座を覗いて見るのでした。そして幻惑されるようなファイナーレの光芒の裡に終演の幕が下される多勢の人に紛れて雑踏の舗道に出たのですが、その時急に雨足が繁くなり一時の豪雨を逃れようと私は或る本屋の店先に飛び込んだのです。そしてふと目の前の本を取り

上げ偶然にも開いた頁は奇ク三月号所載の〴〵切腹史談〴〵夢中で一息に読み終つてしまいました。私の趣味、嗜好に完全にマッチした奇ク、以来号を重ねるに従い加速度的に強く魅きつけられて行く私でした。

或る性科学者はその著書の中に於て、〴〵変態性慾〴〵を左の二種に大別して居ります。即ち①性の対象の異常、②性帯域の異常。けれど世の中にはこの二種が混合したり、或は常態の性生活を逸脱した様々なケースもある事と思われまゝ。又人間誰しも自分の変つた性格や性癖に就いては公表しないのが当然かも知れませんが、強いてこれを発表する事も或る種の勇気かも知れません。そして錯倒した慾求の世界に於ける様々な事実を知り、それに対して冷徹なる理解と批判とが与えられたなら強ち無意味ではないでしょう。私は毎号奇クの極めて真摯な編集態度に敬服し、その内容が何れも私達の生活に潤いは勿論の事、或る時は慰めを、或る時は激励を与え、私達の生活にプラスするものゝ有る事を信じます。その様な観点から私はたど〴〵しく貧しい然し真実の過去の編歴を書き綴つて見たのですがこの辺で一先ずこの項を終り度いと存じます。

# 續・悩ましのサディズム



森 山 美 歌

人生の最大の楽しみ、それは享楽。慾望の終局のもの——それは肉慾

私は人生をこのように割り切つて真理の探究に浮身をやつす科学者や哲学者の無駄骨折の暇人を軽蔑し乍ら、ひたすら快楽の探求に生きて居ります。そして私は——悩ましきサディスト。私にとつて快楽の最たるものは男性を虐待し恥しめ、虫けらのように取扱ひ情容蕪ない淫虐の鞭の下にのた打ち廻らせてその精分を吸い取る事にあります。でも一人だけではすぐ快楽の刺戟も飽和してしまいますわ、ですからだん／＼と集団的に発展するというわけ。集団に飽いてきたら？黒ん坊片輪、子供、そして犬や猿といくらでも性

慾探究の種は尽きませんわ。私は今の所この集団快楽のほんの初步に足を踏み入れた所ですわ。未だ未知の享楽がこの先いくらでもあると思うと堪らなく嬉しいわ。

今の私には二月号でお知らせ致しましたように三吉と正男の二人の男が居ります。男なんて云つたら勿体ないわ。私の性慾の道具に過ぎない二匹の雄よ。でもこの二匹も私の性の宮殿では厳格な階級をつけられているの三吉はけだもので、正男は奴隷の階級にあるの、ですから私の情痴の部屋に居る間は三吉は人間並の所業は許されないので。どんなかつて？——勿論獣の様に四つん這いですわ二本足で歩くなんて、それは人間様のする事

ですもの。言葉も使つてはいけないの。たゞ吠えたり泣いたりわめいたりするだけ。

正男は格が上つて奴隷。三吉を責める時の好い助手ですわ。でも時には私の氣紛れで正男も獣なみにするときもありますわ。とにかく男二人を思いの儘に出来るつてのは、愉快なものよ

二月号に正男を私の拷問部屋に案内し、三吉を二人で苦しめた事まで発表しましたが責めの後の私の楽しみを皆様にお知らせ致します。悩ましき変態遊戯の愛好家の皆様がお待ち兼ねのようですから。

x x x

その後の訓練と調教で正男も完全なるマゾヒストになりましたの。どんなにして教育したかつて？——悩ましい私の桃色の密室。勿論二人共生れた儘の姿ですわ、三吉は勿論裸で部屋の隅に私のズロースやシユミーズの汚れたのをこつちやに積んだ上に犬のようにうずくまっています。

「ロープを持つて来い」

とどなると三吉は口にロープを喰わえて私の足元に跳んで来ます。そして私の足にじやれつきお尻を振り乍ら顔を上向けると私は三



吉の口からじやけんにロープを取つて、三吉の顔を蹴り飛ばします。すると三吉は又四つん這いでブロースの山の巣に戻つて行くのです。正男を後手に高手小手に肉が喰い込むようにきつく縛り上げると私は熊の毛皮の上に足を投げ出して坐り正男を抱きかゝえます。「お前は何んてきれいな顔してるんだらう、可愛がつてやるわ」

と云い乍ら熱い／＼炎のような口吻。私の執拗な手は彼の全身をくまなく愛撫するのです。ほてつた美しい肌。正男の胸は十三四の女の子の乳房のようにふつくらと盛り上っているのです。女の子のようにすんなりした足私のしなやかな指でやわく時には激しく感能的に愛撫してやると正男の表情の変化は実に悩ましくも興味があるのです。

「さあ、今から苦しめてやる、覚悟おし」

そう云うと抱いた儘、私は彼の腕を強く強くがぶりと噛み乍ら右手で彼の太股のやわい所を思い切りつねりあげる。

「ウーツ、ウーツ、痛いよ／＼」

悩ましい正男の悲鳴。今度は首を抱いた左手を廻わし正男の鼻を掴まみ上げる。息が出来ないので「はあ／＼」云い乍ら鼻声で苦痛の悲鳴をあげるのです。

「どうだ苦しか？ 苦しいだろう。苦し／＼つていゝ氣持だろう——お前はマゾなんだよ」

そう云い乍ら太股から彼のやわらかな脇腹をつねりあげる。鼻をつま／＼れた正男は顔をくちや／＼に歪めてうめくのです。私は苦痛に悶える彼の顔を見ると惨忍な慾情と悩ましい快感に身体は火とほてるのです。

「どうだ！ 苦しめ！ もつと泣くんだよ。苦しむんだよ」

正男の全身は大きく波を打ち、つねられたあとは紫色のあざ。

「ウーツ、許して！！ もつと苦しめて！！ 死ぬ程苦しめて、もつと／＼」

彼は狂おしく叫ぶのです。——

先月私は旦那にねだつて雑種ですが大きな雄の土佐犬を二匹買つて貰いました。土曜から日曜にかけての、私達の変態遊戯に使おうと、私は毎日訓練しました。それは／＼素晴らしい逸物ですわ。人間相手では味わえない快楽がありますの。引かき傷を作らないように四股の先は皮で包んで爪が立てられないように工夫しましたの。

快楽にはあらゆる手段を用うべきです、私達だけの情痴。誰にも迷惑はかけずに楽しめるんですもの。

そろ／＼永くなつてきましたので、その後犬を使つて三吉と正男をどのように恥かしめ苦しめているかこの次に発表致しますよう。それから三吉に書かせた誓約書をお知らせ致します。

(一) 私儀三吉は美歌様に奉仕する快楽の道具として一生を捧げます。

(二) 私の身体はすべて自分のものではありません。美歌様の所有物であります。

(三) 私は浅間しい畜生です。獣ですから生かすも殺すも美歌様の御意志のまゝです。たゞ苦しめて頂きます。責め虐まれ恥かしめられ、飽かれたら惨虐極まる拷問と責め苦の末殺して頂きます。

以上の三項からの誓約書で彼のサイン印鑑証明を付けて印が捺してあるのです。どうです、素敵な誓文でしょう。その中新らしい男が見つかつたら正男も獣に格下げして誓文を書かせるつもりです。これで私みたいな女の方が居たらもつと／＼私達の愛戯は楽しくなるといふものです、私達の仲間になる女性は居られませんかしら。

# 邦人女性受難事件

——魔都上海の思い出から(その四)——

姫 宮 四 郎

## テロ團の暗躍

その頃、日華事変の進展に伴つて、日本軍は大陸の主要部分を占領したものの、それに未だ全戦局を收拾するには至らず、中国政府はなおも奥地の重慶にたてこもつて、執拗な抗戦をつづけていました。

そして、前線の戦斗が膠着状態になると見るや、日本軍占領地域内におけるゲリラ作戦は、とみに活潑の度を加え、なかんずく唯一の非占領区域である上海の租界地帯は、いち早く中国政府の着目する所となっていました。

即ち、上海の租界内を根拠として、抗日を目的とする宣伝戦とテロ活動は、中国軍主力が南京、漢口を撤退する頃より目立つて激烈となり、その活躍も組織的且つ計画的に行われて、大いに日本軍当

局の手を焼かせていたものです。

そして、何よりも始末のわるいことは、そこには日本軍及び警察当局が立入りできないことでありまして、私服で入り込んで情報を探るくらいのは可能であつても公けの行動はもとより、肝心の犯人を逮捕することさえ為し得ないのであります。

従つて、日本当局の追求する人物の所在が仮りに判明したとしても、彼を逮捕する為には、租界内の治安を掌る上海工部局に対してその引渡しを請求しなければなりません。

ところが此の工部局は、その首脳部が英米仏三国によつて構成されているために、事柄は外交上の交渉となつて、いたずらに面倒であるばかりでなく、当時の国際情勢より見て、これら三国が日本にとつて有利な行動をする筈がなかつたのです。

かくして、治外法権によつて保護された上海のテロ團は、益々そ



の跳梁をほしきままにし、白昼の南京路上に於ける日本の要人狙撃をはじめとして、頻々としてテロ事件が発生した為に、蘇州河以南の租界地区には、一般の日本人が立入ることは禁物とせられていました。

しかも、こうしたテロ行為は単に租界内のみに止らず、蘇州河以北の、日本軍が嚴重に警備している虹口地区に於てさえ、しばしば大胆不敵に行われることがあつたのです。

そのような場合に、彼等が常套手段としていたのは、発見される危険の少い時限爆弾を使用する方法で、日本人の多く集ると見られる場所にそれを仕掛けておいて、そのまゝ逃亡するというやり方です。なかでもよく狙われたのは虹口の映画館でありまして、このために、虹口で映画館へ入るには、誰もが一応入口の所で荷物の検査を受け内部では警備員が絶えず懐中電燈で椅子席の下あたりを点検しているという有様で、のんびりと映画を観賞することもできなかつたものです。

しかしながら、さすがに執拗であつたこれらのテロ活動も、それに対する警戒の強化と戦局に於ける日本軍の絶対優勢とによつて、その後次第に衰退の兆候を示した為に、日本人間における緊張と不安も漸次やわらいで来ました。

それと共に、租界地区への出入も、初めは恐る／＼であつたものが、そのうちにだん／＼と大胆になつて来て、領事館当局の警告も無視して、夜間租界内の危険地帯をうろつく者もあるようになっていました。

このようにして、日本人の多くが、もうテロ団の活躍もほとんど

衰滅したと考へている矢先に、図らずも、上海在住の邦人女性を戦慄せしめた集団暴行事件が、突如として起つたのであります。

それは、大東亜戦争の勃発した年の五月、同じ日の夕刻から夜にかけて、租界内を訪れた六人の日本人女性が、それぞれ異つた場所でテロ団に拉致せられ、あらゆる辱めを受けたあげくに、中国人苦力までも動員して輪姦せられたという、センセーショナルな出来事でありました。

此の事件は、最初日本軍当局の意向によつて、当時の邦字新聞には何ら報道せられなかつたにも拘らず、租界の抗日系中国紙にはそれが堂々と掲載せられ、期せずして一般の日本人も事件の大畧を察知したのですが、その詳細に関しては、遂に公けにせられることはありませんでした。

しかし、事件勃発直後、それを重大視した日本側当局は、直ちに領事館警察に命じて被害者より詳細な事情を聴取せしめ、犯人捜査に着手すると共に、工部局に対しても嚴重にその事件究明の協力を求めたのであります。

私は、事件が起きてから大ぶ後に、工部局に勤務する知人K氏によつて、日本の領警から参考資料として提出せられた被害者の供述書それは(日英両国語によつて作成せられていました)を、特に閲覧する機会を与えられたことがありますので、当時の日記にメモしておいたものから、次にその内容をお伝えしてみましよう。

なお、被害者六名の中で、一名は事件後に発狂に近い状態となつて病院に収容せられ、其他のうち、供述書に述べられているのは四名だけになっていました。

魔都上海の思い出から

## 魔都上海の思い出から

残りの一名については、彼女が等しく暴行を受けたことは事実であるらしく、その氏名も並記されてはいましたが、彼女だけは被害の状況を述べることを拒んだものか、その供述を見ることはできませんでした。

以下は、いずれもみな若い日本人女性であるこれら四名の被害者が、めいめいの受難の模様について陳述したところの、生々しい事件の記録であります。ここでは、供述者の氏名をすべて仮名としておきます。

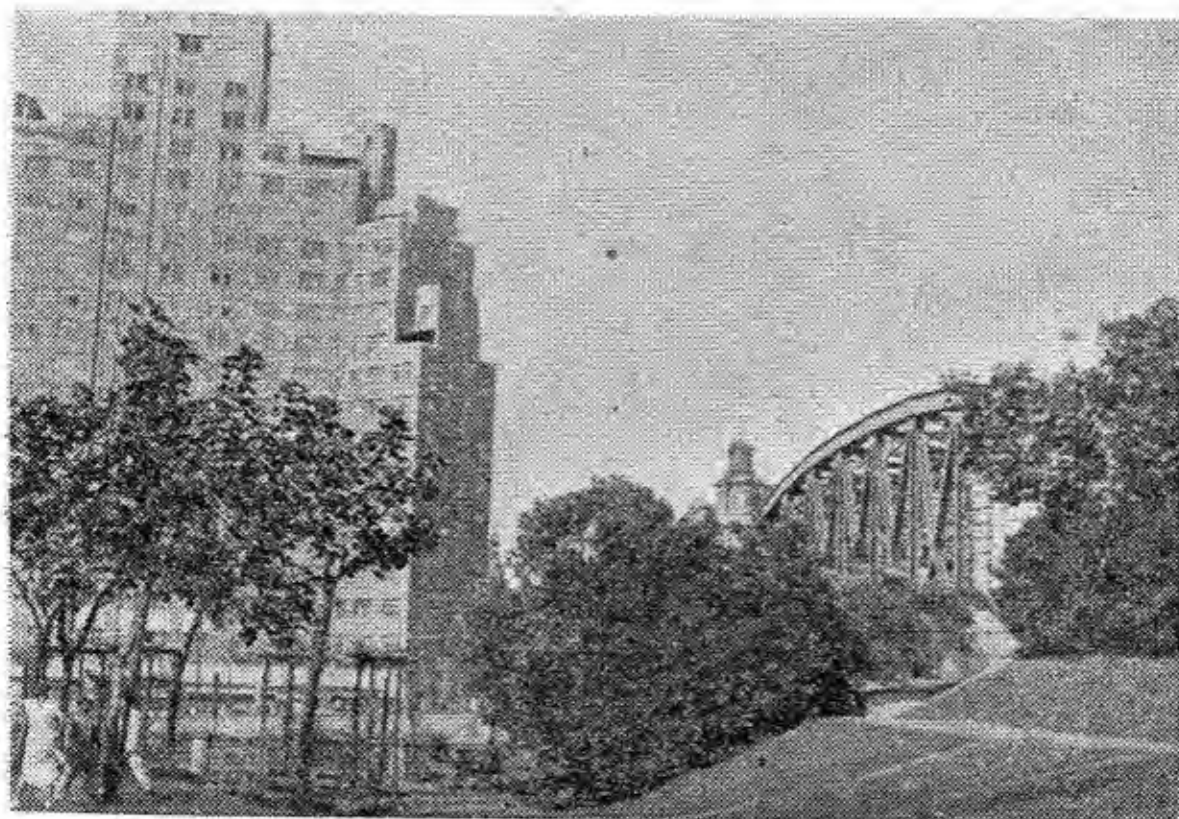
## 其の一 女 給

私は小野節子と申します。二十六才。北四川路のキャバレーTで女給をしております。本籍は福岡県、去年の春上海へ参りました。来た当座は別のキャバレーで働いていましたが、今の所へ移つたのは去年の暮からです。こちらに身寄りはありません。

その日、私は九時頃に起きました。寝起きしている所はお店の二階にあつて、同じ部屋には私の外に朋輩が二人居ります。

朝食のあと、いつものように、私たちの部屋から廊下、それにお店の掃除と、自分たちの下着類の洗濯をすますと、もうおひる近くなります。

## パブリックガーデン



それから簡単につくろい物をしたり、雑誌を読んだりして時間をつぶし、三時過ぎになるとお化粧にとりかゝつて、大体四時頃からお店へ出るのです。

その日は何故か珍らしいほどお客が少くて、全部で七人居る私たちは、全く手持ち無沙汰で困つたくらいでした。

六時頃になつて、なじみ客の一人であるSさんが、ブラリと入つて来るなり、すぐ私を呼んで

「どうだい、これから河向うへつきあわないかい？」

と言つて誘いかけるのです。

こんな商売をして居りますと、唯いたずらに忙しいばかりで、自分の時間というものはありませんから、私はこちらへ来てから、ほとんど見物に出かけたこともなく、河向う（蘇州河以南の租界地区）へも一度か二度行つたきりでした。

それで、そんな時でなければ、めつたに出かける機会もありませんので、私はSさんからマスターの許可を得てもらつと、早速二人で黄包車に乗つて出かけることにしたので、南京路で車を降りてSさんは映画でも見ようかと言いましたが、私はそれよりも街を見



物する方が楽しいので、一しよに連れ立って一時間余り夜の南京路をあちこち見て歩きました。

少し疲れたのでお茶でも飲みたいと言いますと、Sさんはクイーンというレストランへ入って、洋食を奮発してくれました。

私は、それまでにSさんとは別に深い関係はありませんでしたがもしかするとSさんはその日何事かを期していたのかも知れませんが、クイーンを出てSさんはもつとどこかへ行こうと誘いましたが、私は余りおそくなつてもお店の方に悪いので、もうこれくらいで帰ることにしようと言つて、二人でまた黄包車を拾いました。

やがて、四川路を北へ二三分行つた頃でしょうか、突然、うしろから走つて来た二人の男が、左右から私の乗っている黄包車の梶棒を握ると、車夫もろとも車をさらつて、アツと言う間に曲り角を右へ入ってしまったのです。

私は突嗟に

「Sさん！」

と叫んで、すぐ前に行く車に呼びかけたのですが、後になつて聞きますと、別の二三人の男がその時Sさんの車について、そのまゝ前へ走ることを命じ、四川路橋の所まで来ると、どこかへ逃げてしまったということです。

彼等は、南京路からずっと私たちをつけていたものらしく、充分計画的な行動であることは申すまでもありません。

その時Sさんは普通の背広で、私はお店へ出る時のドレスのまゝでしたが、私たちが日本人であることは、中国人から見れば一目で明らかなのです。

横道へ行つてから、それらの男は何事かとなるようにして車夫に言いつけると、どん／＼と車を急がせました。道の両側は大きな建物が並んでいるだけで、街路の照明もほとんど無く、うす暗い中を通行する人もそんなに多くはありません。

私はそれでも、車の上から二三度声をあげて助けを求めましたが数人の人がちよつとふり返つて見ただけで、何ら手出しをする気配もありません。

それに、車の両側についている男から、すごい目つきでおどしつけられてからは、もう助けを呼ぶ元氣もなくなりました。

間もなく車が止つて、一人の男がなにがしかの金を車夫に与えますと、車夫はベコリと一つおじぎをして、そのまゝ逃げるようにどこかへ行つてしまいました。

気がついてみると、私の周囲にはいつのまにか人数が増して、五六人の同じような男が、いずれもみな黒い眼鏡をかけて私をとりかこんでいましたが、何事か相談らしい言葉のやりとりをして、すぐに私の両腕を左右からとらえたまま、引き立てるようになつて歩き始めます。

二つか三つ十字路の角を曲りますと、すぐ目の前に蘇州河が見えてきました。男たちはなおもその河の方に向つて歩いて行きますので、私は、ひよつとすると、殺されて河の中へでも投げ込まれるのではないかという予感がして、思わず背すじがぞ／＼と寒くなりました。

あたりはもうすっかり暗くなつて、対岸にそびえ立つブロードウェイマンシヨンの灯りが、ひとときわ輝いて見えます。

魔都上海の思い出から

## 魔都上海の思い出から

男たちは、ガーデンブリツチのすぐ西どなりにある、小さなパブリックガーデンの近くの空き地へ私をつれ込みました。

道路から少し入って、垣根のかげになつた所まで来ると、彼等は歩くのをやめて立ち止まりました。附近に人影は全然ありません。

やがて、その凹地にあつた一枚の荒むしろの上に、私は無理矢理に押しころがされたのです。

そして、中での首領株らしい一人の男が、私に向つて声を出すと殺すというような意味の手振りを示すと、いきなり私のドレスの裾をたくし上げようしました。

私は思わず「アッ！」と叫んで、両手で裾をおさえようとしますと、傍らにいる男がその手をつかんで押えつけ、そのままシユミーズもろともまくり上げてしまうのです。

私は驚きと恐怖とのために涙も出ず、余りのショックに混乱した気持のまゝで、唯されるにまかせる外はなかつたのです。

虹口の明るい街の灯が、河をへだてゝすぐ向う岸にきらめいているのが、今の私の運命にとつて何の助けにもならない、遠い世界のもののような気がします。

ガーデンブリツチを渡る電車の音が、短い間隔をおいて絶えず聞えていましたが、やがてそれも耳へ入らなくなりました。

それらの男は、やつと私を解放して、どこかへ消えてしまいました。

私は、しばらくそのまゝでぼんやりとしておりましたが、間もなく起き上ると、思い出したように湧き出てくる涙をふいて、乱れた服装をなおしかけました。

その時、先刻取りはずされたズロースが無いのに気附いて、そのあたりを見廻しましたが、いくらさがしても見当りません。おそらく彼等が持ち去つて逃げたものでしょう。

私は、やむなくそのまゝの姿で、とぼ／＼とガーデンブリツチを渡つて、こちらへ歸つて来たのです。

勿論、それらの男は全然見ず知らずで、たとえ黒い眼鏡が無かつたとしても、私には見当もつかないことゝ思います。服装はほとんどが中国服のようでしたが、くわしいことは覚えておりません。

あんなこわかつたこと、そしてくやしかつたことはありませんでした。当分の間は気持が落ち着きませんので、何をする元氣もありません。お店の方も、しばらく休ませていただくつもりであります。

## 其の二人妻

私の名は友田君江、二十五才でございます。三年前に東京で結婚して、昨年の夏こちらへ参りました。子供はまだ一人も無く、主人と二人ぐらして、それに中国人の阿媽が居ります。

主人はT海運に勤めておりますが、四五日前から長崎の方へ出張して、いま留守でございます。歸つて来ましたら何と申してよろしいやら……心配でなりません。

一昨日、私はおとなりのCさんの奥さんとご一しよに、呉淞路へ買物に出かけました。家を出ましたのは、一時過ぎであつたと思います。

東和劇場で日本映画を一つ見てから、呉淞路の方へ廻つたのですが、あいにくどの店にも氣に入つたものが無いので、二人とも何も



買わずに、南京路の永安公司まで行けば良い品物があるだろうからとそちらへ行くことにきめました。

ところが、ガーデンブリツチの方へ来る途中で、Cさんの奥さんが、明日帰国する船に乗るといってお友だちの方に、バツタリ出会ってしまったのです。

私は、一人だけなら行くのはやめにして、帰ろうかと思つたのですが、時間はまだ早かつたし、それに河向うへは夫と一しよに度々出かけておりますので、ついそのまゝ行く氣になつて、ガーデンブリツチの手前から電車に乗りました。

電車の中では、日本人の女の人も二三見かけました。或は男の人の連れがあつたのかも知れませんが、しかし、昼間なら女だけで河向うへ行くことも、そんなに珍しいことではなかつたと思います。

永安公司以買物をすませて、外へ出たのは五時半頃だつたでしょうが、それから私は、しばらくの間南京路を見て歩いて、再び帰りの電車に乗りました。

その電車はバンドまででしたから、そこで降りて、ガーデンブリツチの方へ行く電車を待ちましたが、なか／＼それが参りません。

私は、とう／＼そこから歩くことにしました。黄包車を拾おうかとも思つたのですが、買物といつても大して荷物になるような物ではないし、それにガーデンブリツチまでは歩いて十分ぐらいの距離ですから、そこまで行けば、楊樹浦行きの電車はいくらでも出てくるのです。

ちやうど日暮九時のラツシユアワで、バンドも大へんな人で混雑していました。

左側の建物にそつて半分ばかり来た時に、うしろから洋服を着た男が、私のそばに寄つて来て

「奥さん、ちよつとそこまで来てくれませんか」

と言つて、少しなまりのある日本語で私に呼びかけるのです。

私は不意のことなので、びつくりして返事もせずにおりますと、その男はいきなり私の腕をとらえて、横に入る道へ引つぱろうとします。

私は思わず

「何をするんです！はなして下さい！」

と叫んで、ふり切ろうとしますと、更にもう一人中国服の男が現れて、両側から私を取りかこんでしまいました。そうして

「静かにしろ！声を出すと射つぞ！」

と言つて、ピストルらしい物を私の横腹につきつけるのです。

私は夏の暑い盛りを除いて、あまり洋服を着ない習慣なので、その時も和服姿でありましたから、身体がき／＼にく／＼、それにピストルをつきつけられますと、恐ろしさの余りに口もきけなくなつてしまいました。

二人の男は、すばやく私をかゝえるようにして、大きなビルディングの横に入つてその裏側へつれこみ、そこに待たせてあつた一台の黒い自動車に私を乗せました。

坐席へ入れられると同時に車は走り出し、男は左右から私の腕をとらえて、しかも絶えず拳銃を擬しながら、私が大声を出すことを警戒しています。

「目をつぶれ！おとなしくしていると命は助けてやる」

魔都上海の思い出から

## 魔都上海の思い出から

私は言われるまゝに服従する外はありません。捕えられて争っている時に落したものらしく、三つあつた買物包みのうち、一つだけがその時私の手に残つていたことを記憶しております。

何分ほど経つたでしょうか、それほど長い時間ではなかつたと思います。たぶん五六分ぐらいだつたのでしよう。やがて自動車が止ると、私は或る建物の中へ連れこまれました。

コンクリートの階段を三階まで上つて、運びこまれた部屋の中には、中国服を着て黒い眼鏡をかけた男が三人、テーブルのそばで椅子にかけていました。

私を連れこんだ男の一人が、何やら報告をしますと、中央の男が私に向つて、日本語で名前と住所を問いかけます。私は突嗟にためを答えました。

すると

「それに間違いない？」

と言つて念を押すと、その男はすぐにまた私に

「着物をぬげ！」

と言つて、裸になることを命じました。

私がためらつておりますと、傍らの男が二人つかつかと私に近づいて、帯をほどき、着物をぬがせて、またたく間に長襦袢だけの姿にしてしまいました。

そして、中央の男が他の一人に何事か言いつけますと、言われた男は部屋を出て、すぐにまたじゆうたんのようなものを持つて現れそれを部屋の床の上にひろげるのです。

ついで、一人の男が私の両手をうしろからとらえ、もう一人が長

襦袢の裾をまくつて、私が必死になつて抵抗するのにもかまわず、下につけている薄い腰巻とズロースも取り去つてしまいました。

私は出来る限り抵抗を試みましたが、所詮女の力ではどうすることもできません。

他の男たちは、それに手出しをしようとはせずに、むしろ私が抵抗するのを楽しむような様子で、まわりからじつと眺めているのです。

もう抵抗する元気もなく、私はされるがまゝに横たわつていましたが、くやし涙が後から／＼流れ出るを、どうすることもできませんでした。

やがて、彼等は目的を達したと見ると、私の腰巻とズロースを取り上げて、残りの着物や帯を私に返し、それを着るようにと命じました。

私は、しばらくの間ぐつたりとしておりましたが、泣く／＼着物を元通りに着て、再び前と同様にして自動車に乗せられ、ガーデンブリツヂの近くでおろされたのです。

## 其の三 女学生

私は佐伯啓子です。十八才。上海高女の五年生で、三年生の時に名古屋からこちらへ来ました。家族は四人で、お父さんは××商事の仕事をしています。その外に、お母さんと中学一年の弟が一人居ります。

その日は、学校が午後お休みだつたので、F子さんと一しよに、どこかへ遊びに行く約束をしていました。



F子さんは、私より一つ下の十七才です。新公園（虹口公園）のすぐそばにお家があつてお父さんは××綿花の工場の技師さんだそうです。

私はF子さんとは大の仲よしで、その外の方とは余り親しくしていません。それは、二人とも身長や体重から趣味に至るまで、非常によく似かよつたところがあるからです。

私たちは映画が大へん好きだつたのですが、学校では映画を見ることをなか／＼やかましく言つていました。それでも私たちは、よく二人でこつそりと見に行つたものです。

その日は、虹口にはよい映画がありませんでしたし、それにまた誰かに見つかるとうるさいので、二人で相談して河向うの映画館へ行くことにしました。

私たちは、それまでも二度ばかり、河向うへ映画を見に行つたことがあるのです。家の人からは、私たちだけであちらへ出かけることを禁じられていましたので、いつもそのことは内しよにしていきました。

新聞の広告で見ますと、キヤセイ劇場でアメリカの西部劇をやつ

### キヤセイ劇場



い7号のバスに乗りました。そしてエドワード路まで行きますと、こんどは小豆色の21号のバスに乗りかえて、霞飛路で降りたのです。

劇場へ着いてから、二十分ほど時間がありましたので、二人でフランスタウンと呼ばれるその通りを、あちこちとシヨウウインドウを見て歩きました。

映画が終つて外へ出ますと、劇場の時計が五時近くになつていました。私たちは早速劇場の前から2号の電車に乗つて帰ることにし

ていましたから、二人でそれきめましたあまり筋の複雑なもの、タイトルが出ないので私たちはわからないのです。第二回目の始まるのが二時半となつていましたので、家を出たのは一時半頃でした。グランド劇場なら前にも行つたことがあるのですが、キヤセイ劇場は初めてです。

しかし、劇場のある霞飛路へはちよい／＼行つたことがありますから、道順はよくわかつています。

私たちは、四川路橋から黄色

魔都上海の思い出から

## 魔都上海の思い出から

たのです。

バンドへ着いて、そこから私たちは黄包車に乗りました。そして南京路まで来た時に交通信号が赤になつていたので、車夫は車を止めて、しばらくそれが青にかわるのを待つていました。

ちようどその時のことです。中国服を着て帽子をかぶつた男が、私たちの車夫に近寄つて来ると、何ごとか早口で話しかけました。

すると、それを聞いていた車夫の一人がチラリと私たちの方を見ましたので、私はちよつとへんに思いました。しかし、その男はすぐにはなれてどこかへ行きましたから、別にそれ以上気にもとめなかつたのです。

ところが、交叉点を通り抜けて、南京路から二つ目の路の所まで来ますと、前を走っているF子さんの車が、バンドを真直ぐ行かずに突然曲り角を左へ入り、続いて私の車もその後について行きます。

私は、あわててかたことの上海語で、車夫に道が違ふことを告げましたが、彼はいつこうにかまう様子を見せません。

前の車でも、F子さんが何か大声で叫んでいましたが、車はいよ／＼速度を増して、その路をどん／＼進んで行くのです。

そして二百メートルばかり行つた所で、大きなビルディングのそばに、中国服の男が三四人立つていましたが、そこまで来ると車夫は急に車を止めました。

するとその男たちは、やにわに私たちを車から引きずりおろして私が

「助けて！」

と叫ぶのにもかまわず、そのまゝF子さんと私を、ビルディングの中へ引っぱり込んでしまいました。

私たちは泣きべそをかきながら、それでも必死になつて逃れようとしたのですが、それぞれ二人の男が両腕をつかまえているためにどうすることもできません。

入つた所はビルの裏の方で、何か倉庫のようになっていましたがすぐにその場で、一人の男が黒い布切を取り出して、私たちに目かくしをしてしまいました。

そして、非常になまりのある日本語で

「声を出すと命が無いぞ！」

と言つたかと思うと、ナイフのような物を私のほつぺたに押しつけました。

私は、すっかり生きた心地も無くなつて、左右から腕を取られたまゝ、廊下のような所を、あちらこちらへ曲りながら歩かされました。

そして、或る部屋の中へ入れられると、そこでようやく目かくしをはずされましたが、見ると、私たちを連れて来た四人の男は、いつのまにか皆黒い眼鏡をかけております。

その中の一人が、入口のドアに鍵をかけてから私たちに向つて「洋服をぬげ！」

と命じました。

そして私が応じないのを見ると、直ちにつかまえて、無理矢理、私たちの着ている制服をぬがせ始めるのです。

私はF子さんも同じように丸裸かにされているのをチラリと見た



きり、それから後は恐ろしさの余りに目をつぶってしまったのです。この時、私は思わず「アーツ！」と叫びました。F子さんののはげしい泣き声が、私の耳に聞えて来たからです。

ほんやりとした頭で、恐る／＼目を聞いて見ますと、傍らの鉄製のベッドの上に、F子さんが全裸体でうつ伏したまゝ、ぐつたりとして泣いております。

部屋の中の男は一人減つて、いつのまにか三人になつていました。が、まもなく残つた男たちはF子さんに近づいて、その身体を引き起して仰向けにすると両手両足をベッドの脚に紐で縛りつけました。するとそこへ、姿を消していた一人の男が現れると、そのあとから多くの中国人が、ぞろ／＼とついて入つて来るのです。私はそれを見て、思わずぞ／＼としました。

彼等は、いずれも汚い恰好をした男ばかりで、おそらく碼頭にたむろしている苦力か、或は黄包車引きかに違いありません。垢だらけの破れた服からは、ブーンとひどい悪臭が鼻をつきます。その途端、F子さんは突然狂つたような叫び声を上げたのです。

しかし、F子さんのその口にも、たちまちハンカチが押し込まれその上から目かくしの黒い布で猿ぐつわをかけられてしまいました。私は思わず目を閉じようとしたましたが、両脇についている二人の男が

「目をあけろ！」

とどなりつけて、閉じることを許しません。そうして、左右から私の身体を抱え起して、私にそのまゝで、F子さんの惨酷な姿を見させようとするのです。

このようにして私は、すぐ目の前の親友の悲惨な有様を、じつと見て見つめていなければなりませんでした。

やがて、どれ程の時間が経つたのでしょうか、苦力等はぞろ／＼とまた部屋から出て行きました。四人の男は、F子さんを縛つていた紐をほどきましたが、F子さんはもう少しも動こうとはしません。私は、命ぜられるまゝに自分で洋服を着て、F子さんにも手伝つて着せてあげたのですが、その時にどういふ訳なのか、私たちのズロースだけはとう／＼返してくれませんでした。

私たちは、それから再び目かくしをされて、ビルディングから連れ出されると、少し行つた所でようやく解放せられたのです。

私はF子さんと一しよに、四川路橋を渡つて家へ帰つて来ました。が、その間に私がどんなに声をかけても、F子さんはうつろな目で放心したように、何の反応も示ませんでした。

F子さんは今病院へ入つていますが、まだ完全には正氣に返らないそうです。私たち女学生の中でも、人一倍内気でおとなしいあの人を、あんなひどい目にあわせるなんて、ほんとうにあんまりだと思ひます。

## 其の四 事務員

堤由利子と申します、二十三才。一年前からバンドのY銀行に勤めております。

私たちはお家へ帰る時に、いつも男の人と一しよになることにしていました。私たちの勤めている所から虹口までは、つい目と鼻の距離なのですが、用心のためにそうすることが習慣になつていたの

## 魔都上海の思い出から

です。

その日も、私は途中までNさんと一しよに帰ることにしました。いつもなら他にもお連れがあるのですが、その時は仕事の都合で少しおそくなつたのです。時計は六時十分前を示していました。

ガーデンブリツヂを真直ぐ渡つてしまえばよかつたのに、私はふと乍浦路橋から帰ることを思いついたので、パブリックガーデンの所でNさんと別れると、一人で蘇州河にそつて西の方へ歩き始めました。

乍浦路橋までは、歩いて五分ぐらいの距離に過ぎませんが、それを半分ばかり行つた時に、うしろから自動車の来る音がしたかと思うと、その車が突然私のそばに来て止り、中からバラバラツと二人の男がとび出して来て、アツという間に私を自動車の中へ引っぱり込んだのです。

私は思わず大声をあげて叫びましたが、それは一瞬の間の出来事で、車は私を乗せるやすぐにまた発車してしまいました。

私を引きずり込んだ洋服の男は、共にサングラスをかけて顔をかくしていましたが、車が動き出すと、直ちにポケットからジャックナイフを出して私をおどしつけ、私の両手を細紐でうしろに縛り上げると、更に白い布で私の目と口とを掩つてしまいました。

私は不意の出来事なので、何だかぼんやりしたような気持でおののいておりますと、しばらくして男の手が、ブラウスの上にかゝつてくるのを感じました。

驚いてそれを避けようとしたが、身体の自由を奪われている為に、どうすることもできません。私は泣きそうになつて胸を膝の

上へ押し当てゝいました。

やがて、自動車が止つたかと思うと、私は縛られたまゝで外へ連れ出されました。そうしてどこかの建物へ入ると、コンクリートの階段を下りて、地下室のような所へ連れて行かれました。

そこで、私は目かくしと猿ぐつわを取り除かれたのですが、見ると部屋の中には、いずれもサングラスをかけた洋服の男が五人で何かひそ／＼と話し合つています。

まもなく粗末な椅子に掛けさせられて、私はその中の一人から、達者な日本語で訊問を受けました。

「名前は何というのだ？」

「山田雪子」

私はでたらめを答えました。

「年令は？」

「二十五才」

「いつごろ上海へ来た？」

「二年前です」

「独身だな？」

「はい……」

そう答えてから、私はふと、結婚していると言つた方がよかつたのではないかと思ひました。

「住所はどこだ？」

「狄思威路です」

「番地は？」

「××××」



これでもたためを言いました。すると男はそれと氣附いたものかにわかに顔色を変えて、

「うそをつけ！さては、今まで言つたのは全部でたためだな。よしそんなら本当のことを言うようにしてやる！」

と言うと、他の男に向つて中国語で何か言いつけました。

するとその中の二人が、私に近寄つて縛つてゐる紐を解いたかと思ふと、やにわに私のブラウスを剥ぎ取り、次いでスカートをはずし、シユミーズもぬがせて、パンティだけの裸にすると、再び前よりも嚴重に私をうしろ手に縛り上げました。

私は恥かしさと恐しさのために、生きた心地も無くふるえておりますと、一人の男が巻煙草に火をつけて、いきなりそれを私の背中へじかに押しつけたのです。

私は余りの熱さに、

「アツ！」

と叫んで、思わず椅子からとび上りそうになりました。

「どうだ？本当のことを言わないと、もつとひどい目にあわせるぞかまわないか」

そう言われて、私は改めて自分の知つてゐる家の所番地と、内地のお友達の名前を答えました。

すると、男はそれ以上何も問はずに、しばらくの間じろくくと私を見ておりましたが、やがて

「フン、わりにいゝ身体をしている。どれ、もつと十分に見せてもらおうか」

と言うなり、私の身体に手をかけて、必死になつて抵抗するのを

軽くあしらひながら、残された私のパンティをも、遂に引きずりおろして取り去つてしまいました。

そして他の男たちにも手伝わせて、私をテーブルの上に横たわらせ、両手はうしろに縛つたまゝで私の身体を仰向けにしてしまいました。彼等は私のパンティだけを、あたかも戦利品のようにして取り上げて、残りの洋服や下着を私に返しました。

そしてまたもや目かくしをして、私を建物から連れ出すと、前と同じように自動車に乗せて、四路路橋の百メートルほど手前で私をおろし、自分等はそのままどこかへ逃げ去つてしまつたのです。

私は、身体のおちこちに感じる痛みをこらえて、くやし涙を流しながら、橋を渡つて一人で歸つて來ました。

私の一生は、こんどの事ですつかりメチャ／＼にされてしまつたと思います。もう何もかもいやになりましたので、お勤めの方もやめにするつもりです。日本人の多くの人が、私のことを知ろうがどうしようが、少しもかまいません。ただ、何とかして私を犯した男たちを捕えて下さい。お願いです。

以上、私が領警から工部局に提出された被害者の供述書をメモした日記から抜き書きしてみました。が供述内容の一部に公表しかねる個所がありましたので、特にその個所は削除或は訂正した外は原文のまゝであることをお断りしておきます。

— 未完 —



# 両棲動物

—男色夜話—

岡 真史郎

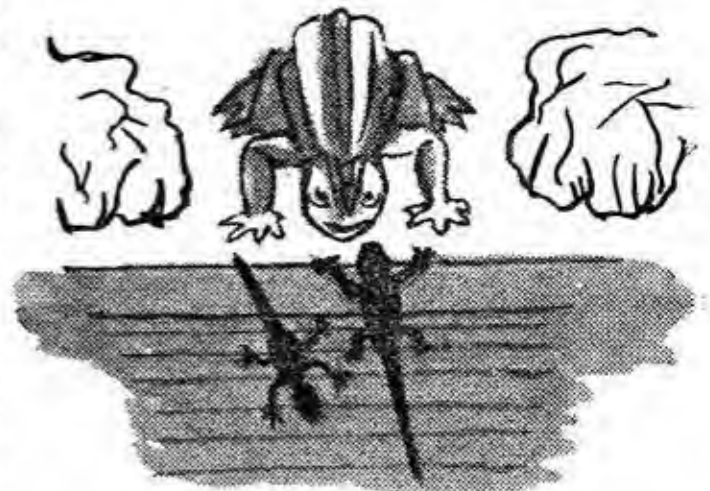
(一)

花水木という木は成長すると数メートルになるみづき科のあまり見ばえのしない木だが晩春の頃になると白いまくれ上つたような四弁のぼつてりした花が咲く。「あめりかやまぼうし」といつて、元来北米の樹木であり、これがケンタッキーあたりの山々に一面群生し一どきに真白な花が咲くと山が一時にはなやかになり、美しいので戦前、有名な植物学者のM博士がワシントンのポトマックへ贈つた桜の木に御礼に米国からもらつて来てあちこちの公園や植物園に植えたのだが、今では大きく育っているのは日比谷公園の一隈、公園事務所のほとりにある二本だということを

知る人は少いだろう。この二本の木は一方が真白な花をを咲かせ、一方はやゝピンクがかつた花を咲かせる。あまり見なれない花だから、散歩の人達がときどき立ちどまつて、上からたれるようにして咲いている、その、ぼつてりと野ぼつたい美しくもグロテスクな花を觀賞していることがある。

この人知れず著名な異国の樹のほとりに福岡から持つてきた砒化木の記念碑が置かれているがこちらの方は真黒できたらしいから一層人々は注意しない。砒化木のところを通り抜けると日比谷の洋式花壇その広潤な華麗な晴れ晴れとした風景を展開する。五月の始めにこ

の日本製ルクサンブル公園を訪れると広々とした、短かくかられた芝生の園には、目もあやに様々の草花が植えられている。紫と黄と白のパンジー、白いデイジーとスイートアリッサム、真赤なチューリップ、黄色のカレンデュラ、赤や紫のサイネリアなど。立派な棕櫚の木立ちと竜舌蘭のしげみとヒマラヤ杉の壁が何ともエキゾチックである。ペーブメントにずらり並べられたベンチには、ルクサンブルで日光浴をしている様々な種類のプチパリジャンの代りに、若いアベックと学生、女学生、そして子供連れの家族がみられる。ここは大東京が作った幾多の公園のうちでも





最も華やかな陽気なそして静に落ちついて気品のある健康な場所である。昔から若い人達はこの所が好きなのだ。

日比谷公園は明治三十六年に開かれた日本最初の西洋式公園で五万坪というが、これには公会堂や図書館の敷地も含まれている。グランドや野球場、テニスコート等は昼間一種のスポーツセンターとして、元気の良い若い喚声と潑刺としたどよめきを、みなぎらせている。日比谷なんてのは、音楽のリサイタルにでも行くか、有楽座の待ち合せに一寸よつてみるか、銀座から発展してきたアベックが数寄屋橋を通り過ぎ、省線のガードをこして必然的にぶつかる恋の場所位なもので、わざわざ行く所じやない。もつとも内幸町の通りには帝国ホテルがあり、日比谷の交又点には一室一万円とかのホテルと地下二階とも自動車のカレーチになつてゐる日活会館があるから、そうしたエトランゼのためか何か知らないが、日比谷公園の内幸町側中央入口に日比谷花壇という高級なフロリストの店があつて、蘭の鉢等を並べてゐる。公園事務所は皇居のお濠のそばにあり、秋には菊の展覧会もやるし園芸好きの人々のために各種の草花も売つてゐる。上野とくらべると、日比谷は何と

云つてもバタ臭い。上野のような江戸の歴史も寺院も史蹟もないし、公園の周囲は一面のビルディングの壁がとりかこみ、一方は皇居前広場と直結してゐる。ここは云わば東京のセンターなのである。昼間は晴々とし、夜は反対に暗黒にしずまり反つてしまふセンターである。丸の内の庭にすぎない。

日本橋M商事の時計が五時をうつと、社内の連中はぼつ／＼退社しはじめる。向山陽夫は六時まで課長の椅子で残務整理をしてゐる。早くきり上げることもあるが彼のきちょうめんな性格が大抵の場合そうさせる。

彼は極端に要心深い。しかしそれも仕事の上のこと、性質自体は案外抜けている点もあるのである。ねばることがもう一つ向山の特徴なのだ。M商事は香料化粧品洋品雑貨洋書等を扱つてゐた。男女の社員は多くおり、商売が小さい美しい娘もゐるのだが社風がお上品であり、社内恋愛ごとは一種の御法度になつてゐた。向山課長はこうした御家風に対しては忠実でもなく、さからうでもなく、全く無関心の態度を示した。課長ともあるからには彼も人並みに東京の大学を出、人並みに結婚し、人並みに子供をもうけ、人並みに酒も飲めば煙草もふかし、冗談も云え

ばお愛想も使い、時には若い者に忠告の一つ二つはするのである。つまり人並の社会の普通の課長であつた。

「向山課長て一体どう云う人なの？……あの奥さんあるんでしよう。あなた、いつか課長さんのところへ行つたでしよう？」

「ええ、割にかわいい顔の人だつたわ。愛想良くてお茶なんか出してくれたわよ。きつとあの方奥さん孝行なのね」

「そうかしら、……でも私、あの人あまり好かない。女性にはやさしいけど、通り一ぺんじやないの。T課長みたいに陽気じやないわお仕事のことは細かいでしよう。私いつだつたか、彼氏からの手紙へんなことで、あの人にもつかつたのよ。T課長だつたらそれこそ大変よ。とても一通りのお説教じやすまないわよ。それが、あなた。……ただにや、にやただけなのよ。気味が悪いわ。あの人女性がかわいいかしら。女嫌いにしては奥さんがあるしね……変ね、……あなた、そう思わない？」

「そうかしら？でもあゝいう性質だから、こうしたお店も勤まるのね。あの方だつて、若い時にはロマンスもあつたんでしようよ」

「四十前後ですつて？男の四十つて魅力があ

るのにね」

「私、お店にしては割にきざでなくあまりめかさない、ああした地味な方の方がたのもしいわよ。でもあなたの云う通り心から好きになれないわね。まだ他人のことは寛大でおおめに見てくれるから、そう嫌でもないわ」

これが向山の課の女子店員の下馬評である事実、四十才になつた彼がこの世で関係した女は彼の妻だけだということは、彼が道心堅固な宗教家でもなく細君にぞつこんほれこんでいるのでもない以上ますます奇妙なことである。向山は

植物的な男で血なまぐさい対人関係が嫌いであり、女店員から冷いと云われても平気であつた彼が少年の時彼の母が人相見に彼の写真をみせたところ、この子は大きくなつて



女に苦勞すると云つたので人知れず母は心配したものである。皮肉にも彼は女に惚れて苦勞した経験はなく、惚れようとしても惚れられない苦勞があつた。人相見の予言は逆の意味で適中していた。何れにしても彼の人相は好色の相を現していた。

向山は学生時代、同期生のKと熱烈な恋愛をやつた。Kは正常な異性愛の男で、フェミニストであつたが女のような顔をしていた。彼とKとの関係はひそかに数年続いたが、Kの死をもつて終つてしまつた。今でも向山の

書齋の手文庫の底にはKと取り交したラブレタの束がかくされていく。この時に向山の純粹無垢な恋愛感情は昇華し発散してしまつたのだ。向山はKとキッスしたわけでもなく、ましてや

同性愛的な肉体関係を結んだわけでもない。勿論二人で風呂に入つたこともあり、同衾したこともある。Kの方はブラトニツクであり向山の方は肉慾があつても、愛の力があまりに大きく相手を汚し征服することは出来ぬであつた。Kの死以後彼は結婚した。それは対社会的な義務観と家庭的落ちつきを得度ためであつた。M商事のような会社では独身の中年男は信用されないのである。しかし本能は無惨であり、向山のようなリベラリストにとつては、何ら抵抗すべきよりどころもなかつたから、彼は適度にむしろ稀な位に、要心しながらも男の体を買つていた。

人生の倦怠期が来るにつれて彼のこの秘密の遊びは大部劇しくなつた。彼のような男を両刀使いとも宮本武蔵とも云うが、やはり右利きか、左利きかどちらかの方が強いのが自然であり、彼にあつては男色は素面であり、女色は仮面であつたかもしれない。したがつて、一方は何ら工夫も要らず自然にふるまつたが、一方は一種の演技が要つた。しかし、この演技も永くなると身について来て、他人目には自然にみえるものである。人は他人をそう深刻に分析しないから、向山がそんな両棲動物であるなんてことは夢想だにしない。



彼は己のスリルにみちた両面生活を妻にも内密にして渡っているから、他人の罪惡に対し、神経を使っている暇がない。彼の最も大きい、罪惡感はその家庭を裏切っていることであり、彼の妻が無智で彼の仕事や趣味を理解しようとしないうことをもつて、精神的な云いわけにしていたのである。彼が自分に忠実であり度いと思う時は、彼は自分の家庭を捨ててしまふのである。

有楽町駅を出たのは六時半を過ぎていた。簡単な夕食をすませると、散歩の人達の盛んに行き来する一丁目の大通りを過ぎて日比谷公園に向つた。この辺はとりわけ、外人の遊客が多くG.I.の軍服姿も華美な刺繡で背中にジャパンと浮き出させた金ピカのチョッキを着ているのも瀟灑な背広姿もとどろで立止つて、パン助を物色しているのもあり、大びらにパン助と組んで歩いているのもある。交叉点の角の入口のポリスボックスを一寸注視すると、向山はそそくさと暗黒になりつつある公園に入つた。

この入口のとつつきにある池は昔の江戸城のお濠を埋立てた名残りであり、その当時の石垣が土手のようにして池の内幸町の大通り側に残っている。池に面した方は石垣も保存

されているが、反対側は石だたみすら取りこわされ、なだらかな土手になり、自然石をつみ重ねた石段と樹木の林になつてゐる。土手に植えられた、ケヤキの大木は公園でも有数の老樹で池や公園の道を覆うようにして繁つているイチヨウの大木も多い。クスノキとかツバキ等の常緑樹も一面に繁り、ヤツデの繁みも深い。土手の上には一条の道が走り、老樹の枝はトンネルを作っている。ずっと並べられたベンチから池の方を見下すと、花壇は見えないが霞ヶ関の方のビルディングの列と公園の森林がみわたされる。この土手は全くアベック用か展望用にしか役に立たぬような古代の遺物で現代文明の中心地で恋愛の舞台に再生したようなものである。男色者の間ではここは舞台と云われているのだ。

向山は長くもない舞台を一往復すると、すいているベンチに腰かけた。ベンチの客の大半は男女のアベックだつた。彼等は日の高いうちから公園にねばつていて、いくら、語つてもあきない話があるのか、話も出つくしてただ体をくつつけてよりそつていただけでも楽しいのか、とにかく、自分達自身のことにならなかつた。他人には全然無関心なのだ。なかには、猛烈な接吻をしているものもある。池の面

は、かすかに銀色に光つてゐた。公園の照明燈が青くまたオレンジ色に輝いて美しい。アベック以外の男達は殆んどが舞台で見せるためまたは見るための男色家の散歩客であるらしかつた。それはゆつくりとした物欲しそうな、手持ち無沙汰のようなデモストレーションの歩きぶりであつた。向山はぼんやりと池を眺めているような恰好で耳はとぎすましていた。時たまがさつな多人数の靴音はするがそれは物好きな見物の学生達位なものだつた。二人の足音。それも一方が、太く力強く一方が弱いのはアベックだが、そうでなければ、ホモのアベックなのだ、彼等は口数も少く、大声で話すでもなく、ひっそりとして歩いていた。

ベンチの男客達は互に他をこつそり観察し合つてゐた。ヘテロの社会でこんなに人の顔をじろじろ見る男がいると、刑事か記者かとかかくろくなことがないから、人は気味悪くなる。ただ男女の間になるとあいつモーションかけてるのかと満更でもなくおぼしめしてくる。

恋愛の公認される肉体間では、この感情は自然とされている。いまや夜のとりどりが公園をしつとりと包み照明燈にてらし出される部

分を除いては、人の顔もさだかでない。ホモの男達はまたことさらに暗いベンチに黙然とすわっていた。一つのベンチに三人位並んで池の方をじつと眺め、隣の客が話しかけてくれるのを辛抱強くじつと待っているのだ。他からみていると、それは一種こつけない風景だった。始めに切り出した方が負けなのだ。

彼の隣にはつそりした感じの学生服の青年が腰掛けた。かすかな光ですかしてみると、割に顔は整っていたが、むしろきつ過ぎる位で浅黒い。二十分位じつとしていたが向山が何とも云わずこの男をじろじろ見ていると、「失礼ですが、今何時頃でしょうか」

と、太い声できいてきた。時計を出して、時刻をつけてやると、軽く頭をさげて感謝の意を表した。向山が

「誰かお待ちですか」ときくと

「いいえ別に。おじさんもお一人ですか」

「ええ、良い人みつかつたの?」

「ううん。誰か居ないかと思つておじさん、遊びませんか?」

と云つて向山にびつたり寄つてきた。彼は一目で直感的に惚れる男でなければ、一緒に寝ないことにしている。この学生服は、残念

にも彼の好みに適していなかった。

「僕みたいなおじいちゃん何処が良いの。もつときれいな子なら一杯その辺にいるでしょう」と、そつ気なく云う。

「商売人?おじさん、商売人相手にするの?あんなの買う人の気知れない。私こわくて買ったことない。」

と云いながら、そばから彼の横顔をあおぐようにして眺めていたが、その手は向山の身体に近づいてきた。

「およしなさい。人が通るじゃないか。」

「でも、この方が安全ですよ、暗いところの方が反つて危険よ。」

「便所へいらつしやい。沢山やつてるじやないか」

「あんなの醜態ですよ、……こうしてれば、何してるか判りませんよ」

日比谷に集つてくる素人のホモで舞台で物色しているような連中は、容色でも財力でも自信のない、出鼻が出がらして、これとは思ふような逸材がいらないのが普通である。そうした自信のある連中はそれぞれちゃんとした箱や巢があつて、東京中に散在した其々の酒場(ボーラーバーと悪口云われている)なりクラブなりで宜しくメートを上げている。

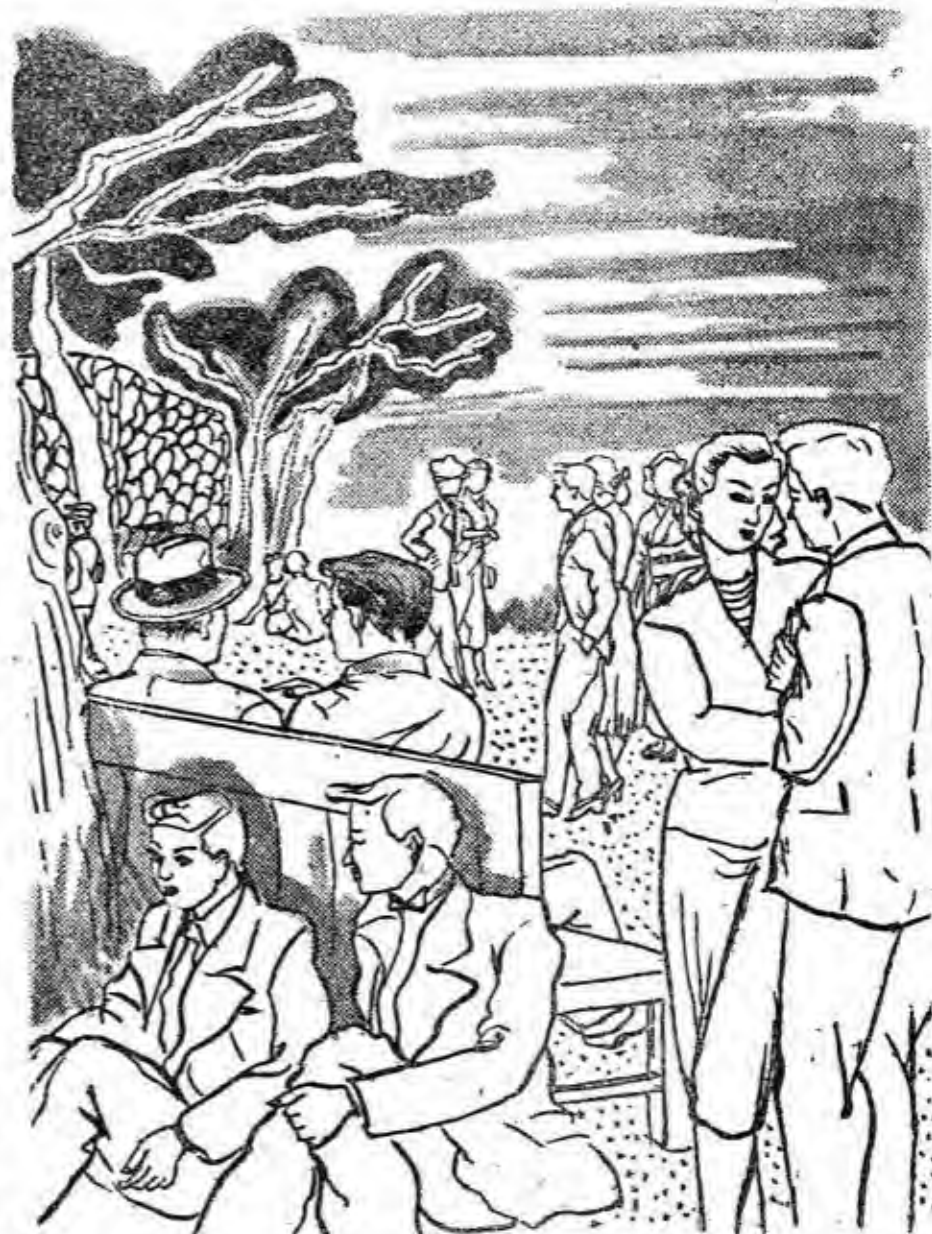
時たま出てきてもよほどあぶれた時か下手物漁りみたいなものらしい。ただどうしても此処へ来ざるを得ない連中は無性に男恋しくて男でさえあれば誰でも良いという連中が金銭の介在なしに恋愛の相手を求めたいという殊勝な連中である。毎日舞台に日参していればそのうち、百に一は自分の求める相手がないわけでもない。それは秘められた悲願である。何とこの道の難しいことだろう。ホモの数が百人に二人として大東京の男三五〇万人のうち七万人もホモがいるわけだが子供や老人はぬいて三万人位は生殖力旺盛な一人前のホモとして活動しているだろう。そのうち肉体にも経済にも恵まれた三千人位があちこち意識的に動いているのかも知れない。それは流星のように無方向に飛び合っているから目ざす相手にぶつかるのは千載一遇のチャンスなのだ。チャンス。

土手の下の森の中に一条の道が内幸町の大通りと平行に走っている。この道から舞台に上る石段がその道で男色の花道と云われるのだが、花道の下から通称は事務所の便所にかけて、そうした連中が、三々五々ちらばっていた。ゆつくり歩いたり、せかせか歩いたり、または暗い樹蔭に一人じつと立止つて動かな



いのもあつた。向山は暗い道を歩いてフロリスト傍の便所の方へ行つた。真暗な樹立ちの蔭にも、じつと動かない人が立つていた。知らない人だと、ぎよつとするだろう。その傍を通る時も、また道で互いに通行者がぶつかる時も、彼等のひとみは、妖しく燐光を放つて電光石火的に相手の品定めをするのだつた。彼等は特殊の触角の触手を持つている海中の生物のようだつた。この界限はさながら海の底であつて、到るところに繁つた海草の間を種々の魚が遊泳しているのだ。魚は、すれちがつた瞬間に皮膚で恋をする。敏捷に泳ぐ魚もいれば悠々とまた堂々と泳ぐ大魚もあつた。ちよこちよこと遊び去る雑魚、底にへばりついて餌を待つてゐる。ヒラメやアンコウやタコのような者もいるし、きらびやかな魚も地味な魚もスマートな魚もいる。彼等は一匹づつまた群をなして、無方向に、徐々に静かにパークのうなばらの中を遊びまわつていた。

脊の高いスマートな若者で、真白なマフラをし、蝶ネクタイを結び、小さい髪をとくのえたのに、今度は向山が時刻をきいた。相手は尻を流動するような歩きで、向山についてきた。二人は硅化木の場所をすぎ、花壇の入口で、ぼそぼそ話し合つた後、この男は、



後におコマと云つてセミプロのゲイボーイだとわかつたが、その時向山は知らなかつたのである。

「あんた、毎晩いらつしやるの」

と聞くと、かすれたような色気のない声で「いゝえ、別に……時々暇な時来るんですけど」

とあつさり答える。

「もう大分御経験なすつたんでしよう」

「えゝ、……軍隊でおぼえたんですけどね。」

始めは知らなかつたんです。外人は私のような型に何人でもつくんです。背が高いからでしょう。」

この時も向山の心臓は高鳴らないのであつた。彼は何とか彼とかおコマと話しているうち、相手は向山を捨ててその代りの者を紹介してくれた。闇の中へ消え

て行つたが、出てきた時彼の後に立つていたのは、向山の好きなような脊の低い若い子だつた。スマートなスタイルで、みるからに純情そうだつた。物も云わずに、向山をみつめていたが、向山が見ると、下を向く。彼の心臓は高鳴つた。それはその子が、以前から彼が好意を持つてゐる親切な若い社員にとても似ているからだつた。十九才と云うのだ。向山は有無を云わせず、その美少年の肩をだき二人は、田村町の連れ込み宿へと、タキシード

を飛ばした。

二人の交情は満足に近いものだつた。向山はこの時のことを彼の秘めごとの内の貴重な一部に入れた位である。若き、しなやかさ、すなおさのもたらす潑刺とした小鮎だつた。

香氣をさえもつていた。かすかな胸毛さえ揃えていた。弾力といふ、活力といふ、肌色といふ毛量といふ、骨組みといふ、およそ向山の趣向にかなつたものを揃えていた。つまり、

この子—おヒロということも後でわかつたが—の肉体は完全に近いのだつた。風呂場で向山はおヒロの体をおうむけにしてあぐらをかいた彼の上にのせ、赤ん坊を洗うようにして体のすみずみまで洗つてやつた。おヒロは力なくぐつたりしていた。洋服を着た時におヒロはうつむきながら、お小使いちようだいといつた。云わなくてもやつたろうけれど。向山という男は、およそ色目鏡をかけると、物ごとの判断の出来ぬ不細工な男だつた。昼の社会の彼を知る者は同一人とは思わないだらう。夜の世界があまりに不安に満ち、つきつめた様相をもつて彼にせまつたからなのかもしれない。しかし、彼と云えど、腹の底から満足していたのではなかつた。要するに彼の抱いた者は血の通つた人形にすぎなかつたで

はないか。相手は純情そうに何も語らず何もコケツトをていするでなし、色気なんてないのだつた。彼は自分がほれた若い社員の像をおヒロの上に重ねて想像の恋をしたのだろうか。

二、三日して向山は再び公園を訪れた、フロリストの便所のところ、魚の回游する道でいきなり彼はおヒロに会つた。今度は彼の方で受身だつた。

「おじさん、行きましよう良い家知つてる」と彼の腕を取るから、とにかく歩き出して「今日は、持ち合せないから駄目」と云うと、

「公園の中でも良いの、絶対に判らないところ知つてるから、いくらでもお気持だけで良いから」

とひつぱつて行つたのは使用していないプールの裏のヤツデの茂みの塀の下だつた、そんな所へロケーションに行くのは、ポリの巡回時間以外が絶対に必要だつた、もし見つかったら、弁解の方法がない、人の行かない所へ夜分男二人がこそそこそ入つて行くのは悪事にきまつている、こうしたことは余程強烈な性慾にかりたてられた金のない男のやることだつた。おヒロの頭は地面についてしまい、

まくつた外套の下から、夜目にも白い尻が光つていた。

「この間、おじさん紹介してくれた人ね、あの人、紹介料よこせつて云うの。私三百円しかもらわないからと云つて、百円やつたの、だから、きかれたら、そう云つてね」

と帰り道に云うのだつた。何と云う、きたない奴だろう。この時に向山はおヒロを商売人ときめてしまつた。大体において、彼は男娼の社会を良く知らなかつたのだ。

三回目はもつといけなかつた。向山は一種のつき合ひの気持しかなかつた、この時は内幸町の大通りで、いきなり会つてしまつた。またかと彼は思つて、にやりとした。純情な素人ぶつても君は、毎晩来てる商売人だてにとがばれたね。と彼の目は云つていた。急いでタクシーをよび、遠くもない田村町かいわいのホテルに連れこみ、例の行為がすむと、金銭のやりとりになつて向山は嫌なものを感じた。二人はしばらくだまつていた、二人とも互いの交渉がこれで最後になることを直感した。向山は御休憩四百円というおヒロの話で行つたのだが、彼にホテル代を払わせると五百円かかつたと云い、五百円札を机の上においた、一枚の紙幣は二人を嘲笑していた。



向山が、それを取つておけ、今晚は気分が悪い、この次、はりこんでやるからと云うと、おヒロはだまつていたが、暫くして、

「人を馬鹿にしないでよ。何よ、こればかり、あんたの財布ちゃんと見たわよ、千円ちようだい」

と云う、向山は自分が、ねぎつたような、汚らしさを感じて、千円札を呉れてやつた。

「君の云い方は気に入らないね、千円位問題じゃないけど、ホテル代だつて、うそついてるじゃないか、此の前の人にだつて、うそ云つたし。……君はうそが好きなの」

「こんな商売している者が本当のこと云うもんですか。この間、あんたに云つた私の住所

も名前も皆、うそですからね」

「じゃ君は第一回から僕をだましていたの、君は齢に似あわず、図太いね……じゃ、この間のあの住所姓名は何なのさ、手紙もらつたら、どうするの」

「あれや友達のとこよ。友達が報してくれることになつて、始めから本当のこと云う馬鹿はいないわ。それより、お尻が痛くて仕方ない。さつき便所で血が出たもの、お医者へ行くから、さつきの五百円も、ちようだい」とぬけぬけと云う。向山はこんな青二才になめられてるのに腹が立つて来たものの、せつかくの遊びの終りを、けんか別れしたくはなかつた。

「君は馬鹿だよ。そんな商売の仕方でも永もちするんかね」

向山は極めて静かに云つた、ホテルの者にきかれ度くなかつた、妙な羞恥心だつた。おヒロは、

「何でも良いから、早く五百円ちようだい」と云う。

「外へ出よう、出てから話そう」

「いやよ、ここでちようだいよ」

と云つてドアに立ちはだかり通せんぼしている。ホテルの柱時計が十一時をつげていた向山は物も云わず立上ると、おヒロを軽くつき飛ばしてドアに手をかけていた。(続く)

## 歡義先生性愛相談欄開設

### 歡義先生の言葉

「病的な苦悩を専門家に訊きたいが、その機会もないので独り困っている」という風な人々が世間にはどの位多くかくれているか知れません。特に精神的な方面、性癖といった風な事柄は他人に話すことも出来ず、又普通の医者にも口に出して訴え難いものです。

それを自分勝手に病的なものと決断して苦悩している者の何んと多いことでしょうか。

私は市井の開業医として、日常具さにこう

いう特異例に接しており、相談にのり解決した事もあります故、なんとか責任のある人間味豊かな解答を与える事も出来ると僭越ながら考えております。

昔から一盗、二俤、三妾、四芸、五妻、特姦と申されておりますが、此の心持を人間性の赤裸々な行動から遙かに逸脱した所まで行き過してしまうと病的なものになつてくると思うのです。

これを所謂道德の規準から少々はみ出して

も、これ位ならば許せるという範囲内に止める事は、指導者達の責任であると思ひます。そこに理解ある医師の協力が必要になつてくるのではないでしようか。

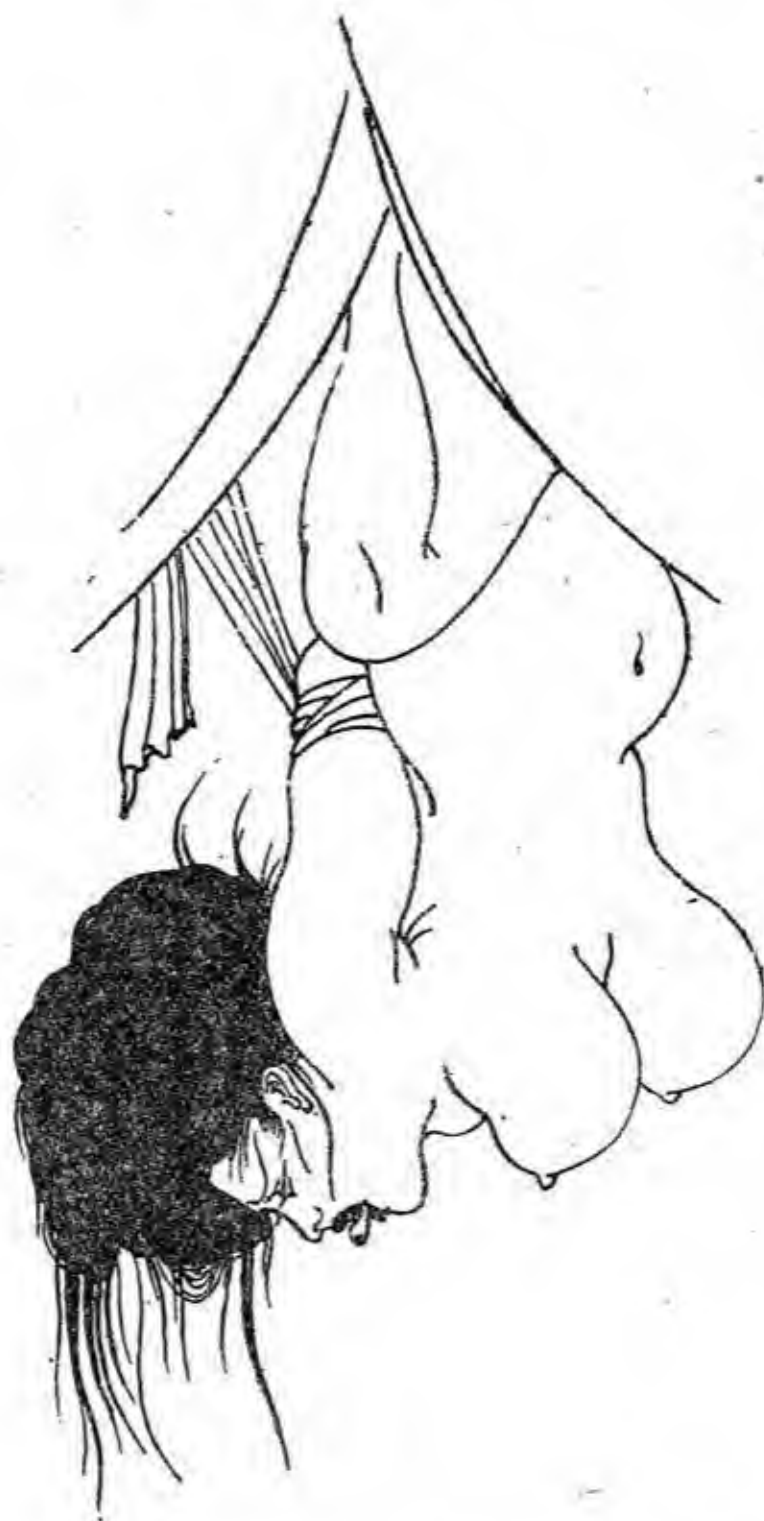
### 〔質問要領〕

質問は出来るだけ詳細に記入の上、相談係宛に御送付下さい。次号本誌上より回答致します。但し直接の回答はお断りいたします。

質問者の秘密は厳守いたしますから御遠慮なく御質問下さい。(相談係)

# 私は何故責め絵を描くか

絵と文 南川和子



太平洋戦争が始まる一年程前から私は北ボ  
ルネオのサンダカンというゴム園のある小さ  
な町に住んでいました。

夫はN殖産の会社駐在員で、私は、当時南  
国情緒に憧れていましたから、夫の勧めるの  
を幸い〃一度は見物しておきたい〃と喜  
んで、夫と一緒に生活する気になつたのでし  
た。

けれど、直ぐ戦争が始つて、私は、恐ろし  
い目に合わなければならなかつたのです。

敵軍に交つた白人が、どや／＼と私達の住  
家を襲い、私達、日本人を片っぱしから拉致  
し去つて、バリケードを四方に廻らした抑留  
所という狭いキャンプに収容されたのでし  
た。その時の戦慄は女でなければ分らないと  
思つています。

収容される時の身体検査は嚴重で、それこ  
そ女でも……いゝえ、女なら、なおさらなの  
です。それこそ、一糸纏わぬ素裸にさせられ  
て、ズロースまで取上げられ、到底口では言  
うことの出来ない程の恥しい思いをさせられ  
たのでした。彼等は女となると歓声をあげて  
喜び、必らず別室に閉じこめて、そこでは念  
入りの検査が始まるのです。

女一人に男数人、しかも、それが敵国の男  
性であるとしたら、想像しただけで私達は慄  
え上つて終いました。

白人は女性に対して紳士的だと聞かされて  
いましたが、こんな特別な事態になると、や  
つぱり人間の本能というものはみな同じだと  
いうことを知りました。

私は夫と突き離されて、その特別に設けら  
れた一室に入れられました。そこには軍医が



一人と、あとは全部、検査官ばかりです。その検査官といつても、全部、名ばかりの兵隊達であることが一見して分かりました。机の上にはクスコ、カーテル、肛門鏡から、膀胱鏡まで、ありとあらゆる検査道具が薄気味悪く、積んであり、それがロクに消毒もしてない有様なのです。いくら乱暴な婦人科医でも、こんな不潔な医療器械は使わないと思います。

既に私の前に、五、六人の女性が済んでいましたので、その場の乱雑振りは眼に余る程でした。縛った縄は、ち切れ、血液の附着した脱脂綿、多分、いやがる女性を無理に抑えつけたのでしよう、内診台代りの大きな木箱の上には一枚の粗い軍隊毛布が、もみくちゃになつて床の上にまで匍つていました。

四方の窓は、すっかり開け放されていて、明るい南の太陽が、まばゆい程の光を、室内に降り注いでおりました。

こんな明い部屋で、こんなに多くの男性、しかも白人達の前で、私の肌が曝されるのかと思うと羞恥の一面、倒錯的な自虐の気分さえ起つてきて、何故か私は大きな吐息を一つ洩らしてしまいました。窓の外では、かなり離れた位置で、夫や、日本の男性達が、片唾

をのんで私達の方を見守つていました。私は、決して、どんな辛い目にあわされても、どんないやな事があつても、決して悲しい泣声を、あげまいと、心に誓つていました。

## 二

型通りの訊問が済むと、私は、案の条、とびかゝつた検査官達によつて、衣類をはがれ、その場に、捻じるように、体を、かがまされました。白人達の獵奇の眼が、私の白い二ツの山をなめるように見ているのです。

私は悲鳴さえあげられず、いゝえ、どうしても、あげまいと決心していたのですが、余り、呼吸が苦しくて、思わず悲鳴をあげて終つていたのでした。

別の白人達の毛むくじやらかな手が、まるで、歯ブラシのように私の太股や、脛をなでまわします。その時は、私も思わず「いややう」と両脚を縮めて、こぼみましたが、彼等は、そんな私の喘ぎが面白くてたまらないらしいのです。

私は子供のようには暴れていました。それ以外、どうすることも出来なかつたのでした。叫んだつて誰が助けに来てくれるわけなし、そんな権利は、もう総べての日本人から

奪われて終つていたのでした。

動けば、銃殺されるに決つていました。

そんな、〃みじめな日本人、私は、口惜しさと羞恥を、じつとこらえて、彼等の前で、女としての醜態をみせてはならなかつたのでしたが……あ……私もとうとう犬のように四ツ這いにさせられました。こんな私の哀れな恰好を夫に見られたくない一心で、私は、出来る限り、窓より体を低くするために、両足を、かがめていましたが、別の、方向にある入口の扉が大きく開け放たれていたので、そんな私の体位がまる見えになつていたとは……あとで……私が内地に帰つてからのお話ですが、夫にさんざん笑われました。そんな恥かしい私の過去を再び語つて、私の真赤な顔を見て喜ぶ夫を、あゝ、この人も、やつぱり、あの白人達と変らないんだな、と淋しく思つたりしました。

白人達は日本の女性は、慾が深いから、ダイヤモンドや貴金属類を、身体の中にかくしていると思つていたのでした。

いゝえ、そんな暇があるものですか、そんな時間がなかつた程、彼等の侵入は早かつたのです……

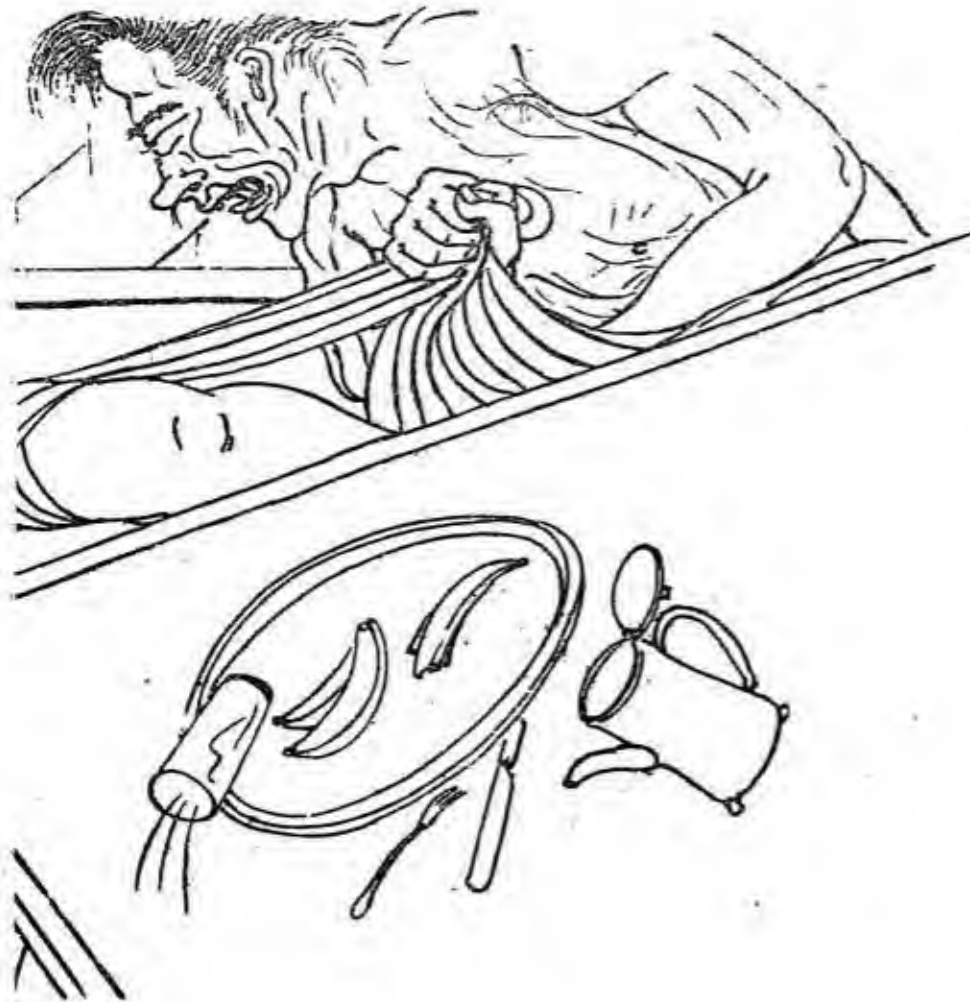
でも、仕方がありません。白人達は、黒い

髪のと、黄色い肌で、しかも胴長の日本女性独得の肉体が物珍らしかったのだと思う……それで、こんな機会に、いろ／＼な珍奇の世界を探ろうという慾望があつたのだと思います。それは直感で分りました。女性の本能ですもの……白人達が私に強いる、いろいろの要求で、直ぐ分つたのです。そして息を弾ませて、

「オム、ビッグ……」とか「オムイエロウ……」「ピンク」だとか、「オ……ラーシ……」「ビッグ」「ホワイト」「ブラツク」だとか、様々の感歎詞を表して、眼を輝かしているのでした。

私は、とうとう全身の力を振り絞つて、もがき苦しんでいました。けれど、私が泣き叫べば泣き叫ぶ程、彼等は、ますます執拗に喰い下つて、私の肉体を翻弄し尽くさなければ、おきませんでした。

幸い、私は、それだけで済



んだのですが。私と一緒に南に、はるばる、渡つて来た、若い敏子さんは、酷い死に方をしなければならなかつたのです。せめて、私と一緒に町に住んでいたとしたら、そんな惨めな死に方にはならなかつたろうに……それを思うと人里離れた山の中の小さな農園にいたことがお気の毒で堪まりません。

敏子さんは侵入して来た、土着人達の手にかゝつて、若くて美しい命を終えてしまつたのでした。

その詳しい事情は、纏て、上陸して、私達を解放してくださつた日本軍の調査隊の方々によつて明るみに出されたのです。調査に當つた憲兵隊の方々は、直ぐ山狩りして下手人を逮捕し、斬首しましたが、凄惨な敏子さんの死を目撃した、夫の山田さんは、その日の恐怖を次のように私に語つて下さいました。

× × ×

「敏子、敏子……」

私は、何だか不安だつたので、隣室で仕事に夢中だつた妻を呼びました。敏子は、やがて生れ出る赤ん坊のために、せつせと、生ぶ着を縫つていたのです。一日も早く、サンタカン市の産院に移つておけばよかつたのに、考えれば残念なことばかりです。

敏子は、こゝ数日、胃腸を、こわして下痢が続いておりましたので、南方特有のアメーバー赤痢ではないかと心配だつたのです。

その時どか／＼と慌ただしい足音がして、悲鳴と一緒に誰かゝ押倒された様子でした。私は、思わず立上つて隣室へ行つていました。隣は敏子だけの部屋だつたのです。



「敏子ッ」

私は夢中で駆け寄りました。無惨……敏子は既に侵入した五人の土着人達に、よつてたかつて引倒され、仰向にされて必死に抵抗していました。突嗟に私は自室に引返し、護身用として何時も肌身から離さなかつたコルト……だが、今日に限つて見当りません。

「ひひひ……」突然、背後で動物的な笑い声がしたのでふり返ると、なんと土着人の手に私のコルトが握られているではありませんか。「しまった」私は、ままと彼等のトリックにかゝつて唯一の武器を取上げられていることに気がついたのです。彼等は無抵抗の私を後手に縛り廊下の柱にくくりつけました。万事休す。あとはかよい妻がどんな始末になるか、私は心の中で神に祈るばかりでした。

土着人の一団は「土賊」<sup>サンカ</sup>といつて、日本で云う「山窩」のような一団で、都市を距てた山中に住み、ピソーという曲りくねつた短刀を持ち隙を窺つては住民を襲い掠奪暴行を、恣



いまゝに働いていたならず者なのです。ところが、彼等は、敏子の美貌を知悉していて狙つて来たに相違ありません。何故なら、その一団の中に、かつて私の家で使つていたジョンゴス（下男）が混つていて、ニタリ／＼、敏子の姿態を、快よげに打眺めていたからです。

「あ、ジョンゴス」

私は思わず彼の名前を呼びました。

「トアン（旦那様）上等なア」

と、小指を示して、ジョンゴスは不敵に笑

っています。「あ、駄目だ」私は直感しました。ジョンゴスが、以前、敏子のマンデー中を覗いたり、肌ぬぎになつて化粧に余念のない夕刻、敏子の背後に廻つて、例のニタリ／＼の北叟笑みを送つていたのを知つて、その度に私は、彼を叱責し、追い払つていたのを思い出しました。

敏子は、椅子から引ずりおろされ、いきなり腰をつかれたので大きな身重のお腹を、苦しげに起伏させて、物もいえず、ワナ／＼唇を震わせていました。ジョンゴスは敏子の異様に膨んだ腹部を見て、キラツと動物的な眼を光らせ、何やら仲間にかぶと、いきなり敏子にとびかゝり、白い両腕を後に、ねじ上げました。敏子は、

「堪忍して、ジョンゴス」

と哀願するようにジョンゴスを見上げました。

それが、一層ジョンゴスの劣情を唆つたに違いないのです。彼は、一気に敏子のワンピースに手をかけると、裾を掴んで、引上げました。

「あ、あッ」

悲痛な敏子の号泣が洩れた時には、彼は、もうブラジャーに手をかけ、簡単に引きち切

つて、最後のパンティにまで手をかけていました。敏子は二丈もあるサラシの腹帯を巻いているので、彼は、それを解きにかゝります。敏子は必死でジョンゴスの手に噛みつきました。

「パン」彼は怒つて、いきなり敏子の頬に平手打をくわえると、くの字にのびた彼女の腹帯を悠々と解き始めました。

敏子が、くるくると二、三回、体を、くねらせて回転したかと思うと、どさりと床の上に伸びてしまいました。

仲間が交互に敏子をもて遊んでいるうちに、彼等は、ふと廊下の天井を見上げました。南方の住家は、天井が高く、梁が縦横にめぐらしてあります。塞ぎ板がないのです。

私は、ぎよつと身震いしました。彼等の根柢が分つたからでした。

彼等は互に頷き合うと、嫌がる敏子を、手取、足取、廊下へ引出し、一人が、二尺余りの丸太棒を探してくると、敏子の縮めた両足首を左右に別々にとつて無理矢理、大の字にのぼして縛りつけました。両腕が後手に縛つてあるので、妙に反りかえつた敏子の肉体が、まるでパンクしそうに一層、青筋をたて、緊張しはり切つています。私はわめき彼等

を徹底的に怒鳴り散らしていました。

それが合図のように、彼等は、敏子の腹帯を拾つて、梁に引かけ、丸太に結ぶと、敏子を逆さに天井に吊り上げたのです。敏子の絶叫——悲痛な号泣が暫く続きました。ビク／＼内股筋を震わせ、もがいている敏子のポーズは凄惨というるか、妖艶というるか、それは、どんな勇気のある男達でも正視出来ない悲惨な女体の断末魔でした。

眼を閉じて、大きな口を開き、そこから長い舌を出して、眠るように逆さに吊され揺れている敏子。あゝこれが現実の、あの美貌を謳れた、敏子の変り果てた姿なのでしょいか。大きな腹部は破れんばかり下降して、胸部にずつしりと重みを托していました。

#### 四

この様な事実を私に語ってくれた山田さんが、ある日、「和子さん、あなたは、絵心もあるし、恐ろしい敏子の地獄図が想像出来ることでしょう。しかし、悲しい事に私は、筆や絵に才能がありませんので、たゞ若くして死んだ妻の惨劇が、次第に薄らいで行くばかりで、忘れずに、冥福を祈ることも出来ず、それが残念です」

と涙ながらに仰有つたのです。

なるほど、僅かでも芸術の勉強をした者は、小さな事を胸の中に温めて、鋭いイメージを働かせることも出来るのです。それで私は私なりに凄惨な敏子さんの地獄絵図を想像していたのです。

× × ×

あれから、もう十年以上もたちました。私と夫は、幸い故国に無事、帰還することが出来ました。或る日のことです。私は本屋の店頭で、奇譚クラブの「責め絵」を瞥見して、異常な興奮に駆られたのでした。山田さんの敏子さんを思い出したからです。敏子さんが、何時の間にか、その図柄のモデルに、すり変つていました。

そして私は、私なりに、過去の体験が生んだ、「責め絵」を描きたい慾望に駆られました。それは男性側、或は女性側、どちらでもよいのです。とにかく、責める方が愉快し、責められる女性が、必らず苦悶し、泣き叫ぶ地獄図を幻想しているのです。

観賞者の皆様は、どう思ひになられますか、知れませんが、私は、今申し上げましたような事実から女性の観賞者は別として、男性の欲求のまゝに女性を責めようと志しまし



た。女性が責めを喜ぶ場合、男性は少しも責める興味を覚えないのです。苦しみ、もがく女性のうねりや羞恥を見て、世の男性達は、あのボルネオの白人兵や、土着人のように、興奮し、満ちたりた気分に入るのではないでしようか。淫らといえるでしよう。けれど男性の女性観は淫猥な欲望を除いたら、何の変哲も、美的観念も起らないのではないでしようか。殊に女体の美に就いては、女性はいざしらず、男性には必然的に性欲の対照としての審美眼が働いていると思うのです。私は他の方の描く責め絵を愛好しております。けれど、私の個性は更に、追求させようともかくのです。一方的に主観を働かせた「責め絵」それは凄絶であり、号泣であり、断末魔の苦悶であり、どうしても、最後には性的な美を追求したいのです。

けれど、それは、どの程度に描写してよいのか、やはり、リミットを考えなければならぬ。不満が、私の責め絵の中にはいつも胚胎していると思うのです。恐らく、それは、私に同調して下さる観賞者なら痛切に感じて下さるのではないかと思うのです。

けれど、私は、このリミットを越える事は、出来ないのです。総べての人間生活には

制約があり、その制約の中で、充分に生きてこそ立派なのですから、不満は不満として、社会生活の秩序だけは守つて、ノーマルな精神で描いていくべきだと思います。

私は、世間でいう「いやらしい絵」を描いています。けれど、アブノーマルな人間では決してないと自負しています。アブノーマルな人間と「責め絵」を愛好する人間とは、イ

コールではないのですから、観賞者の皆さんは、健全な責め絵の愛好者になつて頂きたいと思うのです。私は、そんな決心で、責め絵を描いています。アブノーマルを好む、ノーマルな文化人の為に、私はこれから、その人々の赤裸々な要求に応じて行きたいと思つています。

(おわり)

## 次号 (十月号) 豫告

- |                     |                               |
|---------------------|-------------------------------|
| 針を刺される女……南川和子・画     | 呪縛……辻村 隆                      |
| 体操倉庫……河村哲夫・作        | アースへの讃歌へ答えて……羽村 京子            |
| 瀕死の白鳥……津森澄子・画       | 私の想い出……岡田 咲子                  |
| 口絵写真……都築峯子・画        | 現代のサジズム……久留木 栄                |
| 野外の責め場より……辻村 隆構成    | 哀怨責め場絵噺……岩 広志                 |
| 戦前現れた責め絵……伊藤晴雨氏の巻   | 或る被虐性愛者の手記より……(二) 天泥 盛栄       |
| 聖画の誘惑……近見 啓         | 再びストラックスについて……(吾妻新氏へ答える) 沼 正三 |
| マダム紅鶴……野村恵美子        | 奇妙な告白……水上流太郎                  |
| 私の服、縛られ服……三谷二三子     | 孤独な放浪記……小暮 達也                 |
| 女情抄(女腹切八景)……亀岡絃七郎   | 我が生い立ちの記大島 一                  |
| 蜘蛛と蝶々……(一) 飛田 良二    | (偽告) 愛情の絆……北野 由紀              |
| (不連なニューフェイス)……村田 誠一 | 外に連載物は、淫火(第十回)                |
| 花杖……岡 真史郎           | ぶ・すれいぶ(第十回) あるマゾヒ             |
| 両棲動物(二)……飯塚 紺二      | アリスの降伏(第三回) 等満載               |
| 待合「おかめ」……飯塚 紺二      |                               |



# あるマゾヒストの手帖から

(四)

沼

正

三

## 第二十八

汝男の許に行くか……

「汝女の許に行くか、鞭を忘るる勿れ」

これは超人の道徳を説いた女性憎悪者ニイチエが、「ツアラツストラ」の中で、彼に説教させている有名なことばである。サデイストの方（がこの「手帖」を読んでもくれるとは思っていないが）は是非憶えておかれるとよい。

これをもじつて、同性に対し、

「汝男の許に行くか、鞭を忘るる勿れ」

“Gehst du zum Mann, vergiss die Peitsche nicht.”

と説教した女性がある。「性的危機」という本を著したグレーアマイセル・ヘスという人だ。

彼女によると、近代的男性は、何であるよりも先ず、マゾヒストである、心理的マゾヒストである。男性が今日妻の中に求めるのは

強い、しつかりした女主人であつて、それは母の像——強く、しかも彼を導いてくれた——を暗中模索しているのだ。そこで、女性の方はこれに答える文強くなければならない。だから「鞭を忘るる勿れ」である。献身の権化のような女性が文学書で讃えられている間に、現実世界で凱歌をあげているのはアマゾン（別項で扱う）や復讐三女神のような支配的なタイプの女性であることを忘れてはならない。云々。

どうも議論としては少し雑で戴きかねる所が多い本だが、ニイチエに張り合つた所はまことに天晴れである。近代的男性が心理的マゾヒストだというのはことばのとりようにもよるが、早い話が私達が米国風のレディ・ファーストの作法を身につける過程を考えてみても、婦人の同伴者でもある時、いつも彼女に気を配っていないければならないということは、彼女の召使の代りをするということに等しいので、これを心理的にマゾヒズムに堕していると見ることは決して



奇矯でない。だから、米国文明の浸透した近代社会は根本的にマゾヒスティックな色彩を含有しているといえるだろう。

ともあれ、すべての女性が、このマイセル・ヘス女史の戒めを忘れずに、常に鞭を携えて私達にのぞむようになって欲しいと願うのは、私一人ではないであろう。フラグランティンを待望するや切である。

## 第二十九 「月夜鴉」

江戸時代の春本を見ても分るように日本の風土にはマゾヒズム（いずれ詳しく書くが私は女性のマゾヒズムはいわゆるマゾヒズム現象とは認めない。）やフラグランティズムはあまり栄えなかつた。殊に男性を鞭つ女性を主題とする文章は古典においては恐らく今昔物語本朝部巻二十九の「人に知られざる女盗人の語」を最初にして唯一のものとするであろう。谷崎が「恋愛及び色情」というエッセイでこれに論及しているのを御存じの方も多かるう。

こういう古典と比較するのはおかしいかも知れないが、フラグランティンをヒロインとした珍しい小説として、あまり人の挙げない「月夜鴉」の梗概を紹介しておきたい。作者は川口松太郎である。流布しているから何処でも読める、その割には同好の人に知られていないようである。

長唄の家元杵屋和十郎の娘お勝、嫁ぎおくれで二十八、三味線の腕は確かでも女では四代目は継げぬのが惜しまれている。男優りで六人いる父の内弟子達から陰で淀君とあだ名される位の勝気である。内弟子の中で十六になる和吉という少年を使つて自分の身の廻りの世話をさせているが、彼は三味線の覚えが悪い。仲間からも

「お前は稽古などせず若いお師匠さんの腰巻でも洗え」といわれている。お勝は可哀想になつてお蔵の中で人知れず稽古してやる。覚えが悪いので頬を平手打ちにする。そうするとチャンと憶えるのである。いたわつて教えるよりひどい目に合せておぼえ込ませる方が呑み込みが早い。お勝は平手打ちを愛用し、その度に胸のつかえが下りるような気がする。

頬が腫れて赤くなつてくるので、簾の鞭を使つて顔以外の所を折檻することになる。お勝は平手打ちとは別な快感を感じ、稽古のあとはせい／＼した気分になる。和吉の肩も膝も腕も背中も長さ四五寸の赤い腫跡が無数に喰い込んでいる。この折檻の二年間の中に和吉はめきめき手を上げ、遂に歌舞伎座に補充で出るようになる。その中お勝の縁談がある。和吉は泣いていう、「私をお師匠さんの旦那にして下さい。旦那でなくつても好いんです。弟子でも下男でも一生傍へ置いて貰えれば何でも好いんです……」お勝は和吉とは年が十二も違うので問題にしてないが、お嫁にゆく話をして和吉を涙ぐませるのが面白くて彼をからかう。犬に食べ物を見せて「お預け」というあの感じ。涎を流しながら、おとなしく待つてゐる犬の感じが和吉である。小犬のようにお勝につきまとう、それを邪険に振切つたり、半日口を聞いてやらなかつたり、お嫁にゆくといつて気のすむまでからかつて、泣き出すまでいじめる。鞭で打つ時とは違つた面白さで、お勝の思うまゝになつてゐる。

その中、段々情がこもつて結局二人は親に逆つて結婚する。勘当中に一門の大ざらいがあり、和吉はとにかく家元の聲というので出し物に「綱鮎」をひく。和吉は初めての檜舞台に上りそうになり、開幕の直前に家に帰つて、お勝から例の鞭で打つて貰つて性根をつ

け、それから弾くと素晴らしい出来で忽ち名声が上り、勘当もとける。帝国ホテルで盛大な結婚披露、だがその時十九の花婿に対して三十一の花嫁は自分の老け方に初めて負け目を感じる。嫉妬のヒステリーが年と共に昂じてくる。

お勝が三十九、和十郎を襲名した和吉が二十七の時、先代が死ぬその葬式のあとで、女中のお雪と夫との仲を疑つて鉄で夫を傷けてから取押えられる。その晩夫の枕許でお勝がしよげると、和十郎は、突いてかかつて来たお勝に、昔鞭で打たれた頃の美しく強かつた彼女を見たといい、お前は強くなれば美しい、自信を持たねばならないといつて、布団の下から鞭を取り出して妻に握らせる。「お前を若くするのはこれなんだ。夫婦仲を昔のようにするのもこれなんだ」鞭がピュツとなる。「それだよ、俺が外の女とどうにかされろと思つてゐるのかい、十九の時からこんな風に仕込んでしまつた俺を、あんなお雪のような女と……」「いやよ」叫んだのと古ぼけた鞭が空を切つたのと同じ時、びしつ！ 普通りの音がした。九年目の手応え。「忘れていたんだ」強くなくつちやいけないんだ。びしつ！ 二つ目の手応えで和十郎はお勝の膝へすがる。お勝は彼を抱く（これで小説は終つてゐる。）

### 第三十 外国語の「むち」

洋書を訳す時に日本語の貧困を感じるといふのは、翻訳に経験ある者の一致した感想だが、マゾヒストにとつて非常に重要な概念である鞭についてもそうである。

日本語では「むち」「しもと」の二語しかない。中世には「すばえ」又は「ずはえ」の語が後にあがる「楚」の訓として使われ、

「若枝を切取つて作つたむち」をこれで表現したが現在では死語になつたから、あらゆる場合を「むち」「しもと」で訳さねばならない。「しもと」は特に刑罰用具の意の時に用いられる語で、訓としては「答」の字に用いる。「答」の字は後にのべるように本来限定された概念であるから、次項のように鞭と區別して、鞭刑、答刑と使い分けが可能であり、又それが妥当だと私は思つてゐるが、ひろく「むち」による各種の刑一般を「答刑」と表現する人が多い（例えば、木村亀二教授の「身の体刑、特に答刑」という論文）等の右のように「答」を「しもと」と訓ずることから来る。「しもと」以外は一切「むち」これは「ぶち」から来たといわれる。で、先生が教室で持つてゐるのも、騎手が握るのも日本語では「むち」しかない。洋書のマゾヒズム文献では各種の「むち」の語が用いられてゐる場合、単に鞭と訳したのではその光景もしかと把握できないことがある。そこへ持つて来て普通の英和、独和、仏和の大辞典などは不親切なもので、のべつに「鞭、答」の訳語を与えてゐる丈である。で、いささかペダントリーの嫌いはあるが、洋書を読まれる方の参考になるようなことを少し書いておく。

私達は「むち」と聞くと「鞭」の字を思い、柄の先の革紐のついたものを頭に描く。これにあたるのは、英 whip, 独 peitsche, 仏 fouet, 羅 scutica 等である。「しもと」としても用い得るがこれに限らないから馬や犬に使う鞭は普通右の各語が用いられる。riding whip (乗馬鞭) Hundepeitsche (犬鞭)、fouet de cocher (馭者鞭) 等。独 Knute, 仏 knout, 独 Nagaike 等は矢張り革鞭であるが罰として鞭撻する時に用いる「しもと」で、革紐の部分にこぶがあつたりする。peitsche もそうだが、いずれもスラヴ系の語であ



る。英 lash は whip の同意語<sup>シノニム</sup>見たいに使われるが正確には革紐の部分、即ち鞭索<sup>むちのこ</sup> (whip-cord) を指し、羅 lorum にあたる。この語は lora となつてるのが普通だが、これは鞭索が複数のものが多いからである。鞭索九本のいわゆる九条鞭を、英 cat-of-nine-tails, 独 neun-schwänzige-Katze 即ち「九尾の猫」という。

Reitgerle (乗馬笞) などという語もある。

英 cane, 独 Rohrstock, 仏 canne, は籐竹で作られたよく撓うもの、英 stick, 仏 trique, 等はそれほど撓わぬものかと思うが、厳密には区別されまい、いずれも「杖」と訳してある。独 Prügel, 仏 bâton は「棒」と訳してよい。前者は特に刑罰用具としての棒であるから、「しもと」である。

刑罰用の「鞭」で特に「しもと」と訳してあたるのは英 scourge, 独 Geißel, 仏 bastonnade 等の語である。羅 flagrum, flagellum も奴隷に対する「しもと」であるが、乗馬鞭の意に使われたのを讀んだこともあるから正確にはいえない。

以上は、洋書を読みながら次第に合点されて来た範囲の知識である。私は語学を専門にするものではなく、手許に同義語辞典も持合せていないので、これ以上の穿鑿をする力はないし、右に書いた所も誤りなきを保し難い。然し、諸君の目にされた洋書に右と違う用法があつてもすぐ私の誤りだとはいえない(殊に近代人の文であるときには) 何故かという、奴隷制、農奴制の社会に於ては鞭はありふれた家具であつて、それ丈にひとはその各種類を正確に使い分けた、丁度私達が高下駄、駒下駄、木履、フエルト草履、ゴム草履等々を使い分けるように。所が奴隷というものがなくなり、教育界からも鞭が排斥され、一方自動車の発達で牛馬を一般人の目から

遠ざけ、その結果今では鞭というものが日常生活から消失してしまつた。(真に私達の痛嘆に値することである!) 西洋でもだから近代の人は右の区別に割合無神経なようである。そして whip, peitsche, fouet, が丁度日本語のむちと相敵うように広く使われる傾向がある。

が、だからといって、区別を無視してよいとは申せない。殊にマゾヒストを自任するものが whip も rod も同じに思つてゐるのでは米屋が糯と粳とを混同するようなものである。少くとも「むち」と「しもと」は区別すべきだし、むちの漢字として、普通「鞭」「笞」の二字が用いられるのだが、この場合は、「二十の扉」式にいつて「動物」製が「鞭」、「植物」製が「笞」と区別するのが適當であろう。前項で、ヒロインお勝の揮う「籐の鞭」は、だから「籐の笞」と書い方がよいと思う。

漢字にふれた序でに漢字での用法を一瞥しておこう。  
先ず構造や材料で区別すると

鞭 ベン (革のむち、whip.)

笞 チ (麻や竹のむち、rod, cane.)

楚 ソ (いばらのむち、すばえ、rod)

榎 カ (ひさぎのむち、rod)

籐 スキ (竹のむち、cane)

鞘 ソウ (馬鞭のむちさき、lash にあたるものか。)

等になる。外に

敲 コウ、捶 (捶) スキ、

策 サク、杖 ショウ

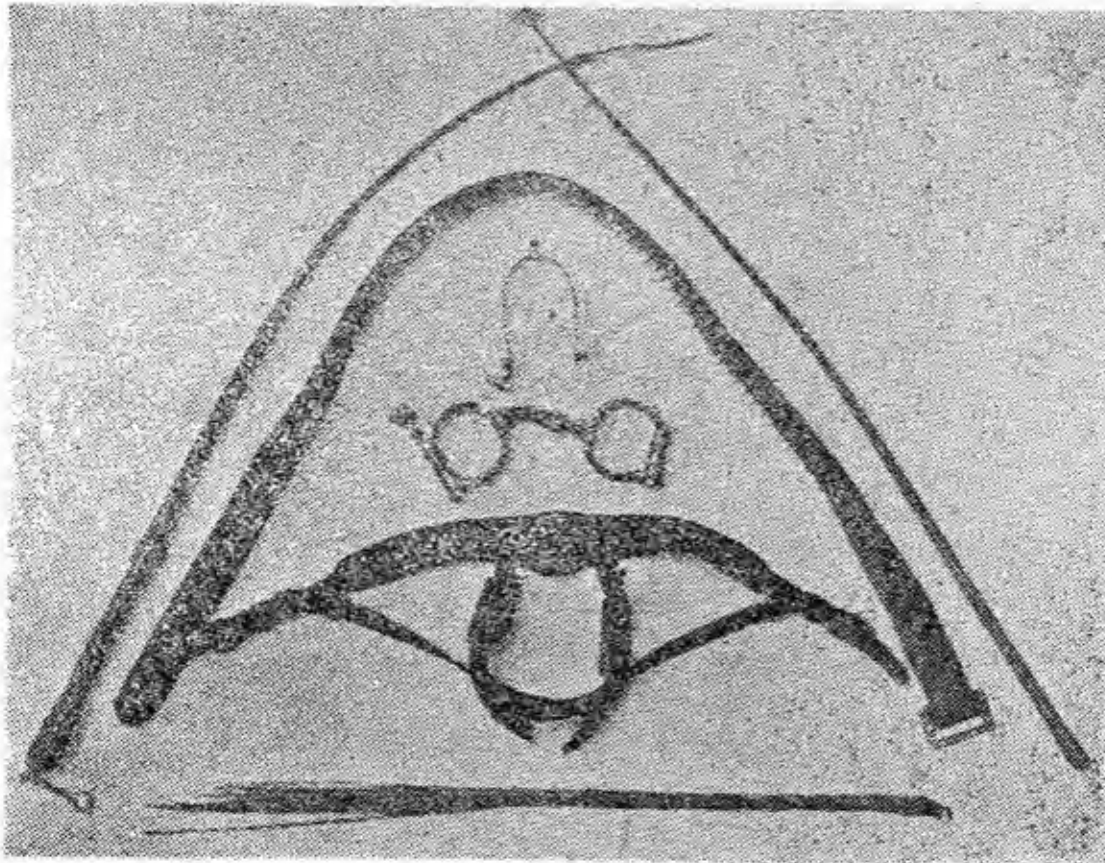
(すえ、cane)

又用途では

鞭 ベン、策 サク  
 篋 スキ、枚 バイ  
 櫛 タ、櫛 (過) タ  
 鞭 ベン (官吏を罰するむち)  
 扑 (朴) ボク  
 榎 (櫛) カ、楚 ソ  
 榜 ホウ、答 チ (罪人を罰するむち)  
 (生徒を懲すむち)

等に区別される。尤もこのあとの方の区分は可成り曖昧で、答杖徒流死の答や杖のように、刑具の別が刑自体の別を意味する時代では、ある意味では、あらゆるむちは罪人を罰するのに使用されることが可能だったわけである。

右の漢字の区別は、先のように、書物読破中次第に納得したものでなく、手許の漢和字典を参考にして書出してみたものだから、どの程度に正確な使用区分であるかは私としては断じ得ないが、私の漢籍に関する僅かな知識からでも、随分混淆しているようである。ただこういった漢字を並べられて見ると、今更のように私達は日本語の貧困さに驚かされるであらう。



### 第三十一 答刑と鞭刑

前項で欧州語に本来存する鞭と答の区別が守られていない例があると書いたが、その理由は、いうまでもなく、近代に至つて奴隸制度が廃止され、更に刑罰としてのむち刑も殆んどなくなつてしまつた上、学校教師の鞭の使用も教育学者が賛成せず、その結果乗馬でもする者以外は、近代生活の公式面からむちが追放されてしまつたという事情——私達マゾヒストにとつては実に千載の恨事であるが——によるのである。

米国のある州には今でもむち刑が残つてゐるときいたが、その他の文明国は英国を除いて、いずれも十九世紀の間にむち刑を廃止した。英国はヘンリー八世、エリザベス女王の時代に各種の身体刑生命刑を定め「血の立法」を行つた「輝ける歴史」を持つていて、世界中に英国位死刑の多い国はない、といわれた十九世紀の初めにおいて死刑にあたる罪が二百二十三あつたそうである。だからむち刑にも執着してゐて、第二次大戦後やつと廃止したのだが、忽ち又復活の議が起つたことが近頃の新聞にも見えてゐる、日本でも戦前の関東州や少年矯正院では法律でむち刑が定められていたが今はなくなつた。



尤もこれは法律で定められたこと文についてのお上品な議論で、私刑としてのむち刑がいかに公然と行われていたかは、陸海軍初年兵の経験ある者には今更いうまでもない、外国でも同様で、米留學から帰った友人の話によると、女性問題のからだ黑人リンチは大抵死刑に終るが、学生間などで、例えば、設備の白人黒人の使用区分を破つたことを理由になされるリンチではむち刑が行われるに止まるそうで、相当惨虐なものだが、全然司法上の問題にはならないという。

私達の接しうる範囲でむち刑のよく出てくるのは、帝政ロシアの文学である。段々紹介してゆくつもりであるが、今回は、一口にむち刑といつても答刑と鞭刑とがどの位違うものかということをはつきり示す文章を一つあげて見よう、アントン・チエーホフの「サガレン島」太宰俊夫訳による。(近頃岩波文庫にも一部分が入つたようである。)

チエーホフは一八九〇年に樺太を訪れている、当時ここは流刑地になつていた、彼は囚人及び流刑移民の状態をあらゆる方面から描いているが、ここに引用するのは、囚人に対するむち刑について記述した所である。

最も一般的に行われているのは答刑である、一八八九年にアレクサンドロフスク郡では、囚人、移民二百八十二名が行政処分を受けたが、その中二百六十五名即ち百名に対して九十四名は答刑を受けた。答刑はサガレンでは、嫌悪も恐怖も惹き起さない。答刑執行の際、少しも苦痛を感じない者が、囚人の中に多数存在するといわれている。

鞭刑はこれに反し、サガレンで施行されている刑罰の中で、最

も惨酷であり、最も嫌悪されている、そして、地方裁判所の判決によつて、しかも医者の検診によつて体刑能力を決定された上でのみ、行われるので、極めて稀である、鞭刑を制定した欧露の立法者達は、もし眼前に鞭刑の執行を見たならば、直ちにこれを廃止したであろう、人間はこれほど恥ずべき見せ物は他に見ることができないであろう。

鞭刑の執行を私はドウエでみた、彼はハバロフスキー地方裁判所で鞭刑九十回と一輪手押車に鎖で繋がれる刑とを宣告されていたが、不注意のため執行されずにサガレンに送られて来ていた。それが発見したのである。

看守部屋には手足をくくりつけるため小孔のあいた傾斜椅子が置かれている、プロホロフはそれに縛りつけられた、刑吏は先端に三本の革条のついた鞭を握つて、落ちつき払つて手入をしてから、「しつかり頑張るんだぞ!」と低い声でいつて、身構えた。

「一回!」看守は寺男のような声で怒鳴つた。

瞬間、プロホロフは黙っている、表情も変らない、然し痛さのための痙攣が全身を掠めてゆくと、叫び声でなく、金切声が鳴り渡つた。

「二回!」看守が叫ぶ。

刑吏は脇に立つて、体を横切つて鞭を置くように叩きつけ、五回目毎に鞭打箇所を代え、三十秒休憩する、プロホロフの毛髪は額に貼りつき、額は腫れ上つた、五回目から十回目がすむと、前回の鞭のミミズ腫れが赤紫色になり、青くなつた。

「俺あ不仕合せな男だ、俺あ殺されるんだ!」

と云つたと思うと、頭が奇妙に伸びてゆき、嘔吐の音、もう音

を出さず、ただ、うう……と嘆かれた唸声を出すだけである。

「四十二回！ 四十三回！」看守は相変らず叫んでいる。……

到頭九十回まで執行した、急いでプロホロフの手足を解き、助けて起き上らせた、鞭打箇所は皮下出血のため、灰色を帯びた赤紫色と変り、ところどころ出血している、齒はががつして合わず、顔は黄色になつて濡れ、眼を廻している、頭を冷して病院に連れていった。

「罰するのを見るのは好きですがすよ」看護兵は欣然として云うのだ。彼はこの侮辱的な見世物を心ゆくまで眺めて満足し切つていた。「いい気持だ！あの男を叩くより絞殺する方がいいや！」

囚人ばかりでなく、罰する人、立会う人達まで、この体刑によつて、粗暴になり残酷になつてゆく、教養ある人達でもその例に洩れぬ。まして他の者達は執行で快楽を得るほど慣れ切つている某看守長は、鞭打刑の時に口笛を吹いているという話であつた、又他の看守長は、嘆れ声を出すように囚人の頭を椅子に縛りつけるように命じたりした。そして、五回十回と鞭打しては、何処かに出かけてゆき、後で帰つてくると、残りを鞭うつのであつた。

引用が少し長きに過ぎたかも知れない、どうもマゾヒストのためよりもむしろサディストのための紹介になつてしまつたようだ、然しとにかく答刑には無感覚になつている囚人でさえも金切声をあげるのが鞭刑であるということは、はつきり認識して貰えたと思う。同じ様にむち刑といつても、この両極端を含むのだということ念頭において、苟くも両者を取りちがえたりすることのないようにしたいものである。

### 第三十二 微視的マゾヒズム

一定の刺戟によつて性的快感を味う、反応の一つにマゾヒズムは属するが、この場合、同じ量の刺戟では快感を感じなくなつてくるし、しかも感覚は刺戟の対数に比例するというフエヒネルの法則から、快感を等差数列的に増加するためには刺戟を等比数列的に増加せねばならぬので、求められる刺戟は次第に濃厚になり、破綻の危険が増大する、だからマゾヒズムなんてお止めなさい。

これはよくノーマルと自称する人から聞かされる意見で（本誌やKK通信紙上でもお目にかかつたような気がする）、たしかに一面の真理はあるけれども、そのまゝ受取るわけにはゆかぬ議論である例えば刺戟の量だけを見て、質を考えに入れていない誤りなどは誰でも気がつくであらう。

しかしもつとこの説の抜けている点はマゾヒストの性的快感の何たるかを理解してないことである、体系的に述べる機会を失っているので、唐突な独断と思えるかも知れないが、私はいわゆる現実的マゾヒストと観念的マゾヒストの区別を認めないものであることを先ず明らかにしておく、マゾヒズムの現象的形態としてはいかに分類するもよいが、マゾヒストには二種類はない、いずれ別項で詳しく説くが要するにあらゆるマゾヒストには観念的マゾヒズム (ideal Masochismus) 想像的と訳すもよい。享有の余地がある。そしてこの分野の性的快感には決してフエヒネルの法則はあてはまらないのである。

キンゼイ報告として知られる「人類雄性的性行動」に、教養人と非教養人との差異を論じ、その一つとして、教養ある男は性的に敏



感であつて、教養のない男には無意味なことからも刺戟を感じうるという意味のことをいつているが、ここで教養に帰せられていることを、当面の問題においては、マゾヒズムに対する習練、慣熟の度合と考へてよいであらう。即ち強い刺戟でなければ感じなくなるどころか、刺戟とは普通人の思ひぬ程の軽い刺戟にも感じうるようになつてくるのである、私はこの現象をかりに「微視的マゾヒズム」と呼んでいる。

微視的マゾヒズムの刺戟物はあらゆる所にある、芭蕉は「よく見ればなすな花咲く垣根かな」と吟んだ。一茶は蠅が手をすり足をする姿に感情を移入した。レフアインされたマゾヒストは蟻地獄に落ちた蟻に自分の心理を投影することもできるであらう、その蟻の世界に牢固たる奴隷制度の在るを知つて神の摂理の不思議を覚えるだろう、蟻の世界の雄の地位に皮肉な意味を感じとるだろう……。

俺は感じないというマゾヒスト諸君もあらう、そうしたら、それは諸君がそれだけにレフアインされていないからである。自分は実行派だから想像的マゾヒズムは分らないのだというようなマゾヒストに二種あるという考え方に逃げ込む必要はない。レフアインされればいいのである。

これはある程度はキンゼイ博士のいうように教養的要素に依存することは否めない、長屋の夫婦が怒鳴り合う時に上流階級の夫婦は遠廻しの皮肉で互に傷つけ合うことができる。それは特にことばに対する感受性の問題であるが、同時に感受性一般のレフアインの度合の問題でもあるのだ。しかしマゾヒズムの分野においては、必要なのはマゾヒズム的教養であつて、学歴などで示される教養ではないから、マゾヒストは常に自分をマゾヒズム的にレフアインし、

教養を高めるように努力すべきであらう。

俺は実行派だからそんなものの必要としない、という人があるかも知れない、がそれはその人が観念的マゾヒズムの快感を知らぬからである、サディズムの場合は多少心理的機制を異にし、同一に論じ得ぬと考へるが、少くともマゾヒズムにおいては観念的マゾヒズムがマゾヒズムの本質であつて、現実的マゾヒズムも一応は観念的マゾヒズムと同一の心理を媒介として性的快感に達するのであるから両者は異質の快感を与えるものでない。(私自身の体験によつてかく語りうる。)

そろそろ結論に入ろう、私は微視的マゾヒズムを以て現実的マゾヒズムに代りうるものというのでは決してない。ただ、現実的マゾヒズムのみから、刺戟の増量の不可避を必然視するのは誤りであつて、観念的マゾヒズムにおける微視的境地を開拓することによつてマゾヒストはいくらでもいたるところに性的快感を与える刺戟を見出すことができるということを書いてみたに止まる、もとより散発的な小銃弾であるから、砲弾に代ることはできぬ、私自身妻とのマゾヒスティックな遊戯を毎夜止められない、然しその遊戯が物足りなくなつて来た時、その方向で遊戯を悪どくしなくても、氣をさえれば、微視的な資料が続々と私を喜ばせてくれるのである。(実をいへば、こういうものを書くのもその一つであるといへないことでもない。)

(未完)

七月号誤植訂正と補遺、(第十、空想的の愛)の標題は空想的読書法が正しい、(第十三、女王様ごっこ)カルネの「ホテル」とあるのは「北ホテル」、小説の方の作者はダビである。

## 責めの自画像

越<sup>こし</sup>野<sup>の</sup>義<sup>よし</sup>夫<sup>お</sup>

私が責めに興味を覚えたのは小学三、四年の頃でした。初めは少年、少女雑誌等に載っている母子物の父親に虐められたりするいじらしい姿、そんな絵や文に衝動を覚えては、一人二階にコツソリ上つては本の頁をむさぼり読んだものです。

元来私の家は町の中産階級で父は元軍人であつた故か、酒は浴びる程よく飲み其の上酒癖が悪く夜遅くまで酒を呑み歩いてはよく母を虐めて、打つ、殴るの虐待をするので、子供心にも父が夜晩く帰つて来るのはどれ程恐しかつたか、知りません。遠くで父の咳払いすると怖くて頭から蒲団を被つたものでした。其の上父の二号（小母さん）も別棟に起居して居り、そうして環境の中でこの萌しは益々盛んになつてゆきました。

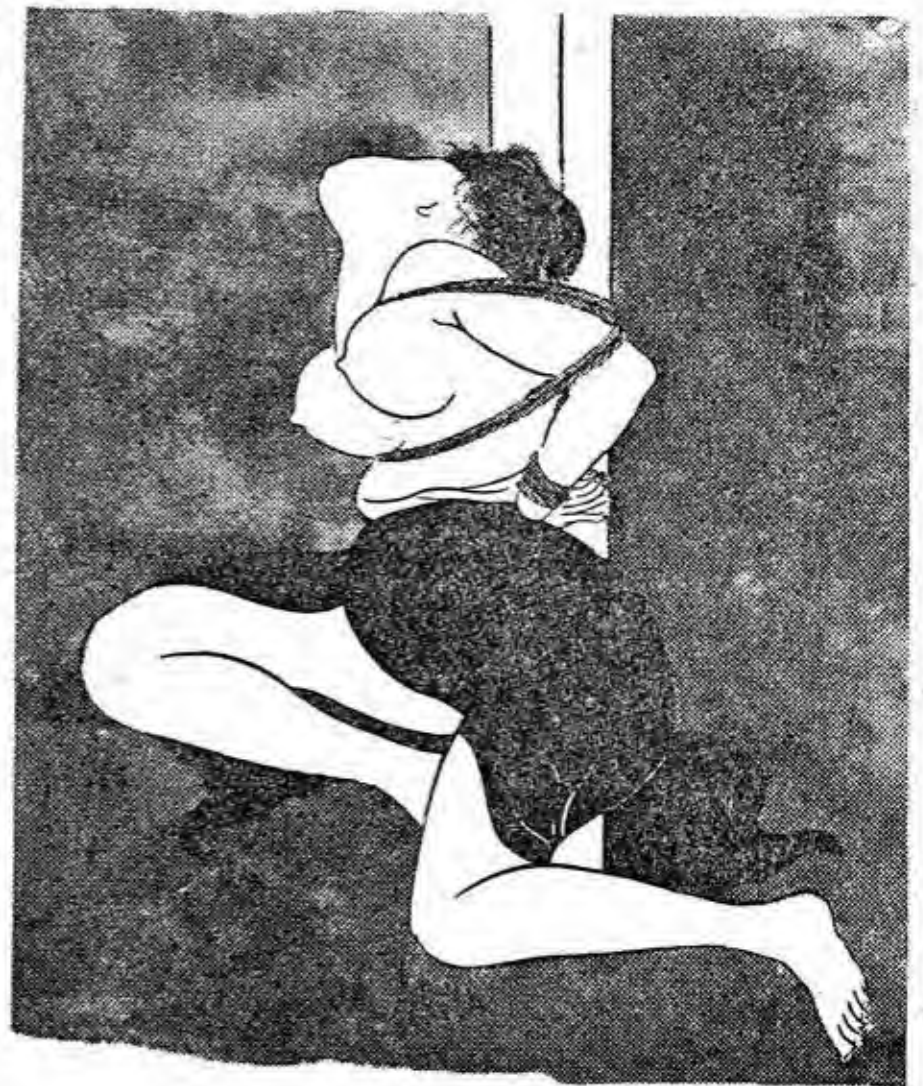
私の家は村に近い郊外の故か、便所が母屋

から離れて庭の隅にあり田舎の便所の様に土足のまゝ上る便所でした。私はその便所にコツソリ行つては裸になりお腰の代りに風呂敷を腰に巻いてその薄汚い便所の中に座

つて、母が虐められる様を空想し自分が虐められる母になつたような積りになるのです。

其の内やつと母の赤い花模様のお腰を盗み出し、これを巻いてからはそんな行為は益々募り、或時は便壺のすれ／＼迄便器の中へ、その赤い花模様のお腰一枚の体をスツポリと落したりしました。

又、或時は雪の降り積つた庭で雪責めの体験も（母がそうして虐められてることを空想し乍ら）しました。……これが後年現実にな



ろうとは夢にも思いませんでした。私が春の目覚めを知つたのもこの便所の中でした。

父は昔、小母さん（妾）に芸者屋をやらせていた時分によく若い芸者を虐めては裸にし、細引で柱に縛つたりして折檻したそうです。私が小学五年の頃、家に居た春やと云う女中が何か盗みをしたとかで父から折檻を受けて泣き叫び母や小母さん迄出て宥めるのを父は聞かず無理に春やをそれこそお腰も取つてしまい、細引で後手に縛り上げた上、裏の



庭に引きずり出して一日一晚、立木の根元に繋いでお仕置きをした事がありました。(まだ少女といったあどけない春やがお腰までも取られてしまうという事は、どんなに恥しいことだつたでしょう。)

彼女は世にも哀れな姿に泣き乍ら、それでも辱かしさのあまり足をくねらせて、じつと俯向いて居りました。父の縛つた細引が三重四重に春やの白い肌に痛々しく喰い込み、晩秋のうすら寒い気候はこれに加勢して春やを苦しめていました。便所にゆく振りをして庭に出た私は、この情景に思わず熱い血を掻き立てられました。実際の女を縛つた姿を目のあたりに見たのはこれが最初だつたのです。私は春やの側に寄り、縛られて自由のきかぬ春やの痛々しく盛り上げられ乳房にじつと視線を向けました。然し春やはうつむいたまゝ、何んとも声は立てませんでした。私はそれをよい事に今度は側に転つていた棒切れを取り上げると、春やの縛られた肌を背と云わず胸、腰とビシリ／＼打ち叩きました。春やは苦痛に顔を歪め、縛られた体をくねらせ縄を益々肉に喰い込ませ乍ら悶え苦しみます。春やは小さな嗟すれた声で「坊チャマ、もう堪忍して」

と怨めしように哀願しました。そんな可憐な姿を見た私の血は益々燃え上りモソト／＼春やを責めたかつたのですが、家の者に見付かつてはと、我慢して諦めました。春やは次の朝ようやく許して貰いましたが、私にされた事は一言も喋りませんでした。そして前より増して私を義夫チャン／＼と可愛がつて呉れさせました、然しその年の暮れ近く桂庵に欺かれて朝、外の釣瓶井戸に米搗きに出てそこから桂庵と共に逃げ出し、その後判つた事です。東京の玉ノ井に売られたそうです。その頃から、私の責めに対する異常なばかりの心の炎は募る一方で、本屋の店頭で客用(立見用)に出ているキング、講談倶楽部、富士、日の出、講談雑誌(当時ではこれが相当エロ的で責め場も一番多く載つて居りました)その他あらゆる雑誌の中で女の縛られた絵や写真があれば買つてきて色々と空想を混えて、時にはその縛られている女が私の母であつたりしました。

又映画にもよく行きました。古くは片岡松蒸の縛られた姿、吉野朝子、その他女の責め物は今の映画より多かつたので、私は何時も映画館のカブリツキへ陣取りました。活動館のスクリーンにその場面が出てるのですがこれ

は仲々盗めませんので人目の少ない時そのスクールの前に行つた事を思い出します。これは遂に見られず今でも残念ですが、松竹映画に明烏夢之泡雪が上映された時、館の前のスクールにそれこそ浦里が緋の長襦袢一枚で後手に縛り上げられ降り積つた庭に引き出されて来る場面から、立木に縄尻を繋いで割竹で打ち叩かれる姿、深々と積つた雪の中に転がされ蹴出しも露らわに悶え苦しんで縄尻も長く立木に縄尻を繋ながれている捕われの身の哀れな姿が何枚も出てました。私は毎日その前へ行つては小さな全身を燃しました。

私の雑誌の絵及映画雑誌の縛られた女の写真の蒐集はその頃から大東亜戦が激しくなり雑誌も味気ない物許りになる迄相当集りましたが戦災ですつかり失つてしまいました。其の頃、古書目録から恋態資料を見つけて蒐集篇を当時七十五銭で東京の本屋から取り寄せた時、伊藤晴雨先生を知り先生の責め写真数葉を、大事に保管していましたが挿絵と共に失いました。先生の写真は今の好々爺の先生と違い少年の私には恐いような近寄り難い四十代の太い口髭を生やした人でした。それに住所も判らず只遠い存在の人に過ぎませんでした。

当時は、月刊雑誌の絵や活動写真が精一杯で、後は母を対象とした空想の艶夢に過ぎませんでした。腰巻に対する慕情も盛んで、近東規矩也氏の様に腰巻蒐集及これをまといて水責め（女の積りて）の体験——風呂場に寒水を貯めて置き、それをお腰の上から手桶に汲んではかける——や現在行っている薄物の赤い長目のお腰を巻いて寒中丸裸で庭に面した敷居際に立ち、隣家の二階の窓から、又は二階に物干しのある隣の物干しに洗濯物を干しに来る若い女の人達に時刻を見計つてワザと現われ立ち自分を晒物にしてこの赤いお腰一枚の姿を見られて嘲笑されるのを心躍らせたのは後年の事です。これに付ては筆を改めて述べたいと思つています。

話が脇道に逸れましたがそれは僕が小学六年を卒える年の二月でした。その日は前日から降り出した雪が止まず、風さえ加つて吹雪になり、学校へ行くのも虫が知らせるのか気が進まなかつたのですが前の晩から小母さん（妾）を本宅へ呼んで来て母に酒の燗をさせ乍ら小母さんと二人で呑んでいる父が恐く早々に学校へ出かけて行きました。と云うのは小母さんに唆かされた父は母が近所の床屋の小父さんと間男して、生れた僕も父の子

でないとして、母を虐め母は目を赤く泣きはらして居つたからなのです。

学校へ行く途中も母の事が心に掛り、胸はドキ／＼していました。イヤ真実は僕の心の淫虐の悪魔が、僕が常々空想しているように母がウント虐められ、ば好いナア！と心の奥で叫んでいたのです。

其の日は学校も吹雪の為早退けとなりましたので降りしきる膝を没する程の雪の中を凍えた手足を引きずつて家に帰つて来ました。そして家の障子をソツト開けて小さな声で只今と云い乍ら、半分の悪魔の期待と半分の恐怖に包まれ乍ら座敷に上りましたがどの室にも誰も居ません。そして炬燵のある室、昨夜から父と小母さんがその炬燵の上で飲んでいた処は取り散らかつた儘で、その脇に僕の目を射たものは、あたり一面に投げ出された母の足袋、着物、長襦袢、下着、帯、腰紐、それにネルの赤い腰巻でした。僕は或る予感にハツとしました。もう胸は恐しさと歓喜に早鐘のように鳴ります。

僕は裏土間へ降りて、裏戸を開けて庭へ出ました吹雪は益々盛んです。物皆白一色に覆われて白魔に深く包まれて物音一つ立ちません。僕はその庭の隅に建っている土蔵の処ま

でコソソリと近寄つて行きました、土蔵は網戸が閉まつていましたが何やら中で人声がし灯が洩れています。僕は網戸に手を掛けてソツと中を覗きました。中にはローソクが数本灯されて父と小母さんが相変らず差向いで呑んでいます。僕はアツと叫んで今少して戸を立てる処でした。その前にどうでしょう。母は髪も乱れ、薄い燃えるような深紅の緋の腰巻一枚にされて、その白い肉体には細引が無残にも五重、六重にも肉に喰い込まん許りに後手にそれこそ高手小手に縛り上げられ、その縄尻は小母さんの手許に握られているではありませんか、側には割竹と鞭が転がっています。

母はもう随分長いこと責め叩かれたらしく真白な肉体は処々赤紫に傷ついてグツタリと打ち倒れているのです。僕の心の悪魔の期待してたことが実現してしまつたのです。

キツト母はあの炬燵の室で泣き叫んで許しを乞うのを父と小母さんが無理矢理に帯を解き着物を一枚々々剥ぎ取り、足袋も脱がされ丸裸にされていつた事でしよう。

僕は期待していたこととは云え余りの恐ろさに先の用心も何処へやらアツ！



と叫んで逃げ出そうとしましたが、其の聲に此方に向いた小母さんは形相物凄く網戸を開けるや否や僕の手をむんずと捕えて土蔵の中へ引ずり込んでしまいました。そして小母さんと父は「義ちゃんだけは勘忍して、どうぞこの子だけは許して！」と泣き叫ぶ母の頼みを嘲笑し乍ら無理やりに僕の猿又も取つてしまい、小母さんの汚れた赤いお腰を母と同じように腰に巻き付けてしまいました。そして僕の見ている前で小母さんは縛られて自由のきかぬ母を仰向けに転して、その真赤な緋のお腰を捲くると両足首に別々に麻縄を縛りつけたのです。

その間、母は観念の眼を閉じて居りました。それから小母さんは縄尻を握つて踏み台を持つて来てその縄尻を梁に掛け通しました。そして父と二人してグイトーと引張るのです。すると打ち転がされて居た母の哀れな肉体はそれにつれて足先から次第に上に上り次には頭が板の間から離れて、縛られた細引が肉にギリ／＼喰い込み右に左にユラユラ揺れ乍ら宙に浮き上つてしまいました。真赤なお腰もそれにつれ藻のように腰の周りを絡らんで、まるで、苦悶にのた打ち廻っているようです。そうして逆さに吊り上げられた母を

又僕の見ている前で割竹を持つてビシリ／＼と打ち叩くのです。打たれる度に吊しと鞭の苦痛に悶え歪む母の顔、その苦悶の美しい顔を僕は悲しさと嬉しさを交叉して息をはずませて見ていました。

其の内小母さんが僕に母を打てと命ずるのです。僕は流石に尻込みして嫌と小さい声で二人の恐しい顔を見乍ら云いました。その云い終らぬ内小母さんの手の鞭が僕の体に五、六、七と激しく鳴ります。僕は折檻に耐えかねて母を責め叩く事を承諾しました。

そして僕は無理に手に握らされた割竹で母の縛められた身体を処嫌わず打ち叩きました。母は世にも悲しい顔をして吾が子の責め苦の鞭を受け乍ら悶え苦しみヒ／＼と叫び泣いて……その体を波打たせて苦しむ苦悶の姿に僕は物に憑かれたように夢中で割竹を母の体に振りました。

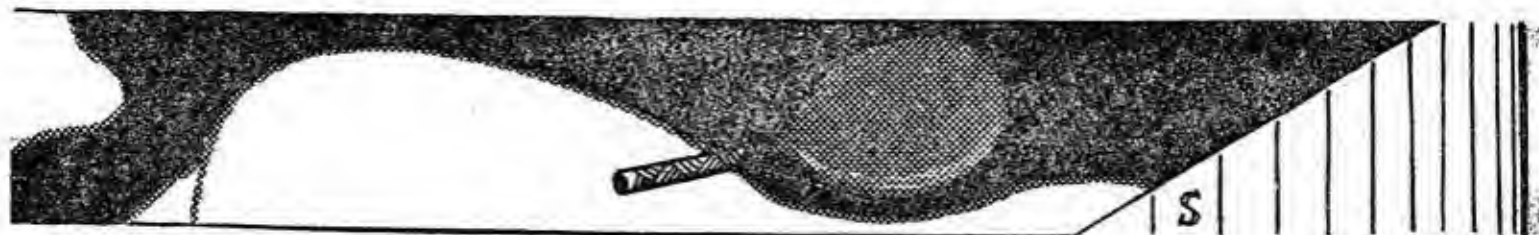
そして責め苦の内に夜となりますと、母は梁から降され半死半生の体を板の間に打ち転がされ、今度は僕も後手に母と同様細引で縛り上げられて、母の側に打ち転がされてしまいました。

父と小母さんは又酒を酌み交し乍ら、何か相談していましたが、やがて母と僕は縄尻を

持つて引き起されました。小母さんはニヤニヤ嘲笑い乍ら「さあ立つんだヨ！」と憎々しげに云つて、責め苦の拷問にやつと起き上つた母のお尻を小突いて、母子二人共小母さんに縄尻を持たれ割竹で、背、腰を叩かれ吹雪の庭に引出されました。素足に踏みしめる雪の痛さ、吹き荒ぶ雪に晒す裸身の辛らさ、そして春やが繋がれたあの立木の根元の降り積つた雪の中に母は緋の赤いお腰一枚で、僕は小母さんのメリンスの赤いお腰一枚で引き据えられました。

小母さんと父は、それから母を下駄で踏み躪り又割竹でさんざんに打ち叩いて、間男を白状しろ！と責め問います。母は余りの苦しさにとう／＼悲しい声で「床屋の主人と間男しました」とあらぬ白状をしました。

その時の母の心はどんなだつたでしょう。父と小母さんはニヤリと笑いました、これで責め苦の拷問が許して貰える処か、間男したと白状した以上その罰にどんな責め苦もやり良くなつただけでした。(未完)



# 京子の生活と意見から

羽 村 京 子

六月号の竹谷十三さんの「責苦」の中で、臨月の妊婦スミが数々の残酷な拷問を受けて身重の異常な体を散々に弄ばれるのは、女性の妊娠した大きな腹に特別の興味を持つ私にはとても痛快でした。その中でも死児を産んでからのスミがまるで牝牛のように乳をしぼられるという思いつきはなか／＼すてきでしたわ。しかし欲をいうと、描写が何だか観念的すぎて、私のようにじかに、強烈に、感覚的に味わいたがる者には大分物足りなかつたのです。

昨年十二月号の「錯乱の倫理」(近東規矩也さん)の中で主人公が浜子の肛門に五寸釘を差しこんで拷問する回想にしても、このスミの場合と同じく私の好みを満足させて呉れました。しかもこの場合には描写もなか／＼官能的でしたわ。

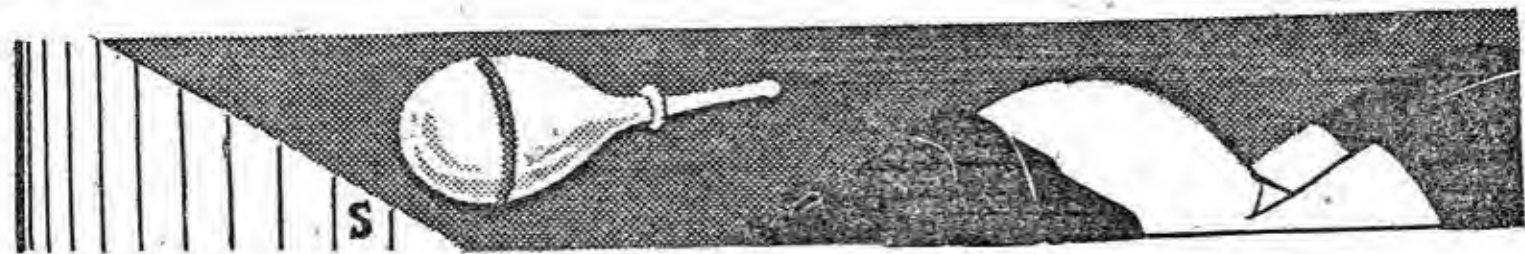
同じようにサドとかマゾとか云つてもその傾向の中のニュアンスの違いは随分あると思います。その人の小さい時からの境遇の違いとか、その後受けた教養の違いとか、

もとより、生れつきの素質の違いによつても、各人は各様の独特な倒錯の在り方があるのだと思います。だから誰でも自分のことは大胆卒直に述べる権利があるのと同様に、他人の言葉に対しても一応は黙つて耳を傾ける義務があるのではないのでしょうか。

この間一ころ論争された「日本髪か、洋髪か」や、また「全裸がいゝか、腰巻がいゝか、パンツがいゝか、長襦袢がいゝか」等に関しても、この位のことなら各々主張される方々も自分が好きだという以外の根拠は別になく、「時代おくれたから」或は「日本本来のものだから」とかおつしやつても、もし御自身が偶然反対だつたら、きつと反対の理由を執り上げて反対の主張をなさると思えますわ。

私は勿論アブレ・ゲールの一人として洋髪主義、全裸主義で腰巻よりブロース、ブロースよりブロースなしのナイロン靴下を、(身に何かつけるとしたら)選びます。(「私」のというより「私の夫の」好みといった方が正直かし





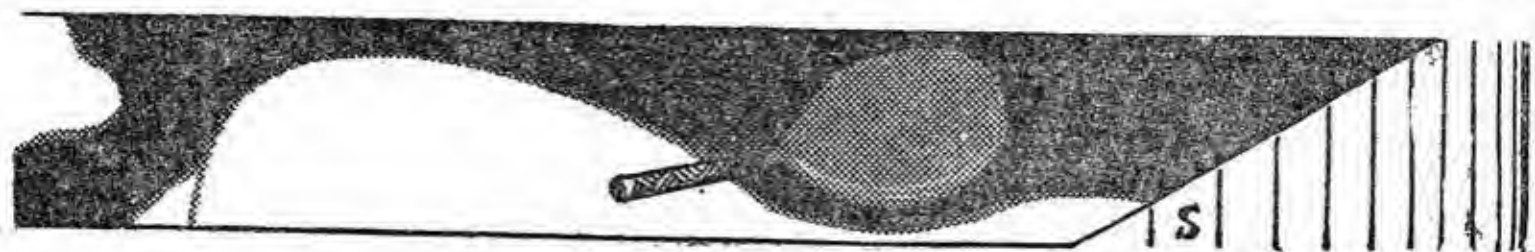
ら?) けど他の方が日本髪や腰巻や長襦袢を私が洋髪や全裸を好むと同じ意味で好まれるのでしたら、「奇譚クラブ」は洋髪全裸主義で行くべし」なんて残酷なことは云えませんわ。たゞ読者の好みが全体として誌上に反映して男サド女マゾが読み物の主流を占め(それは自然な分布だと思えます)表紙も上品な美しいものになつたのでしよう。そして「奇譚クラブ」が特に一定の主義のワクの中に入っていないまゝで、倒錯専門の風俗雑誌として他に比べものゝない独自の性格をもつて来たのだと思います。現在では既に男サド、女マゾの主導権は確立しているのですから、殊更にソドミーや、ウロラグニアなどを排斥する必要はなく、むしろこれらのものゝ持つ特有の陶酔性を少しでも自己の領域にうまくとり入れるようにした方がいゝと思うのです。私は私たちの快楽の深さを探求することは、その広さを探求することなくしてあり得ないと思うのです。

だから同じマゾヒズムといつてもかなり特異な傾向をもつ例として、私とか、又四月号の信太蓉子さんなどが恐れることなく自分の姿をありのまゝに発表して(自分の好みにかなつた形のものが、殊に自分のかいたものが活字になつていゝという一種云いようのない楽しみの外に)例えば沼正三さんとか、吾妻新さんとか中康弘通さんのような学問のある男の方に整理していただいていゝ、勉強することの意義があるのだと思うのです。近頃このようなむづかしい物が多く載るようになって大変いいことだと思つていきます。同時にやはり、信太さんとか大川由紀子さんとか

の告白とか報告式のものも多くなつてはならないと思ひます。

それから小説や絵や写真、これらのものが無かつたら「奇譚クラブ」を読むたのしみは半分にも三分の一にもなつしまうに違いありません。そのことで私は一つの「弁明」をしなければならぬのですが、松井鐘子さん、岡田咲子さんなどの何時もお書きになるものは本当に楽しみで、よくこんなになうまく書けていると思つて感心してしまします。その他の方のもものでは古川裕子さんの「囚衣」(十二月号)「続囚衣」(四月号)にはすつかり感心致しました(告白としてお書きになつたものかも知れませんが、小説の部に入れた方が適當なように思うのです)今までのところ何だか同性の方のものばかり挙げましたが、毎月の色々な創作から私たちはどれだけ多くのことを得ているか分らないと思ひます。

凡そ創作は私たちの頭の中の倒錯のモヤ／＼をもつとも自由に残すところなく吐き出して見せること出来るものなので、私も本当に創作したいと何時も思つていゝのです。昨年の十一月号ではそのように読者通信に発表したり致しました。それ以来創作というものは本当にむづかしいものだといふ事がよく分りました。私の貧弱な体験と、空想力と、ものをまとめ上げる力とでは、本当に手に負えない位むづかしいのです。そして自分のした約束にしばられて、何時も何か書ねばならない(書きたくて仕方がないという気持は勿論あるのですが)という風に追いつめられて、二月



号にやつと「妖花」を書いた外、つまらぬ紙面の埋め草を綴り合せてばかりいたのでした。だから私（他の方から見ると馬鹿々々しい位大げさかも知れませんが何しろ私は「奇譚クラブ」の多勢の投稿家のたつた一人なんですから）今日は十一月号の約束を取り下げて白紙に返して頂き、今迄のように気まぐな投稿（創作も出すかも知れませんが）を許して頂きたいと思うのです。編集部の方の何時もの御好意あるお励ましに感謝しつつ申し訳ないと思いますが。

本当に「奇譚クラブ」の存在を知ってから私の生活はすっかり変つたような気がします。去年の七月号がはじまりでした。本屋でパラ／＼とめくつて見て思わず頭がカ／＼となる位ひきつけられてしまつたのです。夢中で買つて帰つてから夕方、夫が帰つて来る迄の間のもどかしさ、

「ふうん、こんな本があつたのか、」

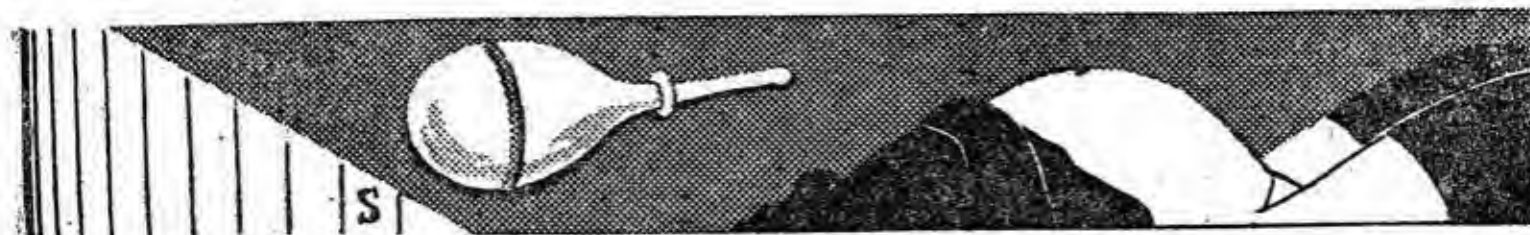
と云つた夫の顔の興奮した輝きは今でも覚えています。それから急いで書いて出したのがあの「狂い咲くカンナ」の告白です。こんなものを載せて貰えるだろうかという心配と恥かしさ、でも「奇譚クラブ」はもう私のなくてはならない友達になつてしまいましたわ。自分たちの書いたものが載せて貰える雑誌だということが他の雑誌の読者の間には見られない近親感を、読者相互の間に持たせているのですだから決して自己を卑下しないで多くの友達と共に自己の倒錯のよろこびを語る事が出来るのですわ。それだけで無く、六月号の座談会の西沢さんのお言葉のように「高等

戦術に属する」という誇り（？）さえある位です。本当にこの雑誌の読者層の水準が高いということは嬉しい事ですわ（年令は中年の方が多くのように書いてありますが私や信太さんのように若いのも居ます）

しかし、「正常になりたい」という欲望が私にもなかつた訳ではありません。今でもやはりそういう欲望があるのかも知れませんが。将来私たちにも子供をつくつて平和に家庭生活をしたいという気持ちが起らないとは云えません。二人きりで一生の間暮そうという夫婦は絶えず退屈しないために何かを見つけないければなりませんし、だからこそ私たちのマゾとサドがいよいよ手のこんだものになつて行くのでしようけど、私たちは今迄のところ別に退屈な生活を埋めるのに苦しんだ事はないようです。勿論読書や旅行なども致しますが「奇譚クラブ」のためにむしろそれ等からはや／＼遠のいた感じがする位です。

ところで私は今日は私の感じるまゝの「正常になりたい」なりたくないの弁」をして見ようと思うのです。黒井珍平さんの「僕の記録」（五月号）の中のカトリック教徒時代のいたいたしいまでに烈しい罪の意識に驚きはしたものの、何か無視出来ないものを感じたからかも知れません。私は自己弁護の好きな女に見えるかも知れません。しかし理屈の上でいくらセルフ、ジャステイフィケーションをしてみても、心理というものはやはりそれ自身の法則を持つているように見えます。例えば私の秘密の悪癖が最も強く（といつても既に病コーモーに入つた現在を除いて）私





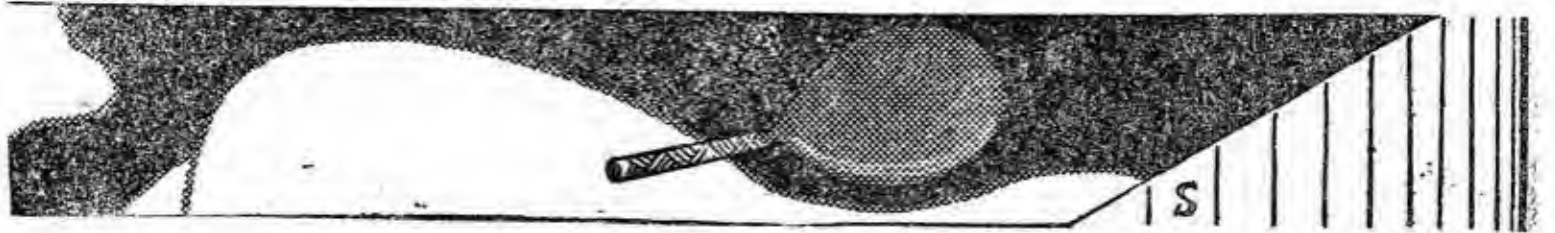
の心身を捉えていた女学生時代、たしか女学校四年の時でした。

私が学芸会で何か繊維の鑑別に関する話をする事になってその準備のため、放課後、毎日生物室に残つてその時の説明に用いる図を書いていたので、ある日生物の先生（やさしい愉快なおじいさんで私の大好きな先生でした）が用が出来て一時間ばかり私一人で残されたのです。先生が出て行くと、とたんに私の胸は激しく動悸を打ち始め、私はどうにも自分が制御出来なくなつてしまいました。というのは生物室にはその時、偶然にも何に使うのか知りませんが途中がゴムまりのようになっていて、手で握つて空気を送り込むポンプが出してあつたからです。（今だ！）と私の心臓は早鐘のように音を立て始め頭や顔にぐんと血がのぼつて体がワナ／＼と震えるのを感じました。私の奇妙な悪癖は、このポンプを用いて私の肛門から空気を入れてみたいと云う激しい誘惑、この絶好の道具を今こそ用いるという命令を発していたのです。

私はもう夢中でした。咄嗟に震える手でそれを取ると……（私はたしかあの時、毛糸のパンティをその上にはいていました。）……手元が狂つてグリーンと痛みを感じましたがかわまずゴム球を握りしめました。今と違つて他人の手を借りる事の出来なかつた当時ではこの重宝な道具は本当に天の賜でした。直腸が空気でグツグツとふくらんで我慢し切れないほどになつたのがクーツと上に抜けて左側の大腸がブク／＼とふくらむ

と私はもう出来るだけ入れて見ようという決心がついてきました。（図で見て頂くと分りますように）大腸は四つの部分に分れています。1の部分（直腸）だけにまず空気が一杯になつて相当の圧力に達すると2の部分に押し上げられてくるのです。それまでが最も我慢しにくい時で出してしまうたくてたまらなくなります。それを辛抱して空気が2—3—4と入つてしまえばお腹はうんとふくらんでも却つて我慢がし易くなります。2から3、3から4へは案外簡単に、殊に3、4は殆ど同時に入つて来ます。それから後はたゞより大きく膨らむだけですが、3の部分が膨張すると胸苦しくなり、胃の中の空気又は食べた物が食道を通つて押し上げられて来ます。しかし相当苦しくても、排出するのが簡単で、出してしまえば間もなくもとの様に楽になりますから口から水を飲むのなんかよりもずっとおすゝめ出来ると思います。尚、4まで一杯にふくらましては絶対にありません）……

先生が帰つて来る足音が聞えた時、私の腹は膨れるだけ膨れていました。ゴムまりのように丸く張つて膨れた腹にそのまゝパチンとズロースのゴムを締めて道具をもとの所に置くと、もう先生は入つて来ていました。私はつめこんだ空気を出すわけにも行かず、と云つてそのまゝでは如何にも苦しいので思わず椅子に掛けて机に突つ伏しました。おまけに下つて来た空気が我慢のならないまでに肛門を内側から押し開いて噴出しようとして来ました。それを咥え



ようと努力で気が遠くなる程でした。

「どうした？」と善良な先生は驚いてたずねました。

「お腹が痛くて」私はそれだけ云うのがやつとでした。

「ふむ熱もあるようだな」と先生は私の赤く充血した顔を見て額に手を当てました。

とつさに出た嘘で先生をだました私は、この時たしかに罪の意識を感じたのです。自分の力ではとても制御できない私自身の憎むべき心理と生理、そして夢中になつてのぼせた頭と高い動悸、震える手、その頃寄宿舎にいた友人たちが知っていた××××という簡単な方法を私も知っていたら（卒業してからそのうちの一人に後で聞いたのです）これ程まで私は深入りせずに済んだかも知れません。

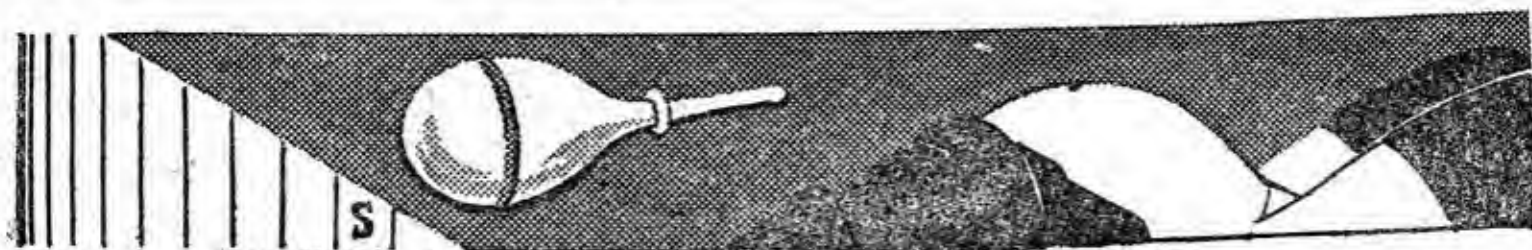
この状態はたしかにあの………前の恍惚に似通つたところがあります。私は何も知らないで………に達することなく、そしてそれに達することを空しく求めて、この奇怪な悪戯を続けていたのでしょう。この事は後で時々畳の上に………ることのあつた………これを証明しているでしょう。しかしそれだけではありません。罪の意識はまた、親や先生に見つけられたら叱られるにきまつているようなことを隠れてするということにあつたのでしょうか。勿論友人にも見られては困るのです。この隠れて行うというスリルはその行為のもたらす興奮状態と共に罪の意識の二本の支柱を形成するものだつたと思います。

カトリックの事は私、よく知りませんが、正常な姦淫でさえも罪であるならば、そこには正常と異常との区別はある

りません。私の場合も同様だつたと思います。何も知らなかつたその頃としては、親や先生や友人から隠れて密かにというだけの事で例えそれが正常なものであつたとしても私は罪の意識を感じたに違いありません。異常だから恥しいとか、自分はどうも異常のようだとか、考えて妙な劣等感やひけめを感じるのは何が正常であるかということの、同様に知ることの恥しい知識に由来しているのです。私の場合は都会に出て楽しい女専の生活に入つてからでした。

しかしその後の数年間は大体正常に近い時期だつたと思います。私の再び異常な時代は昨年三月、夫に私のこの性癖を告白して、夫の協力が得られた時から、本格的に始まりました。しかしそれはもうどうしようもないものです。正常性への努力は、異常な生活を禁欲によつて圧迫して行くこと（それは私たちの弱い意志力では無理なように思うのです）の中に求められないで、すぐれた美術や音楽や文学に触れて私たちの異常な生活にも美しいものを絶やさないようにする事。（勿論、正常な性生活をも並行して営むこと）それによつて、なまの残酷性の齎しがちな心身の消耗を象徴化された、より弊害の少ないものと取り替へることの中に求められています。〃奇譚クラブ〃この美しい雑誌が毎月私たちを大変喜ばせるのも、それがこの様なものを呉れるからです。以前の私一人の秘密は今や私たち夫婦の二人の秘密になりましたが、以前とは少し違つたものと大人らしい気持から二人の秘密を二人だけのものにしてしていると同時に〃奇譚クラブ〃を通じて多くの友達とつな





がつていゝのです。二人だけで縛られた裸の女の写真や縛られた女のすばらしい挿画を見ていると、私は夫の前ではだらしなく取り乱してしまふことに何の羞恥をも感じないのです。他人が見ていたら私はやはり妙な「罪の意識」を感じてしまうところですが。

それでも時たまには、隠れてすることのスリルを味わいたいのと見えて（といつても夫にしまいまで隠しておくことなどはとても出来ません。却つて心が重くてつらいので好まないのです）次のようないたずらで夫を驚かした事もありました。

去年の秋のお祭りの時の事でした。田舎の子供たちが親に買つて貰つて嬉しそうに持つて歩く風船玉を見て私はすぐある事を思いつきそれを一つ求めて来たのです。それからミシン糸の糸巻きの要らなくなつたのを一つ出して来て中心の穴に折れたキセルの竹を切つてはめ、その上から風船の口をかぶせてはめ込みました。夫が帰宅する時刻をみはからつて、私は裸になると、六畳の押入れから天井裏に出て、何時もの逆吊りに使う滑車のある所まで梁を伝つて来て、天井板を外しました。（そこだけ外せるようになっていゝのです戦時中焼夷弾が落ちた頃の遺物です）

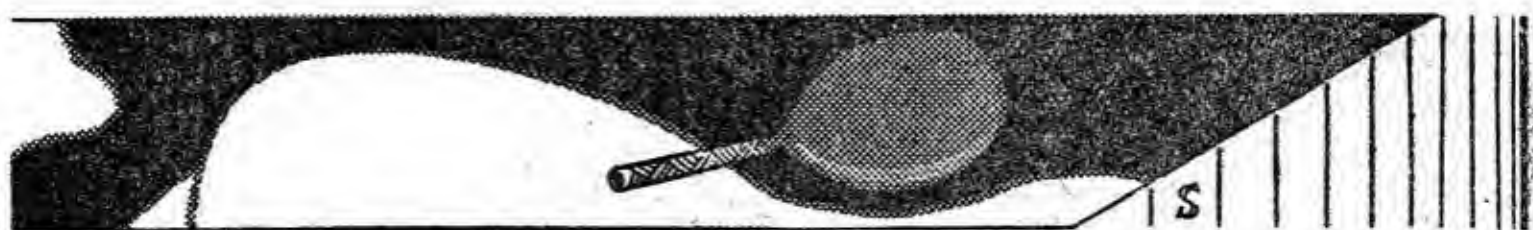
四角い穴から下の畳が見えるのが奇妙な感じを与えました。それから両足首を梁につないだロープで縛り合せて、ゴム風船をうんと大きく、直径一尺半位にふくらまししました。ドキドキする胸を押えてしばらく氣持を落ちつけてから、私は糸巻を握りしめました。……機械体操

の要領で天井の穴から体を逆さに下すのは案外大変でしたが、私は……自分の体を逆さにする事に成功しました。元来ゴム風船そのものの収縮する力は案外弱いものでしょう。しかし逆さになつて内臓が胸の方に下つてゐるためでしょうか、私の腸はむく／＼と膨れて約十分位して、夫が歸つて時には、私の腹部はゴムまりのように丸く膨れていました。勤めから歸るなり、妻が裸でお尻に大きなゴム風船をくつつけ、腹を蛙のように空氣で膨らまして逆さに宙吊りになつてゐたのですからさぞ驚いたことでしょう。云うまでもなく戸締まりをしてあつたので夫は私が一寸出ているのだと思ひ、合鍵で戸を開けて入つて来たのです。この仕掛けに就いては図解を見て頂きたいと思ひます。

お尻から大きな赤い風船のくつゝいた裸女の逆吊りの図なんてのは一寸面白い構図だとは思ひになりません？……夫も大いに氣に入つてしまいましたのよ。

でも一人でお遊びになる方にはこんな大仕掛なことをしたら、それこそ何時までぶら下つて居なくちゃならないか分りませんわね。私がやつてみて一人でもうまく行く一番簡単な方法はゴムまりを使う方法です。

（六月号の座談会で芝さんが「私はゴムまりを使います」とおつしやつてゐるのは、この方法と同じかどうか知りませんが）今の私だつたら女学校の時のように生物室の道具にそれ程魅力を感じないでしょう。先ずゴムまりですが、これは玩具屋さんなどに売つてゐる空氣を吹きこむようになつた大きなもので、バレーなどのボールの皮の袋の中に



あるのと同じものです。これをうんと力を込めてふくらませると直径一尺位につくつた物なら一尺五寸位まで大きくする事が出来る筈です。そうして置いて、管の中途を押えたまゝ管の先………押さえたのを離すと早速空気が入つて来ますが、始めは直腸が膨らむだけでマリもすぐには小さくなりません。それを、括約筋を固く締めたまゝ体の位置を変えて見たりなどし乍らしばらく待つていると、空気が左側の脇腹を上つてやがて下を通り右脇腹を下つて盲腸のところまで、ボコ／＼とふくらむと同時にマリ

の空気が勢よく出てマリは急速に小さくなります。胃がふくらむと胸をつき上げて来て苦しくなります。（この苦しさがまた特別の膨満感を与えるのですが）一度盲腸のところまで空気が通つてしまうと、今度は空気の入つて来る勢もやゝ弱くなつて、それでも数秒位の間には、ジーンと腹がきつく膨らんで来ます。胃の辺りのつかえるのが急にひどく感じられて、ゴオツ、／＼（という位のすごい勢で）食道から空気が吐き出されて来ます。そうすると少し楽になります、食後直ぐですと食物が逆流して来ますからなるべく空腹時を選ぶのがいいと思います。（同様に膀胱が充滿している時も具合よくありませんから前以て空にして置かねばなりません。）

この頃にはマリももう余り収縮する力をもつていませんから、それ程苦しくならないうちに外して、もう一度大きくして二度に分けて入れるか、又はマリを二つ以上用意すれば口から吐き出された以上の分を、更に入れることが出

来るでしよう。

どんなに入れても私の経験の限りでは危険な事はありませんから我慢さえ出来れば蛙の実験と同じ事で、腹の中の空気のために呼吸も殆ど出来なくなる位まで膨らまして見るのも一興だと思ひます。それは驚く位入るものですのよ

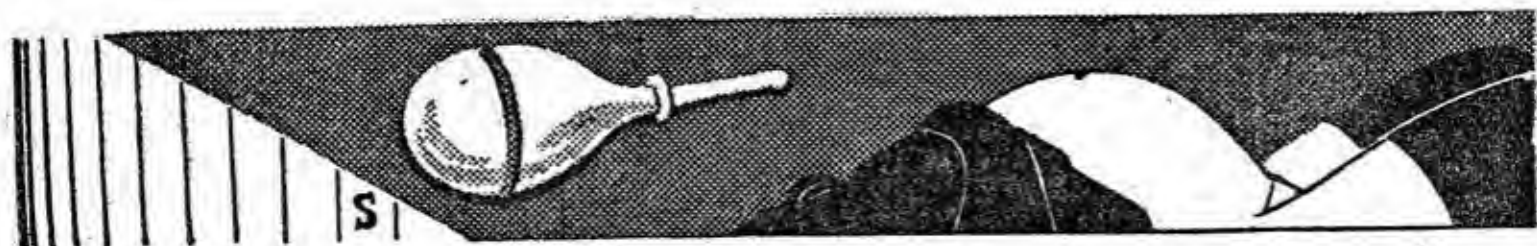
出す時は入れる時と違つて、一度に全部出るという訳には行きませんが、五分間か十分間位で大体出て行つて楽な体になりますから、後かなり残つた分が出てしまうのは大分かゝりますが、それは別に大したことはないのです。ゴムまりの収縮する力はかなり強いものですから、面白いようにグン／＼と強い勢で入つて来るのがまたいいのです。

それから体位の事を少し申し上げましょう。ヴァンデ・ヴェルデは「膝臥位の際には、………腹腔内容物、殊に腸が自己の重量の為に、この際腹腔の一番下になつた所、肝臓部に迄下降し、同時に腹壁が膨隆する。これは、腹腔骨盤部に陰圧を生ずる。………」

と云つていますが、これを利用すれば、この姿勢をもつと強調した形（胸を畳につけて尻を高くした姿勢）で肛門から煙草をのんだり、漏斗を差して液体を流し込んだり出来る（私たちはこれをお尻の「花電車」又は「裏門の花電車」と云つていますが）わけです。例えばイリガートルを利用して腸にぬるま湯をうんと入れてみたい時などは（これは勿論一人でも出来ます）この姿勢をとるべきでしょう

ゴムまりの場合はこれで無くても、幾分腹面を下にした側臥位をとるとか、何なら足を投げ出した横座りで片方が尻



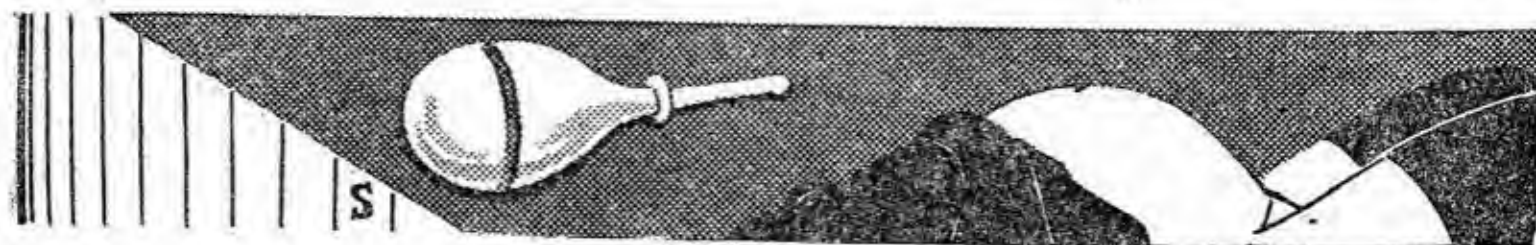


だけを下につけた姿勢でもいゝと思います。たゞこのような方法で腹を膨らました場合、肋骨の下端から下腹までの骨によつて抑えつけられていない部分が横腹をも含めてぶくつと一様にふくれ上つてしまう事で、これも悪くはないかも知れませんが、臨月の妊婦のまんまるく、西瓜のように突き出た美事な腹とは、残念乍ら恰好が違ふ事です。妊娠していない女の腹はどんなに膨らましてもあれだけの大ききで丸くなる事は出来ないように、妊娠子宮でなくてはあゝしてひゞわれの出来る迄腹壁を拡張する事は出来ないのでしょう。それに、弛みつばなしでも体の形が崩れますから、私などもふだんはコルセット（まがいもの）をつけて用心している始末です。

最後に、私は創作する事に依つて、その中の登場人物に私のマゾヒズムの分身をまよめさせ、そのヒロインは縛られたり、鞭うたれたり、吊されたり、肛門から水や空気を入れて腹をふくらませたりする事が出来るばかりでなく遂には腹を割かれたり、バラ／＼に料理されて、肉や内臓を食べられてしまつたりする事が出来る点で、私の空想的なマゾヒズムを充分満足させる事が出来ます。時にはそのヒロインがお腹の大きな臨月の妊婦であつたり、双生児を孕んでいたたり、羊水過多症という、お腹がまるで本当のアドバルーンのように大きくまんまるく膨脹する病氣であつたりする事も出来るのです。

これらの創作は黒井珍平さんの場合（五月号）と同様に中途まで書かれて投げ出され、多くはそのまゝ反古になつ

ているものですが、私はいろ／＼の筋書きに工夫をこらしながら、どぎつい感覚描写を頭の痛くなる迄考えぬいて、少し変な精神状態になつてしまい、結局疲れてしまうために最後までまとめ上げ得ないのです。女学校時代のエスだつたS子さんが臨月の妊婦だつた時に私が無謀にも彼女を裸にしてなぶりものにした（S子さんはその時まで私の異常性に全く気づかなかつたわけでは無いそうで――但し、今にして考えれば思い当る程度で――）昨年の十二月号に書いた事件のあと、赤ちゃんを連れて私の家に見えた時には、私の事をもう悪くは思つていないとのことでした。S子さん自身にはそういう傾向を受け入れるようなものは少しもないけれど、「京子さんも一風変つてるけど憎めない人ね。でも私、本当に呆れるやら驚くやら情ないやらで本当に困つたわ」というのでした。事件以外はすべて私自身の体験乃至私自身の肉体による実験をもとにして書くのです。黒井さんのおつしやるように私の書いたままのまゝの物は恐らく、余り露骨すぎてそのまゝ発表出来るようなものではないかも知れません。でも私はボードレールのように腐肉の臭を嗅ぎまわつたり、裂けた妊婦の腹の血とはらわたと胎児の死体とのごつちやになつた中へ首を突つ込んで浸すような強烈な感覚的刺戟を求めないではいられないのです。（勿論空想の領域でだけです）こんな事を考えている若い女つてあるものでしょうか。私はつく／＼自分の性癖を呪わしく思うことがあります。（勿論思つたつて仕方が無いのですが）



目を閉じると私の頭の中にはいくつかのなま／＼しい情景が、描き出されます。私はそれを手で探り、肉で実感して、それを紙の上に再現しようと、空しくペンを執つて苦悶するのです。時には口に出して夫に伝えようとするのです。夫との秘密の遊びの中で私たちは劇中の人物に成りますし、出来るだけ道具立てをととのえ、足らぬ部分は空想と言葉とで補いながら、私たちはこれ等のなま／＼しい情景を再現しようと試みるのです。腹膜に包まれて／＼と転がり出た私の腸、腹膜を切り開いて取り出される中身のぎつちり埋つて／＼にふくらんだ私の腸、(幻想の中で私は腹を切り割かれる時はうんと食物を食べて、胃にも大腸にも、小腸にも食物やその残渣が一杯つまっているのを好みます。むく／＼にふくらんだ大腸をぎゅつと握つて／＼としごく／＼と肛門から汚物がだら／＼としぼり出されるという情景も私の好む幻想の一つです。)

それから綺麗に水洗いされて、赤や青の新鮮な果物のような臓器をすつかりあげたてて並べて見せている私の美しい死体、まだび／＼と弾力をもっている、ところ／＼脂肪が水を弾き返して露のような水玉をつくつています、それから、籠に盛られたもぎ立ての果物のような私の五臓六腑が発散するムン／＼するような強烈な新鮮な香り、幻想の世界はあくまでも美しく、妖しく、近頃本屋の店頭に見かける原爆被害写真のようにむごたらしい陰惨な感じを与えられるものではありません。

だら／＼つともつれ合いながら流れ落ちる血だらけの腸

四つんばいに突つ伏した断末魔の虫けらのようにびく／＼ともがき、のたうち、肩を波打たせて呼吸する。腹を割かれた私がこのようにもがき、のたうち、呼吸する毎に、まるで生き物のように／＼と腹の裂け目からはみ出し、気味悪くむく／＼と蠕動する長い腸の管の幻想さえ、ドキンとするようなすばらしさを持つた一幅の画のように、私には思われるのです、本当に私は何という女なのでしょう。マゾヒズムの極致としての「切腹願望」というものに就いてどう考えるのが正しいのか、私は知りませんが、私は素直に在りのまゝ、感じるまゝを再現して見たのに過ぎません、云い足りない所も多いと思いますが、私の文章もこれで終りたいと思います。だら／＼とまとまりもなく、読みづらいものになった事をお詫びしたいと思います。

終

羽村京子さんからお送り下さいました原稿には詳細な図解が添布してありましたが編集部の手落で紛失してしまつた事を作者並に読者に対して厚くお詫び致します。京子さんの望んで居られる「料理される女」//腹を割かれる女//というテーマで読者の方から絵が届いて居ります。尚「アーマスへの讃歌に答えて」の第二回目の原稿も受け取りました。これは第一回のと一括して次号へ発表するよう予定して居ります。長篇は期待しています。



# ●縛られた女体美の寫眞分譲●

大好評！他に類例のない本誌独特の全部未発表の  
素晴らしい写真集成る。

女体緊縛美の写真（本誌口絵に発表不能のものを含む）

光沢面焼付 五枚一組 （一集分） 二百円（送共）  
印画紙焼付

第六篇	（第五十一集より第六十集まで）	十集分
第七篇	（第六十一集より第七十集まで）	十集分
第八篇	（第七十一集より第八十集まで）	十集分
第九篇	（第八十一集より第九十集まで）	十集分

## ◎各組とも一集分は五枚一組です

集を重ねる毎に充実、斯界独自の新天地を開拓して参りました写真集は同好者の間に貴重なるコレクションとしての役目を果し、更に従来多数読者の趣向をとり入れ、直接分譲用として特別に撮映して参りました、何れも印刷ではなく印画紙に焼付けヘロタイプを施したもので極めて安価な実費にて同好者に分譲してゐるものであります、読者の要望をとり入れまして、多くはヌードの縛られた女の各種姿態であります、其の外着衣のもの（洋装、長襦袢等）や半裸のもの、道具を用いたもの等多様を含んで居ります。次に三篇三十集分及び新版、第九篇十集分の各姿態の概略を示します。本号折込口絵の緊縛美のオンパレードと併せ御覧下されば幸甚です。

### 【姿態内容の概略】

（第六篇）51、逆さ吊り、絞首台、椅子後手縛り、ハシゴ吊り、くさり緊縛、52、猪吊り、椅子、後手棒、ハシゴ吊り、高手小手、緊縛、53、腰巻二態、逆手吊り、くさり、ベツド、54、吊り、ソファ、ハシゴ吊り、腰巻、55、手摺と棒、55、絞首刑、ストッキング、ハシゴ吊り、腰巻、56、ローソク、吊り以前、くさり、ドア、逆立、57、椅子逆立、猿ぐつわ、腰巻、ハシゴ折檻、ベツド後吊、ズロース、58、ベツド、ストッキング二態、椅子、ローソク、59、雁字搦目三態、手摺縛り、腰巻、60、梯子逆さ吊り、床柱後手、板の間、大の字、ハシゴ逆吊り、（第七篇）61、柱しばり、十字竿、ストッキング猿轡、天秤棒、ローソク、62、長襦袢、ローソク立、柱しばり、後手、竿、63、長襦袢、

後手天秤棒、前向十字竿、荒縄背面、猿ぐつわ、64、梯子段、立柱しばり、エビ責、アクロバット、芋虫、65、立正面縛り、後手芋、拷問台、後手、66、逆立、荒縄正面、後手棒責め、ハシゴ責め、半吊り、67、涕泣、長襦袢足踏、綴通、エビ責、柱しばり正面、68、階段、柱竿横面、同正面坐、晒し台、竿正面、69、柱しばり、晒し物、荒縄荒縄、立正面縛り、下り藤、70、高手小手、立エビ責、荒縄荒縄、ストッキング、高手小手棒縛り、（第八篇）71、拷問板二態、逆手吊り、折檻二態、72、拷問台二態、吊り以前、仕置台後手、仕置台仰向、73、和服折檻、長襦袢、逆手合掌、洋装蒲団、洋装高手小手、洋装手足逆縛り、74、桶背負逆エビ仰俯二態、桶三態、75、高手小手首縛、蚕、鞭打、処刑、仕置台、76、吊り寸前二態、法円流縛り、立膝、拷問板、77、洋装エビ責、洋装高手小手、後手俯伏、寝衣二態、78、責め場五態、79、十字架、十字架逆吊料理台、滑車、折檻、80、吊り準備四態と吊り、

## 吊り三態特選集

（第一組、第二組、第三組完成）  
キヤビネ版、三枚一組 五百円

トリックでない本当の吊し責めの姿態の中最も興味のあるものばかりを選んで三組を得ました。これは総べて未発表のもので前記の女体緊縛美の写真集と重複することはありません。

## ◎襲われる女

シリーズ、十二態集 五百円（送共）

此れは暴漢に襲われる美少女の恐怖の姿態を幻想的に繩をアクセサリーに使用して、極度の緊縛感を誇張した珍しい得難い作品です。（第九篇）81、（少女目かくし）前屈み、立膝正面、正坐横面、後手横面、太股縄正面、82、（雁字搦目）グルグル巻き、蝸牛、舟、弓なり、供物、83、（猿ぐつわ恍惚）手膝下緊縛、後手股間縛り、手拭を噛む、拒否、恍惚、84、鞭打ち片足吊り、さあ打て、お尻丸出し、諦め、疼痛、85、（芋虫縛り）俯伏横面二態、俯伏足部から二態、横臥、86、エビ責横面足揚、正面前屈み、横面前屈み、片足揚片足曲、後手変形縛り、87、両手前縛り前手正面正坐二態、仰臥二態、両手前首吊り、88、両手前向後反り、両足交叉、正面正坐、仰向、俯伏、89、後手後向高手小手足投出、首縄、中膝立、足交叉、90、柱縛り床柱爪立ち、床柱後手足投出二態、床柱正面、柱立縛り（以上）

大阪府堺区内菅原通四ノ三〇  
振替大阪第三四九五六番

曙 書房 代理部



奇譚クラブ最近号

主要目次

- 十月号特集切支丹迫害史○
- 十一月号宗教刑罰戦慄画譜
- 十二月号惑溺の愉快特集号
- 新年号 縛つた女を描く○
- 口絵 吊り下げられる女 喜多 玲子
- 中世紀の宗教刑罰画集
- 扉 愛の使徒 色刷口絵 椋鳥
- 口絵写真 縛つた女を描く
- アブニストの記・らぶすれいぶ鬼山絢策
- 脱 落 者……………小森 原平
- 徳川閨門痴情録……………的場 通
- 淫火(みだらび)……………松井 籟子
- 戦争処女の手記……………藤安 節子
- 長崎らしやめん考……………花山 剣作
- 読者座談会交悦に伴う責めの衝動心理
- マゾヒストの果て……………福田 英一
- 糊の執著……………長岡愛一郎
- 鼻腫礼讃……………升岡 金吉
- 変の字問答……………浮家 鷹三
- 告白記 僕の記録……………黒井 珍平
- 女の賣場を描く時の心境……………伊藤 晴雨
- あなたのムチの下に……………角田 平八
- 赤につかれた男……………上村秀久雄
- 男色の花道……………堤 行房

○二月号責めの小説特集号○

口絵 怪奇派小説名場面集(乱歩の巻)

口絵写真 恋に狂つたワン・カット

スペインの宗教裁判

- 妖 花(心の悪魔)……………羽村 京子
- 夜開く孤島……………岡 真史郎
- 淫 火(第二回)……………松井 籟子
- 若衆散華(同性愛欲史譚)……………戸崎 平馬
- 変の字問答(第一話)……………浮家 鷹三
- らぶ・すれいぶ(第二回)……………鬼山 絢策
- 燐 光……………久留木 栄
- 女嫌いの種々相……………仁比山 等
- アレキシナの日記……………鳥上 源一
- 女囚獄中記花井お梅さんげ談……………小町右近
- 糞尿崇拜とトーム思想……………三瀬 淑朗
- 処女崇拜と宗教売淫……………島影 映
- 比丘尼開眼……………久松 俊介
- 琉球の女達……………木之下白蘭
- 悩ましのサディズム……………森山 美歌
- 切支丹迫害史……………漆島 迫平
- 死刑執行奇談……………茂木 芳久
- 黒井珍平氏に答う……………伊藤 晴雨
- しいたげられるよろこび……………林田 澄子
- 破つた日記帳……………川端多奈子
- 硝子便所……………芳野 眉美
- つわもの哀史……………吉井 川洋
- 映画とサディズム……………雲井 彰

○三月号 東西拷問くらべ○

口絵 柱に縛られた女 喜多 玲子

口絵写真 東西拷問くらべ

- サディズムの精髄……………吾妻 新
- 切腹史談……………中康 弘通
- 同性的男性愛の謎……………染田 玄
- 受難記(ある女の告白)……………岡田 咲子
- 妖異聚楽第……………戸崎 平馬
- らぶ・すれいぶ(第三回)……………鬼山 絢策
- 女囚私刑体験記(其の二)……………小坂多美枝
- 黒井珍平さんへ……………羽村 京子
- 艶書通信(喜多玲子さまへ)……………高野すみ子
- 文学歴史に現われたるサディズム
- 悲痛と快楽……………波多野 新
- 第七天国の夢想……………梅井 清
- 伊藤晴雨先生へ答えて……………黒井 珍平
- 屍 臭……………丹波 太郎
- 色情の価値……………角田 平八
- 猿 轡 雑 考……………千葉 三郎
- 白い便器の幻想……………芳野 眉美
- 伊藤晴雨氏の解答を讀んで……………和泉としを
- 破つた日記帳……………川端多奈子
- 緊縛女優列伝縛られた女優たち升岡金吉
- アドニス灯……………鷺巢 千芳
- ジプシイの性的生活……………有馬 正秋
- 淫 火(第三回)……………松井 籟子

○四月号 錯倒の告白特集○

口絵 くすくすられる女 喜多 玲子

口絵写真 緊縛美の考察

後手と高手小手について

- 搾衣(続少年矯正院体験記)……………獄 収一
- 神の酒を手に入れる方法……………沼 正三
- 肥満体への郷愁……………麻生津和夫
- 乗馬服と長靴と鞭……………森本 愛造
- 不思議な拷問……………有馬 稲高
- 私の新婚生活……………島村 康雄
- 開花の契機……………信太 蓉子
- キヤメラ愛好会……………岡田 咲子
- 妓 の 影……………泉 辰之助
- 交 感……………藤安 節子
- 支配者と被支配者……………波多野 新
- 責めの美的表現……………小此木蘭一
- らぶ・すれいぶ(第四回)……………鬼山 絢策
- 春婦哀歌(飛田の娼婦たち)……………花村 鶴二
- 新裸体狂楽論……………七条美樹子
- 続・囚 衣……………古川 裕子
- 地獄繪行脚……………長岡愛一郎
- 美少年の死……………岡 真史郎
- 恍惚境と法悦境……………高取 辰治
- 切腹史談(二)……………中康 弘通
- 縛られた女優たち(二)……………升岡 金吉
- 風流猿轡……………吾妻 新
- 人獣交婚談異婚抄……………山崎 浩平
- 或る家庭教師の告白……………角田 平八
- 淫 火(第四回)……………松井 籟子



緊縛美のオンパレード (1)

51



52



53



54



55



56



57



58



59



60





緊縛美のオンパレード (2)

61



62



63



64



65



66



67



68



69



70



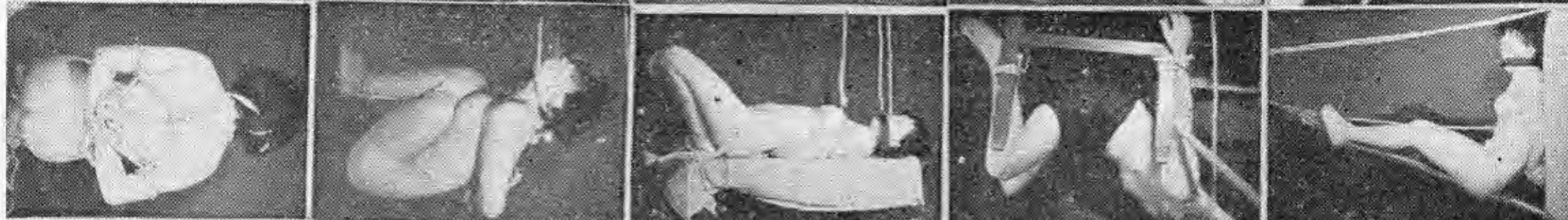


緊縛美のオンパレード (3)

71



72



73



74



75



76



77



78



79



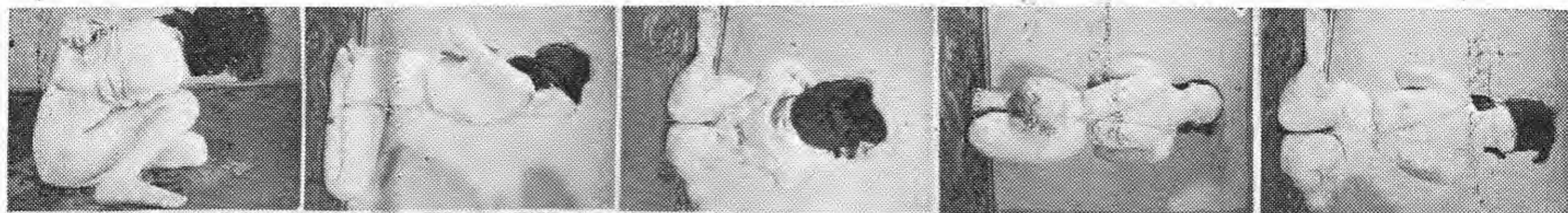
80





緊縛美のオンパレード (4)

81



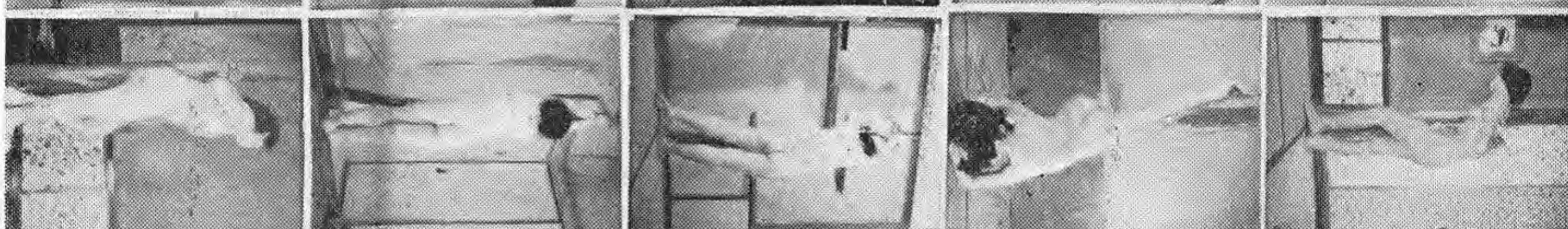
82



83



84



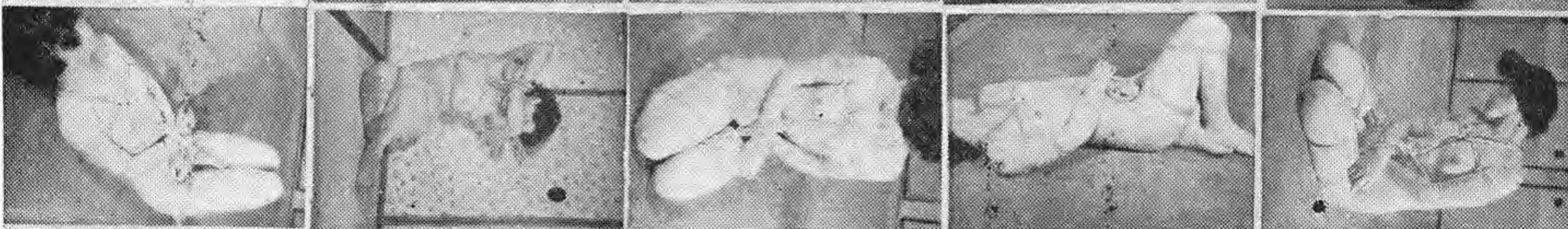
85



86



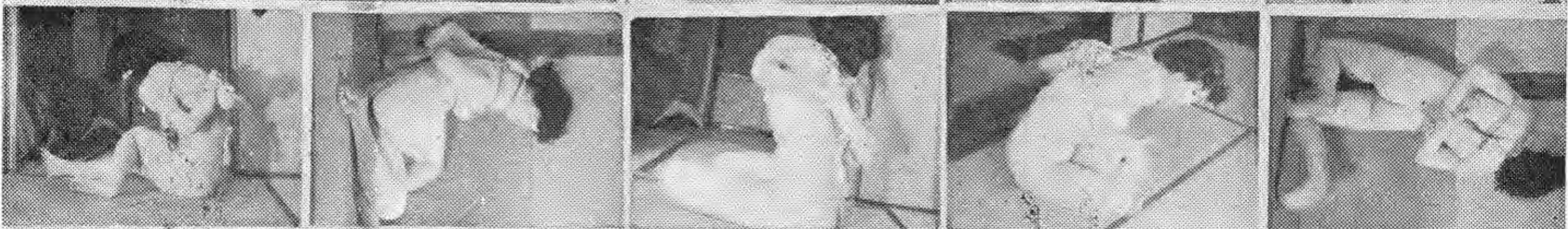
87



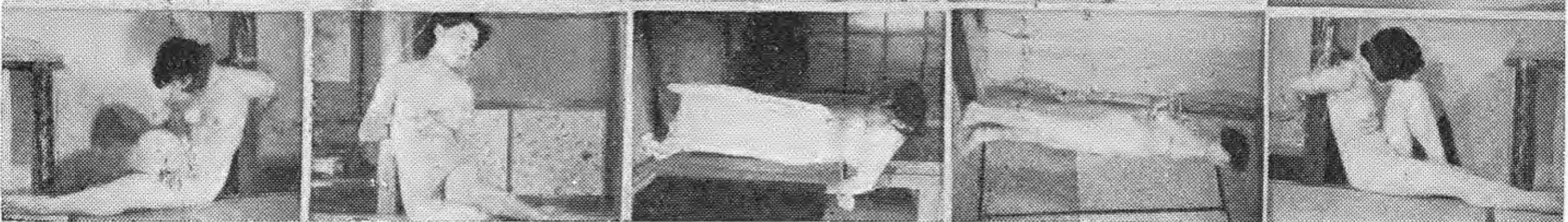
88



89



90





## 〇五月号特集男性MASOO

口絵 戦後の挿繪に現れた女の責め場

高月 大三

口絵写真 荒縄による緊縛感のスポット

塚本 鉄三

怪奇画集

(ドイツのクロテスク画集より)

マゾヒストの会……………沼正三・訳

風流責各態……………吾妻 新

捕縛難考……………獄 収一

僕の記録(完結篇)……………黒井 珍平

らぶ・すれいぶ(第五回)……………鬼山 絢策

家出の味……………牧 さち子

雌獣の手記……………近見 啓

女王様ごっこ……………飛田 良二

偽られる殉教者……………成瀬 亮

続・硝子便所……………芳野 眉美

道徳的な物語……………笹田 豊

私の欲び……………瓜生 珠子

少年及び女性の切腹……………中康 弘通

実験室にて……………角田 平八

淫 火(第五回)……………松井 簀子

吊られた白鳥……………川端多奈子

魔都上海の思い出から……………姫宮 四郎

奴隷の安の記……………中野安太郎

縛られた妻以前……………早川新一郎

盲いたる手……………藤安 節子

真空地帯の一挿話……………鏡 六平

暴帝イワン罪悪史……………高取 辰治

## 〇六月号

口絵 お小夜嵐

緊縛による二表情

扉 夢はスカートの下に

口絵 地獄物語(往生要集)

クリスチーヌの受難……………吾妻新・訳

虹の階段……………泉 辰之助

ヴァンプ女優列伝……………朝見 速夫

アブノーマル・ファンタジー……………岡田 咲子

責 苦……………竹谷 十三

拷問と倒錯の根源探求……………翁 要吉

静安劇場後日譚……………姫宮 四郎

廓の灯影……………片矢 薫

出獄(少年矯正院体験記)……………獄 収一

縛られた女優たち(三)

切腹問答(中康弘通氏へ)

淫火(第六回)……………松井 簀子

由紀子のお仕置……………大川由紀子

若衆武士道……………戸崎 平馬

らぶ・すれいぶ(第六回)……………鬼山 絢策

暴帝イワン罪悪史(二)……………高取 辰治

あるマゾヒストの手帖から……………沼 正三

其頃を語る(一)新派劇の賣場伊藤 晴雨

自殺の手段としての女性の切腹に

ついて……………池田 敏夫

文芸に於ける切腹描写……………中康 弘通

我が告白の断章……………須藤 律夫

第二回読者座談会

松井簀子女史を讀んで

## 〇七月号

口絵 百鬼夜行の図

口絵写真 縊くつわ五態

クリスチーヌの受難(二)……………吾妻・新訳

妻は縛らす……………岡田 圭介

切腹本願……………亀岡絳七郎

川端多奈子さんと信太齋子さんへ

祭壇に君臨する脚……………羽村 京子

淫火(第七回)……………松井 簀子

らぶ・すれいぶ(第七回)……………鬼山 絢策

片耳伝奇……………窪村 弘

女体緊縛美について……………千葉 三郎

囚獄の思い出……………獄 収一

歌舞伎とサジズム……………宮内 義雄

暴帝イワン罪悪史(三)……………高取 辰治

あるマゾヒストの手帖から(二)

辻番附の話……………沼 正三

切腹願望……………伊藤 晴雨

変の字問答(第三話)……………水内 武郎

磯になつたお姫様……………浮家 鷹三

四馬路界隈……………毛利 綾子

我が告白の断章(二)……………姫宮 四郎

くすくすられるよろこび……………須藤 律夫

女囚私刑体験記(三)……………山本 百合

私の主題……………小坂多美枝

一清教徒の日記(二)……………岡田 咲子

曇後雨……………栗島 洋

新しいサディズム……………川端多奈子

吾妻 新

## 〇八月号

口絵 戦前戦後の挿繪に現れたる責め

及縛り繪……………村田 誠一

苦笑オンパレード……………林 凡流

鞭打たれる外国の少女たち

口絵写真 被縛女体の研究……………渡辺彌三郎

色 狼……………辻村 隆

明治期の被縛画家……………児島 光

アームスへの讃歌……………伊藤 晴雨

苦悶する裸像……………住田 弘志

女人群像……………福田 英一

悦虐秘帖……………藤安 節子

クリスチーヌの受難……………信太 蓉子

公妃の復讐……………吾妻新・訳

被虐の愛情……………沼正三・訳

甘美なるアリスの降伏……………若林 啓子

女腹切の考察と女性の切腹例田谷 敬生

夫婦愛の表現法としての裸女緊縛に

ついて……………西沢 芳造

片耳伝奇(二)……………窪村 弘

アブノーマル・プレイ……………獄 収一

手記妻は縛らす(二)……………岡田 圭介

らぶ・すれいぶ(第八回)……………鬼山 絢策

あるマゾヒストの手帖から(三)

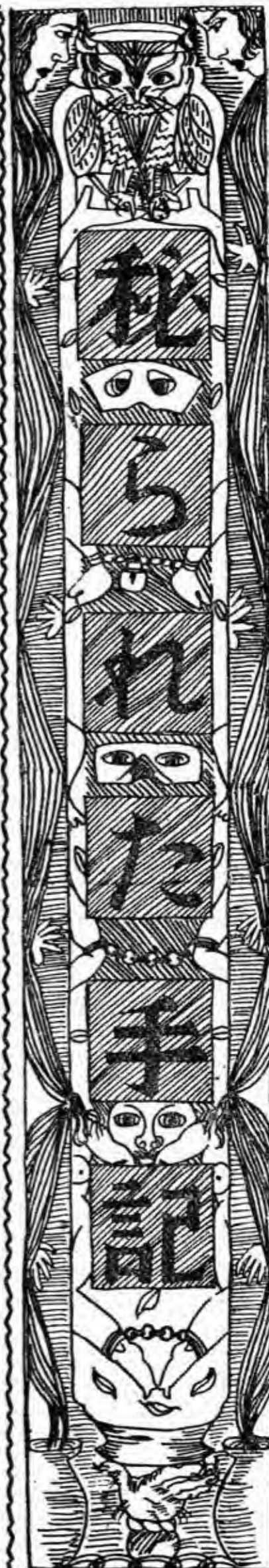
女のズボンについて……………沼 正三

古川裕子さんへ与える……………吾妻 新

或る被虐性愛者の手記より……………天泥 盛栄

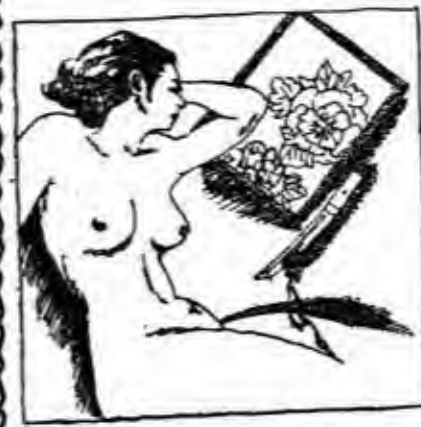
淫 火(第八回)……………松井 簀子

沼 正三



# 燃ゆる緋罍栗

川合伊都子



本誌四月号信太さんの「開花の契機」続いて六月号水内さんの「切腹願望」を拝見して私と全く同じような女性の居られるのにどんなに意を強くしたか知れません。と同時に今まで夫以外の人にひた隠しにしていたことを告白させて頂ける御誌に心からお礼を申し上げたい気持ちでいっぱいです。顔を見られたらとても御話出来ないこ

となのですけど、と言つて一度は人様に聞いて頂きたいと思つていたのです。もしも余白でもあつて掲載して頂ければどんなに嬉しいことでしょう。

私は二十八でございます。恥かしいことですが、縁談が決まつたとき、以前から好きだつた青年にすべてを許してしまつたのです。この縁談はその青年とのいきさつから無論破談になりましたが、其

後彼とも全く離れてしまい、三年後、私が二十三の時に今の夫と結婚しました。夫となつた人は結婚後二ヶ月ばかりして私の不しだらを知りましたが、すこしも咎めずかえつて不仕態だつたが故に愛される様な妙なことになつてしまつたのです。そして毎日に年毎に二人の愛情は増して来て今では楽しい家庭を作つて居ります。不審に思ひになるかも知れませんが拙い筆の跡を読んで下さればお判りになると存じます。

1

「お、この傷どうしたの」と夫に聞かれたとき、私は奈落の底へ突き落されたようにハツと思うと目先がまつ暗になつてしまいましたそれは結婚してまだ七十日ばかり



しか経たない或る夜の闇中のことでした。伊都子が決して夫の目にふれないように注意していた左の下腹部の刺傷の痕を、ついあられもない恰好を見せた瞬間に見とがめられてしまったのです。

「あつ、あなた」と私は腰巻も寝衣もいつしよくたに纏んで腹部を抑えましたが、いまさら間に合いませんでした。

「え？、どうした傷なの、見せて御覧、何も隠すことないじゃないか」と夫はまた尋ねました。

「何でもないので、小さい時怪我したの、見ちやいや」と私はさりげなく言つたつもりでしたが、後で思うと自分でもおかしいくらいその声は明かに狼狽の色が現れて居り、お腹を寝衣で抱くように押えている手もかすかに顫えていたようでした。

「怪我した？いつ、どれ見せて御覧」と夫は私が隠せば隠すほどどうでも見なければ承知しそうもありませんでした。

「ね、夫婦じゃないか、傷ぐらい見せたつて当り前じゃないか、ちつとも恥かしいこともないもありやしない」と迫ります。

私はもう観念してしまいました（えゝまゝよ、どうせ何時かは知れるんだ、一生隠しおわせることはとても出来つこない。先へ行つてから破鏡の憂目を見るよりいつそ早い方がいゝかも知れない）とふてぶてしい気持ちになつたのです。

「さ、お見せ」と急ぎ立てられた私は、思い切つてぐつと湯文字を臍の下まで押し下げて下腹を露わにしましたが、流石に恥しいので夫の方へは右側がやつと見える程度に体をくねらせて布団の上へ横坐りに坐りました。

夫は私の肩へ手をかけると矢庭にぐつと仰向けに引倒し、私がはつと傷の部分の隠そうとする隙も与えず、私の右手を膝頭で押え、右手で左股の付け根を押えつけてしまいました。彼の目の前にはい

やでも私の傷がまともに曝け出されました。左の下腹、鼠蹊部から七糎ほど上の処に、長さ三糎ばかりの傷痕がひきつりになつて、それに続いて横にお臍の下の方へ向つて三糎半程の薄い癒痕が夫の目に映つたことでしよう。

私はもうすべてが終りだという気持ちで俎の上の鯉のようにおとなしく彼のなすまゝに委せました。すると彼はどうしたのかいつまでもじつと傷痕を眺めていました。

た。その間に私は頭の中で色々な悪智慧を働かせ始めたのです。よく新聞記事にある銭湯などの帰りに痴漢に襲われて下腹部を刺された女、そうした全くの災難で受けた傷とでも言い逃れようか。それにしては先刻小さいときの怪我だなんて言つてしまつた。その上怪我にしては余りに規則的な傷なのです。では腹膜か何かの手術の痕——としてはこんなひきつりになるような深い傷痕を残すことはないでしよう。どう考えてもうまい

理由がつけ兼ねます。

やがて夫は私の体から離れてそつと抱き起してくれました。そして

「伊都子、凄く傷だね」と言い、後は独り言のように「素敵だ」と目を輝かしているのです。私は事の意外に驚きました。きつと厭がるに違いないと思つたこんな傷痕に何かとても魅惑を感じたらしい口吻なのです。

「小さい時の傷だなんて、本当の事をお言い、そんな古い傷じゃない。自分で切つたような傷だ。こゝう腹一文字に」と夫は右手で握り拳を拵らえて自分の左の腹へ当てゝ切腹するような仕草をして見せました。私はもう何も彼も本当の事を打明けて話してしまおうと覚悟をきめました。それは夫に告白しなければ悪いというような気持ちも含んでいましたが実は話さずには居られない。話をしたい、聞いて貰いたいという曝露趣味の表われだつたのでしよう。

「本当のことをお話します、あなた許してね」と言つたものの、夫が私の告白を聞いたらどんなに怒るだろう。結局別れ話になるか、さもなければ、どんなに責め苛なまれるか知れない。と思うと急に悲しくなつて夫の膝に泣き伏しました。すると夫は私の肩へかけた手を背の方へ廻してやさしく愛撫してくれながら、

「まあ、わけをお話しよ、泣いてたんじやわからない」とそつと私の涙を袖で拭つてくれたのです。私はとうとう夫の前にすべてを告白してしまいました。

## 2

「伊都ちゃん、それで君は承知してしまつたのかい」と真佐夫はとても恐い顔をして私を睨みましたがそれは私に縁談があつて、それを父が一人決めをしてしまい、私に押しつけて来たことを彼に泣いて訴えたときのことです。

「承知するもしないもないのよ、

だから私」このまゝもう家へは帰らず、どこへでも連れて逃げてくれと彼に哀願したのです。

この夜は北の国特有の霧が濃く立ちこめて街燈の光が夢よりも淡く、生温かい大気が二人を包んでいました。何というロマンチックな夜でしょう。私はもう両親のこともなにも念頭になく、この夢幻的な雰囲気の中へ溶け込んでしまつたのです。長いく接吻と抱擁とが二人の頭を完全に麻痺させてしまつたのでした。

彼との恋愛は戦争中からだつたのですが、彼は召集されても病弱のため即日帰郷という当時としては誠に不名誉な目に合されていました。そんなわけもあり、又私もまだ十九だつたので恐ろしさもあつて、二人の間には肉体関係は全くなかつたのでした。それがこの夜、私はもうこのまゝでは済まされぬ、どうしてもこの肉体を彼にやつてしまいたい気持ちでいつぱいになつたのです。

「一つ体になつて死にたい」と彼に囁いてしまつたのです。

この私の言葉が、多少でも理性が働いて逡巡していた彼を氣狂いにしてしまいました。

「一緒に逃げよう。そして二人で死のうよ」

私はもう全身の血が駆け廻つて立つていることさえ耐えられなくなつて彼に獅噛みついてしまつたのです。

数時間の後、二人はN温泉の或る旅館の一室に納まつていたのです。こゝまでどうして来たか、私は唯彼に従つて汽車に乗り、車に乗つたりしてただけではつきり判りませんでした。

彼は二十六、私は十九だつたのです。二人の年から見ても、落付かない態度から見ても駈落者だといふことはすぐ宿の人達に感づかれていたでしょうが、二人は無論そんなことは気が付きませんでした。

彼は宿帳に自分の本名を堂々と

書き、二行目へは妻伊都子と書き入れました。死を覚悟している彼は少しも悪びれず、宿の番頭の前ですらくく書いたので、番頭も「おや」と思つたのでしよう。何とか取つてつけたようなお世辞を残して部屋を出ていつてしまいました。

私はすっかり気が落付いてしまつたのです。伊都子は彼の妻なんだという氣持になりきつてしまつて、その夜彼にすべてを許しました。そしてこれでいゝのだと思うと彼が無闇に愛しくてたまらなくなつてしまいました。

二人が情死を決行したのはその夜明け方でした。方法を色々相談しましたが、薬物は何もない、結局彼が持つていた中型のナイフが一挺あるだけです。二人が抱き合つて死ぬにはこのナイフを使うことが一番手近なのですが、彼はどの道を突いて殺そうか迷つていました。私はこの時初めて自分のお腹に興味を持つたのです。そし



て今一緒に死ぬ彼の精血を吸ったこのお腹、私は自分のお腹がいとしくつてたまらなくなりました。

「こゝ突いて、決つて殺してね」

と私は彼の前へ下腹まで露わにして寝床の上へ坐りました。ナイフを見てそつと下腹を撫で廻している内に、もう彼の前でも恥しい気持などなくなつてしまつたのです

彼はまぶしそうに私のお腹を見ていました。私は手首や足首が割合に細いので衣服を着ていると瘦せ形に見えるたちなのですが裸体になると案外肥つているので、こういう風にべたと坐るとお臍のところへ大きく一つ段がついてその下はむつちりと膨れてしましますその下腹へナイフを持った彼の手首を掴まえて刃先を押し当てたのです。彼の手は私の手の中で顫えていました。私はまじろぎもせず彼の顔をじつと見つめ、そのまゝ彼の手のナイフをぐつと引寄せたのです。ブスツというような音がしました。と同時に「あ、痛ッ」

と思わず叫びそうになつたのを歯を喰いしばつて口外にもらすまいと骨折りました。鮮血が滾々と流れ出しただろうと恐る／＼傷口を見ましたが、刃先が一糎位しか突き刺つて居らず、傷口からは僅かに血が滲み出した程度でした。次の瞬間彼の顔が緊張したと見る間に新たな激痛を覚えました。傷口を見るとナイフの刃先はすつかり私のお腹の中へ突刺さつて真紅な血がたらたらと流れ出しているではありませんか。灼け付くような痛みを覚えながら、何か言い知れぬ喜びを感じるのでした。それは彼と一緒に死ぬのだというそんなものではなく、このお腹が切り割かれて行くという現実の喜びだつたのです。痛みが薄らいでひどく擦つたいような感じがして来たと思ふと目の前に私の大好きな緋罌粟が一面に咲いて、その中に自分がくず押れて行く何ともいえない恍惚境に入つていつたのでした。

## 3

これが私のお腹の傷の由来なのです。気のついた時は町の小さな医院に寝かされていました。幸にそれこそ本当に今思えば幸だつたのです。腹膜炎も起さず傷は半月ばかりで退院出来る程に癒りました。

私は親許へ帰れずS市の伯母の処へ預けられてしまいました。父が方々へ手を廻して事件を伏せてしまつたのと、時世が戦争一色だつたのとで表沙汰にならず、新聞にも出されずに済みましたが、それにつけても彼の仕打は薄情でした。私が氣を失つてしまつたのを見て急に怖氣づいて旅館をこつそり抜け出して行衛不明になつてしまつたのでした。

私の血塗れ姿は夜が明けると間もなく発見されたのだそうです。宿帳は一応尤もらしく見てましたけれど何となく不安だつた宿の人が警戒していたのだそうで、私が

まだ失神している内に室の係りの女中さんが見つけてしまつたという話でした。

こんな訳で勿論父の決めた縁談などめちやめちやになつてしまいました。

私は伯母の家でだん／＼気が落付いて来ると、もう薄情な彼のこゝろなど全く何の未練もなくなりましたが、あの夜以来——お腹の傷を見ると無闇と自分のお腹がいとしくなつてくるのです。そして刃先を突刺したときの感触、切つ先の触れた瞬間冷やつとしたかと思ふと続いて灼けつくような痛み、真赤な血汐がたらたらと皮膚の表面の脂肪に弾かれて二筋三筋に分れて流れる、やがて掻きむしられるような痒みを覚えると、あの燃える緋罌粟の中に私自身も緋罌粟のひとひらとなつて散つて行く。私は両掌で下腹を縦横に撫で廻し、しまいに滅茶々に掴んでもみくちやにしながらうつ伏せになつて

喘ぎ、身をくねらせてのた打ち廻るのです。

その翌年、私が二十になつたとき、終戦のどさくさに私の一家は住み馴れたN町を離れて戦災を受けなかつたO市へ引越しました。父は商機を見るのに敏捷だつたと、こうすれば私を手許へ引戻しても差支えないと考えたためだつたのです。そして伊都子があんな無分別なことを仕出来したのは自分が悪かつたからだと言つてくれ

ました。それから三年後今の夫と結婚したのである。実は最初結婚などしたくありませんでした。

だつて私には夜毎に楽しみがあつたのですもの、だがその楽しみを繰返したためか私はかなり強い神経衰弱になつていたのである。それを父や母は感違いして早く夫を持たせようとしたのでした。

結婚したくない理由はもう一つありました。それは言うまでもな

くお腹の傷なのです。夫に知れたら不幸になるにきまつていたのである。それなのに何故結婚したとお思いでしょう。恥かしいこと

ですが、今の夫と初めて会つて見たとき私は結婚するの何のということよりこの男に抱かれないという気持ちになつてしまつたのです。

どうせこんな体、不幸になつたらいつでもそれこそ自分の手で、お腹を思う存分掻切つてあの楽しい感触をもう一度十分に味つて死

にたい。死んでしまえばいいんだと考えたので結婚してしまつたのです。

それから前に述べましたような経緯からとうとう夫にこんな告白をしなければならなくなつたのです。そんな私を何うして夫が愛してくれているか、又現在は東京に住んでいます、それまでの事件が一寸風変わりなのですけれど余り長くなりますので、筆を改めて述べさせて頂きたいと存じます。



## 孤児院での経験

野々村由紀夫



(一)

孤児院時代に見聞した事を一寸お話致しましょう。

私は幼ない時孤児院におりました。そして高等小学校を卒えると同時に社会に出たものです、その

私の居りました孤児院は男子寮と女子寮とに別れておりました、そして学校の教室位の室が幾つも

並んでおります。一室には十人位の子供が収容され、子供を監督する為に保母が入口の保母室(六畳)にいるのです、そして一室毎に玄関がついております。簡単に云う

と六畳と学校の教室位の室とが一軒になつてゐる家の長屋と云うわけです、

この他に家庭寮があります。この家庭寮と云うのは、女子の



上級生に炊事をさせたり、裁縫をさせたりして——一般家庭に住込んで困らない様に教育するのを目的として建てたもので——それだけの設備がしてあり、専任の教師がおります。——ところが、この教師は、昼間だけで夜は誰も監督する者がおりません、この寮へは女子の上級生が一週間交代で五六人を単位として泊りこみで教育を受けるのです。だから夜の監督も必要なわけですが、私達が最上級生の時はどうしたのか夜の監督の教師がいなかったのです。こうした状態だからこれから私がお話ししようとする事が行なわれたのかも知れません。

さて、私は男ですから全部はわかりません。たゞ、私が、私の寮から抜け出してこの家庭寮の窓から、そつと覗いて見たことをお話しするわけです。私が窓から覗いた時、英子と呼ばれる学科の成績は余りよくありませんが、目がぱつちりとして、まつ毛が長く、鼻筋

が通つて口の小さい、私達の同級では一番可愛らしい子供が四人の同じ寮の女の子供達に囲れていました。

英子は一生懸命、何かあやまつておりましたが周囲の子供は少しも聞き入れる様子がありません。こんな状態が十分も続いたでしょう。やがて一人の子供がかん高い声で、

「ねえ、良いでしょう」

と叫びました。この声だけが今までのぼそぼそ声に比べるとかなりはつきりした声でした。皆がうなずいた様です。

## (二)

家庭寮の室は八畳です。その室に布団が敷きつめてあります、そのうです隅から隅まで敷きつめてあるのです。そうしてどうでしょう真ん中に英子を座らせるやいなやいきなり一人が英子の首をしめたのです。いや首をしめたのではありません、たゞ暴れない様に首を

押えているのですが、覗いている

私にはそう見えませんでした。後の三人は両手を持つ者、着物をぬがせる者等、期せずしてそれらの仕事を分担し、またたく間に英子の体はズロース一枚にされてしまつたのです。それだけではありません。今度は寝巻の帯を取つて英子の体を縛つてしまつたのです。勿論この間には英子も抵抗したことは云うまでもありませんが、どう云う訳か一言の声も出さないのでした。

さて三巻きばかり胸に縄を巻かれた英子は室の中央に、投げ出され、他の四人はもう寝巻をぬいでシユミーズ姿で英子の傍で何やら相談をはじめました、英子は体を締め、じつと布団の上に転つています、私の方から見るとその顔がはつきり見え、美しい上に尚こうした時の顔はきれいなものだと感じました。顔ばかりではありません、まだ未成熟乍らふつくらとした乳房、下腹、私は始めて見た女性の肉体の美しさに驚歎していた

のです。

誰かが室から出て行きました、やがて帰つてきました。その手には電燈のコードが四本握られております。それ／＼そのコードを手にするとそれを振り上げ、振り下ろして英子を叩くのでした、英子は「ウン、ウム」と声を出さない様に懸命に我慢をしていました。体をあつちへ転がし、こつちへ転がして身をくねらせ苦痛に耐えているのです。だがどうにも我慢が出来なくなつたのでしよう。「ひえー」と悲鳴をあげてしまいました。すると一人が英子の口へ布片を押しこんで即席の猿ぐつわをかませたのです。

何の折檻かは知りませんが、もう良いかげんにやめたら良いのに四人は英子を壁へ押しつけて、ズロースを脱がそうとするのです。思春期の少女が同性の目の前に裸をさらすという事はどんなに恥しいことでしょうか、英子は両足をばた／＼させて取られまいとしま

すが、足の裏を擦られてとう／＼脱されてしまいました。

英子の目からはぼろ／＼と涙が出ていました。それからしばらく探りの折檻が続いたのです。するとどうでしょう。英子の目からはもう涙が出ていないのです。勿論目はぬれていますが。それがかえって目にうるほいが出来て何とも云えない美しさなのです、そしてその目がほ／＼えんでおります、目ばかりではありません、顔全体が笑っております、擦られる度に気持ち良さそうに体をくねらせているではありませんか、私はあきれ乍らこの風景を眺めておりました。



私は中国山脉を背負った戸数二

百戸位の農村に生れ父母に早く死

別して年老いた祖父に養育されて

居ました。祖父は農業のひまの時

四人は、こんな話をしはじめました。

「ちえ、笑っているよ」

「もつと叩こうかしら」

「駄目よ、かえって喜ぶばかりよ」

「じゃどうしよう」

「そうねえ」

「もうゆるしてやろうか」

「駄目、もつとやつつけなきや」

「じゃあ、どうするのよ」

「あれが良いわ」

「あれつて、なによ」

「エボよ」

「大丈夫かしら」

「大丈夫よ、この間やつたの、何

ともなかつたつてあの人云つてたわ」

「あの人つて誰」

「そんなこと良いじゃないの」

「そうね、じゃあエボをやるうか」

声が次第に高くなつて私の耳に

話し声が全部聞こえる、それにし

ても「エボ」とは何だらう、私は

新しい興味を期待して窓から離れ

られませんでした。

押入の中から何やら引っぱり出

されました。長さが一尺ぐらい、

真つ黒な万年筆よりも二廻り位太

い棒、それは理科の実験に使うエ

ボナイトの棒なのである「エボ」

とはエボナイトのことなのだ。こ

れを何に使うのだらう。私は室の中をじつと見つめた。すると一人が右の足を、もう一人が左の足を持つてそれぞれの方向へ引っぱりエボナイトを持った女がその間く近づいてゆきます。

私はなにが始まるのかと思つて無意識に顔を前に突き出しましたそのとたんにいやと云う程ガラスに顔をぶつけてしまったのです。思わぬ音に私は自分乍ら驚いてしまいました、私は窓から飛び下りて一目散に逃げ出しました、しばらく走つて庭木の間から後をふり返つてみると家庭寮は真つ暗になつていました。

## 白 粉 地 獄

中 川 秀 夫





は村の河川工事に人夫として朝早くから夕方まで働きに行っている。私は学校から帰ると一人で留守番をしていました。私の十三才位の頃でした。

広い家に唯一人で居るのでたやすや長持などかき廻していると母が残していった桃色の裏生地があったので長くくつき合せて自分の腹に巻きつけ乍ら力一ぱい締めると何んという事なしに快い気持ちで全身をかけめぐるのでした。そして腹はだんぐと細く締つてひょうたんのようにくびれ上つて来ました。二十廻りも三十廻りも巻きつけると息も止まるような苦しきの中に自分の身体を苛む喜びを押えることが出来ないのです。何故だか分らないが腹を締めつける事がこんなに快いと云うことを始めて発見しました。

それから毎日々々な方法で行うようになりました。俵に使う荒縄で一方を柱に縛り真中を腹に巻きつけて、もう一方を反対の柱に廻

して端を自分の手に持つて引張るのです、すると私の体は両方の柱の真中になつて二方から引張られるようになります、そのような事をする私の胴はいつも縄のきずがついて困りました。

こんな事をしていゝる中にだんぐ／＼昂じて来て一人で締める事が物足らなくなつてしまひ近所の友達を集めて捕物遊びをするのです。勿論私が捕らえられる役になるのです。先ず私が走つて行くとその前に両方から細引を張つて待つていて、私が引掛つて倒れると、一人は手首に又首に足にと細引を掛けて力一ぱい引張るのです。

私は蜘蛛の巣に掛つた虫のように八方から寄つてたかつて棒のように縛り上げられてしまふのです。そして縄を掛けられもがく時が一番快い興奮を味うのでした。

毎日のように学校から帰るともうそんな遊びに夢中になるのです。松の木に吊るされたり梯子に縛りつけられたり、両手両足を別

々に細引を掛け腹にも細引を巻き仰向けにして六人が引張るのです。手足に細引が喰い込み胴が千切れる程締められた事もありました。

其の中に学校も終え町の叔母の家に行き紡績工場に少年工として働らく事になりました。

此の町は御大典記念の時始めて市制になつて紡績の町として知られて居りました。映画館も三つあつて、毎夜一回上映して居て、休日には必らず見物に行きました。

その頃は五月信子の鬼神のお松、高橋お伝など毒婦の出る映画があつて鬼神のお松が捕手に追われて帯もとけ髪も乱れて三本五本と捕縄を掛けられ梯子で囲まれて逃げようともがく場面などもあつて私の血を沸き立させました。毎夜こつそり見に行つて楽しんで居ました。映画の本などそんな場面があるを買つて来てはそつと出して見ては楽しむのでした。その頃工場では長谷川と云う三つ年上の少年と親しくなつてよく一緒に映画も見に

行きました。長谷川はよく私の手をねじたり首を締めたりするので私もわざといじめられるように仕向けるのです。私が逆らわないと見ると彼は荒々しく私を押えつけピンポン台の上に大の字に縛りつけたりしました。

工場は当時昼夜二交代制で夜は昼の半分しか機械が運転せず電気を消して真暗なので夜業の時は長谷川と二人でこつそり眠りに行くのです、その夜も二人でいつもの所に行くと彼はいきなり私を押えつけて工場で使う細紐で両手を別々に思い切り縛つて大の字に機械の金具に吊り下げるようにして止め足も別々に開いて別の金具に吊つてしまひました。私の体は背中だけ板についているだけの姿にされました。長谷川は「どうだい思ひ知つたか降参すればほいてやる降参せんともつとひどい目に合わせるぞ」「降参するものかどんなにでもして見ろ」と云うと「よし今に思い知らせてやる待つとれ」

と云うとどこかへ行きました。私はこれからどんなことをされるかと心配と期待に胸をおどらせて自分の黒足袋をはいた白い足首に紐の喰い込むのを此の上ない魅力を感じ乍らうつとりと見つめて居りました。やがて彼は長い／＼細引を持つて来て自由の全くきかない私の体を荷造りをするように首胸腹と処きらわづぐる／＼巻に締め上げてしまいました、もう私は本当に身動きも出来なくなつて首や腹を締めつけた縄の為にほとんど気を失つてしまう位でした。でもこれは誰にも知れない秘かな喜びでした責められる喜び体を縛られ締めつけられ身動きならないようになつて始めて味う快樂でした。こうして仕第に私はアブノマーの泥沼に深く落ち込んで行きました。

ある日、叔母と妹娘の方は工場へ行つて留守で私と愛子と二人だけでした。愛子は肌脱ぎになつて化粧して居りました。私はねそべつて本を読んで居りました。愛子は化粧も終つて長襦袢を着て白足袋をはいているとちら／＼と白い脛が見えるのをたまらない亢奮を感じ乍らそつと盗み見て居りました。こんどは伊達巻を巻きつけるのです、私はもう辛抱出来なくなつていきなり巻きかけの伊達巻を引張つて愛子の胸を力一ぱい締め上げてしまいました。胸がくびれていやが上にも私の欲情を盛上げて来ました。愛子は苦しうに

「何するの秀夫さんの馬鹿お母さんに云い付てやる」と云うので「云つてもかまわん馬鹿だから何するかわからんぞ」と云い乍ら逃げようとするのを手をねじ上げて皮バンドで縛り上げて横にねかせて足も別々に拡げて両方の柱に縛りつけてやりました。胸を細く締め付てあるので上から見ると骨がねじ

れているように見え腰は高く盛り上つて居ました、愛子はもう抵抗しても駄目と思つたのか「あまりひどいことをしないでね」と観念したように大人しくなつて云うので私は「うん」と云つてこんどは首をそつと締めてやつたのです、愛子は「どうしてそんなに私をいじめのそんな首をしめると死んでしまふわ」と苦しうにとぎれ／＼にかすれた声で云うのです。私は細い柔らかい首の感触が両手に伝わつて忘れられずそれから後誰もいない時には愛子の方から虐待されるように仕向けてくるので私も色々な方法で愛子の体を責めてやりました、中でも私は胸を締めつけて首を押えるのが一番好きなのですが首は余力を入れると気を失つてしまうのでじんわりと長く苦しむように締めつけるのです。なるべく細い紐を使うと、首に喰い込んでも失神することはなく一番実感が出るのです。それから胸なら少し位きつく締めても大丈夫で時々腹を下すことがある位でした。

此のような愛子と二人の悦楽の遊戯はいつか叔母の気付く事になつて私は大阪の印刷屋に店員として出されました。十九才の時でした大阪に出てからは環境の変つたのと仕事に追われてそんな事を考える機会もなく無事な日々を送りその内日華事変が始り大平洋戦争へと突入して打続く連戦連勝に酔い乍ら私達は各々の職場に奉公して居ました。私も小さい乍ら独立して紙加工業を営んで居りました其頃大阪にも女剣劇が流行していて私も友達と久しぶりに新世界の演舞場で上演している河村美代子と云う劇団を見に入りました。

舞台は河村美代子の女掏摸が村はづれのお堂の中で五六人の雲助の為に着物を脱がされ桃色の長襦袢一枚に剥がれ真赤な扱帯が巾広に巻つけて裾は乱れて白い脛も露わになつ艶かしい姿で縛られ其の廻りを囲んで責めつけているので



す。一人の雲助が長襦袢の襟をぐつとはだけるのでその時「ライト」を青にしたのであごの下からくつきりときわをつけた白粉が背中から胸にかけて真白く浮いて見えて思わず私ははつと息を呑みました。

真白に化粧した女の襟首が此の時位私の脳裡に深く映じた事はありません。体中の血が一時にかつと逆流するのを覚えたのです。今日まで眠っていた私の異常な血は此の時を期して再び流れ始めたのです、そして劇を見乍ら、赤い扱帯を締めている為くつきり体の線が浮び長襦袢一枚の豊満な肉体の河村美代子の女掬摸を身動きも出来ない位ぐる／＼巻に縛り上げ襟から胸にかけて真白に白粉の浮ぶ首を細い紐でぎゆうと締めたらしい顔は真赤になつて、苦惱にゆがんだ白い首には細い筋が何本も浮び出て紐は益々喰込むだらう、体は苦痛のため蛇のようにうねりのたうつだらう最後に豊満な腰部

を灼熱の棒で責めつけた………そのような淫らな妄想をえがき乍ら劇場を出ました。

帰り途化粧品店で固練の白粉と髪を買ひ、古着店であるべく艶かしい長襦袢一枚と伊達巻を五本ほど買つて来ました。夜、皆が寝静まるのを待つて二階に上り大きな鏡を持つて来て戸をしめ切つて買つて来た白粉を水にふいてはけにふくませてあごの下から首胸背中とべたべたと真白にぬり上げてこんどは長襦袢を着て伊達巻を長くつき合わせて腹に巻き乍ら力いっぱい締めつけるのです。

伊達巻はすべすべしているの巻毎に引ばるとぎゆうつという音がしてぐい／＼と締つて行きます私の体は胸が細くくびれて両手の指で計るともう一寸位でとゞく位細くなりました。下腹と上にくびれ出た上を更に巻き締めるので全部巻き終つた時は立つていられない位息苦しく、はあはあと肩で息をし乍ら別の布で作つた縄を体に

巻いて一方を柱に止めてびんと張つて廻り乍ら柱に近づくとも自然にぐる／＼巻になります。首には紐を二廻り巻いて一方を柱に止めてこんどは反対の柱に廻して残り足を縛るのです。そうしてもがくと私の首は柱の真中になつていて両方から引張られて締められる計算になるのです。

こんどは鏡の前で横になつて鏡にうつる自由を失つた自分の姿を見たら体を蛇のようにのたうたせてもがいているのです。足をまげると私の化粧した白い首に紐が喰い込みみ／＼ずばれのように何本も筋が浮び顔は真赤になつて苦痛にゆがんでいます。そして最高頂の一時が終つてしまうと、後はもう苦しきばかりで幾重にも巻きに巻いた紐や縄を解くのが大変で、こんなに沢山の縄が巻かれていたのかと自分乍ら驚く程でした。やつとの思いで解き終えるとぐつたりとなつて襟首の白粉を落すのがやつとでした。

白い首、豊満な肉体、縄、此等が交錯して走馬燈のように私の脳裏に浮んでは消え、浮んでは消えて果しない悦虐の泥沼に引ずり込まれて行くのをどうすることも出来ません。こうして私は永久に白い首と縄に悩まれ続ける事でしよう。私の名はサジズムとマゾヒズムの両方を兼ね具えた異常男です淫火に出て来る小百合夫人のような女性が私の前に現れないだらうか………

私は時折、自分の過去に現れた長谷川や愛子、それに捕物遊びをした幼い頃の友達の事等を思い出して、今頃はどんな生活をしているだらうかと懐しく思うのです。そして奇譚クラブの小説や告白の中に出てくる人物が私の空想の世界の人物とが入り混つて、そしていつしか、私自身もそのイメージの世界に溶け込んで現実と夢幻との境がわからなくなつてしまうのでした。



# 愛と憎しみ

塙 不二子



(一)

「あッ、あの方だ」

と私は思わず知らず跡を追いました。渋谷駅西口からはき出される人達がかげ込む公衆便所の辺りを職場にしている妾なのです。初めのうちは駅の改札口のすぐ前や地下鉄の登り口、証券会社のビル横まで進出していた事もありましたが、だん／＼追い払われてこんな所へ来てしまったのです。妾は肉付の締った割合にスラリとしたタイプで、もうコートなしの和服にグリーンのシヨールだけといった恰好に自分でも自信を持っていました。

「お茶飲みませんか？」

と妾の方から声をかけたのです。

一週間ほど前のことです。

「もう飲むのは御免だ、早く帰つてグツスリ眠りたいよ」

そういつて手にさげていたケーキの包みを妾の方へ無造作に出し乍ら

「おい君、これ上げるから今夜は御免／＼」

とスタスタ井の頭線の階段を上つて行つてしまいました。

そのサツパリした態度に、いつもなら何んとか云つてしつこく喰い下る妾ですが、どうしたのかボンヤリ見送つてしまったのです。

きつと此処を通る人だろうから、近い内に今度こそしつかり捉えてやろうと待ち構えていたところだったのです。

背を叩かれた彼はびつくりした顔で、振り向きざまじつと妾の顔を見詰めています。

「フ、分かつて？この間、ケーキを頂いたの妾よ」

「あゝ君か、でもよく分つたな」

「そりや分りますとも、妾ラブしていたんですもの」

本当は彼の歩き方が一風変つた急不足であつたのです。

「妾この先の喫茶にいろのよ、お茶どう」

「今夜もこんなに酔っているし、

もう沢山だよ」

「それなら静かな処へお供させて妾、お店へ行つて持ち物をとつて来るから待つてね」

実際そんな安バー等へ案内しようものならどの位ぶつたくられるか知れやしない。大人しそうな彼は抗らわずに妾について来ました女給が三人交代で客引に出る規則になつていますが、場所が悪いのか客もありません。何んとか持ち物だけ手早く取つて出ようと思いましたが、店へ顔を出すなり、

「マスターが呼んでるよ」

又客を引ぱつて帰らないと小言を浴せられるに決つてゐる。いやになつてしまふ、しぶ／＼梯子を



上つて行く。四坪ばかりの狭い店だから満足な階段など無くて、梯子の裏から覗かれるとすつかり下から見えてしまう、上りきるとバタンと上げ蓋式に板を元通りに下して、上り口の上まで部屋の一部に使う仕掛けになつていたので

す。

「おい不二子、客をどうした？今夜は誤魔化そうたつて瞞まされはしないぞ、今小窓から見えていりや男と一緒にたじやないか、あれは何んだ。お前はな、この店の女なんだぞ、客を一人でも多く引張つて来るのがお前たちの商売だぞ其れに何んだ、これから何処か安ホテルへでもシケ込もうてえのか」

見られてしまつたか、今更下手に弁解したとて仕方がない、妾は黙っていました。

「おい、つつ立つていねえで此方へ来な」

マスターは妾の腕をグンと邪険に引張りました。

妾は思わずよろけて彼の膝の上へ転つてしまいました。

「お前、痛い目が見たいんだろ見たけりやウンと見せてやるよ」

妾はもう駄目だと思いました。

階下への逃げ口は塞がれているし、バーテンや女達も気をきかせて何処かへ行つてしまつたのでしよう。

「何すんのさ」と妾も睨み返しました。

「やい泣き面かくなよ」

そのまゝ妾を横ざまに抱きすくめ様とします、妾は力一杯押し返してパツと飛びのきました。がベニヤの壁板にどんとブツつかつてはねかえりざま前に倒れました。

「待て」

と男の力で今度は妾の肩に手をかけるとグツと胸をはだけさせ、帯を解こうとするのです、妾はマスターの二の腕の内側の柔かいところを思いきり抓つていました。パツと立ち上つた男は何時持つていたのか革バンドを片手にひつ下

げているではありませんか、妾はハツと思ひました、その妾のひるむ隙に乗じてバンドが振り上げられたと思つた瞬間、妾の肩から背中へかけてじんと熱い棒が走りました。妾は壁板にしがみ付いて、

「許して、許して！」と叫んでいました。

「ザマア見ろ、初めから大人しくしていりやいゝんだ」

「はい、ザマだ」

帯はとけ、裾も乱れシユミーズも肩からさけて上半身は裸になつてしまつていました。

「いゝ体だ」

男は尚も妾を抱きすくめ様と近寄つてきましたので、ガブツと鞭を持つていた手首にかみ付きました。

「何するんだ、よしウンと懲らしてやるぞ」

「不二子おれが憎いか、俺はお前が可愛くて仕方ないんだ」

妾の細紐を抜き取ると腕を後にネジ上げました。妾は嫌な男からこんなヒドイ目に逢わされて反抗したい心の底から、何んだが熱い燃える様なものを感じて来ました

「おい、こうしてやる」  
まだ妾の体温が残つていそうな今解いたばかりの細紐でネジ上げられた両腕をしつかと縛られ更に乳房まで一巻も二巻も廻してグツと締め上げられてしまいました。

か。

「やい、こうしてやる」

縛り上げた妾の裸体をむさぼる様に眺めていた男は、汚れたタオルで妾の口までしつかり塞いでしまふと、もう一度鞭をとり上げて転つてゐる妾を用捨なく叩き始めました、妾は古畳の上をゴロゴロころげ廻つて少しでも鞭の先を逃れようと身悶えしましたが、声さえ出す事が出来ません、呻めく、苦しき、そして快き。

「不二子おれが憎いか、俺はお前が可愛くて仕方ないんだ」

男はそう叫び乍ら尚も鞭を腿や腓までも浴せて来ます。妾だつてどうしたと云うのでしよう。此ん

なにされても、この残忍な男が憎めなくなつて来てしまつたのです。外に待つてゐる彼の事など、すっかり忘れ果てゝ今では自分から鞭の音と、肌を走り廻る焼ける様な苦痛にのたうち廻るのでした。

妾をこんな女にした義兄さんがうらめしい、義兄さんの馬鹿、妾は呻き声と一緒にこう叫ばずにはいられませんでした。

立てば頭のつかえそうな中二階です、天井も張つてなく屋根裏が丸見えの裸の梁を見上げると、男は妾の細紐をばらりと解いてしまいました。

妾はもうハア／＼喘ぐばかりで抵抗する力もありません。男のするまゝになつていました。妾を引立てる様に起こすと裸の梁に両腕を左右別々に縛りつけてしまうのです。丁度十字架にかゝつたキリストの像の様、ロマンチックな夢ゲーキの一と包から生れた哀れな女囚です。無防備の裸身を思うまゝ男の眼の前にさらけ出している

のです。部屋の中央に磔になつてゐる妾は前から後からも男の燃え立つた視線から覆いかくす何物もないのです。これからどんな残酷なお仕置きが加えられるのでしょうか。

## (二)

義兄さんの馬鹿、妾にこんな痺れるような秘密な喜びを教えたのは義兄さんなのです。

すぐ傍の土手の上を京成電車が時折ゴォーと通つて行く。妾は昔々綴方教室〃という女の子の作文で有名になつた東京の四ツ木にその頃住んでいました。姉は前から銭湯に行くのが嫌いで、裏のゴム工場の流し湯をバケツに汲んで来ては狭い台所の隅で行水を使うのです。体だけ大きくともまだ子供ぽかつた妾にも姉の真白い肌に何んだか青や黄色い瑕跡が絶えないのを不思議に思われましたが、其れが何んの為めか分りませんでした。

戦争が益々激しくなるにつれて女工員をしていた姉が妊娠六カ月で過労と營養失調からか、とうとう亡くなつてしまいました。最後に息を引き取る時(義兄さんと此れから仲よく暮しておくれ)と云われた事が妙に忘れられません。

急にガランとした家の中で一人ポツノンと義兄の帰りを待つてゐるのが淋しくて堪りませんでした。靴の音がするとやつと歸つて来てくれたかと、まるで恋人でも待つていた様に胸がワクワクして来るのですが、其の音が途中で消えてしまつたりすると、其の遺瀨無さと云つたらありませんでした。

丁度勝手元でおそい夕食の跡片付けをしていた時です。ガラツと戸が開いたのでハツと思つて振り返つたとたん、どうしたバズミか持つていた洗いたての茶碗がすべつてガチンと大きな響を立て、板の間に碎け散つてしまつたのです。ズカズカと上つて来ました残業帰りの義兄がやにわに腕をネジ

上げて妾の頬を打つたのです。今迄に見たこともない怖い顔付でした、妾は思わず其処にしやがみ込んで、両手で顔を掩つて泣き出しました。

又こんなこともありました。

姉のお墓参りに丁度義兄が珍らしく休暇が取れたので留守をお隣に頼んで、二人して出掛けた時のことです、妾は踞んで一心に墓石にお水をかけていると、義兄がじつと妾の後から見詰めているのはありませんか、その眼が妾の大人になりかけた尻の丸味に注がれていて、その眼の中に妙にネバツこいものが光つていましたのでゾォーとしたことを覚えています。

其頃は愈々空襲が烈しくなつて今日焼き払われるか、明日焼き払われるかと毎日心も体も落着かない日が続きました。あの辺は今でもゴミゴミした処ではありますがたつた一人留守番している妾はなんだが、恐ろしくて仕方がありませんでした。早く歸つて来て呉れ



「ばと義兄一人を頼りにしていた時ですから、お茶碗をこわしてグツと両腕をネジ上げられて頬を叩かれた事も忘れて、まるで新婚時代の若妻の様にいそいそと義兄を迎えたものでした。丁度配給のお酒があつた日です。貧しいながらも食卓にお酒をつけて。義兄も気嫌よく、たつた一合の酒をうまそうに飲みました。」

「近頃急に奇麗になつて来たね、まるで姉さんそつくりだよ」

一寸顔を赤らめた彼は妾の顔ばかり見てそんな事を言いました、何んだか妾の方が羞かしくなつて下を向いてばかりいました。

「知らない人は夫婦だと思つていろよ」

馬鹿馬鹿しい、二十も年が違つてと思つても、その言葉には万更悪い気持がしませんでした。

「風呂へ行つてくる」と長火鉢の引出しから小銭を出しかけて「おい、此処へ入れて置いた金はどうした？」

「知りません」

「知らない？」

其の頃生活は苦しくて義兄も内心イライラしていた事は事実だけれど、今晚はスツカリ楽しそうにしていたのに、何うした風の吹き廻しだつたのでしよう、別の処へでも置き忘れたことと妾は気にもかけずに、石鹼入と手拭を用意しました。

「本当に知らないのか、隠したつて駄目だぞ」

「えッ？」

却つて妾の方がその声の大きいのに驚いて振り向いた位でした。今の先までの義兄とは全く別人といつた男が怖しい形相をして立つて立っているではありませんか、妾もシヤクにさわつて返事もせずに黙つていました。

「白状しろ、本当の事を云わないか」

と矢庭に妾の胸をドンとつき飛ばしました。妾は不意をつかれてアツと云つたきり仰向けにぶつ倒

れました。彼は起き上ろうとする妾のスカートに手をかけて、とうとうシユミーズ一枚にしてしまひました、両手を後に廻すと揃えて縛つてしまつたのです。勿論妾は夢中になつて暴れたのですが、そうすれば尚更、乳房にまでも紐が喰い込んで来て、もう何うする事も出来ません。殺されるのかと覚悟をきめました。

妾が完全に縛り上げられて転されるのと義兄はニタツと笑つた様です。妾は初めて自分の縛り上げられた恥しい姿に気付いて耳たぶまで真赤にして、顔を畳にすりつけていました。義兄はそういつた妾の姿を、じつと射るような眼で眺めているのです。妾は自然に涙が出て来て仕方がありませんでした。腰から背中へ熱湯でも浴せられる様な感じ、少しでも逃れようと跪いて見ましたが駄目でした。義兄は皮の鞭をふるつていたのです。姉もきつと此んな風に打たれたら、縛り上げられたり、虐げられ

たのでしよう、それだからこそ銭湯にも行き度がらず、行水なんかで汗を流していたのです、然かも姉は或はこうされたことを喜んでいたのかも知れません。姉夫婦は側から見ても仲のよかつたことは疑う余地もなかつたのですから。

義兄は妾の髪の毛をつかんでゴシゴシと畳にすりつけ、「白状しろ、白状しろ」と狂人の様に迫ってきます、妾は只「かんにんしてかんにんして」と夢中で叫び続けるばかりでした。生れて初めて知らされた折檻、そして叫んでいるうちに何んとも云えないうつとりとした境地に陥つて行くのでした。縛つたまゝの妾の裸身を義兄は力一杯抱き締めまると、耳のそばへ唇を寄せて、

「こんな事しても、仲よく一緒にいて呉れるか」

と心の底からの願をこめて囁いたのです。妾はたゞ頷くばかりでもう声も出ませんでした。

## 淫

(みだらび)

## 火

(第九回)

栗 松 井 籟 子  
原 伸 画



「一寸、あんた……」

呼ばれる声に、村山富男は「悪いところで……」と思った。振りむくまでもない、松枝に違いなかった。知らん顔して行きすぎようとする村山の耳がちぎれる程引っぱられた。

「痛いよ」

村山は言った。

「ほら、知つてたくせに」

松枝に言われ、なるほど、道の真中で急に耳を引っぱられれば、痛いもくそもない、もつと激しい言葉がとび出すはずだと思った。

「なに、お前ぐらいのもんだからね、俺はまだ誰にもそんな乱暴を、まして道の真中でされるような借はないよ」

「何をうだうだ言ってるのよ。あんたもう仕事済んだの？」

「仕事は途中でぬけてきた……」



「あんた！」

と、松枝は大きな声できめつけた。

「お金がないない言つて、何よ、仕事を途中でサボるなんて……。たまに入ればのんじやうし、私はいつたい何を着ればいいのよ。サボるほどお金があるのなら、私に頂だい」

松枝は手の平を村山の目の前へつき出した。

「ほら」

と、村山は小百合夫人から渡されたイヤリングを見せたが、松枝がそれをとろうとする手を押さえて

「もうけ仕事なんだよ。これがすめばお前にもいくらかやるからね」

「あてになるもんか、一寸みせてよ、それ……」

村山は松枝にとられないように用心しながら、そつと手をあけてみせた。彼の太いごつごつした指と、厚い手の平で、白い真珠のイヤリングはブラチナのねじが折れそうに華奢にみえた。

「何だい、そんなもの、大事そうに持つていて……。拾つたのかい？ 百円か二百円出しやどこにも売つているよ」

松枝が軽蔑するように言い放つたので、村山はむつとした。小百合夫人にあこがれている気持に唾をはきかけられたように思つたのだ。

「これはね、お前のもつようなものじやないんだ。本ものなんだぜ」

「わかるもんか」

松枝はまだブラチナ台の本真珠のイヤリングなんかみたことがないのだ。はじめつから、村山が安物を拾つて商売まで投げ出して

ると思うから腹が立つた。

「あんたもいいかげんおめでたいね。第一イヤリングつてものは両方の耳にはめるもんなんだよ。それ一つ持つていつて売れるもんか。ただだつてもらい手はないよ」

「違ふよ、これは本ものなんだから、真珠の値段で売れるし、ブラチナはブラチナで一匁いくらつて売れるじやないか」

「じゃあ売つておいでよ、私、一緒に行つてやるから、フン、売れるもんか」

「売れるさ」

村山はむきになつた。

「そんなにいうなら売りに行こうよ。さあ、どこでもいいじやないか、その辺りの貴金属やで聞いてみようよ」

松枝は馬鹿にしたように言うのと、村山をこづくようにした。

「売りや売れるけど、いいんだよ、これは売らないんだ」

村山は言いながら、困つたことになつたと思つた。松枝に小百合夫人の名を出すことは禁物なのだ。しかし、ここでぐずぐずと松枝と押問答していたら、貴船を迎えに行く時間がなくなつてくる。どうしたらいいかと考えた。

二

小百合夫人は習慣のように何度も時計を見ながら、村山富男を信用して待つてゐる自分に苛立つてきた。イヤリングの一つぐらゐどうでもよかつた。たゞいつたん背を向けた世界へ、もう一度近よるうとしてゐる自分が苛立たしいのだ。南京虫といわれるその小さな腕時計をもう何度見たことだろう。七時にはまだ間があつた。貴船

一郎が来る来ないより、会つてそれからどうするかということに思案しているのだ。いつそ会わない方がいいのではないかという心の声が大きいの。

しかし、村山ならホテルへ誘うかもしれないが、まさか貴船一郎が、今日会つていきなりどこかゆつくりする所へ行こうと言うはずはないと思つた。ただお茶をのんで、何なら食事ぐらい一緒にして別ればいいのだ。そして、本職は画家だと言つた貴船のモデルになつてもいいと言え、貴船が厭だとはいわないだろう。西洋の名画には、貴に似た宗教画が数多い。日本の貴絵というのは芸術的にとかく低く考えられるが、女の裸体の美しい線が洋画の技法でえがかれた時、貴絵の中にも芸術性はあるだろうと小百合夫人は考えるのだつた。日本画でもいい。花吹雪の下で、銀かんざしも重たげに縛られた雪姫の絵を思い出す。有名な画家の筆になるものだつた。

貴船一郎を待つ心は被虐を待つ心なのだ。それにしても、本当に貴船一郎は来るのだろうか。小百合夫人がそう思いながらドアの方へ目をやつたのと、村山富男が入ってくるのと一緒だつた。後に松枝がいた。

「すみません」

いきなり村山は小百合夫人にあやまつた。

「こいつにつかまつてしまつて、今までこいつをまくのに骨折つて

### 前号迄の梗概

被虐の喜びを味つてみたい小百合夫人は、つみしき深い上流家庭の人妻として夫の雄作にそれが言えず、むしろその夫婦生活は淡白びつた。ある日姿を変えて大阪の新世界という下町の盛り場を歩くうち、村山富男というマゾヒストと知り合い、東京から渡つて来た不良少女で、つる子という名だと偽つた。ところが村山富男の情婦松枝の嫉妬からみじめなめにあわされるのを画家くづれの青年、貴船一郎に救われ、その内妻順子にあう。その生活が小百合夫人の夢にえがいた悦虐の世界であつたのを知り、激しくそれに惹かれる心と、その異常さをおそれる心と相半ばして、小百合夫人は夫の雄作を旅に誘う。雄作はその旅を契機に学友の南部邦彦との男同志の情交を清算しようとはかつたが、邦彦は旅先まで雄

作を追つて来て、小百合夫人に雄作との關係を告げてしまふ。しかし夫人は邦彦の言葉を信じようとしないので、夜の山道で夫人を縛りあげ、猿ぐつわまではめて草むらに倒し、それと知らぬ雄作とのみだらな会話を聞かせる。雄作は夫人が邦彦との關係を知つたことを打あけられると、羞恥と困惑に我が身を責め、夫人の手で肉体的に責められる方がましだと思ふ。被虐に喜びを求めていた小百合夫人は斯くして、偶然加虐の味を覚え、自分自身を見失ふ思いで再び新世界へ行つてみたくなる。途中みなみの人通りの中で、サンドイツチマンをしている村山富男に声をかけられ、貴船一郎が自分に会いたがつてゐるのを知り、貴船をよんできてもらうよう、ことづけの証拠にイヤリングを村山に渡し一時間後に会うことを約束する。

いたんでおそくなつて……どうも役に立たないで本当に……」

ぼそぼそと言ひ訳する村山の横から松枝が口を出した。

「いつかは失礼。あんたに会うならあんたに会うつてはつきり言え、ばいばいのに、村山の奴、へんにもじくしてゐるんでしよう？じやあ、これやつぱりあんたのね」

松枝は村山からとりあげたのか、真珠のイヤリングを出した。

「ええ」

と、小百合夫人は答えたものの、松枝の手からそれをうけとつていいものかどうかと一瞬とまどつた。



「そうわかれば別に文句はないのよ。村山がひとりでもいいことしようとするから面倒になるのよ。ああだこうだ言つたあげくに、やつとあんたがここで待つていて、貴船を村山がつれて行くことになつてゐるんだと言ふんでしよう、本氣に出来やしないわよ。おそくなつてごめんない。私、一と走り行つてくるわ。もう一寸待つてよ」

松枝がいうのに

「もういゝですわ」

小百合夫人は氣弱く言つた。

けれど松枝は村山の言つたもうけ仕事というのがやつと納得出来たのか、あわよくば、イヤリングを自分がせしめようとしたのか「いいえ、すぐですもん。村山みたいなものろしたことはしてないわ。自動車で行つて自動車で帰えれば三十分とかかりやしないのよ。あんたを案内して行つてもいいけれど、貴船には順子つて人がいるからね、うるさいでしょう？ 私ならうまいことごまかしてつれ出すから大丈夫。村山じゃへまするところだつたわよ。ハハ、ハハ、」

と、男のように笑うと、片手にイヤリングをつかんだまゝ、外へとび出して行つてしまつた。

「待つてよ、俺も行く」

村山は大急ぎで立上ると

「じゃあ、もう三十分待つて下さい、本当に済みません」

そういうと、小百合夫人の返事も聞かずに、松枝のあとを追つて行つてしまつた。

## 三

それからきつちり三十分、小百合夫人ははじめて入つた喫茶店でコーヒ一杯で腰をおちつけるのもためらわれて、ジンフイズとチーズをもらつた。洋酒になれた夫人の口にはレモンの味と甘みが多いソーダ水のような薄いジンフイズだつたが、わざと時間をかけてなめるように飲んだ。折角村山夫婦が骨折つてくれているものを、すつぽかして帰えつてしまふわけにもいかない。まして村山の女にはひどいめにあわされたことがあつたとはいへ、その人柄を憎む気はなかつた。むしろ、あの時と今日を比べてみると、その見幕の違いが面白く思える程だつた。

村山に会うたのは今日で三度目、芦屋で会つたのをいければ五度目になる。村山という男も憎めない人だと思ふ。はじめに散財してくれただけは帰えりしなに置いて帰えつたが、二度目はおごつてもらつてゐる。サンドイツチマンをしてゐる男がビールをおごるのは、小百合夫人が本真珠の首飾を彼にやるのと同じ位のおごりなのかもしれないと、夫人は人のふところを察するのだつた。村山の女にやつてしまつてもいいと、夫人は思つた。

店の前に車の止る音がした。

ドアのあく音に貴船が来たのかと、我にもなくあからむ小百合夫人は、入つて来たのが村山の女と知ると、自分の頬の赤みをアルコールのせいにするように、急いでコップをとりあげて、残りを一息にのんだ。

「待たせちやつたわね」

松枝は相変らず乱暴な口調でいうと

「表に自動車待たしてあるから一緒に来てよ。貴船さん鬚そりたいたつてさ。そんなの待つてたら三十分つて約束がおそくなつちやうから、あんたを迎えにくる間に、鬚もそつて、顔も洗つて、男前になつておきなさいつて、そう言つてやつたのよ」

小百合夫人はその言葉を疑わなかつた。鬚をそるという考えが、自分に会うのを貴船が子供ののように、恥しがっているようにもとれた。

自動車は天王寺へ向いて走つて行つた。まだ焼跡が残つていてほ

の暗い道を、松枝の指図で何

回か廻つた。小百合夫人にはどの辺になるのか見当もつか

なかつた。

「その角でとめて」

と、松枝はいうと

「このさきは自動車が入らないのよ」

と、小百合夫人に言いわけした。

こわれた垣を入ると、茶室のような離れと、土蔵の窓から灯が洩れていたが、母家は焼けたままになつていられしく、その離れの方へ松枝は夫人を案内した。

その丸窓の灯の下に貴船一



郎がいるのかと思うと、小百合夫人は足もとがあやしく乱れた。急ぎたい心と、まだ躊躇する心が体の重心を支えかねる感じにするのだ。

けれど一歩中に入つた小百合夫人は

「あつ！」

とかすれたように叫んだ。恐いものを見た時と同じように、足がその叫びを反射して逃げ腰になつた。それをさえぎるように、松枝はピシヤツと戸をしめると、鍵をした。

「いらつしやい」

座敷の真中に突立つたまゝ、冷やかに小百合夫人に声をかけたのは貴船一郎の情婦順子だつた。

しかし、小百合夫人は順子を見て叫んだのではない。床柱を背中に村山富男が縛られていたのだ。

「俺が悪いんじゃない。つるちやん、許してくれ。松枝にあんな所で合わなければよかつたんだ。俺のせいじゃないんだ。わかつてくれよ、ね」

村山は言つた。

「なにがつるちやんだい。そんなにされてもまだ甘いこと



言っているんだね、憎らしい」

松枝は村山の膝をこりくと踏んだ。

「あんたに手を貸してもらわなかつて、ちやんとこまでつれてきたよ、もうこつちのもんだ。フムムム」

松枝は小百合夫人を見たが、豹が獲物にとびかゝるよ

うな鋭い目の中に皮肉な微笑をさえ浮かべて、小百合夫人に近づいた。夫人は棒立ちのまゝ、じり／＼、じり／＼と松枝との間の空気を押しつけられてくるように息苦しく、声も出なかつた。

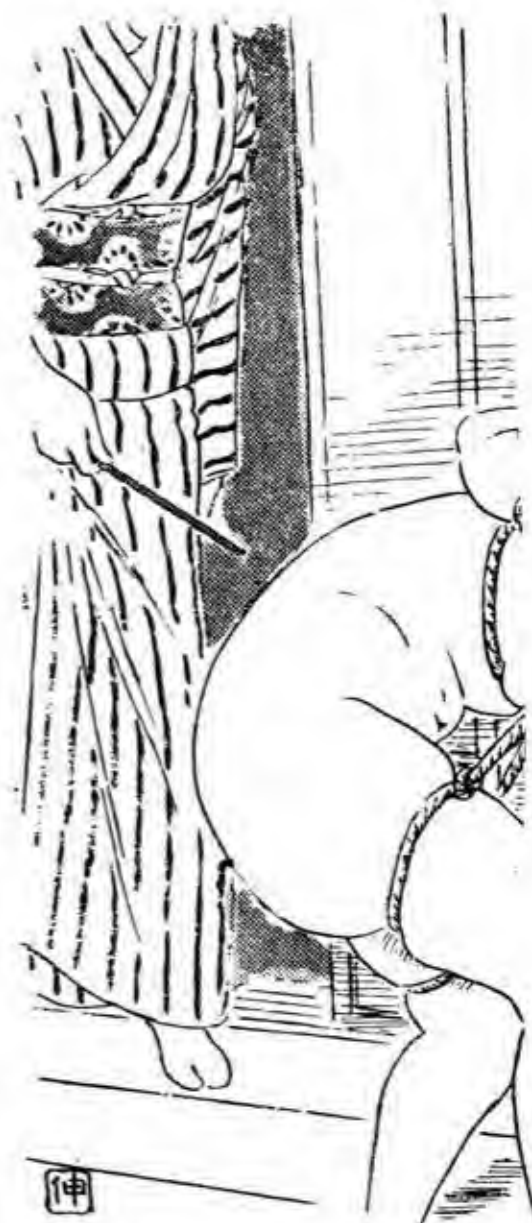
松枝がパツととびかゝつて夫人の手をとつた時、本能的に逃げようとしたが、順子に肩を押されて、片ひざついてしまった。順子はすでに手の中に握りしめていたのか、手拭で小百合夫人の口をおもつて、かたく猿ぐつわをはめると、片手をつかんだ。

「まず裸にしちやおう」

松枝がいう言葉に、はつとしてもがいたが、ひとりにふたりではないいつこない。まして松枝の底力は、村山の様な頑丈な男を扱い慣れているのか、この前、身をもつて知つたように、逃れるすべはなかつた。

ボタンがはずされ、上着もブラウスもとられてしまった。

「スカートはあとからでもとれるよ。さきに上をひんむいちやおう」スリツプのたすきが肩からすべるようにおろされて、ブラジャー



て押しつけていた。

「一寸、この時計をはずしとこう」

順子が細引を持つてくると、片手を順子につかませて、松枝は夫人の腕時計をはずした。

「いい時計だね」

松枝も装身具には女らしく惹かれるのが、一寸の間見惚れるように外国製の小さい時計を見ていたが、そのすきに夫人が逃げようともがいたので、足の力を増してふみつぶすように夫人を押さえた。

細引が夫人の手首でぐつと締める。もう抵抗のしようもなかつた二た巻、三巻き、乳房の上と下に廻わされて、ゆがんだ乳房が細引の間からとび出した。

「長い紐だね、二の腕へかけて……」

言いながら、たのしむように松枝は夫人の二の腕を締めつけた。

「チエツ、いい恰好だね、縛られて首飾をしているというのはおかしなもんだけど、まあ真珠よりは縄の方が似合いそうだ。これはも

がはずされると、丸い形のいい乳房が出た。小百合夫人は村山富男の視線が痛かつた。「さあ、縄をかけるんだ」松枝がいうと、順子は夫人の手を松枝にまかせて細引をとつてきた、その間松枝は、夫人の両手を後へぐつとつかんで、まるで荷物でも縛る時の様に片足を夫人の肩にかけ

らつところ」

松枝は首飾をはずして鏡台の上へのせた。

「ほら、こうして手を思いきり上へあげて、首へ縄をかけるといい気持だろう？ え？ 何とか言つたらどう？ フフム、猿ぐつわで云えないのか、じゃあ、こつくりしなよ、え？ いい気持だろう？ 違う？」

松枝は縄尻をとつたまゝ小百合夫人に言つた。夫人はたゞじつとしていた。どうしてこんな恰好にされて、「ええ」とうなづくことも「いいえ」と首を横にふることも出来るだろう。

「え？ 厭かい？ フフム、痛いかい？ 首を横に振るか縦に振るかすりや返事が出来るんだよ。返事しないね。いいよ、今に返事させてやるからね」

松枝はというと

「さあ、スカートもとつてしまおう」

と、順子に指図した。

「何故こんなめに合わされなければならぬの？」

夫人はそう問いたかつた、しかし、問うまでもない、二人の女の嫉妬なのだろうとは察せられた。そして、それよりも、いつたいこれから自分はどんな風に責められるのだろうと思うと、女二人の手におとなしく身をまかせるよりは、抵抗出来るだけしてみたかつた。村山の目の前で、自分が少しでも女達に責められることに期待をもつように見えるのは恥しかつた。力の限りあばれながら、小百合夫人はその反動を効果にいられた。

「静かにしたらどう？」

女達は夫人がもがけばもがく程、よけい苛めるのを面白がつた。

「私達は疲れたら休めるのよ、でもあんたは苦しみつづけなければならぬんだから、あんまりあばれない方がいいわよ」

松枝は言つたが、小百合夫人は足にまでかかる縄をはずそうともがいた。

「静かにしないのね。じゃあ、ひとりであそばせてあげるから此方へきなさい」

松枝は縄尻を持つて夫人を立ち上らせた。やつと立ち上ることは出来たが後手に縛られた縄は首にまわつて太股へ廻つてゐる。真直に立つことさえ出来なかつた。頂度天井から吊り下つたような型に手を高く背にあげていながら、体は前かがみになつた。それで歩けと言われても、どうやつて歩けるだろう。

「さつさと此方へ来なさいよ」

松枝は首の縄の間をつかんで引いた。小百合夫人はよろよろと爪先きだけで小さきみに歩くより仕方なかつた。

「早く早く」

順子が面白がつて、後から小百合夫人の尻を火箸で突つついた。何をされても声も立てられない。裸体のみじめな恰好を村山富夫に見物されているのだ。

松枝に引っぱられ、順子に責められて、やつと縁側の柱の所まで来たが、今度は座れといわれても、自由に足をまげて座るのがむづかしかつた。女二人にさんざん小づかれてからやつと柱を背に座ると、松枝はその小百合夫人の足の下へそろばんを置いた。大かた商店からでもまきあげてきたのか、大きく頑丈なそろばんだつた。小百合夫人の重味をそろばん玉一つ一つががつちりと受けとめた。

「ああつ！」



夫人は猿ぐつわの下で思わず呻いた。何とかして脛からそろばんをはずしたいともがいたが、松枝は別の縄を持って来て、夫人を柱に縛りつけて、足も動けないように縛った。

「まだそんなに痛くないでしょう？」

順子はいつも自分がやられているのか平然と言った。

しかし正座させた足の下のおそろばんは、肉にくいこんで骨まで押しつけるように痛かった。普通の間隔で呼吸が出来ず、「ああーっ、ああーっ」と息をあえいだ。

「どう？ 少しは静かになつたわね」

松枝は気持よさそうに夫人を見おろすと

「私を恨んじやいやよ。私はべつにあんたを貴船さんに会わさないつもりはないのよ。此処へ来るまで貴船さんをお迎えに来たんですもの」

妙にやさしい物言いで言い出した。

「私はね、お使い賃に耳飾か首飾をもらうつもりだつたのよ。けど貴船さんは此の頃此処へ一寸も帰えんないんだつてさ。順ちゃんのお金を持つていつたきり帰つて来ないので順ちゃんが困っているときけば可哀想になつちやつてね。あんたを裸にしといてあんたの洋服を借りれば順ちゃんだつて稼ぎに行けるつてことに気がついたのよ。ね、いい考えでしょう？ だからあんたは貴船さんが帰えつてくるまで此処へ泊つていればいいのよ。裸でね、フフ、ハハ、でもただ裸になつているのもつまらないでしょう？ だから一緒に遊んであげているんじゃないの。あんたはいつか村山の手を縛つてくれたでしょう、そのお礼よ。順ちゃんも縛られた所をあんたに見られたから、あんたの縛られた所を見ればおあいこつてわけよ。当分

二人で大切にしていけるわ。村山の奴がうるさいんでね、どうしようかと思つているんだけど……。まあ、村山の稼ぎの分はあんたの首飾でも売ればおつりがくるんでしよう？ あんた金持なんだね。宿泊料にもらつておいてあげるわ……。」

松枝のおしやべりはいつはてるとも知らなかった。そろばんの玉はもう痛さの感じがわからなくなる程足にくいこんだ。夫人は縄に締めつけられた胸を波打たせてあえぎつづける。

すると松枝は

「順ちゃん、あれのせてみよう」

と、片隅にたてかけてあつた裁ち板を目でさした。それは一寸近くも厚みのある硬いへら合だつた。

二人がかりでそれを小百合夫人の膝の上へどしんとおけると、それでもまだ足りないと思つたのか、その上へ瀬戸物の火鉢をのせた。火鉢を使う季節もすぎていることとて、灰がかたまつて、ひとりでは持ち上らない程重い火鉢だつた。

「ううっ！」

小百合夫人は思わず呻つた。それは昔の絵にある石責めと同じだつた。そろばん責めというのかもしれない。

「ううっ！」

夫人は口の中の手拭をくい破る程に歯をくいしばつた。そろばんと板と火鉢に、上下から締めつけられた足は指の一本一本が引きつって、猿ぐつわを透して呻き声が外へ洩れた。こらえようとして体に力をいれれば、足の指だけではなく、脛も太腿も筋がつれた。

「ああっ！」

夫人は火鉢の中へ顔を埋めるように突伏してしまつた。

「そうはさせないよ」  
松枝は夫人の顔を引きおこすと、首へかけた紐を柱に廻して結んだ。

「火をおこしてよ」

順子に言うと、やがて真赤におこった火を夫人の膝の上の火鉢の中に入れて、火鉢の中に落ちてゐる煙草の吸いがらをその火の中へ集めてくべた。めらめらと燃えればまだしも、吸いがらは火の中でくすぶつて、ただ煙をあげていぶるだけだった。

小百合夫人はコンコンとむせんだ。猿ぐつわをはめられていても、鼻は煙を吸つてしまう。そのくせ咳は外へ出ず、体をねじつて苦しむばかりだ。しかし柱を背に縛られた身は苦しむ程、痛さが増し、足の下にそろばんも、膝の上の板も、火鉢も、彼女を責めつけこそすれ、どけることは出来ないのだ。

「かんにんして、かんにんして……」

声にならない声をふりしほつて、小百合夫人は縛られた体を悶えつづけた。

四

小百合夫人が雄作をおいて一と足さきに帰阪したのを芦屋の家では知らなかった。だから、二日、三日と小百合夫人の行衛が不明でも誰も尋ねようとはしなかった。雄作は本邸に帰えつてゐるものと思つていたし、留守をあずかる家の者はまだ東京にいるものと思つていた。



小百合夫人が無断で家をあけていることがわかつたのは、雄作が帰宅してからのことだった。

「奥様はまだあちらへお残りあそばして……？」

と女中に聞かれ

「いや、さきに帰えつたが」

と、雄作が思わずいうと

「はあ？」



と、戸惑った様に問い返す女中の様子から、小百合夫人が箱根から家へ帰えつていないことを知った。雄作はひとりで東京へ出て、会社の用事を済ませて帰えつて来たのだが、伊勢だか志摩だかに旧師をたずねによつたとしても、もう帰宅していなければならぬ日時だった。雄作は急に心配になった。箱根で思いがけない事件があつたあとだけに、夫人の行動が案じられた。

「そうか、じゃあ途中志摩の方を見物してくると云つていたから、それでゆつくりしているんだろう。もうそろそろ海のいゝ季節だからね」

雄作は女中の前をとりつくろつたが

「留守中の新聞をとつてあるだろうね、箱根から向うは新聞も違うんだよ。ハハ、ハハ、」

と、磊落に笑つた。

しかし、書齋に入ると、真先に新聞の三面記事をつぶさに読んだ。夕刊新聞まで丹念に読んで「身許不明の自殺美人」というような記事にどきんとした。しかし、変死にも事故にも小百合夫人らしき人はなかつた。心当りにそれとなく電話してもみた。ただ雄作の心に小百合夫人の家出につながる原因が傷になつていただけに、家の召使達にはあくまで何でもないうちに振まつた。夫人が帰宅しないのは何の不思議もなく、行先きもちやんと承知しているようにみせかけなければならなかつた。

そんな時、邦彦がたずねて来た。

雄作はもう邦彦に会いたくなかつたのだ。けれど、今まで親しくしていたものを、折が折だけに、居留守を使うことが女中達にはばかられた。

「奥さん帰えつてないんですね」

邦彦は雄作に挨拶よりさきにそう聞いた。主婦のいない家というものは、何かしらん殺風景なのかもしれない。

「なに、一寸出かけているんだ」

雄作はとりつくろつたが

「嘘おつしやい」

と、邦彦はきめつけた。邦彦にすればそれを望んでいたのだし、本当に雄作が同じように小百合夫人の失踪を喜んでくれないはずだ位にしか思わない。「とうとうあいつ出て行つてしまつたよ」とても言つて、「さあ、君のせいだよ、今日はたんといじめてやるよ」とでもいうのだつたら？、どんなに情があるだろうにと思うのだ。邦彦にとつて雄作は異性同志の恋愛と同じように愛人なのだ。雄作が事毎に自分より小百合夫人を重く思うのが癪だった。

「奥さんは帰えつて来ないわよ」

邦彦は女のような言い方で言つた。

「君、何か知つているのか？」

雄作はあわてて言つた。

「ほらほら、ただのお出かけと違うでしょう。そんなに心配？ いこと教えてあげましょうか？ 雄ちゃん、あなたこういう人知つている？」

邦彦は雄作の目の前へ一枚の名刺を出した。

— 貴船一郎 —

ただそう書いてある。住所を消したのか名刺の左下は墨で線が引いてあつた。他には職業も住所も書いてない。

「貴船一郎」

雄作は口の中でつぶやいた。覚えのない名前だった。

「何なんだ、これは？」

「さあ、私も知らない」

邦彦はそらつとぼけるように言った。

「知らないものがどうしてこの名刺をもっているんだ？、これが小百合さんという関係があるのだ？」

雄作はいきまいて詰めよった。

「まあこわい。奥さんのことというとなんか一生懸命になるんですかね。私はお君さんから聞かされただけです」

邦彦はその家の女中の名を指して言った。

「お君さんがね、こういう人が奥様に合いに来たといつてその名刺を私に見せたんです。この間から毎日のように来るんです。……背の高い、きれいな人です。……」

「ふーん」

と雄作は言ったが、すぐに笑いながら

「おかしいじゃないか、その人と小百合さんのいないことと、どう関係があるんだい？ 関係があればその人が小百合さんの留守は知っているはずだし、小百合さんをたずねてくる道理がないじゃないか」

と、雄作は言った。

「それを留守を知らずにたずねてくるのだから、何の関係もない証拠みたいなものだ」

「それにしても、とても目の美しい人です。……奥様のどういふお知り合いなのだろう。……女中達がうわさしていますよ。いないって断るのが気の毒な位なんです」

「ばかにその人にこだわるね。僕に嫉きもちをやかせたいのかい？」

雄作が聞くと、邦彦は人ごとのように言った。

「私はその貴船一郎という男を知っているんですよ」

「え？」

「中学が一緒だったし、私が遊びに行つた大阪のある街で見かけたこともあつたわ。もう何年にも話合つたことはないけれど……。女を苛めるのが好きだつていううわさでね。多分その男だと思うんです」

邦彦が言うのを合図のように、玄關のベルがリーンとなるのが遠く聞えた。二人は何となく同時に顔を見合せた。 (つづく)

## KK通信 (第十二号出来)

本誌特別会員の連絡機関誌として育つてきましたKK通信は同好者の方々に向く文章、絵画写真を満載、大好評のうちに第十二号を迎えました。本通信は一般書店にては販売しておりません故、直接発行所へお申込下さい。一年分二百円(送共) 半年分百円(送共)です。見本は切手二十四円にてお送りします。旧号は第六号より以降残っております。本誌をお読み下さった方は一度見本でも御覧下さい。

## // 美しき縛しめ //

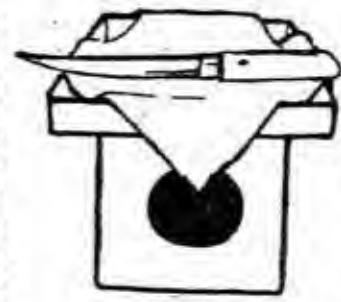
表紙裏に広告の通り、只今、縛られた女ばかりの十六態を揃えた豪華絢爛たるアルバムを分譲中です。本誌の信用をかけた良心的作品ですから、何卒売切にならない中に一冊お求め下さい。

## ◎画帖、時代物責繪巻◎

新しい感覚と解釈によつて打樹てられた多色刷責絵の豪華版優雅な装釘と犠牲的安価、是非お申込を乞う。



## 神道殉教史



## 神風連と大東塾

中 康 弘 通

神道殉教史と題して、こゝに神風連と大東塾の殉教記録を述べるに当り、一言お断りしておくことは、本稿の目的が筆者の「切腹研究」の一環として、殉教の烈士の最期を文献に従つて説述するにある。という事である。従つて両事件の神道思想史的背景は、幾多先覚の論考されるところでもあり極く簡単な説明に止める。

神風連の思想的根基は、幕末肥後の儒者国学者林桜園より始まる。和漢儒仙神の教学に通じ、遂に蘭学迄も修したと云う桜園は、身を九州に畢つたが故に認められること少かつたが、確かに一個の人物であつた。彼の主説となすところは、古神道の理想たる祭政一致を以つて大本としていたから、その門に学ぶ

者悉くが、熱烈なる尊皇攘夷思想の継承者であつたことは言う迄もない。

而して明治維新成るの時、桜園長逝し、次いで新政府に於ける藩閥抗争の犠牲として、河上彦齊が斬首刑に処せられるに及び、肥後勤王派は、太田黒伴雄、加屋霽堅の二領袖の下、新政に対して批判的態度を保持して来た時に県令安岡亮太郎は、彼等を慰撫する方図として、県下の神職に就かしめた。官祿を望まずと称した神風連の人々も、神祭の事に当るとあつて、始めて動いた。此の方策は、当面では慰撫宜しきを得たが、一党の結束は益々固くなつた。時に明治七年である。

政府の洋化政策が、九年三月の断髮廢刀令となつた時、加屋霽堅は上書して、「廢刀は国体を廢するの門」と極言した。即ち此の令

を目して最大の汚辱となしたものである。然し固より、上書は県令の容れるところとはならなかつた。

こゝに齊しく新政に懺足りずとする者、萩及び秋月に在つた。連絡は日に密を加え、遂に同年十月二十四日には、二十六日を期して萩に挙兵の旨、通知が齎された。

二十四日の夜半、神風連の徒は予ての神託に従い、二百に満たぬ寡兵を以つて行動を開始した。武器とするもの僅かに刀槍のみ。時に加屋が起草した檄文に曰く、

「畏くも神勅を奉じて、神軍の魁を為し」と。誠に成敗利鈍は彼等の問う所ではなく一に神意のまゝに、死斗を決したのであつた。全軍を七隊に編成し、要人を個々に撃つ者は、まず安岡県令宅に県令を斬殺、種田鎮台

司令官、高嶋参謀ら相次いで落命した。

本隊の主力は二首領に率いられ鎮台の砲兵營を陥入れた。富永守国の率いる一隊は歩兵營を攻め忽ち圧倒した。然るに先に、兵力分散を憂えて看過した分營より逆襲あり、更に危く逃れた与原連隊長も指揮権を掌握するに至つたので、鎮台側は小銃の威力を発揮、神風連を苦戦に陥入れた。

同志相次で銃弾に倒れ、遂には砲兵營より転じた主力の、加屋、太田黒両首領も死するに及び、壮図は潰滅した。

銃火器の威力を無視したこと、分營を攻撃目標に加えなかつた事、此の二項は戦略上に重大な錯誤であつた。然し事の成否は彼ら殉教の徒の顧みるところではなかつたかも知れない。かくて生存の同志は各所に悲壮な殉教の最期を遂げるに至る。

まず二十五日、重傷の身を藤崎八幡宮に潜めていた人々は、探索を感知するや、立川運上田倉八、猿沢常太郎、大石虎猛、友田栄記上野堅吾ら老壯、枕を並べて割腹した。

附近の同志鹿島麴雄宅に在つた。富永喜雄大野昇雄、菅八尋の青年組も相次いで屠腹。二十一才の弱冠青木又太郎また、居合せた莊野彦七に介錯を托して見事に腹を割いた。

同じ頃、追究の手未だ迫らぬ内に自刃した第一番は、辻橋見直である。敗戦と同時に帰宅、家族に覚悟を語り、若妻芳子に古式通りの準備を命じた。平素最も温雅にして当日先駆奮戦した見直は、死を決することも亦、最も早かつたのである。やがて流石に芳子が涙ながらに差出す白木の三宝より、短刀を執つた見直は従容と切腹して果てた。時に三十六才。未だ焼打の焰も納まらぬ内であつた。

二十六日に入ると、参謀齋藤熊次郎は、実父母加来氏、養母の兄下川氏ら来り見送る中に、三十才を以つて切腹した。未だ二十二才の妻冬子は、悲しみに耐えて当才の嬰兒を抱き戸外に出た。是は座に耐えぬ為ではなく万一泣き声を嬰兒が立て、未練に夫の腹切る刃を鈍らせては、との配慮であつた。

二十六才の青年永山正良は、一日姿を隠し後に帰宅した。既に熊次郎切腹の報も伝つていたので、老父安正は正良の所存を問うた。

正良告げるに切腹の決心を以つていたので一刻も早く父が勤めるのを、二晩睡りませるので、と熟睡した。明け方起されて辞世を認めた。安正が彼の切腹を見届ける勇氣無く隣りの河野通頼方へ避けると、予ねて正良を愛慕していた河野の娘が駈せ来た。彼女は甲斐／＼しく仕度を整え、止まつて愛人の切腹を見届けた。

鶴田伍一郎は妻に命じて酒を肴整えさせ、さて切腹の決心を告げた。妻秀子も逃るべからざるを知り、涙ながらに打ち肯く。やがて夜半に至り、十四才と十才の二女を起そうとする妻を押止め、忽ち諸肌脱いで腹掻き切り返す刃で咽喉を刺した。時に物音に目覚めた姉娘が立ち来り、恰も刃を抜き取つた父に泣き縋つたが、太一郎は絶命した。四十八才であつた。

彼の一子太直二十才は、伯父の家に逃れ、父の決意を聞くや、

「お庭先で潔く切腹したく」

と、庭上に藁蓆を敷き端座、腹を切り自から喉を貫いて、沈着さを賞された。

先に鶴田伍一郎に従つて、戦場より帰り来つた少年達があつた。

太田三郎彦十七才は、夜熟睡の上、姉に決意を告げ、友人を招いて永訣の後、割腹した喉を突いて即死せず叔父に手を添えて貰い絶命した。

最年少の猿沢唯夫は十六才の身で、父母に許しを乞ひ割腹した。当時の流行り歌に曰、「七ツとせ、中にも惜しきは、十六の蕾の武



士も、諸共にみな御切腹、そのいさぎよさと。

嶋田嘉太郎も十八才で切腹した。

伊藤健二十一才と菅夫一郎は十八才、宇士町に逃れたが、潜伏も困難と知るや二十七日夜、宇土川の岸で神明に祈念した後、自刃した。

是より先、横田真雄は家兄に介錯を乞うたが、兄が拒んだので、自から竹林中に席を設け端座、やおら一文字に薄く腹を切り、遂に兄をして介錯の刃を揮わしめた。二十三才。

青木曆太二十四才と荒木敬治三十才は、叔母の家に逃れ、そこで切腹した。曆太は弟安彦に会いたいというので、叔母が呼びに行つたが、母は、曆太の気怏れを恐れて容易に許さなかつた。安彦が馳せ込んだ時には、既に充分屠腹絶命後で、血汐は座敷に溢れていた。こゝに哀れを止めたのは米村勝太郎である。

彼は鹿島鸕雄、水野貞雄、児玉忠次を自宅に伴い帰つた。然し総て形勢非と知つた母のすゝめで自刃と決心した。時に十五才の許嫁美須子があつた。彼女をして永訣を告げしめようと言う者と、未練が残るといふ者とあり遂に美須子は呼ばれずに終つた。

まず鸕雄が二十五才を以つて果て、次いで

貞雄二十三才、忠次十八才の順で切腹、最後に勝太郎が腹を切り喉を貫いて終つた。時に二十四才。

沼沢広太は弟、春彦を陣没せしめ、二十七日夜半、菩提寺の父の墓前で切腹した。二十才。自から髪を直し頬紅、口紅迄施した。宗村敬治は、妻留子の父木庭氏の、自首勸告を却け、二十八日三十才を以つて自刃した。

夫の切腹を終始立派に遂げしめた留子の健気さは、流石、志士の妻と称えられた。

彼の妹婿宗村弥門も、義兄敬治と共に再挙の機を狙つたが、叶わずと知るや、同じ夜、二十八才で切腹した。

春日末彦は創傷の身を縁辺に潜めていたが兄恒徳が官に捕われ鞠問激しきを聞くや、自宅に立ち帰り二十一才で切腹した。眉目秀麗の美少年であつたと云う。

同じ日、搜索の兵士を面前に、潔い最期を遂げた一団がある。即ち若槻少尉が附近の山中を探るうち、五青年を認めた。然るにその一人が、

「只今こゝに最期を決したところである。暫くお待ち願えれば、潔く割腹してお目にかけよう」と申入れた。

下士の反対を却け、少尉は此の申入れを快諾、こゝに一同は諸肌押し脱ぎ潔く切腹した。即ち兼松群喜二十四才、小篠清四郎二十二才、兼松繁彦、高田健次部十九才、小篠源三は僅かに十八才であつた。

領袖の一人富永守国は林田鉄太と共に逃れて林田宅に入つた。自刃を決心し、短刀を老母にと残し、林田と共に熊本城を臨む甲山に向つた。林田の妻恒子は二十六才、名残尽きぬか見送りつゝ随うのを、林田は叱咤して帰らせる。二十八日の夜であつた。

山頂に至り、まず林田が腹を切ると、守国是を介錯、自分も腹を掻切り返す刃に咽喉を貫き、合掌した上へ顔を伏せて絶命した。時に三十五才、林田は二十八才であつた。

老母は形見の短刀を見るや、  
「腹は長い刀で切つたのか、さぞ切りにくかつたであらう」

と悲嘆した。富永家は三兄弟が殉難した。桜井直成は美貌、且つ僅かに二十才の妻、美登子に、切腹の決心を告げ離縁を申出た。然るに美登子は拒んだ。後に二十八日午前四時頃、直成は祖父の墓前に於て切腹した。時に三十一才。立会つた従弟、葉室某の、「深腹切るな」との注意に答へもあえず、直成は

短刀を左の下腹に突立て、薄く真一文字に掻切つていた。返す刃で咽喉を絶つた。

美登子は実父母の意にも拘らず遂に貞節を全うして大正九年に没した。

美登子と同じ立場に在り、遂に家人のために強いられて他に嫁したのは、小林恒太郎の妻麻志子である。

小林恒太郎は、元來覚悟の身で妻帯を欲しなかつたが、母に強いられ十九才の麻志子を三月に迎えた許りであつた。自刃と決して後離別を麻志子に告げたが、彼女は肯んじなかつた。

やがて座敷に入り、畳一枚裏返したところへ、同志の鬼丸競が、まず某よりと中央に端座、野口満雄が左、小林が右に東向して座を占め、齊しく腹を屠つて果てた。

競四十才、満雄二十三才、恒太郎は二十七才であつた。

麻志子は兄の意志で後年小林家を離り、他へ嫁いだが、破鏡の歎を見、小林家を訪れて罪を謝するなど、憂悶の内に、一夜自刃して果てた。彼女としては、むしろ夫に殉じて同時に死ぬべきであつた。との悔恨が一生付きまといつていたように思える。

夫に殉じたのは阿部景器の妻以幾子である

石原運四郎と景器が三十日、阿部宅で切腹の覚悟を定めるや、以幾子は神酒を酌み交す兩人の傍らで待つていたが、景器が諸肌脱ぐと同時に懷剣を取り出した。景器の制止にも、子供も無い身だから、と強いて自刃を云い張つた。阿部石原兩人が腹一文字に掻切るのを見届けつゝ、彼女も喉を突いた。

景器三十七才、以幾子二十六才、運四郎は三十五才であつた。

運四郎の妻、泰子も以幾子の死を聞いて、自刃を欲したが、遣兒醜男氏を囑された身と思ひ直し、後年、醜男氏が桜山同志会を起すに及び、始めて心の晴れるを覚えた。

吉村義節、松井正幹、古田孫市、植野常備の四人は、山伝いに身を潜めていたが、後凶空しと知るや、平山という所で鎮守の社前に終夜祈願をこめた。未明に至つて、社殿の裏の林に入り、まず松井が、次いで植野が切腹吉村が介錯した。残つた古田が、腹一文字に掻き切るや吉村は一刀打ち下した。然るに疲労のためか手許が狂い肩を切つた。古田が短刀を放し首を支えたので吉村も落付いて刀を振り下した。

さて吉村自身は長刀を短剣に替え、静かに腹を切り喉を突いたが、やはり疲れているの

で急所を外し、息が絶えなかつた。刺え便意を催した。起きて用を果し、又もや喉を突いたが意の如くならず、遂に捕えられた。後斬首の刑に処された。松井四十二才、植野三十六才、吉村三十二才、古田二十六才。十月二十七日の明け方であつた。

二十九日には、熊本城を臨む大見岳に於て六人の同志が割腹した。こゝにも死者への思いやりとして、搜索隊の警部が、一同山頂へ自刃に赴いたと聞くや、中道にして「一服」と煙草を喫し、終つて山頂に至つた。既に、六士割腹の後であつた。

その他名を挙げれば限りないので、変り種二、三紹介しよう。

愛敬正元は秋月に向う途中、十一月三日、三國峠を越えて巡査に誰何され、短刀を振りかざした。忽ち逃れ去る巡査に眼もくれず、途上に突立つたまゝ短刀逆手に取直し、われと我が腹一文字に掻き切り喉を絶つた。時に五十四才。

有働数彦は敗戦と共に逃れたが行方を消した。十一年七月に至り、雁回山の山中に白骨ありと新聞に報じられた。遺骨と聞いて有働家では直ちに探索、短刀の鞘を発見した。先に発見者が保存した刀と合せ、数彦と確認さ



時に二十一才。

平生、死屍を人目にさらさず、決意を語つていた通り実行したものである。

後藤政彦は一挙の日、任ぜられた曲野神社に在り、熊本に帰つた時は既に事敗れていた然し結盟を重んじ、同志と死生を共にせんと二十七日切腹した。時に二十二才。

叙上の如く、神風連に加わつた人々の内、約八十名が随時随所に於いて、欣然と腹を屠つて果てた。

彼等は誠に、彼等の信条通り、清く明るく一生を終つたと云えよう。たゞ事に処して余りに単純直截に過ぎた。兵を談じて兵を知らずの感さえ深い。要するに彼等の一挙は神意を信じ、行うところ神意あらば成る。敗るは神意至らざりしもの、と観じていた結果である。

戦後を免れて或は相集い或は独り、切腹して終るに至つた所以は畢意死を見ることが帰するが如し、とする神道思想の発露であらう。神道史上最大の殉教記録とすべきである。

昭和二十年八月十五日の敗戦を痛憤し、深く自責する余り、弥栄を唱えて代々木原に自刃した。大東塾十四烈士の最期は、是亦一つの神道殉難史である。

大東塾はもと神道修成派より大孝道を唱導した影山庄平翁の開くところ、後年翁が病床にあり長子正治氏が塾長となつた。太平洋戦争末期、正治氏応召のため、庄平翁は塾長代理として救国の悲願を唱導した。

敗戦と降伏の決定に当り、翁は塾員に向い「塾を代表して割腹自刃し、以つて神前に詫び併せて皇國の前途を守護せむ」との決意を披瀝した。時に塾は東条内閣以来の弾圧により下獄応召徴相次ぐ折であつたが、留守を守る者一同、割腹の挙に加わることを熟慮した。十八日に至り割腹する十四名の人選も定まり女性に着衣等の準備に忙しかつた。

此の間の事情は、特に後事を托された大倉常吉氏、殉難者藤原仁氏美枝さんの手記に詳しい。

米軍が二十六日に代々木進駐と決定したので、割腹の挙は二十五日決行となつた。

当日午前一時起床、軽い食事を摂り、神前に祝詞を奏上した後鼻緒に白紙を巻いた草履に白鉢巻白足袋、着物に袴という装束で、短刀と刃に巻く白布を持参、代々木原に向つて出発した、時に午前二時であつた。

三時代々木着、一同所定の如く着座、庄平翁以下最後の祝詞を奏上、双肌を脱ぎ短刀に

白布を巻いて最期の支度を終えた。

まず庄平翁が

「覚悟はよいか」

と一同に問い、然る後、弥栄を唱和、翁の「いざ」

との懸声諸共、一同時を同じくして腹を切り、二人の同志が介錯に當つた。

折しも所定の如く三時を期して塾を出た。大倉常吉氏、藤原美枝子さん、影山弘子さん（翁次男の夫人）は、一同の遺体収容の為代々木原に向つた。

美枝子さんの手記によれば、塾の此の挙が神明に通ずる大道と信じつゝも猶、切腹した人々が助かりはしまいか、神意を念じた事を記している。

朝露の中を踏み分けて探すうち、大倉氏が現認した。二人の女性は

「駄目ですか」

と叫びつゝ走り寄つた。

そこにはひもろぎを中心に円座した十四烈士が、見事に腹掻切つて宮城を伏し拝むが如く俯伏していた。予期していたことながら、驚き、悲しみ、悔しさ、一度にこみ上げる涙に咽びつゝも

「あなた、よくやつてくれましたね」

と夫君の遺体に寄り添つた美枝子さんの心境は、先述の神風連に際し、夫や愛人のために腹切刀を手づから整えて捧げ、涙ながらに最期を見届けた烈女達の傷ましくも雄々しい姿と相通じるものである。

生存者は一人も無いので切腹の適確な状況は判明しないが、僅かに検死に当つた井上病院長の手記は、その一斑を窺わしめる。以下此の手記による。

即ち美枝子さんの届出で馳せつけた警官は井上博士に検死を依頼した。時に五時半頃の草原に烈士の遺体は、眼を見開いたまま驟雨洗われていた。血は殆ど洗い去られ介錯に當つて飛散した方向さえ判らなかつた。切腹の方法により大別して記述する。

#### 「臍上一文字法」

◎影山庄平塾 行年六十才

臍の上約一寸の所を横に二十糎切り、刀を腹中に止めたまま介錯を受けた。腹の切口は左から十五糎迄は深さ半糎あとの五糎は深さ一寸五分、腹膜に達していた。浅く突き立て引き廻しつゝ漸次力を加えたものであろう。一文字法の典型である。頸は、後頭部と頭との境目を斜前に三分の二切られていた。

◎棚谷寛同人 行年二十四才

臍の上を一直線に長さ十七糎、始めの八糎は深さ腹膜に達し、あとは浅い。深く突込んで一気に引廻したものであろう。第四頸椎の所から首を打落されていた。

◎芦田弘準同人 行年三十才

臍上約四糎の所を横に十五糎、皮のみ薄く切る次いで右鎖骨上、胸鎖乳嚢筋の所を斜上に切上げた。長さ五糎、深さは胸鎖乳嚢筋の所を斜上に切上げた。長さ五糎、深さは胸鎖乳嚢筋を切り、頸動脈には及ばぬ。第二頸椎骨で首を切断されていた。

◎村岡朝夫氏 行年二十九才

臍の上二糎の所を横に十五糎、皮膚のみ深さ半糎切つていた。首は第四頸椎から打落されていた。

#### 「臍下二文字法」

◎藤原仁同人 行年三十二才

臍下二糎のところを横に十五糎、皮のみ次いで直ぐ下に平行して、深さ半糎横に十五糎切り、見事な二文字切腹を遂げた。首は第二頸椎から打落された。

#### 「臍下一文字法」

◎野崎欽一氏 行年二十二才

臍下約五糎のところを長さ二十糎、皮のみ浅く横に切つた。首は第四第五頸椎の間より

打落されていた。

◎津村晴好氏 行年二十三才

臍の下を約十五糎横に皮のみ切つた。首は左の頸部を袈裟掛けに切り、鎖骨で止つていた。当夜は雲の去来激しく、明暗定まらず、介錯が困難であつた為であらう。

◎野村辰嗣氏 行年十八才

臍の下約四糎のところを横に十五糎の長さで、深さは半糎皮膚を切つた。首は第五第六頸椎の間を切り前咽喉の皮一枚で繋る。

美枝子さんの手記に曰く、

「十八才の野村辰嗣さんも、すが／＼しいお顔をして切腹していらつしやいました。よく十八才で立派に死んで下さいました。」

と。最年少にして此の最期は、其の壮を語り伝えるべきであらう。

◎野村辰夫同人 行年三十才

臍の下を長さ十五糎、深さ腹膜に達する一文字腹を切つた。次いで咽喉を、甲状腺中心八糎、深さ気管に達するほど掻切つた。最後に左乳下内側より外側に向い巾三糎半の刺傷を与え、刃先は心臓に向い峰を下に突込まれていた。

当日は東山準同人と共に一同の介錯に當り最後に東山準同人を介錯した後、自刃した。



殆ど烈士の悉くが余り深く切つていないのに野村同人は可成り深く切つているのは、やはり介錯する人も無いからであろう。

◎東山利一準同人 行年二十六才

臍の下を約十七糎、深さ直腸筋に達するまで切り、次に左乳の内側第四第五肋骨の間を斜内上方に突いた。峰は外を向き、深さ十糎首は第一第二頸椎間を斜前下方に半ば切り下げていた。

「切腹の記録無き者」

◎牧野晴雄同人 行年三十二才

井上博士の記録では、腹部に刀傷無し、とある。然し烈士割腹の拳を終えた夜、復員婦塾した塾監長谷川幸男氏の手記によれば、明らかに一とすじの腹部切創を遺体に認め得たという。

左乳下、第四第五肋骨の間を内上方に、巾二・五糎深さ八糎、完全に心臓を突いていた首は第五頸骨を切り皮一枚残して、端座のまゝ絶命していた。

◎福本美代治氏 行年四十才

腹は切つていず、左乳下第五第六肋骨の間を、外から上方へ、巾二糎半、深さ十糎突いていた。刀は峰が外。介錯は袈裟掛けに鎖骨まで切られていた。

◎吉野康夫氏 行年二十四才

腹は切らず、左乳下第七肋骨より外方へ深さ約三糎突いたが、上へ刃先を向けず横に突いたので致命傷とならなかった。首は左頸部の胸鎖乳嚢筋を切断、鎖骨の直ぐ上に長さ五糎、深さ二糎半切られていた。背からは左肩甲骨下部第八肋骨の位置から刺傷を受けていた。巾二糎半、深さ約十五糎刃先が腸管を切断、是が致命傷となった。

大倉氏ら一行がかけて付けた時、

「美枝子さん、弘子さん、僕生きています残念です。でも皆立派に死にました。」

と、苦しい息の下から叫んだ。

入院後、夕刻に至り絶命した。

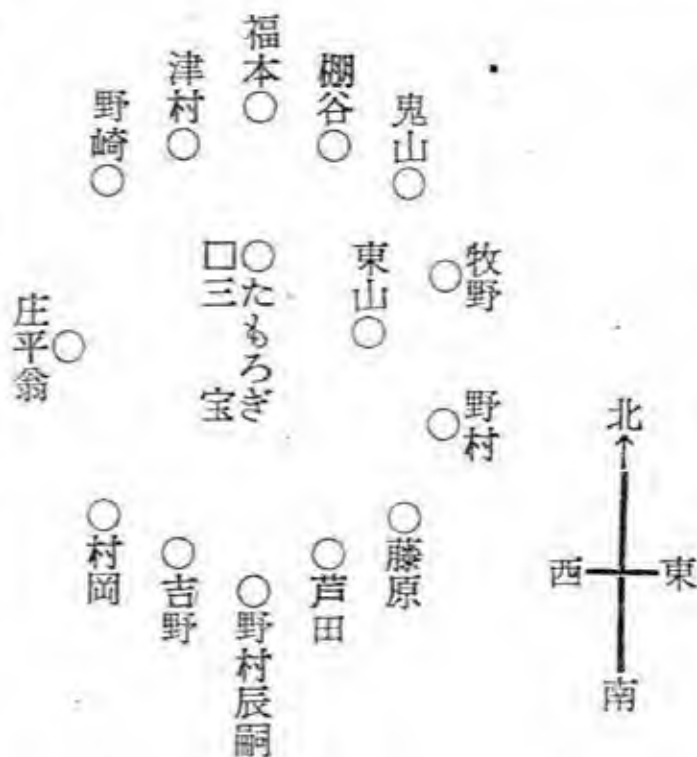
◎鬼山保同人 行年二十八才

首は第五第六頸椎の間より打落されていた胸疾で永く臥床中であり、切腹はしなかったものと見え第一番に介錯を受けたようである

叙上の如く、大東塾の十四烈士は、一千余

年の伝統に従つて切腹の真髓を實踐した、殉難者と云える。他日筆を改めて触れたいと思つている「死なう団」の如きとは、やゝ立場を異にした、真に神道殉教史に名を止むべき人々である。

## 大東塾烈士自刃現場図



人悉く思想的立脚点を必ずしも齊しくするものではないが、切腹の精神を顕現して従容死に就いた烈士の純一なる志に対して、深く敬意を表さねばならない。

## 責めのアイディアを募る

本誌の縛られた女の写真に対するポーズについて御意見御希望の方はドシドシ御遠慮なく御申出下さい。その際は必ず略画を添布願います。採用の節はそのポーズの写真を贈呈申し上げます。

(編集部)

## The Sweet Surrender of Alice

## 甘美なるアリスの降伏

(第二回)

珍書紹介

寒川 緑・訳

## 第三章 密室の饗宴

アリスが激しい苦闘のあとから立ち直れる様に、私は十分間の余猶を与えたのですが、その間に私は、体重を両の手首にかけて、危く身を支えて、ひっそりと頼りなげに立つている彼女の姿態を、綿密に観察致しました。

それは刺戟的な光景でした。彼女の胸は一呼吸毎に、上へ下へと揺れそよぎ、双頬は紅潮したまゝ、大きな帽子は横にずれ落ち、同時に、優美な良く調和したドレスは、彼女の程よく肉のおいた容姿を非常に引き立たせていました。

彼女は、驚く程に早くも自分を取り戻していました。そして、恐ろしい予感に戦いて、コツソリ私の挙動を伺っているのです。

私は彼女を何時迄其のまゝにしてはおきませんでしたが、ゆつくり彼女を一周して調べた後、椅子を持ち出して来ました。端が彼女の膝頭に触れる程度真近に据え、足を拡げて腰を下しました。自然彼女は私の両足の間に立たされ、ドレスの前が私のズボンにふれることになりました。彼女の顔は私の頭の上に、その俯向いた顔をあからさまに眺める事が出来ました。

私が此の位置を取り終りますと、アリスは神経質に身を震わせて、逃れようとしていました。が、甲斐もなく、そのまゝに立ちつくしていただければなりません。私は、そうした彼女の動きに目を留め乍ら、両足をやりわり挟む様に引寄せました。私の両膝の圧迫を同じ膝に感じて、抑えようのない戦慄がアリスの全身を突き走り流れました。私はニヤリとしました。腕を腰にソツと抱き寄せ、両足に力を加えました。彼女は、まる／＼私の抱擁に包まれました。顔をドキ／＼と高鳴る胸に押しつけました。暫くの間、彼女の狂おしい挽きが続けられていましたが、まゝに知らぬ我身を覚りますと、やがて、避けられぬ運命に身を委ねる外はありませんでした。

私は今迄も、ダンスのお相手を務める時以外に、アリスをこの腕に抱いた事はいそありませんでした。けれど、伴りの抱擁などは、私が両手両足の中に挟んで、全てを包んでしまう様な抱擁に比較すれば、實際無に等しいものでした。彼女は恐怖に怯え震えていましたが、その戦慄の波すら私に云う術ない歓喜を与えるのでした。やがて、彼女は小さな声を出しました。

「お願い……ジャック、放して！」





私はしつこく頬をアリスの胸の隆起に押しつけて、その紅を散らした顔を覗きこみました。

「気に入らないのかい。アリス」

意地悪く云つて、益々強く抱き締めました。

「君は全く、うつとりする程素晴らしい娘だと思ふね。そして、君が着ているものをみんな脱いでしまつたら、どんなに素晴らしくなるだろうって、想像しているんだよ」

「嫌！嫌！ジャック！」

彼女は苦悩につきのめされた呻きを上げ、

悲嘆に荒々しく身を撚じらせました。

「帰して、ジャック！いけない……いけないわ」

けれど無駄なことでした。

答のかわりに、左手を彼女の腰に廻して身体を支えますと右手は二ツのお尻の山を撫で廻し始めたのです。

「あゝ！止めて！ジャック。止めて頂戴！」

金切声を上げたアリスは、

困憊して、くねくね身を捻り空しくも私の貪婪な手を逃れようとした。

哀願、泣言には一切馬耳東風、手は豊満な臀部から太腿にかけて、下つて膝のあたり迄一しきり愛撫致しますと、再びお尻に戻つて来ました。アリスは、美しいポーズを示して身をくねらせていました。彼女はよろめく様に前半身を私に押しつけて、私の手を懸命に逃れようと顔を真赤にして、そわ／＼と身体を揺りました。けれど、コルセットは胸への直接攻撃を防いでいます。そこで私は、処女の乳房が陰見出来る程度に上衣を開いてやる

うと思ひ立ち、ブラウスのボタンをはずし始めました。

「ジャック！……止めて……止めて！」

彼女は悲鳴を上げて、させまいとして空しい抵抗をしました。私は笑うだけで、ボタンを外し続けて行きました。ブラウスを開いて肩の方に押しやりました。後には胸衣が胸を守つていました。私は此の胸衣を寛げようと思いました。優美なリンネルの感触が指を楽しませました。やがて先と同様、寛げて左右に押し分けますと、忽ちに喰い入る様な私の目の前に、犠牲の祭壇に供えられた、アリスの雪の様な胸が現れ、二つの乳房には、殆んどその乳首までが認められました。

「あゝ！あゝ！……」

彼女は苦しげに呻いて、此の残酷な露出に痛ましく顔を赤らめるのでした。けれど、強烈な美酒に酔い痴れる私の意に介する所ではありませんでした。私の目は、激動する感情に伴れて、上下に喘ぎ揺れる二つの円球の谷間を見せている愛らしい乳房の高まりに釘付けにされていました。両腕をアリスの腰に廻しますとグイと引き寄せ、その動悸うつ胸に唇を強く押しつけ、狂おしくキス致しました。「よして、ジャック！」

アリスは、絶叫と共に締金を死物狂いに引き張り、激しく接吻を逃れようとして無茶苦茶に暴れました。けれど、私の唇は依然として揺れそよ胸の上を彷徨し、合間合間には熱いキスを注ぎますので、彼女は、殆んど半狂乱の態となり、私は攻撃の手を一時緩めねばなりませんでした。

羞恥に頬を梁める、アリスの悩乱の姿を享樂しようと、私は、抱擁を解き、椅子の背にもたれかかりました。

「あゝ！神様！」

アリスは呻きました。彼女が私の執拗な責めの手を身に泌みて感覚した事は、一点の疑いもありませんでした。しかし、彼女にとつては迷惑この上ない事でしようが、私は、今少しの間いろいろな方法で悩ませてやることに決めました。

彼女の昂奮が収まつて、動揺が和らぎますと、私は、両腕を再び腰に廻して、お尻の愛撫を開始致しました。

あゝ、その感触の………！私の手は、薄衣に包まれてコリ／＼、フリ／＼と引き締まり、はね返る肉塊に蕩然と、撫で、さすり上げ、歡喜してアリスの丸々した豊満なお尻の頬を徘徊するのでした。アリスは云いよ

うのない羞恥にのたうち挽き、殆んど意味の取れぬ事を口走り、やめて、／＼と哀願するのでしたが、果ては、ヒステリーの発作を思わせる徴候を呈するに至り、私は止むなく、此の絶美なゲームも中止しなければなりませんでした。安心感を与えるべく、椅子を退いて立ち上りました。

部屋には、高さ八フィートもあり、人を等身大に映し得る立鏡が置いてありました。私は、アリスが先程の責苦から平静を取り戻しつつある中に、この鏡を彼女の前に押して行つて、その中央に、彼女の姿が映る様にして据えました。鏡の中に映つた自分の映像を認めた彼女は、落着きなく、そわ／＼身動きしました。それも道理、彼女の胸は無残に剥き出しのまゝにされているのです、そしてその取乱した服装は、その大きな帽子——彼女は今でも頭にのせていました——と相俟つて鏡中に反映し、恐ろしい自分の立場をまぎ／＼とアリスの胸に刻みこんだのです。

鏡を満足の行く様に立て掛ますと、私は、椅子をアリスの後に据えて腰掛けました、そして、身をのり出し、再度、アリスを両足の間に挟みこみました。ですが、アリスは今度私にお尻を向けているのです。鏡は忠実に全

ての挙動を映し出していました。女性の直感が、これから開始されようとしている攻撃の対象となつていふことをはつきり告げ知らせていました。私はけれど、彼女に思考の暇を与えませんでした。素早く両手を廻して引寄せました。同時に鏡の彼女に喰い入る様な視線を集めました。

彼女は、顔をバラの花の様に真紅に彩り、呼吸は不規則に乱れ、両腿をビツタリ固く合せ、ブル／＼身体を震わせていました。恐ろしい不安に怯えているのです。けれど、私は彼女が次に起るものを予測して怯えているのだとは考えませんでした。

ソツと両手を下げますとやがて、その手は靴下の上から足の裏を擦り始めました。

「嫌！嫌！お願い、ジャック！止めて！」

アリスは声を絞りました。頬を真紅に染め驚愕の余り暴れ狂いました。必死と縄目を引き張り、拳を握り締め、頭をガツクリ後に投げ出し、眼は恐怖に見開かれました。

全身の重みを手首にかけて、私の攻撃の手から両足を自由にしようとする絶望的にバタつかせるのでした。が然し、結果は同じことでした。鏡に映る彼女の挽きは私の官能の火を煽るに役立つばかりで、更にむごい技巧を招致



する結果を招くのみでした。私は、片手でスカートを腰の高さまで捲り上げて美しい雪白のブローズと黒絹の靴下を曝し出しました。が途端、彼女は恐怖と苦悩の余り、全くヒステリ状態に陥つて、フラ／＼と吊り下つてしまいました。若し、彼女を吊り下げている支えのロープがありませんでしたら、恐らく、床の上に顛倒してしまつた事でしよう。

私はすつくと立ち上つて、彼女のスカートを下げ、肱掛椅子を後ろに据えて、その上に楽に休息出来るように滑車を弛めました。そして、彼女が今迄試みた全て徒勞に終始した抵抗を断念して、遠からず、私に降伏するだろうと確信しつゝ、彼女が意識を回復する迄その傍を離れたのでした。

彼女の降伏は私の目的とする所のものですけれど私は彼女に依つて蒙つた侮辱の、どんな些細な一片も許容する意志は毛頭ないのです。とは云え、処女の肉体に、殆んど表現の埒を越えたシヨックを与え、……な攻撃を加えることに決めはするのですが、現在の彼女の心情を考慮しますと、此の上、更に辛辣な責めを加えてよいものか些か迷う次第でした。

私の意図した第一段階は、アリスの着衣を

剥ぎ取ることでした。アリスが稍々平静に返つたと見てとりすますと、私は直ちに滑車を活動させました。彼女の身体は、両腕を上方に差し伸べたまゝ直立させられました。我が身の行末を伺う様に恐怖に落ちた目射して私の顔をチラ／＼盗み見ていました。私は彼女に告げて、若し承諾の意志があるなら、其の機会を与えた方が良くはないかと考えました。彼女は全く見事に着飾つていましたので、破損したくなかつたのです。ですが、鉄を少しも使うことなしに脱衣を得られるとの自信は全くありませんでした。

「これから、僕が何をするか知りたいんだらう？アリス」

私は申しました。

「教えて上げるよ。君は裸になるんだ。全くの赤裸にね。一片の布も残さずに！」

紅がサツと彼女の頬を流れ、それは首筋、胸にまで拡がつて行きました。（胸は先刻のまゝ露出されているのです）頭が前に垂れかかり、呻き声が洩れました。

「嫌……嫌ヨ……あゝ、ジャック……どうしてそんな、非道いこと……」

と自由のきかない身体を燃じらせるのでした。

「これはプログラムの二番目さ、アリス」

私は彼女の苦悩を楽しみ乍ら申しました。

「これには、初めに片附けなくてはいけない但書が一つあるんだ。こうだ。縄を解いた場合、君は大人しく自分で着物を脱ぐか、それとも僕が剥ぎ取るかということだ。僕は、君の決定を左右する積りは無いが、女が男の前で裸になるのが困るぐらいの事は知つてるよ。……此の選択は君に一任しよう。たゞ、一言云つておく。僕は君がこれ以上抵抗して得る結果を見たくないのだ。服が台無しになつてしまふ……それは可愛想だからね。さあどつちにする？」

彼女は、四肢を震わせ乍ら一瞬憐みを乞う様に私を見ましたが、やがて、黙つたまゝ目を外らせました。明らかに相剋する感情に心が乱れ騒いでいるのです。

「さあ、アリス」

私は畳み込んで云いました。

「返事を承わろう。でないと、僕が気の済む様に脱がしてしまふぞ」

アリスは今、背筋が冷くなる程恐ろしい悲局に直面していました。視線は部屋の中をあちこちとさ迷つていましたが、何を見ているともありませんでした。何か云おうとする様

に口を開きかけるのでしたが、舌がひきつれた様な眩きが洩れるのみで言葉とはなりませんでした。呼吸は頻繁となり、胸は、激情に恐ろしい程波打っていました。私は一刻、返事を待つかの様に黙っていました。口を開かぬと見ますと、静かに抽出へと歩を移し、一挺の銃を取り出して戻ってきました。

銃を目にしてゾツと身を震わせる彼女は、懸命の努力を振り絞つて、悲痛な、感情の滲み出る様な響きをのせて申しました。

「服を……取らないで！ ジャツク！……どうしても私が……欲しいんですたら、……このまゝにしておいて……私……大人しく云う事きゝます……あゝ！ 許して！」

彼女は慟哭しました。

「それは、工合が悪いんだ」

幾分いたわる様に、けれど、依然キツパリ答えました。

「君は裸にならなくてはいけない、アリス——さあ、脱ぐかい？——それとも脱ぐ気はないかな？」

アリスは激しく身を震わせて、憐みを求める様に視線を投げるのでしたが、返答として私の目内に、憐憫ならぬ断乎とした決意を読み取りますと、戸惑いした様に云うのでした。

「あゝ、ジャツク！ そんなこと、出来ないわ少しは可愛想と思つて。ジャツク！ このまゝにしておいて。私、誓います。私……大人しくします」

私は頭を振りしました。もう、私のする事はたゞ一つ。即ち、猶予なく着物を奪い去ることでした。アリスは悲しげに泣き出しました。

「やめて、ジャツク。やめて……やめて……」

アリスの背後には、彼女に休息を与えた眩掛椅子がそのまゝ置いてありました。ブラウスや胸広は、寛げられたまゝ肩のあたりに掛

つていました。椅子の上に乗りますと、それを腕に浴つて握り締めた拳からロープの方へ引き上げました。注意して見ると、アリスのシユミーズや肌着は、皆肩の所で留める様になつて居り、ホツクを外しさえすれば自由に取りはずし出来る様です。無理矢理裸にするに、差当つて予期され



た困難は、これで解消したわけです。ホツクを外せば、あとの着衣は、簡単にアリスの肉体からずり落ちて行つてしまうのです。従つて、素裸に剝くのも私の手一つにかゝつてい

るのです。狂暴な喜びが私の心を衝き上げて

きました。私は、直ちにアリスを裸にする楽しい仕事を続けて行きました。

アリスは、己が身の頼りなさ、果敢なさを知つて、不安と羞恥の余り泣いて憐みを乞うのでしたが、その哀願に傾ける耳はありませんでした。私は彼女の裸体を見ようと夢中になつて居るのです。忽ちの中に、私は、シユ

ミーズやベチコート  
のホツクを外して足  
の方に下げ、彼女を  
コルセット、ブロー  
ス、ストッキングだ  
けの姿にしてしま  
いました。魅惑的な光  
景！両の頬には恥ら  
いの紅が漲つてい  
ました。彼女は出来  
るだけ身体を縮こま  
せ一見、両腕だけで身  
体を支えている観を



呈しました。目は俯せていましたが、敏速な私の手の動きと、その恐ろしい成功とに茫然としているようでした。

もう、アリスが身につけているものと云つては、シユミーズのレースだけしか伺う事も許されませんでした。処女の乳首を秘めた巴里風の優美なコルセットと、膝の所で広く截つた、無数の襷のついた、レースで縁取りした艶めかしくも挑発的なズロースと、膝から下の恰好のいい足を包む黒絹のストッキングと、その終点にあるチンマリと可愛らしい靴が総てありました。そうした彼女は、世の男性が想像し得る最美の肉体を備えていました。そして、私にとつて其の見事さは、彼女の羞恥感に依つて倍加されたのでした。何故なら、彼女は、凄まじくも取乱した我れと我が姿を、鏡中に認めなければならなかつたのです。

しばらくは讚美の視線をアリスの肉体に集中した後、私は、ズロースを脱がそうとして其のテープを解き始めました。途端にアリスは胸中に蟠つた屈辱感に生き返つた様になりました。女性にとつての最後の楯を強奪されるという感情に、暴れ狂い、悲鳴を上げ、必死と縄目を引きました。然し、縄目の解けよ

うわけはありません。そして、彼女のズロースは、今や、支えもなく膝下にこり落ちて行き、其処で躍起と押しつける両足に留められて、寸時停滞するのですが、私の一引き二引きに、雪の様に裸の周囲に積り、靴の上に仮の宿を求めたのでした。

あゝ、私にして文豪の筆があつたなら、此の段階のアリスをどう表現しましょう！無残な着衣剥奪の責苦、精神肉体両面の苦悩、その必死の絶叫と胸迫る哀訴、その狂おしい悶え、苦渋に満ちた表情。こうして一枚、又一枚と着衣は肉体を離れ、一步一步と恐ろしい素裸のゴールへと直進して行つたのです。

彼女を裸にしている最中に、偶然、然し、不可避的に私の手がその素肌に触れたりしますと、其のシヨックは、甚しく彼女を動揺させる様でした。けれども、上衣を剥がれる苦悩が、どれ程に痛切であつたにせよ、ズロースを足元に引き落され、こうして、最後の防壁を除き去られた際の羞恥を苦悶に比較すれば、それは、たいした苦痛ではなかつた筈です。頬を燃え立たせて、狂おしげに縄目を引き、恐怖に目を見開き、痙攣的に胸を波打たせ乍ら、アリスは苦斗のシヨックと喘ぎに息も絶えど、言葉ならぬ悲鳴を上げるのでし

た。私は、そうした彼女の苦悩に呆然と見惚れていました。そして、事情が許すなら、何時迄も眺め飽かしていた事でしよう。けれども今の私は彼女の全裸の魅力を存分味う慾望に駆られているのです。又、その苦悩の延長が失神という結果に落ち着かぬとも限らないわけです。若し、そうなつたら、最後の着衣を取り去られて、赤裸とされ、嫌応なく、私の目の前に立たされるアリスの惨めな有様を目撃する喜びは失われてしまうのです。そうしたわけで、訴え叫ぶアリスには頓着することなく、コルセットを外し、ストッキング、靴を引抜き、まつわるズロースも一遍に取り去つてしまひ、其等を彼女の後ろに置きました。シユミーズ、肌着の肩留めのボタンを外しました。二つは勢よく足下にこり落ちて行きました。私は、彼女が素肌にじかに当るヒンヤリした空気を感じて、おぞましいものでも見る様にソツと素早い視線を鏡に走らせたのを見逃しはしませんでした。そして又、彼女が其処に認めるものが、美しい光沢を放つ、真珠の映像である事も承知していました。彼女は、本能的に両足を能う限り擦り合せ、縄目の許す限り身を縮こませるのでした。

# 夕の朝顔

那須不二夫

森 禎二良・画

「姐御、そいつあ良くネエ了見だ」

庄三郎の声は憎らしい位落着いて居る。今迄どんな男だつて一寸此方から色眼でも送ればすぐ酒に酔つた鱈みたいになるものと信じて居たおくに取つてそれは意外であり、むしろ不思議であつた。庄三郎はおくにのあらゆる媚態にも眉一つ動かそうとしないのだ。おくには焦つて来た。

「それじゃ庄さん、お前はどうかあつても妾に恥をかゝすつもりかい？」

「姐さん、感違いしちやいけねエ、恥をかゝせるの何のとそんな事があるもんか俺だつてお前さんのその気持は有難いと思う、だけどこいつばかりはどう仕様もねエそんな事位お

前さんだつてよく知つて居る筈じゃネエか」

「そりや妾だつて、その位の事は知つて居るワそれを知つて居たら女の口からこんな恥かしい事を云い出す妾の胸の内を少しは察して呉れても宜いじゃないか、庄さん、助けると思つて妾を連れて逃げてお呉れナ」

「冗、冗談じゃネエ、あつしは之から夜道をかけて明日は甲府へ行つて市蔵親分の所で喧嘩の助人をしなきゃならネエ驅……」

「さ、その喧嘩へ妾やお前さんをやり度く無いんだよ、そんな危い処へ行かずに妾と一緒に……庄さん後生だから……」

よろよろと男の軀へもたれ掛ろうとするのを

「いけネエ、姐御、俺あ忙しい軀だ。何処迄

もお前さんの相手をしちやア居られネエ……」  
「あつ、庄さん、待つてお呉れつたら……」





も縋りつくおくにの手を振解く様にして庄三郎、スタ／＼と歩き出した。五、六間行つた所で振り返つて

「姐さん、親分を大切にしてくださるで暮らせよ」

その儘夜の街道を走る様に遠ざかつて行く男の後姿をおくには道端の草の上へ坐つてボンヤリ見送つて居た。まるで取りつく島もない。だが男の姿がおぼろの月明りの中に小さくなつてやがて見えなくなるとおくには諦めて立上つた。

「畜生！ 何んて唐変木なんだろう！」

それからベツと男の去つて行つた方へ向つて唾を吐いた。

## (二)

おくにはまるで無遊病者の様に街道を歩いてたが腹の中は男に振られた口惜しさで煮え返つていた、自分で自分をどうして宜いかわからないヤケクソな気持なのだ。

何時家へ帰り着いたかも覚えがない位だったがそれでも裏木戸に入る前におくには着物に付いた藁ゴミを払い、髪のはつれを掻き上げるのを忘れなかつた。そつと家へ上つて奥へ来ると、今夜は一里程離れた榛沢の天王の

宵祭りでその盆奠座へ出向いて留守だと安心し切つて居た藤蔵の居間に灯がついている「おくにはギクリとした。」

「おくにッ！」

鋭い藤蔵の声、長火鉢の向うに鈍豆煙管を不味そうにくわえた藤蔵が眼を光らして居る「ヤイ、今時分迄何処をウロついて居やがつんだッ」

「木崎のお福さんとこへ行くつて云つてあるじやありませんか」

「フ、ン、そんな事あ、百も承知だ、さつき庚申堂の前で何をして居やがつたッ、俺あそれを訊いてるんだッ」

誰か親分に云い付けた奴がある、テツキリ途中で合つた乾分の重吉に違いないとおくには思つたがもう後の祭だつた。

「サア、白状しろ、相手は何処の何奴だッ」

「……………」

その相手が今日の暮れ方、この家から草鞋をはいて行つた庄三郎であるのを藤蔵はまだ知らないらしい。おくには鋭く自分を睨み付けて居る藤蔵の顔が今夜は特別に醜く見えて唾でも吐きかけてやりたい気がした。

「ヤイ、云わんかッ」

二度目に藤蔵が怒鳴つた時おくには反抗的

に藤蔵の顔を見返えすと

「そんな事知りませんワッ」

と、ヒステリックに叫んでツンと横を向いた。

「何だ？ この女ッ」

見る／＼藤蔵の額に青筋が盛り上つて膝を起すとピシツと烈しい平手打が頬へ飛んで来たがおくには謝らうともしない。もうどうでもなれと云う不貞腐つた態度で石の様に黙つて居た。

## (三)

昨夜の痴話騒ぎがどう納まつたのか、翌る日、陽が高く昇つても藤蔵の家の雨戸は開かなかつた。乾分達は昨日から天王祭の賭場へ出払つて家に残つているのは飯炊きの婆さん一人きり、その婆さんはさつき迄井戸側で屈託の無さ相な顔をして洗濯をしていたのを見るとどうやら昨夜のゴタ／＼を知らぬらしい外は昨日に続いて秋晴れの小春日和ピイチク／＼と雲雀の囀りがうるさい位耳について街道の方からは、往來の馬の鈴の音が長閑に響いて来るが、藤蔵の家では相変わらず大戸をおろした儘、何時迄経つても人の起き出す気配がない。その街道から母家の屋根越しに

藤蔵の家の裏手に見えている白壁の古土蔵——代々御殿場の町で堅気の油屋をやつていたと云う、之がその名残りで先代の頃は近在から集まつた菜種から油を絞るために何時も四・五人の職人が此処で働いていたと云う話だが藤蔵の代になつてからはまるで商売はそつちのけだから職人は一人残らず散つてしまひ建物は荒れ朽ちて、戸前の海老錠も赤く錆びた儘今では滅多に人の出入りする事も無い、中にはその頃使つた蒸釜や搗臼などが薄暗い中に埃をかぶつて、普通りに置き放してあるのが地獄極楽の見世物で見る責め道具みたいな氣味悪さだ。その人氣もない油蔵の二階でさつきから妙な物音がしていた。

(ギ、ギツ、ギ、ギツ)

と何か軋む様な微かな音、それが間を置いては思い出した様に聞えて来るのだ。

(ギ、ギツ)

また鳴つた。耳をすますと、今度は何やら二階で蠢く氣配がして、続いて

「チツ畜生！」

と口惜しそうな女の聲がした、それは紛れもないあのおくにの聲であつた。

二階は窓が閉め切つてあるのでまるで穴蔵の様な薄暗さだ、油臭いヒンヤリした空氣が

氣味悪く淀んでいるその片隅に、ほの白く浮かんで見える物の影がかすかに動いて……おくには腰巻一つの素裸にされて大黒柱へ後手に縛られている。眼が釣り上つて、乱れた髪の毛を二三本、何時も濡れている様なあの色ツばい唇にキユツと噛んで細引の無惨に喰入つている豊満な軀を絹糸の様に悶えているのだ。だが、いくらもがいてもどうする事も出来るものではない。悶える度に柱へ巻きつてある縄がギ、ギーツと軋む、その音がまるでおくにの軀の何処からか出る悲鳴の様に聞えて蜘蛛の巣に懸つた毒蝶の様なその姿を一層凄艶なものに見せて居た。

昨夜藤蔵の為に責められた揚句、此処の二階へ引摺られて来たのが真夜中頃、それつきり助けに来て呉れる者も無かつたし、当の藤蔵はあれから一度も姿を見せなかつた。

#### (四)

おくにはこれ迄宿場を流れ歩いてひどい目にも合つて居るし、縄の味も知つていた、だからこんな目に合わされても大して驚きもしなければ普通の女みたいに泣いたりもしない。それ処か腹の中では、自分に首ツ丈惚れてる藤蔵がその内縄を解きにやつて来るに違ひな

いと高を括つているのだ。しかし昨夜の事を思い出すと自分でも訳の解らない腹立たしさがかみ上げて来て、自分をこんな姿にして置いて今頃は又ク／＼と寢床の中でいびきをかいているに違ひない藤蔵のアバタ面が憎らしかつた。

「畜生！」

身悶える度に肌へきつく締まる仮借のない縄目がまるで藤蔵の代りに自分の軀を身動きも出来ない様に押え付け見張つている生物の様に感じられる。縄はおくにの両肘を搦め乳房の上へ延して後手に括つた両手を背高に締め上げてある、よく云う高手小手と云う奴で手首を縄から脱することはおろか、肘も動かせない様になつているのだ。おくにはもがくのを止めて顔を上げた。まるで牢屋の様なこの二階へも何処からともなく外の光が洩れて闇に慣れたおくにの目に柱へ繋がれている己の姿が痛々しく映る。その自分の姿をおくには今日程美しいと思つた事がなかつた。おくには今年廿三だが小供を生んだ事のない肌はまるで生娘の様に水々しい。そのふつくらと弾力のある二の腕へ蛇の様に絡んだ麻縄が乳房に喰入る位きつく締まっている無惨な姿はおくに自身の眼にさえ何かウツトリする



様な妖しい美しさであつた。じつと眼をつむると憎い／＼と思う庄三郎の面影が何時の間にか臉の裏へ忍び込んで、自分を助けに来て



を噛み切ろうと考えた。何処でも一ヶ処縄を切ればあとは何とかして手首を縄から脱けられそうに思えた。しかし、肘や胸に掛つてい

呉れるそんな場面がフツと心に浮かんで来る（あの唐変木だつて、きつと妾のこの姿を見たら、ホ……）

おくには口をつぼめて小声で笑つた。昨夜庄三郎のために根こそぎ崩された誇りがほの／＼と蘇ってくる。

（妾はまだこんなに若くて美しいそれなのに……）

おくには三年前三島の宿で身請をされ二十も年の違う藤蔵の為に今日迄自由にされて来たのが今更の様に口惜しくてならなくなつた。おくには

此処を逃げ様と思つた。縄さえ抜けられれば脱がされた着物に向うの長持の上へつくねであるし、帯の間の財布には

江戸へ出る位の路用もある、そう思うと急に外の広い世界が恋しくなつた。おくには縄

る縄をすぐ眼の前に見て居乍らいくら頸を伸ばしても、もう少しと云う所で齒が届かなかつたし、後へ顔を捻じ向けて柱へ繋いである縄を噛み切ろうとしても矢ツ張り縛られた肘や手首が邪魔になつてどうしても縄へ齒が届かなかつた。柱へ繋いである縄さえ切れればあとは勝手にその辺を歩き廻つて金物の角へでもこすり付ければ手首の縄を切り解く事が出来ると思つたおくには軀を弓の様に反らし埃だらけの床へ太腿をすり付けて悶え続けた。

（もうどうでもなれ！）

おくには力尽きてグツタリと縄目に身を任せて柱へもたれ掛つた。だがおくにはそれ程悲観してはいなかつた。

（逃げられない）

と観念すると男の為にこんな姿にされているのがかえつて面白い様な不逞々しい気持になつて来る。それは廓にいた頃夜毎嫖客を送り迎えて張店に坐つていた時のあの自虐的な諦めの気持であつた。おくには埃だらけの床板の上へ坐り崩れている自分の丸っこい膝

へ眼をやり乍ら、それを見る時の藤蔵の眼付を想像してニツと不敵な笑いを浮べた。

(五)

日が暮れて蔵の中が真暗になつたが、矢張り藤蔵は姿を見せなかつた。

（一体何時迄放つて置くつもりなんだろうか？）

流石におくにも少し不安になつて来た。

（もしかしたら、この儘干乾しにするつもりではあるまいか？）

そんな考えが冷く背筋を走る。その時不意に階下でガラ／＼と大戸の開く音がして続いてミシ／＼と階段を上つて来る足音が聞こえた。それを聞くとおくには今迄乱暴に投げ出していた両足を慌てゝ引込め、膝を重ねる様にして色つぼくうなだれた。見るからに縄目に観念し切つたしおらしい姿だが眼丈は鋭くうつ向いた儘横目使いに上り段の方をそつとつかゞつてゐる。サツとガンドウの光が闇に流れて、階段の上り口に立つてじつと此方をすかしているらしい藤蔵の下半身が見えた。その藤蔵の足がやがてズイとおく、のいる方へ向いて動いたのを見るとおくには息をのんで軀を固くしたが、その時突然階下の方から

「親分、大変だッ」

と呼ぶ声が聞えた。

「何だ、何だうるせエ奴等だ」

藤蔵突嗟に

上り口から半身を下へ突き出す様にして

「ヤイ／＼、

留、上つて来るんじやネエ今降りてくから待つてろいッ何？賭場に間違いがあつたつて？」

藤蔵、如何にも狼狽した様子で手にしたガンドウを奥の方へ差しつけるとその光の中に白く浮ぶおく、の姿を一寸の間ギラ／＼光る眼で見えていたがすぐにド、ド、ドツと荒い足音を立てゝ階段を降りて行つた。続いてガラガラと大戸の閉まる音がしたがそれつきり★



★おく、の耳は一切の外界の音から再び断たれてしまつた。

「いやだネエどうしたというんだらうか？」

肝心の所で飛んでもない邪魔物が飛出して来たものだ。何か賭場に間違いが出来て藤蔵を呼びに来たらしいがひよつとしたら、こんな姿でもう一晚放つて置かれるかも知れないそう思うとおくにはうんざりしてしまつた。縄を抜けようともがいた故か、無性に喉が乾く、その上昨夜から何も食つていないのでひもじくてならなかつた。おくには少し眠ろうと思つて柱へもたれた儘眼を閉じた。



それからどの位間が経つたか、ウト／＼としていたおくにはつと闇の中で何かゴソゴソと生物の蠢く様な気配を感じて眼を開いた。何か得体の知れないものが階段の上り口の方から此方へ逼り寄つて来る様な気がする

(何だろう?)

おくにはギョツとして闇の中で大きく眼を

見張つた。古い土蔵等にはよく大きな青大将等が巢喰つてゐる事がある。フトそんな話を思い出すと、おくには全身に冷水を浴びた様な恐怖に襲われて死物狂いに身を悶えた。そしてその怪しい気配が二三間の身近に迫つた時、たまり兼ねた様に拵高い叫び声を上げた

「だ、だれだいッ? お前は誰だッ」

「……………」  
「誰だッ、返事をおしつたらッ」  
二度目に叫んだ時、闇の中でカチツと鑿石を摺る音がして急に四辺がボーツと明るくなつた。

(続く)

## 【読者通信】 (投稿歓迎)

先に予告下さいました通り御立派なアルバム御送付下さいまして本当にありがとうございます。夜具の上で早速御姉様と二人して開いた時、本当に素晴らしい言葉もありませんでしたわ、只もう夢中で見ましたわ、その時どうしたかつて?、でも叔母の家では私達の自由になりませんわ、お姉様の家でも今度のお休みは雨でしたので私、刑場へ引出されなかつたのです。だからとても物足りなかつたのですけど、アルバムを拜見してすつとしましたわ、中でも、紅と白、足枷、滑車吊りは素敵でしたわ、どれもこれも十六態とも由紀子、こんなに仕置して頂きたいものばかりです。紅と白、多奈子お姉様でしょう。随分痛かつた

御様子ですけど、私達も刑場以前によくこんな姿にされましたわ。両足をお写真の様に宙に下げた儘では本当に胸やお腹が痛くてなりません。でも両足を揃えて膝の上へ二ヶ所も縛つてもらえば、上半身はたとえ後手でも余り痛くなく物凄く責められる感じがですわ。観念のモデルの方の表情は本当に共鳴できます。由紀子何度か繰り返えすようですけど、観念した時の女が一番美しいと思いますわ、それにその時の気持のよいこと、だからお仕置大好きですの。

(大川由紀子)

小生今年三十六才になる普通の勤人で、別にサディストでもマゾヒストでもないと思つてゐるのですが、矢張り心のどこかにアブノーマルなものが沈涵してゐたものと見え、最初、奇クを手にした時は、幾分刺激が強すぎるような気もしましたが、それでも其から離れることが出来ず、何かときどきするような興奮を感じたことも事実です。それ処か読んでゐる中にふと、私自身も美しい奴隷になつて縛られたり、鞭打たれてみたいと思つたりする事もあります。しかしそれは飽く迄、甘美な夢としてあつて、もしそんな場合に遭遇するような事があればきつと、必死で逃げだしてしまふに違ひありません。今迄そうした事を恥しいものとして人前でうつかり言えない慣習と環境の中で育つて来た多くの人々小生も勿論その一人です。——その多くの人々が長い間、鬱積した心理的な苦痛をぶちまけない事は全く不幸だつたと云えましよう。そんな時、私が貴誌

を初めて手にした感激を御想像下さい。多くの筆者達が、それぞれの年令、性別、地位、環境といつた一切のものを脱ぎすて、口で言えない体験や告白を、心から楽しそうに、そして自由に伸び／＼と表現されるのを読んでゐると、そこには一般雑誌にあり勝ちな不健全なわいせつ感が全くないばかりでなく、微笑ましい愉快と、心よい興奮をつき交ぜた健康なものを感ずるのです。

私は惨虐なものや、破壊的なものを好みません。その点で縛られた女々の写真は全く私の好みに合つたものと言へるでしょう。欲を言えば縛る方の(男女を問わず)人物を同時に配合した方が、より効果的だと思つて居ります。

(F・M生)

# 縛られた女ばかりの座談会

## ★第三回 讀者座談會★



司会者	出席者	編集部	日時	場所
川端多奈子嬢 (21)	厚狭春江嬢 (20)	(速記) 家原文子	六月十四日(日) 午後一時	大阪アベノ 明陽軒
	坂口利子嬢 (22)			
	村田那美子嬢 (19)			
	雲井久子嬢 (23)			
	高瀬忍嬢 (18)			

川端多奈子嬢

川端 折角日曜日のところをわざわざ有難うございました。私はとても司会者と云うような柄ではないんですけど、女の方ばかりと云うので心臓でこの大役を引き受けてしまいましたのでよろしく願います。先ず何かからお聞きしていゝかわかりませんが皆さんの好物の甘い物でも食べながら話して頂いたら如何でしょう。

坂口 女の方ばかりつて言うんで、大変気が楽ですわね、私、案内には女ばかりだなんて書いてあつても、いざ出席してみたら、男の方の方が多いなんてだつたら嫌だと思つて――

雲井 そうですわね、川端さん。南さんはお見えになりませんか？

川端 えゝ、あの方だけ何か、御都合が悪いだつて――

雲井 私、南さん来られたら、帰りは一緒に思つてたのに。

川端 お近くですか？

雲井 電車が一緒だけですけど――

川端 私は大分以前から縛られていましたけれど皆さんは、極く最近のようですね。

村田 えゝ、私なんか、まだ一月前位から。

高瀬 私も、そうなんです。

雲井 わたしは半年位になりますかしら、昨



# 縛ら

年の秋からですから、

川端 坂口さんは？

坂口 私、回数は少いんですけど今年の冬、はじめて縛られたことがございますの。今迄三回位になるかしら、

村田 川端さんは私達の大

先輩つて、わけですわね、雑誌でよく拝見しますのですが、やはり一番最初からあのよう

に――  
川端 最初の時は、今から思えば冗談のような縛り方だったんですが、それでも、縛られる事は縛られたんですわ、こうして自分の手で縄を持たせられたりして――

村田 どんなにですの？

川端 後手のときなど、自分で縄の端を握ったりしていたんですよ、こうして――

坂口 その頃は大事にして貰っていたんですのね、私なんか最初の時は、寒くもありましたし勿論全裸ではありませんでしたが、相当きつく縛られて、痛い、痛い、つて言った事覚えていますわ。

川端 厚狭さんは、いつ頃から？

厚狭 わたくし、御仕事の関係で、御呼び出

しがあつても行けない事が多くて、まだ二回だけでですけど、最初は三月でしたかしら

川端 私なんか、最初縄を持ち出されたときびつくりしましたわ、ヌードだけだと思つていましたのに――

雪井 わたし、ヌードの方だけでしたら、一年半位になります。縄の方は仲々、承知しなかつたんですが昨年の十月になつてとうとうはじめて――

坂口 その時の事、くわしく話して下さいませんか？

雪井 昨年の秋、丁度菊の花の盛りの時でした。アベノ駅で待合して、昼時でしたので近くの飲食店に入つたのですが、そこで、辻村さんと塚本さんとうとう口説かれてしまいましたの、それは熱心なんですもの、

高瀬 私はまだ日は浅いんですけれど、やはりヌードのモデルをやつていまして、縛ると云うことを条件に出されました時は、少しも嫌なことごさいませんでしたわ、ヌードで変なポーズをとらされるより、よっぽどましだと思ひまして。

川端 他の方はどうでございますか？

村田 わたしも、やはり高瀬さんと同じようでした。只単にアルバイトのヌード・モデル

と思つていたのに、と思ひましたけれど、縛つて撮られてみるとなんだか、この方がびつたりして――

雪井 私は家で遊んで居りますので、何か一寸したスリルと刺激を求めて、モデルを志願したわけですので膝詰で、男の方があのように頭を下げて頼まれなかつたら承知していかつたと思ひますわ、

高瀬 報酬は余り当になさらない？

雪井 そりや、お小使はほしいんです、でも大阪へ出るにしても憶劫なので、家で洋裁なんかしてるときの方が多いんですの、だからお金なんか、余り使うときがないんです。

高瀬 結構な御身分ですわ、私なんか、母親と第二人を養つてゆくので、とても事務員だけの給料では足りませんので、モデルをアルバイトしていましたが、いつの間にかやら、その方が専門のようになってしまいました、川端 でも、まだそう長くやつておられるわけじゃないんでしょう。

高瀬 ええ、まだはじめてから二月位、川端 一番最初、裸にされたとき羞しかったでしょう？

高瀬 一番最初るとき、とても恥かしくてモデル台に立たされた時、目の前が真暗になつ

てどうしようかと思いました。でも、終ったときのほつとした気持は悪いものじやなかったと思います。もうこの頃ではなんともございせんわ。

坂口 私は去年の夏、彫刻のモデルに一週間程なつた事がございますが、その時は何とかの講習会で十数人の講習生の方々が、まわりから、じろく／＼と見られるんで、本当に恥かしい思いをしました。

川端 台の上へ立つてのですの？

坂口 え、たしか、こういう風に両手を頭の後で組んだようなポーズだつたと思います。が、そのうち、同じポーズをじつと続けているのが、大変苦痛になりました、二度とモデルなんてしないと思ひましたわ。

村田 お勤めになつて居られますのですか、坂口 いゝえ、家で家事の手伝なんかしてたんですが、近所に彫刻家の方が居られて、ちよつとやつて見ないかと云われたので、ふらつとその気になつてしまつたんです。それから二、三度今年の冬までモデル台に立ちましたけれど、写真の方は今度がはじめてですの厚狹 私は、ダンスの女教師をしている関係で、そう大して恥しいと思つたりした事はございせんでした、男ずれがしてるというの

か知れせんけど――

村田 全裸といつても、縄があるだけ、一糸纏わぬという気持が幾分助かるのではないでしようか、開け放しというより、何かこう、ぎゆつと身体が締めつけられるようで、羞しさと不安、その次にもう仕方がないという諦めの気持が心を落ちつかせるように思えますわ。

川端 縄で縛られて痛いでしょう、私なんか慣れていますけど

坂口 そりや、痛いですわ、皮膚が縄と縄との間に挟まれたり、後手にして手首の紐が喰い込んだり何度も、痛い、痛いってゆるめて貰つたことがあります。

雲井 二の腕を縄を巻かれて、その腕を下にして転がされたときは痛いすね、腕が痺れたようになつて、私はやせているので殊にそう感じるのでしょうか、皆さんは如何です。よく壓つておられる方ばかりですけれど――

厚狹 まだ二回きりですので、はつきりわかりませんが、そう辛抱出来ない位痛かつたと



高瀬 忍嬢

いう事はなかつたようです。只縄目だけは一寸残つていましたけれど

高瀬 私は痛い、というよりもつと締めつけてはしかつた位、あの程度でしたら、いくらでも辛抱出来ると思ひました縛る方が痛くないか、痛くないかと余り何度も尋ねられるので気の毒でしたわ必要でしたらどのようなきつく縛つて下さつてもいゝのにと思ひました村田 特に手を逆に吊り上げるとかしなければ、只縛るだけならその位の痛さは辛抱出来るんじゃないでしようか、縛られて転がされたとき柱の角で腕をすりむいて血をにじませた



事があるんですが、その時は気が張つていましたから少しも痛いなんて感じませんでした。後で係の方が大変恐縮している／＼いたわつて下さつて却つて、私の方がくすぐつたい位でしたわ、

川端 私も時々すりむいて血を出したり、縄のとげを刺したりしましたが、その時は案外痛くないのですわね、痛いという事は誰でも同じように痛いんだと思いますが、私なんか少々の痛みや辛さだつたら耐えられる自信があります。

村田 そりや、気持の持ちようでしょうね、私もなんだか縛られるのが好きになれそうないがしますわ、

雲井 わたしなんか、痛いのはごめんだわ、川端 六月号の口絵に出た雲井さんのさる／＼つわなんか仲々にいゝじやございませんこと雲井 あれなんかイヤ／＼撮られたんです。

早く終つて映画を見に行こうなんて思いながら撮られていたんです。

村田 川端さん、縛られている時のお気持ちどうですの／＼破つた日記帳／＼ではいゝ／＼お書きになつておられますが、

川端 そうですわね、本当の気持ちつて、それが本当だつたら本当だけに恥しくつて言えな

いんじゃないでしょうか。

村田 でも、よくお書きになりましたわね。私もいずれ、そんな告白を書きたいと思つているんですけど

川端 今迄、いゝ／＼と沢山の方々に聞かれましたので、どれが自分の気持ちをよく表しているか、一寸わからなくなつてきてしましました。でもぐる／＼巻きじやなしに二巻きか三巻き縛られて、放つておかれた時は後手からジーンと痺れてくるようであつてよく言い表されませんのですが、平常の煩しい事が何にもかも忘れて一点に集中出来るところに楽しいところがあるようにも思います。

高瀬 縛られている時の哀れそうな顔つき、なよ／＼とした自分の姿態、眼をつぶつているので、そんな情景は直接自分の眼には入りませんが縛られていながら、そういう事を想像するのは楽しいことでしょうね。

川端 私もよく縛られたまゝ転されて、いゝ／＼空想を働かして、うつとりしているところを起されてびつくりした事がございます。後手に首縄、猿ぐつわをされた時一番よかつたと思います。

坂口 日が浅い関係だと思ひますが、そんな気持はわかりませんわ、なるべく痛くなく縛

つて早く終つてほしいと、そればかり考えていました。

村田 そりや、お金を貰えばそれでいゝ、と言えはそれまでですけど、縛られるという事が、まあお芝居であつても、自分も出来るだけ、縛られている女という気分を出そうとすれば、その雰囲気に入り込んでしまうのじやないでしょうか。

高瀬 そういふ事も云えるでしょうね。

川端 男の方々は何故女を縛るといふ事にこんなにも関心を持つのでしょうか、私いつも不思議に思つていゝんです。

雲井 でも、女の方でも、川端さんや高瀬さん、村田さんのように男の方に縛られてみたいつて方があるんじゃないやございませんの、村田 だん／＼縛られている中に好きになつてくるつていふ事もあるでしょうね。

川端 でも、女の方を一度も縛つた事のない男の方で、女を縛りたいつて方があるのが、おかしいですわね。

厚狹 男の方の事はよくわかりませんが、私のレツスン場へ来られる男のお客さんで、誰彼なしに若い女であれば結婚してくれ、という方がありますわ、女の自由を奪つて縛り上げる。生きた人間だけに面白いんじゃないで

しようか。

高瀬 私達、女の立場から考えますと、やはり、女をふん縛つてくれる位の意気のある男の方が嬉しいと思いますわ、でも男の方の氣持つてわかりませんけれど、女からいえば、従順とか、素直というのは自分の身についての性質でしょうし、又、そんなに従順にすると、いうことに一種の喜びがあるんじゃないかと思ひます。

坂口 縛りたければ縛らしてあげたらいいんじゃないでしょうか、縛つてほしい、ほしくないは別として――

雲井 男の方の中には「いや、いや」と言うのを無理に縛るのが好きな方があるんですけどね、そんなのは怖いわ。

川端 怖い、何されるか知れないという、スリル、それが又いゝんでしよう。妾なんか裸で縛られて放つて置かれるだけで……。

村田 川端さんの経験談お話しなさいよ、私達の参考のために、――

坂口 賛成、賛成

川端 私、司会者で皆さんにいろ／＼お聞きしたいと思つていましたのに、大変なことになるしましたわ、そのかわり皆さんも、きつと話して下さいね。

厚狹 そりや、もう何でも話しますよ、脱線するくらい、凄いのを――

川端 でも、何から話していゝかしら、やつぱり一番最初のときと、郊外の一軒家で逆さ吊りにされた時が記憶にあるんですけれども、そのスリルを感じるということになると、モデルになつた頃の四五回位まででしょうね。

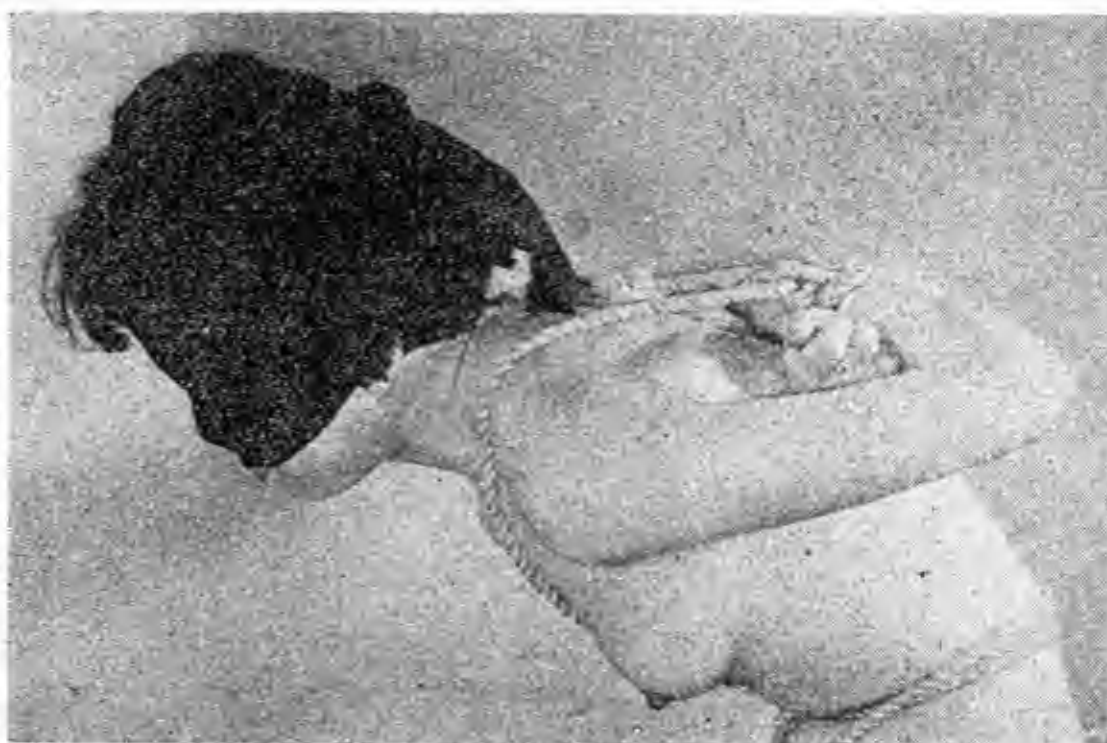
村田 昨年のことなんでしよう？

川端 そう、六月頃でしたか、たしか三度目位るとき、丁度梅雨で煙むるような雨が降つていて、レインコートにレインシューズつて姿で蒸し暑くてベト／＼と汗をかいだ事を覚えていきますわ。一回目も二回目も、びつくりするばかりで目も開けられない位でしたが、三度目で大分落着いてきましたのですけれど、今度こそ何か悪戯をされやしないかと不安でしたの、それでも呼び出しがあつたら、胸がわく／＼して行つたんです。六帖と八帖の間続きの部屋だつたんですが、次の部屋との間の襖が一寸、二寸ばかり開いていて、赤い蒲団が見えるんでしよう。

坂口 男の方と二人きりだつたんですか？

川端 えゝ、そうです。それで今日こそ、縛られてどんなことをされるんだろうつて、本当に心配したんです。若しそんなことをされ

雲井久子嬢



たら、とんで逃げて帰ろうつて思つて、決心してたんです。その日は、床柱や机、蒲団等を使つて、今迄にない、きついポーズをとつたんですけど、まあ、その縛り方のきついことについては何んともないのですが、何かされるんじゃないだろうかという不安が最後まで



で、つきまといつて仕方がございませんでしたわ。

雲井 案外、そんな期待というようなもの  
が、あつたんじやないんですか？

川端 まあ、今から思えば真剣に考えていた  
んですが、期待というより不安の方が大きか  
つたと思います。もつと、心に余猶があれば  
別ですけど、――

雲井 何んにもなかつたのでつまらない、な  
んて――、逆さ吊りは、私にもやつてみない  
かと云われて、一寸好奇心が湧いた人は湧い  
たんですけれど、その中に、寒くなつたりし  
て、とうとうやらすじまいでした、川端さん  
だけでしよう、吊られたのは、――

高瀬 私たちはまだ初めたばかりでとても、  
そこ迄はゆきませんですけれど、一度吊られ  
てみたいような気持もいたしますわ、川端さ  
んのお話では思つたよりきつくないようです  
のね。

川端 えゝ、そりや、他人が思つたほどは  
ね、私自身としては吊られるよりも、もつと  
苦しい縛り方もありますのよ。

高瀬 見た目は楽なようで苦しいポーズより  
も、一層のこと派手に吊つて貰つた方がよい  
ようですね。

川端 そりや、吊られるのは苦しいですよ、  
荒縄で足首だけ縛つて棒のように吊られたと  
きは、足首が痛くて辛抱出来ませんでした  
わ、私の好きなのは両手両足を別々に縛つて  
吊られた時でしたの。

村田 好きなと云いますと、何か、特別に、  
川端 さあ、特に何につて云えませんか――  
ど、なんとなしに好きなつて言いますか――

大体私の好きな縛られ方つて申しましたら先  
にも申し上げました通り、後手の高手小手で  
首へ縄を掛けて息苦しい位の、それに口には  
猿ぐつわですの、足は縛られない方が――。

村田 手を前で縛るのは？

川端 前で縛るのはつまりませんわ、後とは  
比較にならぬ位、それに縄を沢山使つてきつ  
く縛るより、自由を奪う程度がいゝんです。  
七月号の口絵の猿ぐつわ五態では、皆さんの  
が載つていますが、その時の事を話して頂け  
ませんでしょうか、村田さん大層肥つておら  
れますので、後手に廻すの、大変だつたでし  
よう。

村田 私は身長割に体重が十四貫五百もあ  
りますので、一寸、恰好が悪いんです、特に  
坐つた時、足が太くて困りますの、縄の跡は  
大分きつくつきましたわ、太っているからと

思いますけどアルバムに鞭打ちも足が太く写  
つてるでしょう、気になるんです。

高瀬 私は背が高いでしょう、だから肉がま  
だつかない、なんだか未熟な感じだとよく云  
われます、まだ十八ですから、これからだん  
く肉がついてくると思つていますが、縄跳  
びなんか、足をすらりとするのにはよいつて  
言いますわね。

村田 散歩や縄跳びは、つとめてしています  
のですが、生れつきなんでしょうね、厚狭さ  
んもよく肥つていらつしやるけど均整がとれ  
ていられるから、――

厚狭 わたしも足は太いんですのよ、ダンス  
をしているから贅肉はないと思うんですけれ  
ど、太いことは太いんです。下腹や腰にも最  
近特に肉がついてしまつて、ちよつと歩いて  
いても筋肉がびんぐと弾くようなんですの  
よ、初めて縛られた時なんか、一寸横眼でみ  
たら肌にぐつと喰い込んでへこんでるんです  
が、自分には余り感じませんでした。

川端 肥つてられる方と痩せていられる方と  
でこたえ方が違うでしょうね、私なんか中肉  
中背で別にどうつという事はないですが、  
雲井さんなんか、痩せていらつしやるので、  
特にきつく感じられるのではないでしょう

か。

雲井 私も女学校時代は十五貫近くもあつて、よく肥つていたんですけれど、昨年の春、胃をこわしてから、こんなに痩せてしまいましたの、秋には少し戻りましたが、冬には又やせて、今はちよつと肉がついたところなんです、この腕を締めつけられるのは嫌です、それに猿ぐつわも、息が苦しくつて、

川端 猿ぐつわは布地の厚い布で鼻と口とを一緒に掩われるととても苦しいですね、古川さんのように猿ぐつわがないと感じが出ないという方もございますね、私も初めは苦しいばかりで、一時も早く解いてほしいと思ってたが、此頃では苦しい中に楽しさが出てきまして解かれた時には、何んだか物足りないつていう気もする事がありますけど、他の方はどうでしょうか？

厚狭 私なんか、別になんともなかつた、でも猿ぐつわをされるということは、泥棒にでも襲われたときのようで少しいやでした。しかし、それがアクセサリーの一つと思つて馴れ、ばなんともないものですけどね。

高瀬 わたしは口や鼻は出来るだけ、強く掩つて頂いた方がよかつたと思います、自分の

哀れな表情を出すにしても、

出ているのが目だけというので大変しよかつたと思います坂口 暑苦しくつて、息をする度に鼻の穴に当つた布が湿つて気持ちが悪かつたわ、早く解いてほしいと思いました。

村田 私は鼻の頭の布がずり落ちそうになるのでそれをとめているのが苦勞でした、別に苦しいと思いませんでしたわ、あの位だつたら、それよ

り口の中へ入れられたハンカチが唾で湿つてくるのを、出来るだけ濡れないようにしようと思つて——それが苦痛といえは苦痛でしたけど、もう少し乱暴に取扱つて頂いても思いました、一番最後に机や台を使つて、私の希望したポーズを撮つて貰いましたが、それからまだ呼び出しを貰つていませんのです。川端 後手に高く縛り上げられると、肘が痛いことございません？

高瀬 長くそのまゝのポーズで放つて置かれると、肘の曲げたところが凝つたようになつて痛いんですね、解かれても痺れて暫くは自分の手でないようで——。



厚狭 春江嬢

坂口 殆んど後手なんですな。

川端 私は前で手を合せて縛られたこともありますが、やはり、後手の方が無防備の裸体をさらけ出しているというところに自分自身では大変興味がありますの、ポーズの美しさとしては別でしょうけれど、

高瀬 そうですね。痛くてもやつぱり後手に限りますね、後手を首へかけて連絡されて、仰向いたまゝ、うつむくこともどうすることも出来ないポーズで暫く放つて置かれたことがあります。

川端 アルバムに出ていた、〃高手小手〃というあれでしょう。



高瀬 えゝ、そうです、あんなポーズな大好きです。あの時、たしか同じポーズで角度をかえて十数枚撮られた筈です。

厚狭 仰向けに寝たポーズも両手首が身体の下になつて痛いものですね、下が畳とか板のような時には特に――。

川端 手の持つてゆきようによつて大分違うと思います、村田さん「犠牲台」と言うのは可愛いく写っていますわね、猿ぐつわがないのが、却つていい位だわ、

村田 太股が太く写つてゐるでしょう、いつも痩せたいと思うんですが、

川端 私も一時は痩せたいと思いましたが、最近では痩せるのは嫌です。やはり適当に肥つていなくては――、村田さんなんか、そう肥り過ぎていらつしやるという程ではないですのに、――高瀬さんにも両手首を背中の下にしたのがありましたわね。

高瀬 えゝ、手首が痛いからというより、どうして全身の表情を出そうかと思つて、そりかえつたように胸を張つたんですの。

川端 高瀬さんは中々ポーズをとるのがお上手ですわ、その点私なんか、自分自身が楽しんでしまつて。

高瀬 // 荒縄 // なんか中々いいと思ひます

わ。

坂口 写真を撮るだけだから、いゝんですけど、このようにして本当に縛られたら大変ですわね。

厚狭 泥棒に入られたりしてですか？それとも、何か？

坂口 小説にはよくありますわね、時代小説なんかには数人の雲助に周りをとり囲まれて――とか、

(雲井嬢、この時、急用のため帰宅される)

川端 どうにもならなかつたら、観念して、するようになされるんじゃないでしょうか、身動きならぬように縛り上げられる方が、かえつて、じたばたしなくてもよくつて――。

若い女の人達の中で強姦されたいつて秘かな希望があるつて、聞いたことがありますけど私なんか、やはり見られた方が――。

高瀬 女の人達の心の中には潜在的にあるかも知れませんか。

坂口 高瀬さんなんか、あるんじゃない？

村田 坂口さんだつて、その傾向があると思ひますけど。

坂口 わたしはないと思うわ、只、モデル台に立つた時の恥しさというものに自分から楽しんで、最初のときのあの講習会の一週間

は、進んで行つたのは事実ですけど、でもそれから、ずっと出ていませんのよ。

厚狭 そりや、貴女が生活に困らなかつたらよ、私も、ダンスが好きでダンス教師をしていけるけれど、やはり、ヌード、モデルも悪くはないなあという気持、お金の目当てよりも自分の身体に自信があつて、それを誇りたい気持なの、特に男の方の前に、――だから縛るとか縛られるということは問題じゃないわ、縛られてもいいけど、――

坂口 私も、そうなのよ、縛りたけりや縛らせてあげる。只、余り痛いことはイヤなの、川端 痛いとか、嫌だとか云つていても、その中に好きになつてくると思ひますわ、

坂口 そうかしら、

高瀬 叩かれたり、つねられたりするんだつたら、イヤだけれど、縛られるのなら、いゝんじゃないの、少くとも私はそう思ひますの私、ヌードと着衣のどちらでもいいつて最初云われたんですが、やはりヌードの方を選びましたわ、収入の点もあるにはあるんだけど――。

村田 私はどちらでもいいつて御返事しました。

川端 縛るといふことは最初から条件だつた

んでしょ。

村田 ええ、そりやお話ありましたの、ヌー  
トで縛るか、コスチュームかつていうんです  
が、裸を縛つて貰う方が、あつさりしてい

川端 皆さん、どうでしょう、普通のモデ  
ルと違つて縄を掛けられるというのは、直接  
肌に男の方の手が縛るときなんか触れること  
が多いのですが、その点どうお考えでしょう  
か。

高瀬 どうでしょうかしら、ヌードになるつ  
ていうんでさえ或る程度の期待つて言います  
か刺戟があるんですもの、そうでしょう、皆  
さん。

村田 そりや、勿論ですわ、ぐる／＼何重に  
も縄を廻されると、それが直接肌にまといつ  
くものだけに、一寸、普通の感じじゃござい  
ませんわね。

厚狭 ダンスで男の方と一緒に踊っている  
きの感じと似ているんじゃない？

坂口 さあ、どうでしょう？わたし踊れない  
んでダンスの方は知りませんが、縛られ  
るということは一種の今迄経験したことな  
い刺戟でしたわ。

川端 わたしもダンスは好きで昨年はよく踊

りに行きましたけれど、それ  
以来、参りませんの。

村田 縛られる方がよくつて  
？（笑声）

川端 そうじゃないんですけ  
れど、——高瀬さん、一番お  
若いんですが、男のお友達あ  
つて？

高瀬 中学校を出てから今年  
の三月迄お勤めに出ていまし  
たけれど、一向に、——生活  
に追われているとそんなこと  
考えませんのね。

川端 厚狭さんなんか、相当なものなんでし  
ようね、ダンスの先生なんですもの。

厚狭 そんなことございせんよ、男の方  
とよく接しているだけに、男ずれしていると  
云いますか、眼が肥えていますから、普通の  
男では相手にしませんわ。

川端 原狭さんはしつかりしていらつしやる  
から、村田さんは如何でございますの？

村田 私のところは日本でも有名な機業地な  
んででしょう、だから盆踊りの時なんかも相当  
凄いのよ。私なんか駄目ですけど——

厚狭 けんそんなさなくてもいいのよ、ど

坂口利子嬢



うせアブレの集りなんだから、言つてしま  
なさいよ、ねえ。

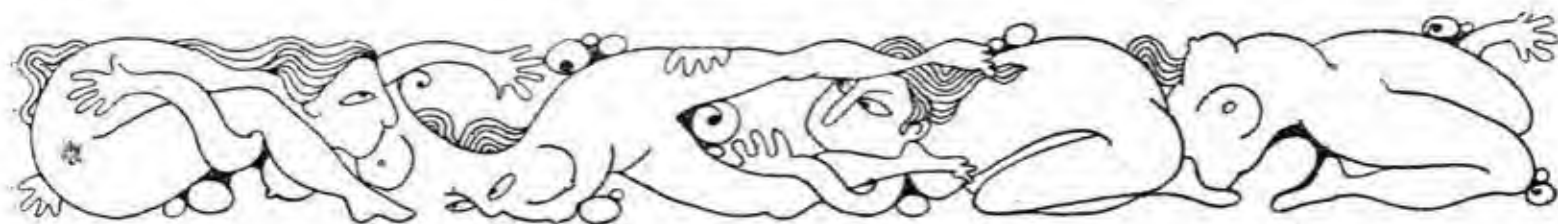
村田 本当なんです。私、内気なんで、でも  
誰か素晴らしい相手の人がほしいつて、時には  
思いますわ。

坂口 川端さんのラブ、ロマンスをお聞きし  
たいわ。

川端 駄目、駄目、皆さん、ずるいわ、すぐ  
私にお鉢を廻してきて、大分時間も経ちまし  
たのでこれ位にしておきます、有難うござい  
ました。

（完）





アブニストの記

# らぶ・すれいぶ

(9)

## LOVE SLAVE

鬼 山 絢 策

一

寝室に戻つて来た徹は、グツタリと椅子に腰をおろしました。彼の口は重く、いつ迄も黙つて居ました。

私はウイスキーをだしてグラスに注いでやりました。

「大変なことになりますよ」

「一体どんなことが起きたの」

「実は今日、会社のこととで池崎さんからあなたに来てくれと伝言を頼まれたので伺つたのです。するとあなたが御留守でしょう。春美さんと二人で話をして居たのです。」

実は前から言おうと思つて言い難くてそのまゝにして居ましたが、春美さんが僕におかしな素振りをするので。今日も二人きりだったものですから、春美さんが僕を誘惑と言つては大げさですが、一寸からかつて見たくなつたのでしよ

う。僕もあなたには済まないと思つてましたが、あまりきつい態度もとれずに居る所に、突然ヨタ者みたいな男が入つてきたのです。以前に春美さんから一寸聞いたことのある大槻と言う男だと思ひます。春美さんは「サブ」と呼んでました。その男が、春美さんと僕との間を誤解してしまつたのです。

あなたは御存知ないでしょうが、春美さんは大変な過失をして居ますよ。

その大槻と言う男と前々から関係があるのです。

大槻が「春美の真の亭主は俺だ」と言つてました。そしていきなり僕に暴力を振つて来たのです。

僕をさんく殴つたり蹴つたりした後で、僕の目の前で、春美さんと……こんなことをお耳に入れれば、さぞ不愉快に思われるでしょうが、事実なのですから仕方がありません。



私もかたわにされる程ひどいめにありました。これを見て下さい」

徹はシャツを脱いで胸を見せました。そこには先刻の椅子の足で踏まれた痕が、紫色の痣<sup>アザ</sup>になつて残つて居ました。

「こんなひどいことをして。畜生！彼奴は悪党です。ほんとうの悪人です。然かも彼奴はあなたの財産迄狙つて居るのですよ。春美さんばかりか、あなたから総べての財宝を奪い取ろうと企んで居るのですよ」

「じゃ二人はどこかへ出かけたのですか」

「え、私は彼等の行く先が大体見当はついて居ます。うちのおやじの所へ行つたのだと思います」

「え？池崎君のところへ？」

「おやじの所へ行つて、だまして金を捲きあげに行つたのです。春美さんもあなたには言いにくいことですが、大槻に熱くなつて、こ

とに依るとあなたから離れて行くかも知れませんよ」

私は徹のヌケ／＼とした嘘に腹が立つて、余程彼と春美との事をぶちまけてやろうかと思いましたが、ま



とを黙つて聞いて居てやろうと思ひました。

「畜生、僕は必らず彼奴に復讐してやる！。必らずあなたのためにも仇を報いてやる」

徹は下唇を噛んで深い決心の色を見せました。

「復讐するつて君、暴力はよし給えよ」

「イヤ、その方法も考えついて居るのです。上手にやりま

す。あなたに御迷惑のかゝるようなことはしません。又春美

さんに対しては、私は別になんとも思つてません。大槻で

す。大槻にこのまゝ負けて引込んでる訳には行きません。清

二さん、僕をこのまゝ逃がして下さい。僕にはしなければな

らぬことがうんと残されてる。まさかおやじがだまされはし

まいと思うが、一応おや

じにも電話でも忠告し

ておかなけりやならない

し。僕これで失礼しま

す」

「その身体で大丈夫か

ね」

「大丈夫です。あなたも

春美さんの行動と、財産

のことに就いては……くれ

ぐも氣をつけた方がい

いですよ」

私は徹をこのまゝ放し

ていゝものかどうか一寸





迷いました。

二人は必らず帰つて来て、徹が居なければ、私が逃がしたと思うに違いない。そうすれば、徹から私が一切の事情を聞いたと思うだろう。さすれば彼等も、今迄のような態度はとれない。春美も私につくか、大槻につくかどつちに決定しなければならぬ破目に行くだらう。私が何も知らないと思えば、まだ現在の状態を続行してゆくかも知れない。それは、徹を逃がさぬ方がいゝかも知れない。

私は春美が到底大槻を離れて私の許に留まる女でないことを知つて居ました。それなら今のまゝでもよいから、この状態を続けて居てほしい。

私はそんな弱気な、情けない気持さえ、その時は起つたのでした。

然し徹をとめておこうとしても所詮徹は留まつては居ない。二人が帰つて来て、又ひどいめにあわされては堪らないだらうし、彼の決意の様子では、私の言うことなどきゝそうにもないと思つたので、

「まああまり乱暴なことはいしないように。君もひどい災難にあつたと思つて諦めた方がいゝよ」

「とんでもない、男がこんなめにあつて、そのまゝ黙つて居られますか。清二さん、あなたはひとが良すぎますよ。僕はそんな訳には行かないんだ。じゃ失礼します」

「あゝもう行くの」

「二人が帰つてくると面倒ですから」

徹は、そのまゝ出て行つてしまいました。

## 二

私はベッドに腰をおろし、腕を組んで考えました。到頭くるところまで来てしまつた。

今度春美に会えば、いくら何でも春美も空呆けた態度には出られまい。私に対して別れ話をきり出してくるかも知れない。大槻はどう言う風に出るだらう。私にも徹と同じようなめにあわすつもりかしら？

私はなにか自分の方が悪いことをして居てそれが見つかったような気持にさえなつてくるのでした。

どこまで私と言う人間は意気地なしか。

読者の皆さん、嗤つて下さい。私と言う哀れな愚かしい人間の悩みを、

私は大槻と会うのが何となく恐しく感じて来ました。斯うして居るうちにも大槻と春美は戻つてくるかも知れない。徹を私が逃したことを知れば、大槻は怒つて私に何をするか分らない。

私は兎も角家をとび出しました。

大槻と春美が、池崎の所へ行つたかも知れないと言う徹の言葉に、私も池崎を訪ねて見る気になりました。

池崎と春美の関係から、徹の言つた事はありそうなことだと思つたからです。

池崎の家へ行つて見ると彼は留守でした。

細君のリシ子さんが、

「あら、先程奥さんがお見えになつたの御存じですか」



「え？うちの春美がですか。あの一人で来たんですか」

「え、お一人でお見えになつて一時間ばかり主人と話してお帰りになりましたんですよ。それから直ぐ主人がたつた今出かけたばかりなのですけど」

「そうですか。では又伺います」

「まあ一寸お上りになつては……」

「ハア、一寸急ぎますので……」

私は玄関口で別れて来てしまいました。やつぱり徹の想像は当つて居た。徹の言う通り春美は池崎からほんとに金を捲きあげるために来たものだろう。そうだとしたらそれは成功したのだろうか。一人で来たと言うのだから、大槻と別れて来たか、それとも表に待たしてでも来たか、一時間も話しこんだと言うのだから一たんは別れたに違いない。それから又二人で家へ帰つてくるのだろうか。徹をあのままにしておくことは出来ない。徹を殺すつもりでない以上徹をいつかは解き放さねばならない。そうすれば徹が私に春美と大槻の関係を喋べることは彼等も想定するだろう。私が二人の関係を知つたと彼等が思えば、彼等はいよいよ最後の手段に出るだろう、兎に角今迄の状態はもう続かないことは明らかだ。

それとも徹を脅迫して私に二人の関係を喋べるなど言うかも知れない。イヤ徹は逃げてしまったのだから、それは出来ない。どうしても大槻は私と春美の間の総決算をすることに肚を決めるだろう。

私は映画を観て、夕食を外で済ませて、家に帰つて見ました。

春美がどんな態度で私を迎えるだろう。春美が徹のことを聞いたなら何も知らぬことに済まして居てやろう。

私はそう決めて、家の玄関を開けたのです。夜おそく帰つた時などは春美は寝てしまつて居ますが、今日のように早く帰つて来た時には、玄関迄出てくるのが今迄の例でした。

それが今日は出て来ません、殊に依るとまだ帰らないのかなど思いながら、私は真直ぐに寝室へ行きました。

扉を開けて中を見た一瞬！私は息が詰りました。

大槻が居るのです。

大槻が私の前に姿を現わすであろうことは、私も予期しなかつたことではないのですが、それが早くも今、眼の前に坐つて居ようとは、思つて居りませんでした。

春美はベツトに腰をかけ、大槻は、テーブルに片肘をのせて、椅子に腰かけて居ました。二人は私の入つてくるのを待受けて居たと言う恰好で、慌てた様子は全然なく、寧ろ狼狽したのは私の方でした。

「久し振りだつたね。下条君。」

大槻は太々しい落ちつきを見せながら、私の顔を正視して声をかけました。

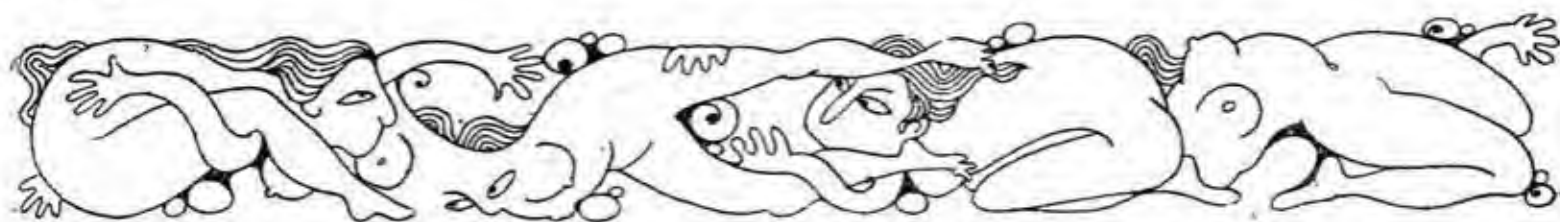
「暫らくでした——。」

「終戦以来、斯うしてお眼にかゝるのは始めてだが、僕はチヨイ／＼君を見かけていたし、君だつて僕のことを全然知らなかつた訳ではないだろう。」

「——。」

私は何と返答してよいか、返事に詰つて大槻の顔を見つめ





て居ました。

「ところで早速だが、物置きの中の徹のことは、君は知ってるんだろ。」

「——知ってます」

「じゃ君が縄を解いてやつたんだね。イヤいゝんだ、僕等も帰つて来たら直ぐ放してやろうと思つてたんだから。それじや徹が君にいろ／＼喋つたろうから、君も或る程度は、今迄の事情が分つてるだろうが、僕の本当の気持を君に分つて貰いたいために、もう一度僕から悠くり話すがね。まあ掛け給えよ。」

彼は自分の家のように振舞つて、頗で傍の椅子を示しました。私は最初から大槻にのまれて居ました。黙つて素直に示された椅子に腰かけるより仕様がありませんでした。

「君も今では知つてるだろうが、春美と俺は終戦前から結婚して居たんだ。春美は俺の女房だつたんだよ」

「違うわよ。結婚なんかしやしないよ。」

春美が激しい口調で横槍を入れました。

「お前は黙つてろい！」

大槻は頭からとなりつけて

「下条君、君は終戦直後の日本の内地のことは知るまいが、僕はね、僕の一家は一番ひどいめに合わされたんだ。親父は空襲で死ぬし、家は焼かれるし、おふくろは營養失調がもとで死んでしまった。たつた一人の弟は満州から帰つて来ない。僕の会社は潰れて、僕はまづとうな人間として活きる道を失つてしまつたんだ。その中でほんとうに僕を暖かく守つ

てくれたのは春美だけだつた。だが春美と同棲する力が僕にはなかつた。俺は世の中を呪つた。そしてこんなやくざになつちまつたんだがね。その間にや春美に金のことで迷惑もかけたさ。だが僕は春美にパン／＼の真似だけはさせなかつたぜ。春美がキャバレーに出るようになってからも、蜜にたかる蟻のように集まつてくる野郎共に、最後の一线だけは絶対に許さなかつた。だから春美にや、俺と言う悪いヒモがついてると評判が立つて、直ぐ客がつかなくなつた、それでも俺は兎に角春美の身体を守つた、命がけて守つたんだぜ——そりやア相手が少し甘い野郎だと見りや——いたぶつて金をふん奪つてやつたこともあつたよ——だが手剛い野郎とは果し合いをしたこともあつた。この胸の傷痕を見てくれ、こりや銀座を根城のヨタ公とやつた時のしるしよ、サツの飯だつて、二度喰つて来た。そんなに迄して守つて来た春美を、俺は君に貸してやつたんだ、これには勿論わけのあることさ。僕は君が紳士で、春美には絶対に肉体的な関係を結ばないことを知つたからさ。

君が春美を真底から愛して居たことは学生時代から知つて居る、その時分から君のひとゝなりは、俺はよく承知して居たんだ、だから、俺は相手が君なら安心して貸してやつてもいゝと思つたんだ。

もつとも君の方じやほんとに春美を自分のものにしたと今迄思つてたろうけど、実際はそう言う訳なのさ。

兎に角春美を一時の間でも君に貸してやつたと言うのは僕の君に対する友情と言うもんさ、ハハ、ハハ。



それでも俺はもしや君の性向が変化しやしないかと思つて  
絶えず注意してたんだぜ、春美が君とこの家に移り住んだ  
当座は、俺は秘かに隣の部屋から様子を窺つてたこともあつ  
たぜ、時にはその扉を細目にあけて、中の有様を覗いて見た  
こともあつたよ、だが君は飽く迄紳士だつた。俺の女房に対  
して些かも獣的行動には出なかつた。真に愛する女への態度  
として、君のとつた行動は立派なもんだと思うよ。で、俺は  
安心して君に預けておく気持になつたんだ。

然し俺だつて春美が欲しくなるときがある。これは男であ  
る以上君も分るだろう。だが君に貸してしまつたんだから黙  
つて春美を借りてくる訳にも行かないし。君に事情を打明け  
るにはまだ時機尚早だと思つたんだ。で、君には気の毒だつ  
たが時々昼間春美の身体を借りて居たぜ、こりや仕方のない  
ことだろう。もと／＼俺のものなんだから。

この状態が暫らく続いてたんだ。俺も春美も兎も角それで  
用が足りて居た。恐らく君も充分満足して居ただろう。

三人が皆よけりやこれに越したことアねえんだ。それでい  
ゝじやねえか、そうだろう、そこへあの徹と言う野郎が出し  
やばりやがつた。春美も春美だ。あんな若僧にチヨツカイ出  
しやがつて、俺の顔を踏みつけにしやがつた。だから俺は黙  
つちや居られねえ。野郎を叩つ殺してやろうと思つたが、殺  
せば後が面倒だから二度と手出しをしねえように仕置きをし  
てやつたんだ。

だがこゝに困つたことができちやつた。

徹の野郎が必らず君に一切をぶちまけるに相違ない、する

と今迄一応円く行つて居た三人の間が今迄の形じや納まらな  
くなつちまつた。

考えて見りやああの野郎重々太え野郎だ。

が、まあ出来ちまつたことは仕様がねえ。春美を君に預け  
つ放しにしておくこたア出来ねえし、いつかは返して貰わな  
きやならない。只その時機がああの野郎のために早くきちまつ  
たと言う訳なんだ」

### 三

さつきから大槻は一人で喋りまくつて居ました。テーブル  
の上のウイスキーをとつて自分のグラスに酌いで一息に飲み  
ほしました。

春美は外出着のまゝ、ベットへ此方に足を向けてひつくり  
返つて居ます。片膝を立てたスカートが捲れて、ナイロンの  
ストッキングで包んだ美しい脚を遠慮なく私達に見せて居  
ます。

そのストッキングのガーターの喰いこんだ上からチヨツピ  
リと見える白い内腿が、今こそ私に春美の正体を覗かせて居  
るように見えました。

大槻はウイスキーグラスを指の先でグル／＼廻しながら  
「そう言う訳で、君の方はどう思つてゐるか知らないが、僕  
の方は春美を君に今迄貸して居たつもりなんだよ、だが僕もい  
つ迄自分のものをひとに預けておく訳にも行かないし、第一  
夜使えねえつてことは不自由だからね。僕も今度は少しばか  
り収入の入るアテもついたから此の際春美を返して貰うこと





にしたぜ。そこで今度は君の言い分だ。これに就いて何か文句があるんなら聞こうじゃねえか」

大槻は私を軽蔑しきつた表情で、うす笑いさえ浮べて言いました。

「春美はそれに同意して居るのですか」

「勿論さ。春美はもと／＼僕の女房だからね」

「同意なんかしてないわよ。」

春美はムツクリと起上ると大槻に向つて言いました。

「なに！」

大槻は凄い眼で春美を睨み返しました。

「なにさ。さつさから黙つて聞いてりや、女房を貸したの預けたのつて、妾の身体を品物同然に思つてやがる、妾はお前と結婚した覚えなんかないよ、いつ結婚式をあげたことがある？、籍だつて入つてないじゃあないか」

「式なんかあげなくなつたつて何年も同棲してりや夫婦じゃねえか、下条とだつて式もあげなきや籍も入つてねえだらう」



「そう言われれば、これ程溺愛して居る妻を式もあげず、入籍もして居なかつたことは私の確かに手落ちでした。」

「だがよ、夫婦関係つてもものは、入籍だとか式だとかそんな形式的なものはどうでもいいんだ。要はお互いの心と心がしつかり結び合つてりやいゝんだ、お前それじゃ又心変りが

したつてのか。下条につくつもりなのかい」

春美はベッドから立つて私の傍に来ると、膝の上に腰をかけ両手でしつかりと私を抱きしめました。

「清二さん、あんたにはほんとに悪かつたけど、妾、前からサブの女だつたのよ。ほんとの事言えばね、妾サブも大嫌い、こんな悪党はないわ。女を喰物にして、女の身体に巣喰つた虫みたいな奴、でもね、妾この男とは離れられない悪縁なの。」

清二さんはほんとにいゝ人。妾大好きなのよ。あなたのまごころに衝たれて妾も人なみの女らしい生活に入れるかと思つたの。でもねえ、女の心つてもものは妾自身にも分らないの



よ。清二さんとサブと……右か左かに決めろつて言われゝば……ほんとに済みません。

妾は悪い女、妖婦よ、毒婦なの。清二さんをさんざん玩具にして、ひどいめに合わせて、親切を仇で返して……」

春美は私の頬にビタリと頬をつきました。春美の瞳から溢れたものが、私の頬を濡らしました。

私も息がつまり、眼がしらが熱くなり、思わず春美を抱きしめました。

「みんな、みんなサブの指図よ、サブこそほんとの悪人なのよ。妾はロボット……」

「おい／＼あまりそうクソミソにコキ下すな。俺は下条君に友情の上からお前を一時貸してやつたんだぜ、俺のこのサバけた気持は下条君に分つて貰いたいもんだな。」

「何言つてやがんだい、お前のしたことは／＼もたせ／＼じゃないか。」

「フン、そう思う奴は思わしときやいゝ、お前だつてその片捧担いだ張本人じゃねえか。だがよ。俺はそう思つてやつたことじゃねえと言つてゐるのさ。俺はどこ迄も友情と同情から出発して下条君によかれと思つてやつたことさ。」

そりやお前から時たま小使いをせびつたこともあるよ。又今度お前を返して貰うに就いちや、今迄の貸し賃を貰うのはこりや当然のことだろう。お前だつて、そりや当り前だと賛成したじゃねえか、フン

いゝよ／＼。俺一人が悪人になつてやる、お前はいゝ子になん。

で、下条君、兎に角そう言う訳なんだ。俺はお前さんからもう少し貸し賃を貰おうと思つてたんだが、お前さんも今じやあんまり金持ちでもなさそうだ。この家位貰おうかと思つたが、可哀想だから勘弁してやるぜ。

この女は自分で喋つてゐる通りに確かに悪い女だ。魔性の女と一緒に居るといゝこたアねえんだ。それで居て別れられねえ俺も因果な野郎さ。君もこの女のために、女房子供迄追い出して、しんしようもなくして、随分ひどいめに合つたから、もういゝ加減眼が覚めたらう。

眼の覚めねえのは俺の方さ。これから先この女のために、どう言う災難が待構えて居るか分らねえ。場合に依りや、命を落とすことになるかも知れねえんだ。それも覚悟のまえさ。お前さんもりこうな方じゃねえが、俺はそれに輪アかけた馬鹿野郎さ。

さあ君も、悪い夢を見たと思つて春美のことは諦めてくんな――。

春美、そろ／＼行こうか。」

「イヤだよ。」

春美はひとと私に抱きつき、頬ずりをし、私の頬に接吻しました。

「おい、あんまりヘンなどに見せつけて俺を怒らせねえようにしろよ、サア、行くんだ！」

大概は立上つて、春美の肩に手をかけて、私からもぎ離すように春美を後から抱き抱えました。

「イヤ、イヤ／＼、妾はほんとに清二さんが好き。お前と一





緒に行くのはイヤだよ。」

春美は駄々つ児のように手足をバタ／＼させて暴れまわった。

「バカヤロウ！」

大槻は春美の尻を膝でつき上げ、上から顔を伏せて、無理矢理に接吻しました。

「イヤ、イヤ……」

春美は首を振ってそれを避けました。

「清二さん、妾はやつぱりあなたが好き。ね、清二さん、妾がこのまゝ行つてしまつてもいいの。」

春美の必死の表情が、救いを求める瞳が私の心の底にまでさゝつて来ました。

「待つて下さい。」

私は思わず椅子から立上つてそう叫びました。

「何だと！」

大槻は春美を抱えたまゝ身構えました。

「大槻君、あなたの言うことはよく分かりました、然し春美さんを今連れて行くのはやめて下さい。せめて二、三日の間待つて下さい。」

「ハ、ハ、ハ、ハ。未練がましいことを言うな。君も男だろう。」

話が分つたんなら、今直ぐこゝで分れたつて同じことじやねえか。斯う何もかも明らかにさまになつちまつちや春美を一時間も君の傍へ預けておくことは出来ねえんだ、それともそれが不服なら、俺アいつでも君と勝負するぜ。」

大槻は春美を突離し、ポケットからナイフを出して、パチ

ンと刃をひろげました。

「お前さんの好きなえものを選ぶがい。俺は卑怯な真似はしねえ、その間待つてやる。」

彼は狂人のように獐犢な眼を光らし、身体中から闘志を發して身構えて居ます。

私は頭がクラ／＼して来ました。

私は椅子にくずおれて、テーブルの上に頭を抱えて突つ伏しました。

「清二さん！」

春美が私の傍に立ちました。

「春美さん！」

私は膝まづいて春美の腰を抱えました。

「清二さん、あんたはどうしてもサブには敵わないのね。」

春美はさげすむような声で私の頭の上から言いました。

「意気地なし！」

春美の右手が発止と私の頬を打ちました。

「アツ」

私が思わず顔をあげた時、春美の往後ビンタが、ピシ／＼と私の両の頬に鳴りました。

「やつぱりお前は男でなかつた。バカツ、バカツ！」

その平手打ちは今迄にない激しいものでした、私は眼が眩み、何を考え、何を言うことも出来ませんでした。

「ちく生ツ！」

春美は足をあげて、私の頭を蹴倒しました。

## K K 通信大好評

見本一部二十円  
半年分 百円

本誌の愛読者を中心とした楽しいグループの自由な集いの機関誌として発足しましたK K通信は号を追って発展、今や特別会員の連絡誌としての母胎になりつゝこゝに第十二号を迎えました。本誌をお読みになられた方は是非K K通信も併せて御覧下さい。

## 特別會員募集

愛読者の強い要望に応えて特別會員制による諸行事を企画しました。会則の詳細及び掲載、申込用紙は郵券二十円添えて御申込下さい。

## 原稿募集

- 一、すべて未発表の興味溢れる作品を望みます。
- 一、内容は本誌に適當と思われるものでしたら如何なものでも結構です
- 一、四百字詰原稿紙五十枚迄の作品
- 一、発表作品には発行後相當の謝礼を差上げます。
- 一、原稿は原則として返戻申し上げかねます。
- 一、締切日は特に定めません。
- 一、読者の体験告白文は内容及びその長短は問いません誌上匿名は御自由です。奮って御応募下さい。

(奇譚クラブ編集部)

## ◎編集方針について

読者のお問合せをお待ちします

尙本誌の内容編集方針について読者の御意見御希望には左記の通り誌上を以て御回答申し上げます故、御遠慮なく御申出下さい

- 一、縛られた女の写真に関して (塚本鉄三)
- 二、男子同性愛の件について (染田 玄)
- 三、縛られた女の件について (松井籟子)
- 四、編集方針の一般について (箕田京二)

## ◎本誌の旧号在庫について◎

本誌旧号は昨年十月号以降より毎号若干保有して居りますが、九月号より以前は全部売切れでございます。昨年度の分は一部送共九十円、本年度の分は一部送共百円にて急送申し上げます。K K通信第五号以前品切れ。

## ◎御願ひ◎

編集部発行所に対する御照会には必ず返信料の同封を願ひます。但し文書編輯の節は御返事の多少の遅延は御猶予下さい。尙理由の如何に拘らず直接の御訪問は固く御断り申し上げます故悪しからず御諒承願ひます。

## 先ず書店へ 御予約下さい

熱狂的な本誌ファンの激増により、各地で本誌の入手難を訴えられておりますが、毎号最寄り書店へ御予約下さい。確実に入手される一方法であります。

◎日本唯一の特色ある雑誌としてその文獻的価値を高く評価されて居ります本誌は是非毎号欠号のないようお揃え下さい。

## ◎直接購読者募集◎

三月分三冊(送料共)三百円  
半年分六冊(送料共)六百円  
一年分十二冊(送料共)壹千二百円

毎月売切れにて御迷惑をかけていますが、御買洩れのないよう是非直接購読の御申込下さる様お待ち致します。半年分御申込の方には責められる女の写真二枚一組一年分御申込の方には五枚一組サービス品として贈呈申し上げます。

## 奇譚クラブ

第七巻 第九号  
毎月一回一日発行

九月号

定価 百円

昭和二十八年八月三十日印刷  
昭和二十八年九月一日発行

編集人 箕田 京二

印刷人 上田 庄之助

発行人 吉田 稔

大阪府堺局区内菅原通四ノ三〇

発行所 曙 書房

振替口座大阪第三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。